明治三十九年四月五日発行
毎月一回五日発行

明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

女學世界



第六巻第五號


四月一日より
第十一回新柄陳列會
凱旋紀念桃山式新製品陳列
寄せ切れ見切り反物大賣出し
意匠參考時代品陳列
懸賞圖案江戸褄模樣陳列
東京日本橋區駿河町
三越呉服店

女學世界 第六巻 第五號 目次


カメリヤは時代の要求により
生れたる最新最良の洗粉なり
カメリヤ洗粉
あらひこ
Camellia
MANUFACTURED
CAMELLIA R Co.
TOKYO JAPAN
カメリヤは一家傳來的なる陳腐の原料を用ひて製せるものと全然趣きを異にす
カメリヤは溫和なる香氣を有するも一度之を用ゆれば花香芬々として爽快忘る能はず唯に色を白くしつやをよくするのみならず殊に肌を滑かならしむる點に於て全く他品に見る能はざる一大特長を有す社交を重んじ衛生に注意せらるゝ貴紳淑女の化粧料として日常缺くべからざる佳品なり
定價一個
瓶入十二錢袋入五錢
◉本舗 東京 カメリヤ商會
◉聯合發賣元
ライオン齒磨本舖
東京神田柳原川岸
小林富次郎
(甲の一)

女(甲の二)

女（甲の三）


ゼム
THE GEM
衛生家必携
懐中良薬

つみくさ



榊原蕉園筆

寶石入指環

(大四 己ノ八)



(1)爪留○ダイヤモンド入六百圓最上ルビー入百五拾圓
(2)爪留○ダイヤモンド入參百圓最上ルビー入七拾五圓
(3)彫刻○ダイヤモンド入貳百圓最上ルビー入六拾五圓
(4)彫刻○ダイヤモンド入百五拾圓眞珠又はルビー卅圓
(5)彫刻○ダイヤモンド入百圓ルビー又はサファヤ廿五圓
(6)爪留○サファヤ亦は通常ルビー入甲價拾貳圓乙價拾圓
(7)爪留○ダイヤモンド及ルビー入甲貳百圓乙百五拾圓
(8)嵌入○總眞珠入拾圓ダイヤモンド入甲六拾圓乙卅圓
(9)爪留○ダイヤモンド左右ルビー又はサファヤ百五拾圓
(10)嵌入○ルビー又はサファヤ周圍眞珠入甲參拾圓乙廿圓
(11)嵌入○ダイヤ又はルビー周圍眞珠入甲廿五圓乙廿圓
(12)爪留○ダイヤモンド三個入八拾圓眞珠三個入拾五圓
(保證)右は其確實なるを保證致す爲め證明書を添附す
(交換)市內は一週間以內地方は往復日數共三週間以內

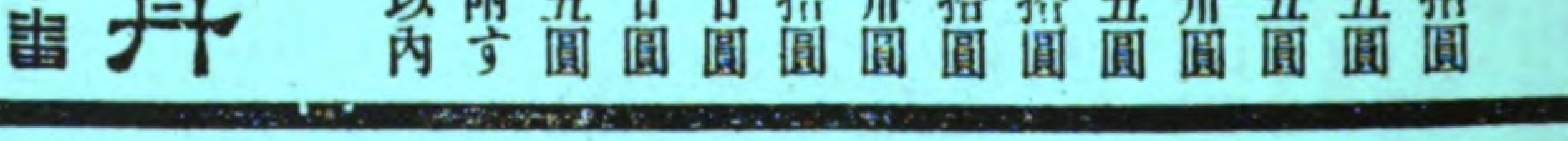
貴金屬寶石
美術携帶品
婦人粧飾品
商

大西白牡丹

東京市南傳馬町二丁目

特 電話本局 三十番

ダイヤモンド 容積表



凡そ當店取扱のダイヤモンドは一々鑑査を遂げ其容量も極めて正確なれど當店亦は他店の別なく華客が購入に際し容易に幾何キャラットあるやを知らるゝに資せんと調査の上掲げしものなれば本表を以て對照し玉へば其容量に大差なかるべし

目下當店到着品の價格は一キャラットに付

待種參百五拾圓
甲種參　百　圓
乙種貳百五拾圓

店主白
大西白牡丹

(乙の二)

意匠登録

登録商標

定價 瓶入 金貳拾錢 同筒入 金拾五錢 金六錢

この玉おしろい(雲井)の儀はへちまの水にてよく晒し玉に製したる白粉へ化粧料の藥品と龍腦麝香の芳しき香を加へ候故御顔の皮膚を清く艶を出し其他御顔一切によろしく腫物を防ぎ候等實に類なき御重寳なるおしろいなり

御用法は常のおしろいの如く水にてときて御使用相成候得ば麗しく相付申候

東京市京橋區銀座參丁目

調製所 松澤八右衛門

(電話新橋特五百參拾四番)

▲賣捌は各處小間物店賣藥店にあり

英學生

山縣五十雄 斯波貞吉 執筆

最もやさしく面白く美麗なる英文雜誌、每號詳密なる註釋を附録とす、故に初學者と雖も獨學自修するを得

實用英語を學ぶは本誌を讀むに限る、一年前僅にナショナル第二讀本を讀み得たる一學生が師に就かず、唯本誌を讀み續けたるのみにて今日はよく普通の英書を讀み巧に英文を作るを得るに至りたる實例あり

毎月二回發行定價一冊**僅に三錢** 郵税五厘半年分 郵税共四拾錢

四月三日第三卷第十一號發行初號より注文に應ず

布施知足譯

簡易生活

定價一冊 參拾錢 郵税四錢

原書は近頃歐米に於て非常の好評を受け**第二の聖書**と迄評されたる頗る有益のもの、米國大統領ルーズヴエルト氏の愛讀書の一、譯文流麗頗る面白し、**大好評**初版直に賣切れ**再版**發行、幸福を得樂しき日を送り健全なる家庭を作らんと欲するの士女は速かに一讀せられよ

婦女新聞の評に曰く……譯文は極めて輕快にしてさながら小說を讀む如く何の苦もなく讀み終らしむ……成るべく弘く家庭に讀まれんことを望む

家庭之友の評に曰く……是非此書を御覽になつて簡易生活の福音に接せられんことを希望します譯文は極く平易に面白く書いてあります故どなたにても讀んで興味を感ずることが出來ませう

發行所 東京神田表神保町十番地 東西社

女(乙の二)

日露戰役末代への好紀念物

好機逸すべからず

紀念郵便切手を貼用し觀兵式紀念消印の上發送

陛下親臨して全國の軍旗隊を青山に
爰に明治三十七八年戰役陸軍凱旋大
觀兵式を行ひ給ふ
今此千古未曾有の盛典の一大パノラマ圖を作る

一條成美官報及當路に質し謹みて

豫約 來廿五日迄に前金拂込御申込を乞ふ

日露戰役 陸軍凱旋 大觀兵式紀念繪葉書

海軍の觀艦式及陸軍司令部凱旋**繪葉書**の消印つきは**幾十倍**の市價にて賣買されて居るそうです今度の觀兵式の紀念切手や紀念消印も定めて地方の諸君は勿論東京市内の諸君でも御手に入る事が困難でせうと思ひます小堂爰に多年の御愛顧に報ぜん爲め全力を盡くして紀念切手を蒐集貼用の上當日東京の紀念消印を捺した儘豫約諸君に一々郵送致します之れを壁上に掲げなば立派な三色版の水彩畫の額面となりますこれを三つに切つて繪葉書に致しますれば是亦至極美麗な繪葉書が三枚出來ます尚裏面には觀兵式の擧行の事項が事細しくかいて有り升から此以上の紀念物は有りますまい○竪四寸七分横九寸アートペーパー摺正價三十錢小爲替注文に限る……

○豫約期日後の御申込に對しては切手や消印の保證は出來ませぬ

豫約申込所 東京神田區千代田町十二番地 團扇地紙問屋 木村新十郎方 大阪繪葉書問屋 **服部健次郎**出張所

三色版摺印刷頗美麗

國民教育の資料子孫への珍寶

（乙の三）

最良煉乳

アメミルク

育兒者は特に此廣告に注意せらるべし

醫學博士 高橋順太郎
藥學博士 下山順一郎

兩先生の指導製品にして砂糖に代ふるに古來滋養品として賞用せらるゝ日本特有の最良水飴を以てせるものなれば彼のコンデンスミルクの如く胃腸を害せず下痢を起さしめざるは本品の特長なり本品は各地有名の藥店にて販賣す

發賣元 東京市日本橋區南茅場町 三共商店藥品部

滋養新劑

グリコナール錠

▲本劑は佐伯矩氏が北里博士研究室に於て牡蠣の滋養成分に就て研究創製せられ多くの醫學者より其効顯卓絕なることを承認せられたる最新滋養劑なり

肺病

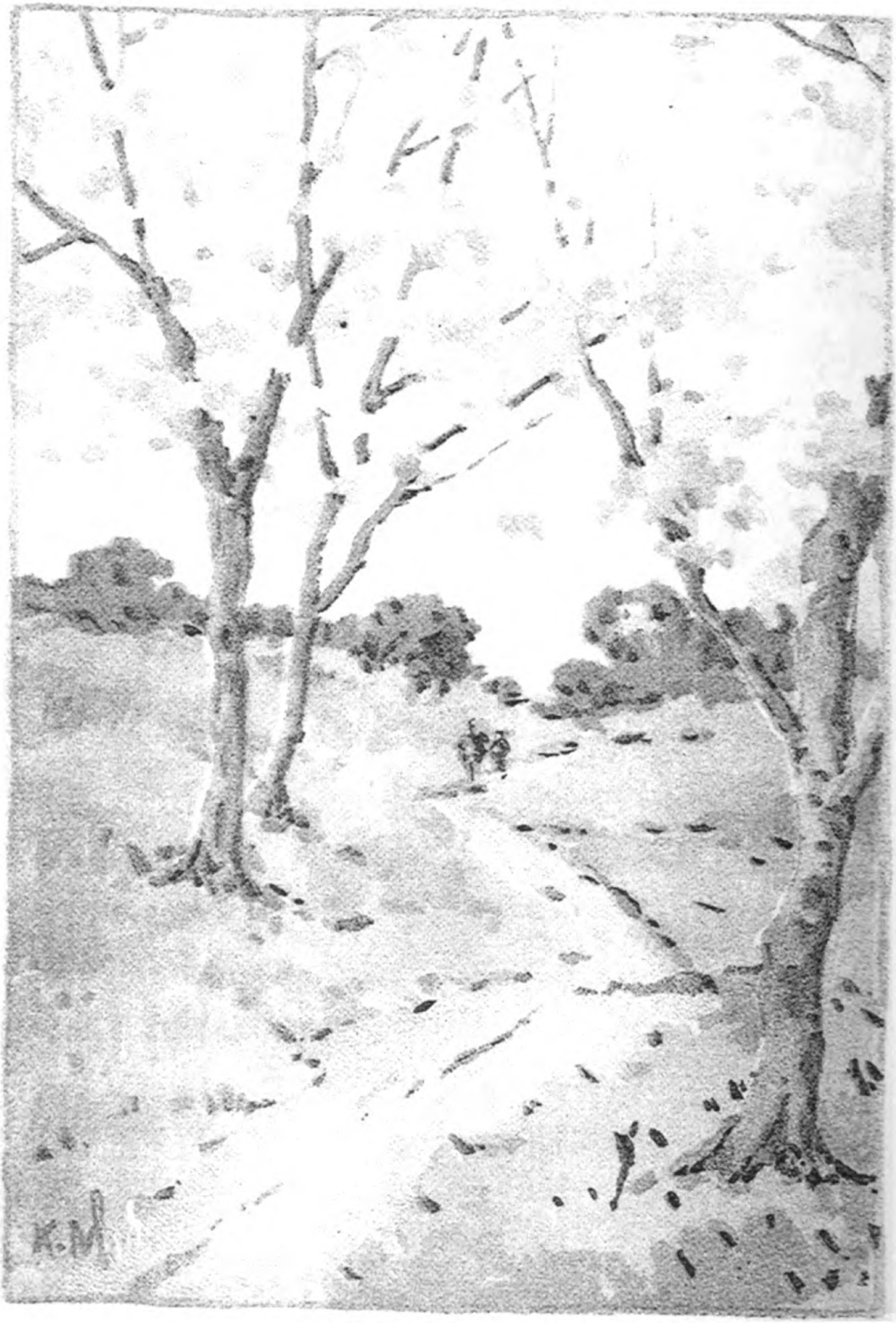
肺病其他衰弱性の病者は本劑の服用に由て速に其體力を恢復し元氣亢進す

本劑の説明書は御申込次第無代郵送す

發賣元 東京市南茅場町二 三共商店藥品部

女(乙の四)

野路の櫻



三宅克己筆

新刊發行

島崎藤村著

小說 破戒

綠蔭叢書第一篇

鏑木清方筆挿畫〇千曲川流域の圖入〇紙數凡五百七十八頁〇四六版本總振假名付〇全一冊讀切〇定價金七十錢〇郵稅十錢

東京神田裏神保町

發賣元 上田屋

この書は二年間の文學的勞作より得たる新しき收穫なり▲書中寫すところは種々なる生活狀態に觸れて光景多樣なりと雖も要するに鬱勃たる新興の精神を以て全篇を貫きたり▲新裁まさに成らんとす請ふ清讀を賜へ

女(四の一)

親切にして怜悧なる相談相手

婦人世界

四月三日發行 每月一回 第四號 一冊拾五錢 郵稅一錢五厘 半年分郵稅共九十錢 一年分一圓七拾五錢

口繪

◎東伏見宮妃殿下と御揮毫の書◎
◎梨本宮妃殿下幷に同姫宮殿下◎
◎前田家婚儀◎名流婦人の面影◎
◎御室の花（中澤弘光）彩色石版◎
◎小猫と小犬のうたがひ彩色石版◎

繪手本

菜花……跡見花溪
摘草……中澤弘光

清き名……橘村
小窓……柴舟
花がたみ……星外

▲女學校卒業生に對する希望……（下田歌子 山脇房子 三宅花圃）

育兒問答（解答親切）
衛生問答

△新婚旅行の改良……村井弦齋
▲我家の今昔……三輪田眞佐子
△千家男爵家の家風……ぎんせん
▲家庭園藝……農學士 恩田銕彌
△西洋諸國の嫁入道具……樂川
▲媒酌人の改良……中橋德五郎
△家庭季節料理……赤堀峰吉
▲井口あくり女子の面影……樂石生
△ビスケツトの製法……馬鈴子
▲牛乳と人乳……農學士 牧忍
△生花のしをり……花の本宗壽
▲家庭菓子製法……未荅庵矯菓
△一門九博士の家庭……古月庵
▲妻君重寶記……岡本瀛陽
△乳母に就ての注意……ドクトル 加藤照麿

▲婦人衛生……醫學士 伊庭秀榮
△鍋島侯爵夫人の平生……胡蝶庵
▲最新世界奇聞……みどり
△現代の歌……與謝野晶子
▲活動……女子高等師範教諭 平野後子
△學校出身夫人調べ……無私庵
▲家庭笑話……こてふ
△女學生遭難記……西村渚山
▲家庭整理法……今西桃里
△東京女學舘案内……峽水生
▲御園形改良服……御園生初子
△清國婦人化粧法……あさひ子
▲新流行肩掛と手套……三越呉服店員
△小說團欒……三島霜川

▲懸賞讀者文藝……

▲小收入の家庭を修むる法……藤崎つね子

發兌元 東京京橋區南紺屋町十三番地 實業之日本社（電話新橋八四七番） 賣捌各地書店

女（丙の二）

數年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を强壮健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグチシヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的姑式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を强壯ならしめ食慾を增進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絕し無病强健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價）壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割增し

新輸入
肉體美容料

色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色**に**變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓七拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



腋臭 わきが

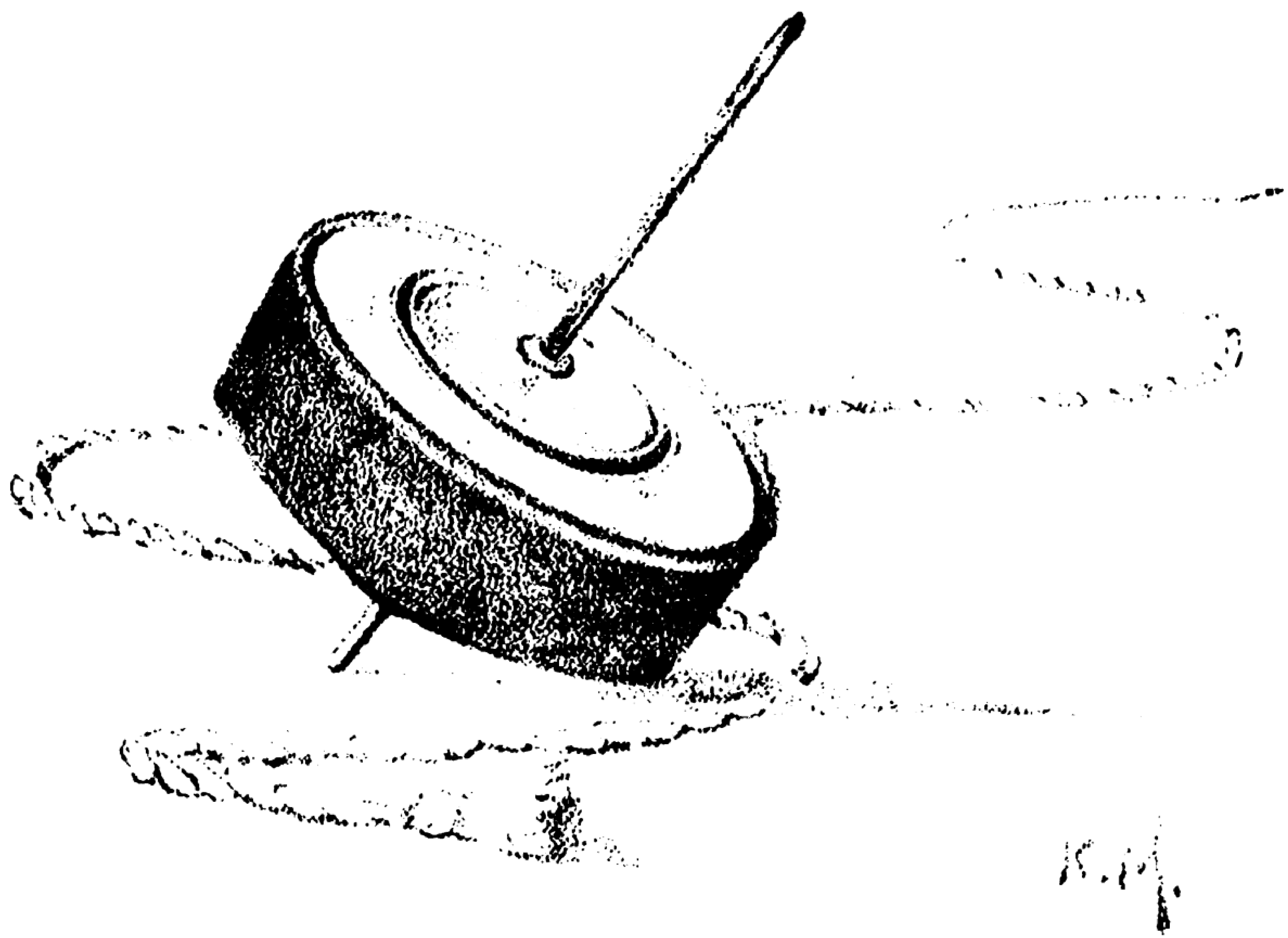
根治確證
新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢 着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

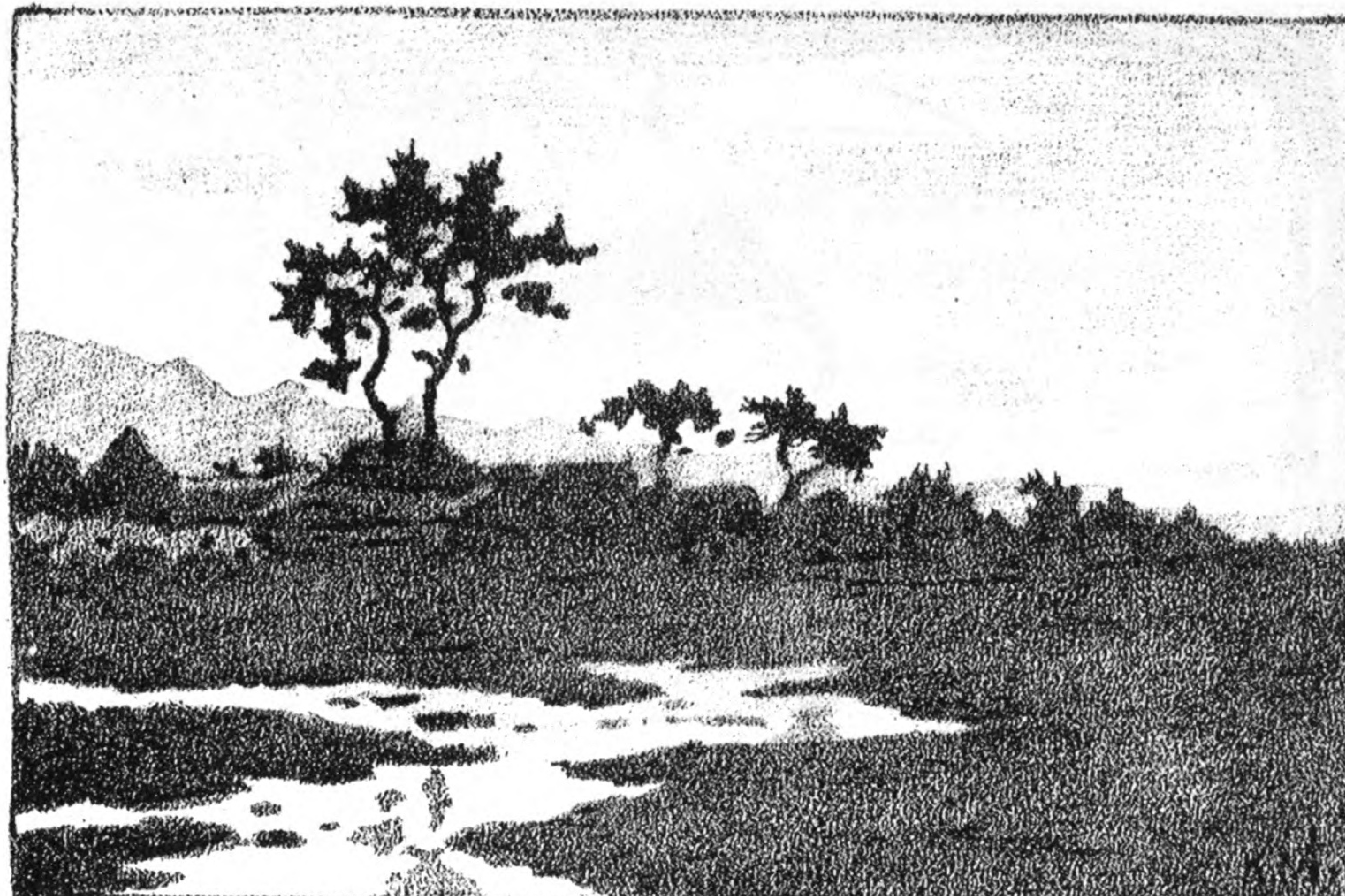
（丙の三）

獨樂



三宅克己筆

興津の朝



三宅克己筆

つばめ



川崎蘭香筆

たそがれ



川崎蘭香筆

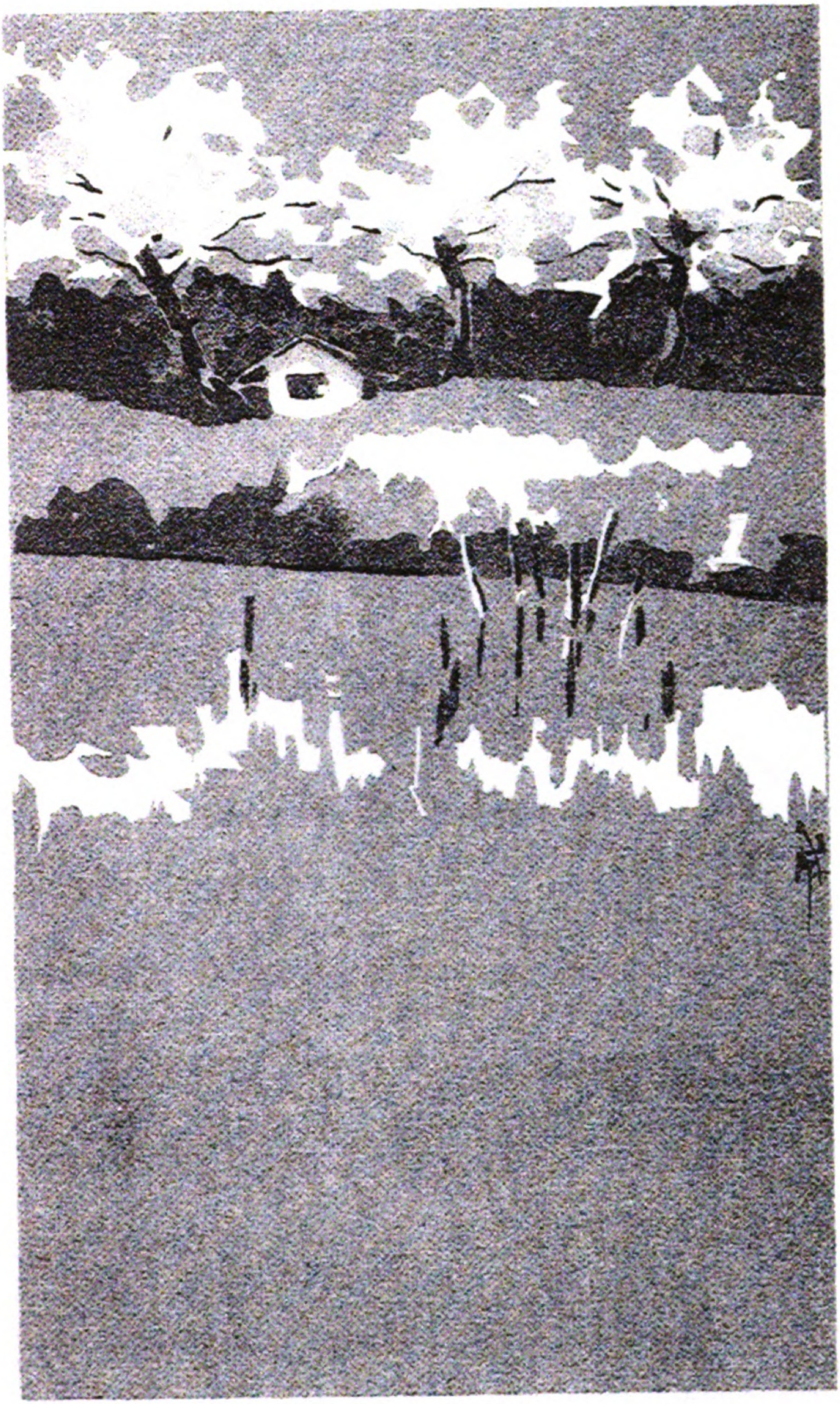
白川の花

一條成美筆



墨堤の花

一條成美筆



天下一品
最上醤油

醸造元
千葉縣野田町
茂木佐平治

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候



女(丁の一)

四月新學期開始

生徒募集

高輪裁縫女學校

東京芝區二本榎天神坂上

▲本校規則書は御申込次第郵送す

書籍 雑誌

内外書籍並ニ雑誌類ハ何種ニ拘ハラズ總テ價格ハ無比ノ低廉ニ發送ハ最モ敏速ニ御取引ハ可及正實御便宜ニ取扱ヒ申候間何卒御愛顧御引立陸續御注文ノ程奉希上候

◎書籍雑誌目錄◎（明治卅九年一月新刷）

改正新刷出來ノ目錄御入用ノ御方ハ郵便切手二錢（郵送料）封入御申越アレバ速ニ送呈致候

東京市神田區錦町二丁目角

勉強堂書店

電話本局二百四十番

毛はぐすりへハロール

け欧米各國にて進化の妙工を奪ふの奇効あり」との評判を博したる有名なる秘密藥を當館主が深奥なる學理と老練なる技術とを以て多年の研究に依り其秘を發き之に最近の發見に係るベンザイ博士の生毛劑に關する新説を參酌し最新藥を配合したれば價額は他の生毛劑に比して廉高價なるべきも其効能の卓絶なる世間に冠絶する技術は斯道の進歩品の如に非ず「マユゲ、ヘエギワ、ヒゲの薄きも濃くしテキにて發したるを生し陰毛等あるべき所に毛無きを生じ禿頭等に奇効あり斯の學術の進歩を應用し更に新藥を加味したれば一層有効となれり必ず試みの生毛劑又は禿青丁幾等にて効無しとて落膽する事なく是非本劑を試み内容增量改正定價七十錢送料五錢郵券代用三錢切手廿七枚送れ

らい病必治藥

はハワイ國に在留して癩病の研究に從事し其効驗を以て有名なる醫學博士ハ[illegible]ン氏の癩病治療藥を基礎とし最新の治療藥を配合したれば効驗峻烈確實なり古來癩病は不治の病と稱し今日にても根治せしむる事は難けれども本劑を用れば病勢を脱力死滅して漸次輕快し一生癩病を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救濟せんとする趣旨に基き發賣するものにして無効なる藥品に非常の高價を貪り大言を吐て善人ならしく見せかけ不幸なる病者を欺瞞せんとする不正の賣藥に非ず容體書に三錢切手封入申込あれば[illegible]

有効確證 胃病根治劑

慢性胃病は甚き苦痛を以て人を害する人多けれども胃病は萬病の根にして日々月々に活力を減殺して知らず〜の中に生命を短縮するものなれば決して放任すべからず本劑は胃病に苦む事十數年其間名家の診察處方を乞ひ百方治療せしも休藥すれば直に再發し一時は慢性胃病は到底治療の途なきものと斷念せしも熟ら〜考ふるに造化用意の微妙なる一方に病を起す物あれば他方には必ず之を治癒せしむる物あるは古來よりの經驗に徴して明なれば慢性胃病にも必ず特効藥のあるべきを確信し千試萬驗の結果本劑を發見し僅に月餘にして洗ふが如く全治したれば斯に拙者の名譽を賭して其實効の顯著なる事を保證し發賣することとなれり胃病者よ急ぎ試みられよ一月分二圓一月二圓送料各四錢と發送せば速に本劑を服用あれ半月分一圓二十錢郵券代用は途中紛失の恐あり可成小爲替に願升

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主

醫科大學卒業藥劑士

從七位勳六等 中島龜之丞監製

女（丁の三）

◉衛生無二殺菌防腐之三種石鹸

登録商標

ホルマリン石鹸

東京圓城

消毒

化粧

洗濯

◉定價

消毒用 金二十錢

化粧用 金十五錢

洗濯用 金五錢

今般弊店創製發賣の**ホルマリン**石鹸は現今醫學藥學兩社界に於て無害にして卓絶なる防腐藥として賞用さるゝ（**ホルマリン**）を適量に含有せしめたるものなれば其効力の顯著なるは彼の諸病原菌中に於て最頑強の脾脱疽菌も本品二萬倍の稀薄液に因て死滅すと日本藥局法註解に下山藥學博士の記述せられ有を以ても明かなり故にシラクモ田虫水虫シツ、ヒゼン、ニキビ、ソバカスの如きも勿論癬病、癩病、等の諸毒を消すは殊に本石鹸の特色は如斯効用に兼ぬるに優美高尚最も世人の嗜好に適する高貴の香料を配伍しあれは其佳香云はん方なく馥郁として使用後と雖ども長く衣体に薰るべし請ふ論より証據御試みありて必ず衛生保健の完全を期せられんことを

官許本舗 東京市日本橋區 本町三丁目七番地

登記商號 圓城商店

(丁の四)

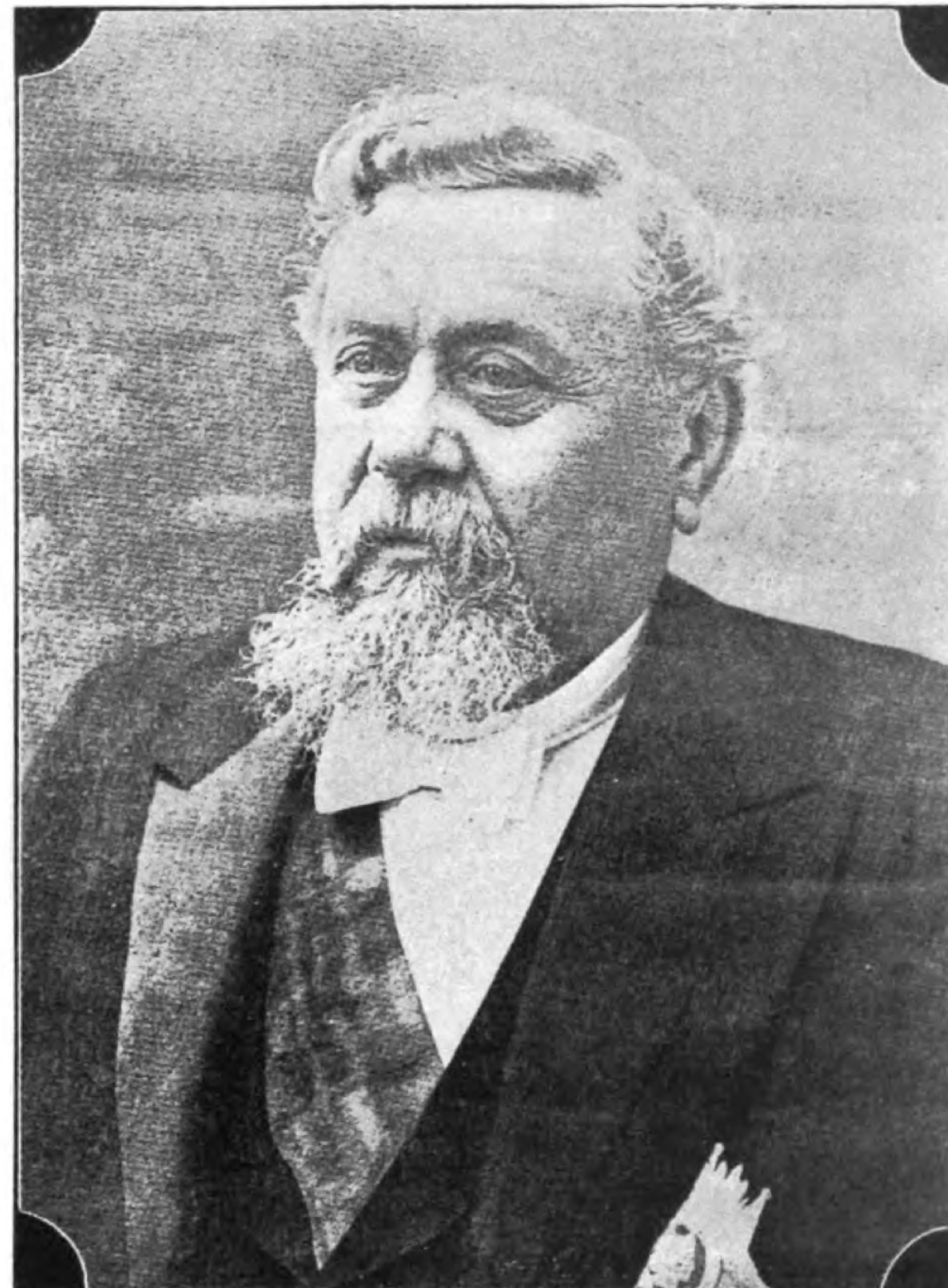
前田侯爵の結婚式



媒酌德川家達公同夫人

新郎前田利爲侯同夫人

佛國新大統領ファリエール氏と其夫人





ファリエール氏は一月十七日大統領に新に撰擧せられぬ。氏は辯護士出身なり。上院議長よりのぼりて今の位地に至る、夫人は交際社會の中心、巴里外交界の花なり。

米國大統領ルーズベルト氏の書齋兼客間



露西亜の二閨秀



巴里に流寓せるマカロフ提督の未亡人



浦鹽斯德に奮死せる慷慨壯烈の婦人

（記事參照）

女（戊の一）

登録商標

佛國天然葡萄酒古「メドック」



此「古メドック」は佛國産純料の天然葡萄酒にて弊店に於て十有年來一手直輸入專賣するものに御座候此葡萄酒は藥用としても常用飲料としても慥に人體に有益あるものとして諸大醫及需用者諸彦の稱讚を辱ふし古「メドック」の名稱世に知らざるものなきに至りしは誠に仕合に奉存候然るに世間往々同一の名稱の葡萄酒を賣捌くもの有之候に付弊店の「古メドック」には印の商標を印し有之候間御注意御買求被下度候●御注文之品は直ちに御屆可致候●代價表は御申越次第進呈す

海外直輸出入
和洋酒食料品商
東京新橋竹川町
三組屋 大塚琢造
電話新橋七三六番

女(戊の二)

生徒募集

四月十日始業

各專修部 裁縫、刺繡 彫刻

普通部 普通學科

割烹室 新築落成和洋料理ノ撰科生ヲ募ル

青山南町七ノ一
青山女子手藝學校

醫科大學藥學專攻 藥學得業士金澤巖著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本

東京市下谷區上根岸町 衛生書院

△圖書總目錄進呈 郵稅參錢御送附御申込の方に呈す

東京日本橋區本町三丁目 博文館小賣係

最も愛すべき香料馥郁
さゞなみ石鹸
高評煉香油（水油代用品）
カスガオイル



紳士令嬢貴婦人用として最も上流社會に歡迎せらる 有名なる小間物化粧品店藥舗にて販賣す

發賣元 東京橘町 小川潮華園

醫學博士 井上通泰先生監修 專門大家講話

家庭衞生叢書

▲全部十二冊 洋裝大判 隔月一回發行（八冊迄既成）

正價 ●一冊貳拾錢 ●三冊五拾七錢 ●六冊壹圓拾錢 ●十二冊貳圓拾錢 ▲郵税一冊六錢宛

第八編

▲口繪　木村醫學博士　緒方醫學博士
●婦人姙孕力の話　伊庭醫學士
●肝臟の話　木村醫學博士
●分娩時の攝生　緒方醫學博士
●色盲の話　井上醫學博士
●小兒の身體上の監視並に感冒の注意　瀬川醫學博士
人工滋養品の話、肉製及蛋白性滋養品（イ）刺戟作用を主とする物（ロ）營養力を主とする物（ハ）可溶性蛋白粉（ニ）消化蛋白
▲雜錄

新刊發賣

發兌元 東京本町 博文館

子宮病 自宅療法

妾嫁きてより七年此方子宮病ちの道の難病をわづらい色々と藥療を盡せしも更に効なく一家悲歎の折柄ふと試みたる療法にて忽ち全快妊娠の身となり今や安す〳〵と健兒を擧げゝれば嬉しさの餘りこれを弘く傳へたし望む人は返信料三錢と容躰書を添へ遠慮なく問合せあれ

奈良縣宇陀郡榛原町 笹岡りん

女（戊の三）


於內外博覽會名譽大賞及金銀牌受領
元和二年創業
ヒゲタ印醬油
ヒゲタ印醬油
HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor.
G. TANAKA
Choshi, Chiba-ken, JAPAN
宮內省御用達
千葉縣 銚子港
田中玄蕃釀造


五大軍醫合議製劑
藥價 五週分壹円、三週分六十五錢、二週分
四十五錢、一週分二十五錢、二日半分十錢
本舖 東京銀座四丁目 (金(?)澤大乘寺町藥商(?))
山田安民
Yamapa's The Ikuatsu
胃活 いかつ
全國各藥店にて取次販賣す

女(戊の四)

神戶高等裁縫女學校紀念會



女(己の二)

文學博士大槻文彦君序文
文學士物集高量君
文學士長連恒君共編（四月上旬新刊發賣）

散文韻文 美文辭彙

全壹册

洋裝總クロース
三六版美本紙數壹千餘頁
正價金壹圓貳拾錢
郵稅拾錢

▲四月三十日迄の申込に限り……特價金九拾錢郵稅拾錢

文章は其辭の推敲を要するのみならず、又想をも鍛錬せざるべからず、從來世に出でたる此種の書籍は辭の佳麗なるに專らにして其想を度外にしたるもの丶如し、本書は其辭の佳麗なるのみならず想の以て作文の資となすに足るべきものを古今數百種の書籍を涉獵して此を拔摘し一題目毎に部を體詩、和歌、俳句、俗謠、美文の七大部門に分ち、且つ逐一出典をも附記したれば、直に以て文章の上に引用し得べし。苟も文を學ばんと欲する者は此書に依りて多大の利益を享くべきのみならず、事に操觚に從ふの士と雖も此書を坐右にして其便益する所必ずや尠少にあらず、大槻文學博士序して曰く『此書百家の文より其華を拔き類を以て分ち收めて索引閲讀に便ならしむ文を學ばむ者一たび此書を繙かば左右其原に逢はむ之を索め得て朗讀玩味せば巧妙なるを得むこと俯して地芥を拾ふが如くなるべし』と以て此書が如何に作文壇上の好書なるかを見るべし。

（己の三）

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

女學世界 第六卷第六號 定期增刊

女玉手箱

四月十五日發行

正價金貳拾錢郵税貳錢

凡そ學問には方法順序あり、規矩準繩あり、之を知つて學べは成功の域に達するを得べけれど、知らずして岐路に彷徨へば到底上達の期なし故に學問の鑰を開かんと欲せば、十分の勉强力を以て方法規矩に循ひて各自の工夫を用ゐざる可からず女學世界の定期增刊「女玉手筺」は女子の爲に學問の道しるべをなし

棚橋女史　三輪田女史　矢島女史　小川女史
鳩山夫人　大山夫人　山脇夫人　井深夫人
塚本女史　嘉悦女史　浮田和民氏　矢津昌永氏
中島徳造氏　小野鷲堂氏　村上専精氏　山田源一郎氏
松浦伯爵

其他の專門諸大家研究自修法より、女流學者の修學の工夫、經驗、其他勉學上のたよりとなるべき修業の栞あり、趣味ある文話ありて、正に學海の好羅針盤たらん。

重要目次

歷史の研究法　倫理と品性　女子と記憶術
地理の講究法　國語と漢文　讀書の工夫
英語の速成法　女子と美術　天才養成法
繪畫の手ほどき　體操と姿勢　父母の遺傳說
習字と筆法　音樂の鍵　女子立志篇
家政の智識　數學獨案內　學問と精神衰弱
禮式と社交　手藝道しるべ　學問と胃の腑
科學の應用　文學の研究法　學問と女子獨身說
割烹と實用　女子の獨學法　女子の苦學生

東京博文館本町

女(己の四)

實踐女學校同窓清國女學生



たらちめ



芝普連土敎會母の會

文章世界

第壹卷第壹號　三月十五日發行　正價金貳拾錢　郵稅貳錢

▲表紙……織田東禹君
▲口繪……木下藤次郎君
▲同……丸山晩霞君

●論説

論文家の三大用意(德富猪一郎)實用文はいかに書くべきか(慶應義塾長 鎌田榮吉)文章の引句について(文學博士芳賀矢一)女子の書翰文について(華族女學校學監 下田歌子)

●韻文

冬のわかれ(新體詩 蒲原有明)

●月旦

當今の時文家(鳥谷部春汀)

●文範

礪波山合戰(源平盛衰記)傘無之候間不參候(松尾桃青)人とては住まぬ所に候(新井白石)樺太穴居記(栗本鋤雲)後の祭がつかへ申候(式亭三馬)一首は此方にも惠み給へや(樋口一葉)貞女の名隱れなく候(細井平洲)亦我黨の風流ならん(竹越三叉)言不畏蛇御慨哄可破下候(賴山陽)牛蒡種四、五粒懇望(稻生魚彥)最後の日記(中島湘煙)わが最初の境界(森鷗外譯)——(獨逸文、英文を添ゆ)矢張國事に關係候(松平春嶽)那須野の馬(松尾芭蕉)拙者京學罷在候(高山彥九郎)濱寺の感(中江兆民)外種々

●評釋

支那時文俗解(高等師範學校講師青柳篤恒)短歌選評(文學士 尾上柴舟)俳句評釋(內藤鳴雪)漢詩評釋(宮崎來城)

●作文法

通俗修辭(五十嵐力)書翰文の要訣(神戶高等商業學校教授中川靜)時文に含まれたる漢文書(早稻田大學講師 牧野謙次郎)時文一斑(龍鳴山人)

●資料

摘句(桂)○熟語○新語彙○同訓異義○日用文字辨誤○雪女新體詩(兒玉花外)

●評傳

櫻痴先生と柳北先生(塚原澁柿)ニイチエの文章(長谷川天溪)

●文話

女子と文章(巖谷小波)剪燈文話(塚越停春)華美の文と質實の文上(石井研堂)雜報の變遷(半溯生)几頭燈前(國府犀東)漢文の話(殿野藍田)山房文話(笹川文學士)

●逸事奇聞

良工苦心○文章百話○原稿癖

●雜錄

余が文章に裨益せし書物
△夏目漱石氏△大町桂月氏△池邊吉太郎氏

●文叢

論文○敍事文○抒情文○書翰文○小品文○新體詩(蒲原有明選)和歌(窪田空穗選)俳句(內藤鳴雪)小說

●英語獨逸語

發刊の辭(高等商業學校教授 高島捨太)英文書翰作法(同人)獨和對譯(陸軍教授仲野秀治)

年刊十二冊◎外增刊發行◎菊判美本▲本文二百四十頁▲寫眞版
光澤紙刷四頁普通四頁水彩畫二枚挿入◎正價一冊貳拾錢郵稅貳錢
四冊金七拾五錢八冊金壹圓四拾五錢十六冊金貳圓八拾錢外要郵稅

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(庚の二)

小自在庵四明　中川霞城君著

平言俗語　俳諧美學

全一冊

洋装大判並製
紙數二百五十餘頁
正價參拾錢
郵税六錢

巻頭（春）さしぬきを足で脱ぐ夜や朧月　青嶋書
　　（夏）朝露によごれてすゞし爪の土　芳文書
　　（秋）枯枝に烏のとまりけり秋の暮　栖鳳書
口繪（冬）凩よ世に拾はれぬみなしぐり　春擧書

俳諧書の世に出づるもの汗牛充棟も啻ならざれども未だ曾て本書の如く一部の美學として其系統に從ひ俳諧の美を縱橫より解釋したるものなし本書は殊に高遠なる眞理を平易に通俗に説明したれば俳諧を學ぶ人は勿論美學を修めんと欲する人の爲にも無二の良書にして古今名家の俳句五百餘首を擧げて例とし尚ほ詩歌、文章、能狂言、院本、脚本、狂詩、川柳の類にも及びたれば美學の書にして斯の如く解し易く斯の如く趣味多きもの他にあるを知らず。

◉目次概要

東京　本町　博文館

（庚の三）

文藝倶樂部 第十二卷第六號 定期増刊

明治畸人傳

洋裝大判正價廿五錢郵税貳錢五厘 四月十五日發行

來る十五日發刊の本誌定期増刊は左に記せる明治の畸人を傳せんとす。讀者は開卷其奇に驚き案を拍つて快哉を絶叫せらるゝや必せり。其記事の奇なるに加へて、各名家が筆を呵せる文の妙あり。蓋し出版界未曾有の一大奇書にして洛陽の紙價爲めに貴からむ賣切れざる内愛誦を賜へ。

◎畸字辨

▲渡邊國武子
▲中根香亭氏
▲副島種臣伯
▲田中正造氏
▲中江篤介氏
▲中井弘氏
▲矢野次郎氏
▲守田勘彌
▲古河默阿彌
▲先代中村芝翫
▲林鈴二翁

▲田中館愛橘氏
▲田尻稻次郎氏
▲河村清雄氏
▲根本通明氏
▲和田垣謙三氏
▲佐田介石氏
▲西行庵小文師（京都）
▲田村宗立氏（京都）
▲大雅堂定亮氏（京都）
▲眞清水藏六氏（京都）
▲割烹鮒魚樂（京都）
▲天田愚庵師

▲松迺舍露八
▲松野眞維翁（大阪）
▲中島芳梅氏（大阪）
▲吉田玉造（大阪）
▲尾上多見造（大阪）
▲前波與兵衛
▲長谷川勘兵衛
▲志村次郎氏
▲能勢覺之丞氏
▲林豐旗氏
▲木村春溪氏
▲柴田芳洲氏
以下畧す

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（庚の四）

團欒



近藤廉平氏の家庭

特待第一回當籤廣告


婦人藥王
中将湯
中将湯
下腹痛み
月經不順
白血ちが血
其他婦人病
一切の特効藥
本舖 東京日本橋區通四丁目
津村順天堂
支店 大阪堺筋大寶寺町南入
皮膚病新藥
イーセリン
東京神田鍛冶町
大木合名會社
發賣
萬年筆は文明の貴女紳士が欠くべからざる要品にして一と度其の利便に浴するや最早一日も萬年筆なき能はざるなり
某紳士戯れて曰く余にして萬年筆なき時はサムソンの毛髪を失へると同じく頓に事務の精力を半減すべしと、
東京 丸善株式會社 大阪

特待第一回當籤廣告


新式彫刻指輪
東京銀座尾張町
白牡丹本店
宮内省御用
玉寶堂
東京下谷
第五回内國勸業博覧會褒賞
東京市馬喰町壹丁目
元祖
小町水
岳陽堂 平尾賛平謹製
株式會社
第三銀行
東京市日本橋區小舟町三丁目
預金利子
定期預金 六ヶ月以上 年五分
當座預金 百圓ニ付日歩 八厘
別口當座 同日歩 壹錢

美術金銀製



盃製作圖案

（銀　　盃）
（無　地）

二寸五分拾貳匁附	金四圓也
三寸廿匁附	金六圓也
三寸五分廿五匁附	金七圓六十錢也
四寸三十五匁附	金九圓八十錢也
四寸五分五拾匁附	金拾三圓五十錢
五寸六拾匁附	金拾七圓也

（十八金盃）
（無　地）

二寸五分廿匁附	金九十五圓也
三寸廿五匁附	金百拾七圓也
三寸五分卅五匁附	金百六拾四圓也
四寸五十五匁附	金貳百五十三圓
四寸五分七拾匁附	金參百廿圓也
五寸百三十匁附	金五百八十圓也

右之外御紋○文字、山水花鳥等彫刻御好に應じ廉價且迅速に製作可申候間陸續御用の程伏て奉冀望候◎送料内地十錢臺灣清韓卅錢郵劵代用一割增

貴金屬細工袋物商

東京市京橋區南傳馬町三丁目

丸屋商店

電話本局二十番

仙女香

洋傘　鞭杖

流行新形各種

仙女香

坂本商店

東京市京橋區南傳馬町三丁目

電話本局　一四四六

・本店ハ明治元年ヨリ引續キ洋傘ヲ營業ス・仙女香鞭杖ハ文政年間ニ開業ス・

…精良品ヲ撰ビ安價ニ調進ス

仙女香

女（辛の一）

主筆 日本中學校教授 攻玉社中學校教授 竹貫登代多君

數學世界

第二卷第壹號 二月四月・一日發行

三十八年五月を以て第壹號を發刊したる本誌は刊行以來學生諸君の大々喝采を博し臨時増刊を發する事二回爾來學期の都合に出り一月三月は各二回宛の發行を重ね三月十五日第十四號を以て三科共完了を告げたり。

今や新學期起ると共に從來の經驗に基づき大に面目を新にし來る四月一日を以て三十九年度第貳卷第壹號を出さんとす、本年度に於ける内容は如何?各科の講義は順序を追て初學者と雖も直に了解し得る如く親切に説明し、且之に新なる問題を課するは勿論毎號研究資料欄には斯道知名なる學者の意見を載し、尚毎號に課題を掲出して諸子の解答を求め、自問自答欄は廣く開放して大方の投書を寬め、殊に各種學校の試驗問題は汎く拾集して之れが解法の指針を示さんとす。

數學世界 算術之部
數學世界 代數之部
數學世界 幾何之部

三科共毎月一回一日發行
各一ヶ年卒業
洋裝菊判
毎號八十餘頁

正價

一冊金拾錢▲三冊前金貳拾八錢▲六冊金五拾七錢▲一ヶ年十二冊金壹圓拾錢▲外に郵税一冊壹錢宛▲三科全部一年卅六冊金三圓貳拾錢㊉外要郵税

第壹號要目

算術(第一號)

代數學(第一號)

幾何學(第一號)

女(辛の二)

◉會員大募集＝目下入會の最好機なり　四月廿日第一號發行

新學期開始

▲事情があつて高等女學校に入る事の出來ぬ人の爲めに『女學講義錄』を發行し僅に二ヶ年間に高等女學校程度の教育を完全に正則に授けます
▲世間の講義錄は乾燥無味で面白味がありません。本會講義錄は此點に注意し、諸學科の講義何れも面白く極めて分り易いようにし、且つ有趣有益なる數十頁の雜錄の外に、美くしい家庭小說を每號附錄とします。

▲本會の講師は皆な斯道專門の大家で且つ教育に充分經驗のある方のみです、講義は只親切と云ふ事を主とし丁寧懇篤に說いてありますから本會々員は親しく講師の膝下に在りて講義を聞かれると同じ事です。
▲本會講義錄は右に述べた通り最も完全したものでありますが、會費は極めて少額で都會一ヶ月の遊學費で、優に全期を終はる事ができます。

大日本淑女學會

高等女學校程度の講義錄發行

批評一斑

▲中央新聞評　講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也
▲每日新聞評　米國の通信教授法を參酌せるもの文字平易說明懇篤を盡くせり
▲二六新聞評　高等女學校の全課程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり
▲日々新聞評　講義はすべて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり
▲都　新聞評　講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し
▲報知新聞評　講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也

上掲の批評を御覽にならば本會講義錄の眞價がお分りになりませう

▲本會規則書▼　端書にて申込あれば直に郵送す可し

◉東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

女（辛の四）



女學世界

第六卷第五號

四月五日發行

配偶の選擇

結婚は人生の幸福の範圍を増大すると同時に又其の災難の領域を擴大するものなり、結婚は幸福を伴ふと共に又災難を伴ふものたることを知らざるべからず、故に人若し結婚せんとならば、まづ其の配偶者の眞價を認めて後日に悔を遺すなからんこと肝要なり、されど這は誠に言ふに易くして行ふに難き事なり、如何なる人も結婚前に當つて其の配偶者を仔細に研究し、其の缺點を探り出すが如き事は不可能なり、况んや其の配偶者が己れの戀人なるに於てをや人は遠方よりすれば完全に見ゆるも、接近して懇意になれば忽ち多くの缺點を發見し是まで氣のつかざりし種々なる難癖を見るものなり、タトヱば彼の富士山のごとし、遠く望めば玲瓏たる玉芙蓉も、足一たび其の所に接すれば遠望の美觀は忽然として亡せ、眼界一面燒石狼藉して缺陷溝壑の多きに驚くが如し、されば配偶者の選擇は決して之を遠望して認むべからず、是に於てか、よく其の父母兄弟を見其家風を見、其教育を見、其平生の趣味好尙を見、其眞價を知るに於て大なる謬なきに幾からんか。



男女 青年の煩悶と其解決

文學博士　元良勇次郎

近來煩悶といふ言葉が大分世間に流行して來たが、煩悶とはそも〳〵如何なる意味であるかといふと、乃ち自己の精神に或る疑問が起つて、その解決に苦しむといふことである、煩悶が原因となつて自殺を遂げた例もあるから、これは中々輕からぬ問題であるが、何か其の解決の方法は無いか、兎角斯ういふことは、衣服の汚れを洗ひ落すやうに一時にさつぱりと解決して仕舞ふといふ事は困難であるけれども、近頃この傾向が青年男女の間に段々蔓るやうに見へるから一寸自分の考を述べて見やう。

一體二十前後の年輩は、恰度身體の諸機關が整備して、其勢力も極めて盛んな時であるから、何事にも感動し易い傾向で物事によく熱中するものである、そしてその思想は秩序的に發達せず、やゝもすれば混亂に陥る氣味がある其れが爲め何か一事件が起ると、自分一個の思想で抑制し切れぬ所から、つい煩悶に陥つて、取返へしのつかぬ過失をやることがある然らば之を救濟するの道は如何かといふに、すでに煩悶に陥つた人に就ては、

その境遇やその事情に依つて、個々別々の判斷を下し別々の方法を取らなければならぬからそれは中々困難であるけれどもこゝには社會全體より見て、之に對する豫防策ともいふべき方法を一と通り話して見やう。

世には一派の誤解者があッて哲學に身を入れると、宇宙は不可解となり其極煩悶を起して終に厭世に陷るものであるから、哲學は實に不健全な學問であるといふやうな誤解を懷いてゐる人もあるやうだが、哲學者に取つては隨分迷惑な話である成程哲學は物理數學などゝ違ひ、學問の性質とて、固より不健全なる思想を容れ得る餘地もあらう、また哲學上から言へば宇宙不可解といふやうな事も或は立論し得らるゝであらう。しかしそれが果して人を激發して煩悶厭世に陷らしむるものであるや否やといふ段になッて論ずれば、自分は勿論其れは絶無であるとは言はないけれども、人を厭世的に陷らしむる大原因は、宇宙其のものゝ不可解的なるよりも寧ろ自己の心中に或不可解の事が存するからではあるまいか。そこで、その不可解の起る原因は何かと考へて見ると。

第一は、青年特に比較的思想のある鋭敏な青年に有りがちなのは人生に大望を懷くこと、即ち英語の Two ambitious である。自分の體質や、境遇や技倆や地位や財產や、分限やを忘却してツーアンビショースになるといふことが煩悶不可解に陷る第一原因であらうと思ふ、此頃總べて其様いふことからして起る身體の衰弱を、醫師の方で神經衰弱といふ中に入れてゐる、彼のヒポコンデリー(鬱憂病)の如きも亦此中に入るのである。

それから青年が其の精神上に裨益を受け、慰藉を受くるところの朋友のないのは、是又煩悶不可解に陷る原因の一つであらう。即ち萬事を打明けて話す友達のないといふのがよろしくない。尤も朋友は撰ばねばならぬ、惡るい朋友は有たぬ方がよいが、去ればとて良友をまでも棄てるのは、毒を恐れて食を斷つと一般、甚だ愚かなことである。良き朋友を持つて常に精神上に怡樂を受くれば身體の諸機關も自づから適當に働らいて煩

悶に陷るやうな事は無からうと考へる。

これを今少しく他の方面から考へて見ると、日本には古來儒敎の影響として天命に安んずるといふ思想が普く行はれてゐたのに、西洋思想が輸入されて以來、思想界は一時混亂の狀態に陷ッて、此天命に安んずる的の思想が打破されて仕舞ッた、加之ならず、維新革命の變動を目擊した人々が、今も生存してゐる爲に健全不健全にかゝはらず投機的の精神が社會の那處かに充ちてゐる。其結果として、或る方面では成功といふ事が非常に鼓吹されてゐるのである。成程功名富貴はあらゆる靑年を誘ふ所の好餌である卑賤より身を起し一躍して靑雲の地に達するといふとは勿論靑年の血液を沸騰せしむる所であらう、故に或場合にはこれが刺擊とも爲り興奮ともなつて靑年をして志を立てしむるのであるから決して惡くはない、けれども斯かる事を奬勵して、靑年をしてツーアンビショースの中に投じ、柄にもない大望を懷かしめた擧句は、恰も今日の如き不健全な現象を來すことゝなるのである。

これに就て一寸外國の有樣を見るに、彼の米國などは一攫千金的の考を有つてゐる者の多いのに拘らず、煩悶厭世といふとの比較的に少ないのは、彼の國柄はたとへ靑年が大望を懷くとも、立働きさへすれば其目的を遂げ得る狀態に在るので、一方で社會が刺激を與へると共に、他方には十分活動の餘地が有るからである。又同一人種でも英吉利人となると少しく趣が違ふ即ち貴族は貴族、平民は平民と、各々其階級分限に安んじて冷靜沈着に立働いてゐる、そうかといつて、決して不活潑な人民ではない、彼等は本國に於てこそ各々その分に安んずるの美風があると共に、一朝殖民地の如き廣濶なる舞臺に出づれば、神身の全力を注いで其の事業に奮勵する、これは英人の特長で、隨て日本の如き煩悶沙汰も極めて少ないのである。

されば如何にして煩悶厭世に陷りつゝある此の靑年社會の通患を洗除すべき乎といふに、之に對する自分の

答案は甚だ簡單である。即ち上述の如く過大の欲望を抑制すると、それに今一ツは精神智識の相談相手たるべき良友を得る事である。過大の欲望を抑へて英人の如く其分に安んじ、其の職業に忠實なると共に、各自その生活規則を正ふすべしといふのである。

爰に少しく自分の經驗をいへば、自分も青年時代には矢張り種々の思想に驅られ、煩悶に陷り、鬱々として不快に沈んだ事もあつたが、今日より思へばこれは朋友の無かつたのが大原因であつたらしい。またヘーゲルの哲學書を讀んで、世間の事が全然判つたやうな氣持の爲た時代もあつた、斯うなると勉强も研究も其方退けとなり、何も爲す事が無くなつて、氣を失つたやうに茫然としてゐた事もある。若し今日の青年にして、斯くの如き精神狀態に陷つた者がありとせば、大に警戒すべき事である。

要するに天命に安んじて其職分を盡すといふ事が、煩悶を豫防し洗除する最大要素であると考へる。但し天命に安んずるといふ事は小成に安んずるといふ事と區別せねばならぬ、天命に安んずるのと小成に安んずるのとは全然別物である、自己の分限に安んじて其範圍に於て大いに努力すると云ふ事が即ち天命に安んずるといふ事になるのである。で、實際問題としては、自分は青年諸君が海外に押し出して、新生涯を作らん事を奬勵する者である。今日青年の煩悶に陷りつゝあるは、取も直さず小天地に跼蹐して、生活の針路に障害の多いのも與つて力あらうと信ずるのである。

今の女子教育界で名聞を求めず、榮華を冀はず、一意專心育英の業に心を寄せらるゝ津田梅子女史は平素極めて少食で朝夕の御飯は一膳位に過ぎないとか、これは勿論習慣でもあらうが、一つは女史が胃を愛さるゝ所から來たもので大食をしては自然に氣が倦むもので、人間氣が倦めば勉强をするのに懶くなるは自然の數、女史はこの點に於て既に攝生の第一義を實行されて居るのである兎角理屈は知つて居ても實行はむづかしいものであるが、克己に强い女史は斯樣にして日々多くの學問をされ明晣な頭腦をして益々明晣ならしむる樣務めらるゝのは敬服の至りである。

衣服の改良に就て

子爵　秋元興朝

日本人、殊に日本婦人の衣服改良は、一時世間の問題となりしが、日露戰爭の爲め、暫く其儘の姿となりたり、今や平和は全く克復せられ、思想界も、農、商、工界も、大に飛躍發展を見むとする時なれば、衣服問題も再び社會の論議に上り來るべきは、言ふまでもなからむとす。

元來衣服は、家屋の構造と密接の關係を有し、單に衣服のみ改良せむと欲するも、家屋を改良せざるに於ては到底行はれ得るものに非ず。今の日本家屋に住して男女共に洋服を用ゆるの不便なるは誰も知れり。中流以上の家庭にて、一部洋館を併有するものなきに非ざれども、而も多くは應接室位に止まり、朝夕の坐臥共に靴を穿ち、椅子に凭るものは非ず。是れ主として婦人の服裝が之を許さゞるに由る。

去れば衣服の改良は、家屋の改良と相伴ふに非ざれば、到底成功を見ること難かるべきも、而も近き將來に純洋風となるが如きは、殆ど期し難き所なるべし。何となれば家屋の木造なること之が第一の困難なれば也。元來我が家屋は木造なるより、疊を敷きて坐臥するの風俗を生じたるものにして、若し初より石造ならば、西洋風若くは支那風に、腰懸を用ゐたること必せり。去らば日本の家屋は何故に木造となりしかと云ふに、其原因は一にして足らざるべきも、日本が地震國なるは確かに之が重なる原因なるに似たり。地震に際して石造の家庭が、木造の其より不適當なるは、こゝに更めて說明を要するまでもなければ也。

また之が第二の困難は、道路の粗惡なること也。花の都と呼ばるゝ東京すら、風の日は塵埃の都となり、雨

の日は泥濘の都となり、時としては風塵濛々として室内まで砂まみれとなることあり、時としては泥中にオバーシユースを吸取らるゝこともあり。斯くの如き道路を歩行して、其儘の靴を以て室に入らむは、百の靴ぬぐひを玄關に具ふとも、到底不可なるべし。之に反して西洋の大都會は、大道小路皆石若くは木を敷き詰め、屡水を以て之を洗ひ、又雑巾を以て之を拭ふを以て、其靴ぬぐひは、日本のものゝ如く早く汚ることはなき也。

第三に、洋館は夏涼しき代りに冬寒く、ストーブを用ゆるも猶寒きを覺え、到底鐵管を以て蒸氣を通ずるに非ざれば、堪え難き程也。而も此の如きは、今の日本人の生活程度に於て、上流の家庭と雖、容易に許さゞるの經費を要す。

第四、我邦が雨量の多き土地なることも、第一の困難也。我邦の雨には足駄がふさはしく、足駄には亦疊がふさはしきこと、是れ必然の結果也。試に高足駄東コートにて、蛇の目の傘を差す婦人と、靴にて洋裝の外套を穿ち、蝙蝠傘を差す婦人との並び行くを觀よ、洋裝婦人の泥まみれとなりたる靴は、歩毎に袴の裾を摩擦し之が裾をして亦泥まみれとならしむるを見ずや。尤も道路の改善にして成し得るに於ては、之が困難だけは幾分か之を減し得ざるに非ず。

斯に知る、今日邦人の衣服を改良し、殊に之が婦人の衣服を改良せむとすれば、差寄り幾多の困難ありて、未だ容易に着手し難き所あることを。而も此儘にして尚何時までも改良の法を講せざらむか、坐するによりて足部血液の循環を妨害し、延て足部の不發達を來し、遂に野遊遠足登山等に堪え難きものとなり、室に在りて遊戯談笑するの結果、運動の不足より胃病を來すもあるべく、新鮮なる空氣を呼吸せざる爲め、肺病に罹るもあるべし、又山水の美景に接して浩然の氣を養はざるより、徒に室内に閉居して小人不善を爲すの憂ひも有るべし。以て健全なる大國民を養成すること難きを見る。

或は說をなすものあり。今日衣服改良の條件としては、第一に質素にする事、第二に衞生に適當せしむる事第三に自宅にて仕立て得るものならしむる事の三要件を具すべしと。然れども此は餘りに消極的に傾き過ぎたり。むしろ之が標準衣としては、單に如何なる衣服が最もよく日本人殊に日本婦人の衣服として適當なるかを選擇して可也。衞生上經濟上の要件は第二三位に置くべきのみ、即ち先づ如何なる衣服が、眞に日本婦人に恰好善きか、如何にせば眞に優美に高尚にして、美人に見ゆべきかと云ふ如き事を第一問題とし以て之を製し次に此くの如くすれば或は不經濟に過ぐるとか、或は衞生に適せずとか云ふ如き各種の點より、更に斟酌增減して、斯に始めて見るに足るの新服裝を得べき也。若し之を最初より主ら衞生とか質素とか云ふ事のみ基礎として製せしめむとせば、竟に或は奇怪の形狀とならざるもの稀なるべし。

序ながら一言したきは、此の服裝の變化と共に變化せざるべからざる結髮の形狀是也。服裝と共に、其髮をも歐米風、若くは支那風、若くは折衷に變化せしめざるべからざるかは島田髷や丸髷が洋裝者に似合はざるを見て之を知るべし。元來此の丸髷なるものは、其形丸きを以て然か云ふと雖、元の名は勝山にして、德川時代に勝山と稱する賣笑婦が結ひたるより起り、一般に社會に流行して、明治初年の如き、高貴の御息所さへ之を用ゐたるもの也。西洋にても、婦人が盛裝の時胸部及背部を露出する風俗は、ルイ十一世時代に於ける佛國の一賣笑婦より始まりたりと。同じ流行なれども、武士が用ゐたる折裂羽織の如きは、帶刀の便宜上より來り、西洋の燕尾服は、乘馬に邪魔なりとて、フロックコートの膝部を切りたるより起り、共に必要上より出でたるものたり、必要より出でたる流行は、必要の消滅せざる限り之が繼續を見ると雖、時代の嗜好より出でたる流行は其流行り廢りに常あることなし。丸髷の如き、今は見馴れたる故何とも思はざれど、虛心平氣に考ふれば決して見善き形に非ず。何とか改良して欲しきもの也。尤も一方の衣服の改良にして成らば、之が釣合の必要上、

自ら廢滅せざるにもあらざるべし。

要するに、婦人服の改良は、何處までも見えの好きを第一とし、家屋との關係、衛生上の必要、經濟上の都合等は、之を第二第三第四の要件として、其順序を誤らざる樣に工夫し、以て世に耻かしからぬ一の新服裝を定むるに至らむこと、吾等が切に其道の士に希望する所也。

女子の職業

共立女子職業學校長　中川謙二郎

我邦從來女子の職業と稱すべきもの甚だ少なし。其中農家の子女は、農業の手助けをなして最も能く働き、商家の子女は之に次ぎて或は帳場に在り、或は店頭に出でゝ家業を補佐し、工業界の婦人は、其狀態知悉し難きものあれば、之を詳かにすること能はざれども、兎に角前二者に比するに、活動の程度稍後れ居るものゝ如し、殊に月給取と名くる一階級、即ち官吏會社員等に屬する一階級の子女に至ては、勞働即ち職業に緣遠きこと、工業界の士女以上にして、家事以上は、僅に琴曲挿花茶湯の如き遊戯に其日を消し、殆ど何事をも爲さゝるもの多し。蓋し安逸を貪るの譏りは、竟に甘受せざるべからざるべし。

是れ我が婦人界に於ける一大惡習也。速に此の惡習を去り、各人をして相當の職業を執らしめざるべからず必ずしも男子と並び立ちて仕事をなすを要せず。必ずしも男子に代りて事に任ずるを要せず。又必ずしも一定の場所に出張して事を執るを要せず。家庭に在りて爲し得べき女性的仕事決して少なきに非ざれば、宜しく此

等に從ふて可也。たとえ月給多く、豐かに生活しつゝある人の子女たりとも、家事以外に一の職業を有せず、全く閑遊徒食の姿なるは、他の農商家に於ける子女に對して、寧ろ慚死すべき次第に非ずや。而も此等の人々が、却て比較的多くの敎育を受けたる人々なりと謂ふに至ては、我等は、其文明の新智識を授かりたる甲斐の覺に安くに在るやを疑はざる能はず。社會は、一面に此くの如き不生產的人間を有するを以て、他方には、星を戴いて出で、月を踏で歸る農夫を出し、過勞に得堪えずして、頗る不衞生的狀態に陷りつゝある工女を出さざるを得ざるのみ。

單に女子が職業をなす點より云へば、工女の如き、社會の徒食分子を減じ、國家の生產力を增加するを以て其善き事たるは言ふまでもなし。而も詳に其狀態を觀察すれば、一方に頗る憂慮すべき所なきにしもあらず。現今の我が工業組織は、女子の勞働に體質相當の度合を有するや否や、換言すれば、衞生上甚だ香ばしからぬ結果を來す事はなきや、是れ一個の疑問也。我等は實に近き將來の母たるべき工女が、過勞の爲め、存外に不衞生的惡果を受けつゝあるもの多きを恐る。

蓋し從來女子にて濟むべき職業、若くはむしろ女子を適當とする職業にして、男子が之を執り來りたるもの少なからざりしに反し、社會が今日其愆を悟りて、女子の新職業を增加し行くは、甚だ慶賀すべき現象に屬すと同時に、大に注意せざるべからざるは、衞生也。必ず母として、第二の國民たる子女を養育すべき大任ある女子は、如何に職業なればとて、生理上有害なる事までも、忍んで爲すべきの理由は、決してあらざるべしと信ずれば也。

社會が次第に進步するに隨ひ、從來になき職業にして、今後必ずこれあるべき女子の職業、漸を以て增加するは必然の勢也。我等も亦出來得る限り之を奬勵するの必要を感ず。近來電話の交換手や、鐵道の出札係が、

女子の職業となり、是迄これに從事したる男子が、女子の爲し能はざる他の職業に轉じたるは、一面より見れば、國家は其れだけ働き手を增したるものとす。交換手や出札係の如く、美術的にして、緻密溫柔なる女子相當の小事業を女子に渡すは、國力發展上大に喜ぶべき結果を見るべし。其他紋を畫く事、模樣の下繪、婦女子の裝飾品製造等、亦皆從來男子の爲したる仕事にして、今後は女子を以て十分に之を爲し得べく、必ずしも大工場に出勤せず、家庭に在りて十分に之を爲し得べし。若し夫れ各商店殊に吳服屋などの店頭に、顏色蒼白なる店員を見るは、我等の頗る不快を感ずる所たり、是亦女子に改めて可也。

なほ今日の日本の社會は、勞働をなさゝるを上品の事と思ひ、華族富豪の如き上流子女は、仕事をせぬものとの舊き習慣を、全く蟬脫せざる姿あり。是れ大なる誤にして、社會の上流に立つ人が此くの如き狀態に在るは、大活動を要すべき戰後の今日に坐視する能はざる所、速に改めしめざるべからず。往古ピートル大帝が親ら造船術を學びたる例は、今更引用せざるも、獨逸の皇室に於ては皇帝たるものが皇太子時代に必ず一の職業を修得するの例は、實に眼前の好模範に非ずや。今日戰捷の名譽ある國民が、猶蒼白くして纖小なる手を華奢と貴び、仕事をすれば手指の太くなる恐れありとして之を厭ふが如き、是非速に打破するの必要ある惡慣習なりとす、我が國民が從來美人の標準を誤り、病的體軀を喜ぶ如きは、眞に笑ふに堪えたる事に非ずや。

之に反して幸に女子に與ふるに適當の職業を以てし得るか、啻に女子をして閑居不善をなすの事なからしむに足るのみならず、男子の仕事を妨害せず、寧ろ相扶けて倶に與に活動するを得、始めて國家の良好なる發展を見るに足らむとす、只注意すべきは、兩性互に其身に適する職業を擇み、互に職業を奪ひ合ふ如きことなきを要すること是也。

今回の日露戰爭は、獨り男子が戰場に於て活動したるのみならず、女子も家に在りて良人の事業を代理し農

家に於ては殊に然るもの多かりしこと、余が地方巡回中に實見したる所也。日露戰爭は、比較的怠惰の日本婦人をして必要上餘儀なく、職業を習ひ、且つ之を爲すに至らしめたるものと謂ふべし。其表面に顯はれたるものは、愛國婦人會軍人家族授產會等の繃帶卷眞田編み等となり、其顯はれざるものは、良人若くは子弟の出征中、殘れる子女が其田畑を耕し、其物品を製造し、其商品を販賣したること是にて、此等の出征者が凱旋したる後も、依然其事に從ひつゝあるものあり。此くの如きは、甚だ良好なる現象なれば、是非共此等婦人の新職業を其儘持續せしめ、同時に敎育多き階級の子女に在りても、恤兵の爲め習得したる手藝の如き、平和後も之を永く捨てざる樣希望に堪えざる也。

更に職工若くは事務員としての女子使用に關する利害に就き、一言せざるべからざるものあり。今日女子の事務員に多少の監督を要する如き、是迄家内にのみ在りたるものが急に外出することゝなりたる爲めにして、過渡時代の弊害として、是位の事は免るべからざる所也。言ふまでもなく永久に然るべき事に非ざれば、社會は之を忍耐して可也。病氣若くは事故缺勤の如きも、自ら男子より多かるべき恐れあれど、是亦俸給の安き點に於て之を償ふに餘りあるべし。故に一個の職業にして男女何れも之を爲し得ることは成るべく之を徒食多き女子に讓るを、今日の機宜に適する事なりと思ふ。

若し夫れ女子に於ける職業と敎育との關係に就きては、三重縣及和歌山縣に於て面白き實例を見たり。即ち工場に於て、工女に餘暇を以て多少の敎育を施したること也。勿論是には幾分の費用を要するのみならず、工女をも疲勞せしむるより、工場主は多く之を好まず、初めは概して厭々ながら之を爲したりしが、工女は爲めに理非の辨別力を加へ、道德心を增し、或は從來歌ひ來りたる卑猥の俗歌に代ふるに、有益なる敎育唱歌を以てする如き有樣となり、從て之が取締りも容易に、風敎の上にも善きこと多く、仕事の分量さへ遂に增加するに至りたり。女子に敎育を與ふるの利益實に此くの如きものあるを見たる以上は、三重縣和歌山縣の實例は、速に之を全國各工場に普及せしめたきもの也。是亦吾等の切に希望する所なりとす。

今日の問題

女學校選擇の不注意

高等女子實修學校長　山脇房子

女子教育の要は學德兼ね備はりたる完全な女子を養成して其本分を盡さしめんとするにありて、決して讀書の數を重ぬるを貴めるでもなく、理屈を喋々するを讃するのでもないとは論を俟たざる所であります、然るに近來多くの女學生幷に其父兄等の選ぶ所を見るに主として看板的であります、例えば學校を選ぶにも可成大なる建築物にばかり目をつけて、內部の整不整抔には一向無頓着であります、廣告が每々新聞に顯はるるもの〻、生徒の數の多きもの等、表面の點のみに就て選擇するを常とし、最も必要とすべき敎化の任に當る所の校長或は監督者の品位人格等にも、亦た校風——これは一家の家風が其主婦の如何によりて異る如く、學校も其校長を初め其他の如何によりて大に差別あるものです——にも一向不注意なるは誠に嘆息の至りであります。

一體此廣告といふものはあてになるものではありません、何となればた〻生徒の多數のみを望む學校はよく廣告に力むるからであります。又た規則書の立派なのもそうです、これはどの學校でも規則丈は完全に印刷して、それに多數の講師の名を列ね、且つ何々博士とか何學士と云ふ肩書のある人名を加へてあるけれども、一週間に一度も出講せぬものがあるからであります。

次に校舍の宏大なのも生徒の多數なのも亦たあてにはなりません、なぜなれば學校にも醫者の玄關と同じく、外見を立派にし宏大にして無暗に烏合……と云ふ

と酷かも知れませんがまあ斯樣云ふた樣な生徒を多數に收容し、教育を名として營利を謀るものが往々あるからです。

されば此に入學しやうと思ふ者は、第一に校長幷に教師等の人格をよく知り、第二に其校の校風例えば其校の出身者に就てよく其處世に於ける成績を探り、第三には內部の整頓して居るや否やを糺すことが必要であります。それから自分の子を入學せしむべき學校は父兄が是非共よく〳〵調査し選擇しなければなりません、然るに唯だ其子の意見にのみ任せ、云ふが儘に漫然入學せしむる者が多くあります、これ實に其不忠實な事を慨かざるを得ませぬ、父兄既に斯樣な風でありながら、却て教師學校などを怨む樣なとの出來るのは嘆息に堪えざる次第であります。

夫から寄宿舍に入らしめる場合は、是非共其寄宿舍の如何を詳細に取調べなければなりません。若しまた入塾の出來ないものは必ず確實なる親戚或は知人に托して通學するの便宜があるでなければ、入學を見合する方よいと思ひます。

新に入學する女子及び父兄に對する希望は大抵右の如くでありますが、こゝに一言現今の女子教育に就て常に嘆息して居ることを少しく申たいと思ひます、私の考へる所によりますと、女子教育今日の急務は女子に實力を附けねばならぬと云ふとであります。私見によれば日に月に女子の教育は進んで來ますが、どうも實際的の智識が乏しい樣に思はれるのです。御覽なさいまし、一般に世の華美な風に染み、自家の收入の程度をはからず、身分不相應な生活をなし、或は身邊を飾り、勝手元の事などは知らぬと云のが上品な人の樣に思ふて居るものがあるではありませんか、こんな風では女子教育は寧ろ不幸を來す原因となりはすまいかと危ぶまれます。されば先づ女子の品性を高め實際の力量あり、またよく自分と我が家を知り、入るをはかり出るを爲し、自家の收入に滿足し、巧に家政を經營する事の出來る女子を養成しなければなりません父兄も亦た充分此事を承知してほしいのであります。

若し收入が少くして下婢を使ふ事も叶はぬならば進んで自分でやり、眞に内助の功を全ふする覺悟にならねばなりません、いくら學問や藝術に上達したとても實際的經濟思想のない、或は氣力の足らぬ女子は如何程あつても何もならず、また到底理想的婦人となす事は出來ませぬ、されば當局者も父兄も當人も充分此心得を有してほしいものであります。

新入學の三綱領

女子學院長　矢島楫子

女子の入學と云ふ事に就ては、父兄にも學生にも隨分希望がありますが、今は單に學生に就て一二の準備をお話したいと思ひます。

第一は健康と云ふ事であります、昔から「健康なる精神は健康なる身體に宿る」と申ました樣にどうしても身體を强壯にせねば、到底成業する事は出來ませぬ併し出來るとして精一ぱいやるのですから其結果として種々の病氣を起したり、常に病身であつたりして、妻となつても主婦の義務を盡す事は出來ませぬ。其上精神にまでも及ぼして賑かな活々した家庭を形くる事は六ケしいのです、反之身體が健康であれば、自然氣もゆつたりするし、少々困難な課業でも爲し遂げる事が出來るし、精力に餘裕があるから愉快に勉强する事が出來るのです、それで私は入學準備の第一として大に身體を强壯ならしむべしとお勸めするのです。

第二は勉强に勉强して無理に入學すると云ふ樣な事をなさず、ありのまゝの力で入學すると云ふ事であります、私の學校では、此方法に基き入學試驗と云ふものは致しません、入學して後に其力を試して見て相當の級に編入する樣にしてありますから、一般の女學校の樣に餘計な手數はしませぬ、一體この俄の勉强と云ふものが、極めてよくない事で、無意味と云ふと假面をつけた樣なもので、害こそ多けれ、益の少ないもので、是等の事は思想幼稚な女子はあまり考へませんから、父兄が大に注意せねばなりません、隣の娘がどう

の、誰それに負けてはこうのと云ふ樣な、見下げた心事から割り出して娘を强ゆるなどは實に怪しからぬ事であります。

第三は學習の精神を慥かにすることです、と申ますのは、この校を卒業して置けば結婚の時によいの、あの校を出ればいくらの月給を取ることが出來るのと云ふ樣な下劣な心を以て娘を敎育し、又入學するなどの考を有たぬことです。即ち敎育せざるべからざるが故に敎育すると云ふことが即ち「人」をつくる爲に敎育する「人」になる爲に敎育さるゝと云ふ高尙な考を以てすることです。さもないと到底眞の敎育はなし能ふものではありません。

夫で私は健康、實力、精神此三者を以て新入學に就ての希望とするものであります。

入學と身體の强弱

京都第一高等女學校長　河原一郎

女子の敎育が旺盛になつて來た結果、入學志望者は年々增加して來ます、現に此學校の如きも常に募集數の三倍もある有樣です。斯樣な次第であるから入學する丈の資格がありながら、選に漏るものが中々に多いそれ故從て競爭試驗的になりますから、さて入學試驗を受くる樣になると寢食を忘れて準備する樣になり、父兄も奬勵する樣になりますが、實に困つたものです‖學校の設備が充分であればこんなこともありますまいが‖さて此入學準備として勉强した學力は以て其生徒の眞の力となす標準とすることは出來ません、併し之を判別することは出來ませんから、止むを得ずたゞ試驗の成績にのみ據る外はありません。

左樣な次第ですから、勢ひ萬事左樣な有樣となり、又た小學校の方でも處によると正科の外に敎育して合

(中綴の一)

特待廣告第一回當籤に就て

豫て各誌上に於て廣告致し置き候如く平素掲載を申込み居られ候廣告主に呈せし特待抽籤券に對し、去三月十一日を以て東京書籍業組合事務所樓上に於て一月二月の特待券の第一回抽籤を擧行致し候

當籤は規定の通り二十五口にして其掲載雜誌及方法等を左の如くし四月の紙上に掲ぐべく而して當籤者及各店廣告誌は下記の如く決定致し候

▲太陽 第五號 四月一日 一頁

四月一日發行の第五號に舶來厚口の漉色紙色刷となし壹頁内に六口の當籤廣告を收め之を本文の第一頁の對面に挿入す

▲實業世界太平洋 第七號 四月一日 一頁

裏表紙に二色刷とし一頁内に三口を載す

▲文藝倶樂部 第五號 四月一日 二頁

用紙を寫眞版用舶來上質紙とし表裏二頁を用ゐ而して全部を寫眞銅版に製作し一頁内に四口宛兩面八口を色刷となす

▲女學世界 第五號 四月五日 二頁

總て文藝倶樂部同樣極めて美麗なる寫眞銅版となし兩面に八口を掲ぐ

第一回當籤二十五口二十店

定價金貳百五拾圓の廣告面進呈顧客

華主名	當籤券數	掲載誌
◎三越呉服店殿	一口	太陽
◎寶文館殿	一口	太陽
◎日新館殿	一口	太陽
◎育成會殿	一口	太陽
◎小西寫眞店殿	一口	文藝倶樂部
◎大木合名會社殿	一口	女學世界
◎丸善株式會社殿	五口	太陽、太平洋 女學、女學、文藝
◎十字屋樂器店殿	一口	文藝倶樂部
◎小林富次郎殿	一口	文藝倶樂部
◎早稲田大學殿	一口	文藝倶樂部
◎平尾賛平殿	一口	女學世界
◎第三銀行殿	二口	女學世界 文藝倶樂部
◎近藤利兵衛殿	一口	文藝倶樂部
◎山田安民殿	一口	太平洋
◎玉寶堂殿	一口	女學世界
◎津村順天堂殿	一口	女學世界
◎松田白牡丹殿	一口	女學世界
◎山崎愛國堂殿	一口	太平洋
◎林漆器店殿	一口	太陽
◎守田治兵衛殿	一口	文藝倶樂部

右一月、二月中第一回の當籤者に候也

博文館廣告部

上記の特待廣告は係員が特に意を凝したるものなり
切に各誌讀者諸君の注視を望む

博文館編輯局編纂

太陽臨時増刊

新法令

附第二十二帝國議會史

洋裝大判二百五十頁
正價金參拾錢
郵稅參錢

太陽増刊 第十二卷第六號 四月廿日發行

第二十二回帝國議會は戰後の經營に任ぜる第一次の議會にして之を前の諸議會に比ずるに、其重要の點に於て幾と比儔を見ず議する所の法案は、其數甚だ多からずと雖も、之を大にしては有名なる鐵道國有法あり、市制町村制改正案あり、輸出羽二重練業法あり、韓國に於ける裁判事務に關する法律あり、韓國統監の職權に關する法律あり、廢兵院法あり、醫師法あり、其他規則の改正變更等、重要なる法律は決して尠しと爲さず、之れに加ふるに、過去一年間に發布せられたる諸種の法令を以てして、太陽臨時増刊『新法令』を發刊せんとす、編纂、例によりて整然、校正又嚴密なり、而して末尾に附する所の『第二十二議會史』は春汀鳥谷部氏の筆に成りて叙事簡明、九十日間の經過は卷を開ひて即ち之を知るを得べし、また是れ座右の寶典、國民必讀の好書なり、敢て之を薦む

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（中付の三）

根治確證

わきが

新治療藥 ラピヨシン

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず 價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を滲滴驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用いよ必ず速に用て苦惱を脱せよ

毛のはへる

原名ヘグネス 白髪生毛液

めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髮増生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

毛をはやしたき人早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止

有力なる最新液にて

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ新しい

化學製品

色の白くなる

ハンドコロン溶液

盛に皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なりし

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十三錢本劑は貴紳淑女紳士間に大高評を博し殊に愛用せらる最新流行の秘方奇劑にして主性本劑を塗擦すれば十分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝をなし

月やくおとし

メリルビン此藥は子宮を痛ず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極て烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る又月經不順より起る子宮血の道を治し全古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製分貳圓參拾錢小包料拾錢

● 專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

根治確證 新治療藥

梅毒

キーネル

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる一種稀有の新劑にして忽ち全身の毒を大小便と共に除り如何なる劇烈のばい毒●そう毒●かさ●ふきでもの●よこね●かんそう●骨うつき其他如何なる惡性の梅毒も必根治す

輕症は半劑惡性重症も二劑用よ誓て奏効す世間種々雜多の無効なる驅黴藥の比に非ず藥價半劑八十五錢一劑一圓六十錢二劑參圓郵券代用一割増

らい病

新治療藥 ダービン

本劑は最近歐洲諸大家の最良藥と認めたる有力藥品の成劑にして何人にも容易に服藥し得る樂院館幾多の調劑の實驗に鑑み丸劑となしたる者にて其有効確實なる本劑に優る者なし試に壹劑分丈けも用ひ見よ必ず大効あり壹劑廿日分三圓二劑四十日分五圓特製九十日拾圓●郵券三錢送れ說明書進呈す

りん病

獨逸秘方 効驗一夜に顯る

新治療藥 キーロシン

本劑は最新の文明的有力藥にして如何程頑固劇烈なる淋病しよかちも一夜に輕快を覺へ膿血速に止り痛を止め輕きは一劑分重きは二劑分如何なる惡性の頑固慢性症も特製を用よ忽ち根治の目的を達す本劑は內服すれば一種の化學的變化を起し強度の殺菌防腐液となり小便と共に排泄せられ自然の洗滌法となり林菌を根底より驅逐し人に知られず居ながら文明的新治療を受るを得速に用て病根を斷絕し苦惱を脱せよ

日本一手發賣本舖 藥價一劑輕症用六十五錢三劑重症用壹圓卅錢特製惡性頑固症用貳圓卅錢

● 專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

(中付の四)

格者を多く出さんとして居る有樣です。でありますから過度の勉强の結果心身に少からぬ影響を與へられ、入學して後病氣に罹るものもあると云ふことです。

けれども現今では止むを得ないと云ふより外ない次第ですから、女子を入學せしめんとするには、是非先づ身體の强壯と云ふことに注意し、激しい試驗準備に堪え得る樣になさしめることが大切です。されば若し女子にして不健康とまで至らなくとも、弱い方であつたなら、一ヶ年位は後れさせる方がよろしい、妙な野心より、無暗に入學を急ぐが如きは極めてよくないことです、かく身體も健康であれば學問の方もさまで勞せずして進歩しますから、何の準備をせなくとも、實力で入學し得る樣になります。

此外に入學に關する注意は澤山ありますが、何にしろ身體が丈夫でなくては駄目ですから、入學者自身も大に此處に注意し、父兄も亦たあまりあせらず、よく其子の實力と體力とを考へて、中等程度の敎育をなす樣になさんことを切望する次第であります。

惡風習の一二

江原素六

昔は、衣服の裾の擦り切れ易きより、取替の必要上木綿を用ゐ、胴裏は辷り能く着心善からむ爲め、絹物を使ふこと、普通なりき。然るに今は全く之に反し、內部は粗惡を極めながらも、外觀のみ之を飾るに至れるを見る。

昔穢多の娘に鳥追ひとなりて春を賀ぐものありたり其姿常に外觀の美をのみ裝ひたれば、世俗は甚だ之を賤みたり。其頃良家の婦女は、外觀は努めて粗末にし、近づきて仔細に之を看れば、極めて價貴きものを着用するを善しとしたるもの也。今や賤しき賣笑婦より、有位有爵の貴婦人令孃に至るまで、等く外觀の美をのみ專一にし、內部の善惡を問ふものなきは、ひとり風俗の變を見るのみならず、以て人心の質實ならざるを證するに足る。此くの如きは社會を以て、富國强兵の素あるを希ひ、大國民の實を擧ぐるを希ふこと

抑亦難からずや。

日本人の貯金額は、近年著しく增加したり。而も猶五千萬圓に過ぎず。ほゞ同じ大さの國土を有する獨逸は、實に四十億の多額を貯金すると聞く。信用の厚薄言はずして明か也。

日本人の惡風俗として最も著大なるものは、民心の不眞面目なるに在り、勤儉貯蓄は愚か、他の物でも我物と思ひ泥棒根性の紳士あれば、賄賂を收穫して現然怪まざるの官吏もあり。之が子なれば、小學校の生徒にも、鉛筆や墨など盜むものあり。之を盜まれたる生徒の父兄中、勤儉貯蓄の心に乏しくして、少價のものなればと之を不問に附するもあり。是に於てか一たび盜みの味を覺えたるものは、何の叱責懲罰を受くることなくして次第に增長し、殆ど已む時なし。然るに此の盜兒にして一たび中學校に入るか、一冊の書を盜むもなほ能く一圓金に價するを以て、直ちに嚴重なる査索を受け、忽ち相當の處罰を蒙るが常也。故に中學の盜兒は多く一二年生にして、其より以上にはあること少し。若し中學に於て改心せざるものあるか、生涯泥棒根性を失ふことなく、異日社會に出でたる後も、官金の私消、私書の僞造など、淺ましき末路を見るが通例也。此くの如きは小學時代に些細のものなりとして盜難をも不問に附したるに原因し、罪は小學教師にもあれば、父兄にも在る也。勤儉貯蓄はまだしも、學校が盜兒養成の氣味あるに至ては、返す／＼も悲むべからずや。

若し夫れ世の富豪が粗衣粗食するは、必ずしも其義務に非ざるべし。而も亦美德たるを失はず。前田侯爵の老夫人は、將軍家の姫君にして日本一の大々名に嫁したる者也。而も其字を習ふや必ず反古を用ゐ、曾て一葉の白紙を用ゐたることあるなし。此の事世に知れ渡りて、勤儉の俗を養ひたると少々にあらざりき。

己を節して人を惠むは、仁慈の事也。稱して美德と謂ふべし、而も仁慈の目的が主ら被施與者の幸福を謀るに在ればとて、全く其望みを充たすは反て彼を害するに均し。之れ其惰心を養ふ所以なれば也。亦思はざるべからず。

女學校卒業生に餞す

松山俊

盛春の季節に際し全國各女學校に於て卒業生を出す數千妙齡の靑春の人朝夕親みし學窓を去りて各其の父母を省するに際して一言なかるべからず

四年五年、學海に棹して具さに螢雪の苦を嘗め、孜々研磨せし効ありて、今し海底の眞珠を獲り得、勇躍しつゝ父母の膝下に回へらるる女學校卒業の諸孃。余は卿等が胸中に充ち滿てる歡喜を推し、恭しく賀辭を呈し且つ其前途を祝せんと欲す。古へ云ふ「小人は送るは物を以てし、君子は送るに詞を以てす」と、余は云ふ迄もなく君子人ならずされはとて小人を學ぶを欲せず、敢へて君子の顰にならひて愚衷を披瀝し、以て社會てふ大にして遠き途に第一歩を着けんとする卿等に餞せんとす。

▲地方より出し女子

余は先づ地方より出で、都會の女學校に入り、今回卒業の月桂冠を頂きて故山に錦を飾る諸孃に一言せんとす。

想ふに卿等の郷里に歸るや、父母、親戚の中、其成業を喜ぶと共に、暗に一郷に誇るが如き言動をなす者あるべし、また知己朋友中卿等の學殖の豐富を稱揚し、隨て卿等に對する態度も、上京以前に比して、多大の尊敬を拂ふ者あらん。而してそれと同時に同年輩者の中には卿等を羨み、或は嫉む者なきにあらざるべし、後進者は爲に一大奮勵心を與へらるゝもあらん、斯く諸種の感想を起さしむる諸孃の責任の重且大なるを覺悟せられんことを第一に覺悟せられんことを切望す。若し卿等の動作にして不幸にして地方人に善き感じを與へざらんか。是唯だ一家の不幸のみならず延て一に郷の女子教育に少からざる惡影響を與ふべく、舊弊者流に好材料を供し、後進者の將來に一頓挫を來さしむるが如きことなきを保せず。又た一方には卿等か今後に於ける一身上の所置に種々なる關係を及ぼし、學問却て身の敵となるが如き不幸を見るなきを保せず。依て余は今卿等の歸郷を送るに當り、告ぐるに左の警を以てせんと欲す。

一、一旦歸郷せば、衣服、髮飾、言語等に注意し、他の注意を惹くが如きこと勿れ、唯ださへ都會風を眞似て以て得意とする田舍女は廢然として世俗の所謂女流ハイカラ風に染むやも知るべからず。併しこれ卿等の責任にあらずとするも、爲に意外なる冷評を加へられ、時に或は卿等將來の身上に意外の災害を來すことなきにあらず、斯く云はゞ卿等は或は之を以て意に介せざるべきも、今迄起り來りし實狀を知れる余は、決して輕忽の問題にあらざるを信ずるが故にかく云ふ所以也。

二、故郷に歸へるに當り、自己の物品を荷造りするが如く、既習の

學藝を胸中のトランクに封じ込み、都會の停車場を發するときは、容易に其口を開かざるべく留意せられんことを望む、第一項に於て少しく告げたるが如く、世人中他の成功を嫉み、常に何等かの失態あれかしと至細に注意する者なり、萬一卿等にして封じ込みし學藝のトランクを容易に開くが如きことあらば、必ずや地方の一角よりして、諸種の惡評を浴せ掛らるゝなるべし、道理よりすれば、齒牙に懸くるに足らずと雖ども、亦た大に留意せざるべからざるを忠告す。

三、一旦家に歸らば、直に家庭の事業に從事し、言を後にして行を先にし、修得せる學藝は目立ぬ程に應用し、決して多くを出す勿れ、教會に於て學習せる者の目より見ば、改良すべきもの少からざるべく、また新意見を實行せんと欲すともあらん、然れども慣習の久しき、急に變更し能はざるは地方の常にして、住民の多數は此種の人々なるが故に若し、卿等にして所謂都會風を吹かしめば、所謂生意氣者の惡評を承るべく、爲に既習の學藝一も施す所なくして終はるなきを保せず、須らく細心なれ。

之を要するに地方に還る女學校卒業生は、出關當時の心狀を以てせんことを望む。これ決して卿等を愚にし、他年研鑽の學藝の光を蔽ひ去れと云ふにあらず、唯だ地方の狀態に鑑み漸を以て之を施すべく注意せよとこれ也。

▲都會在住の女子

都會に住する卒業生は、地方出の學生と大に異るものあり、其多くは通學して寄宿生活なるものをなさず、また旦夕父母の膝下にあり、隣保さへ相知らざる有樣なるが故に、地方出の女子に比して極めて自由なれば、注意も亦た隨て異ならざるを得ず。

思ふに都會の女子にして一校を卒業するに至るや、家居して父母を補けて家政に從事するもあらん。更に高等なる學校に入り、或は技藝的教育を受くるもあらん。一の職業に從事するもあるべく、職に地方に赴くもあらん、請ふ余をして是等に就て記する所あらしめよ。

一、家居して一家の事に從ふに就ての注意は單り都會在住の女子のみに限らず、地方出の女子にも之を要すと雖ども、今は唯だ都會生活をなしつゝある女子に注意せんと欲す。諸嬢よ卿等は學校に於て諸種の學を修め又た家政を學び且つ實習したるなるべし、敢へて問ふ既習學藝は果して其儘事實に現はし得るや、すべての準備は地方の女子に異なるものあれば、之を爲す容易なるが如くなるも、先進者の經驗に聞かざれば到底完全に之を爲す能ざるべく、また其家庭の都合もあらん、されば同窓生は如何に生活し、何をなしつゝあるが如きことに留意せず、たゞ自己は自己の生活をなせ、若し徒らに人を羨み他を眞似るが如き、慾望と行爲あらば、卿等は遂に無爲の人になり終るべし。都會人士の生活は存外のものにて外面美なるも内困難なるものなり、學者らしく事業家らしく見へつゝも事實然らざるものあり、之を換言すれば百鬼夜行の觀なるぞかし、希くは暫し他を見ずし

て己れ己れが生活をなせ。

二、更に高等の學校に入り、或は技藝專門の教育を受くるが如き卿等は多くの便宜を有す、若し志望切にして父母亦た之を許さば進んで之に就け、然れども卿等は今日迄の如き心事を有ちて更に異なる所なからば、卿等の將來の上に思ひ掛けなき影響を受くるやも知るべからず、彼の心にもなき獨身説を主張し、半解の女權論を喋々する、一種の變性男子を見るが如きもの、或はまたホーリーラブよ、スメーよ、バイオレツトよ、理想の人生のと夢幻境裏の人となりて得意がるものゝ如き、等しくこれ學問の食傷者にして一種の不具者たり、若し卿等にして漫然學に就き、たゞ勉強するが爲に勉強するが如きをあらば不幸遂に此種の人物たるなきを保せず、請ふ深く自ら顧みる所あれ。

三、都會に於て或は地方に出でゝ教職或は他の職業に從事する、これ家政の都合に出るもあるべく、自ら好んで之に從事するもあるべく、結婚等の準備の爲めなるもあらん、余は其孰れにするも爲すなくして家にあらんよりは一定の職に從ふを以て其人の爲めなるを信ず、亦た既習學科の應用の爲に之を喜ぶ、されど職業なるものは一見容易の如くにして實は然らざるもの多し、若し卿等にして漫に初めよりよき地位を望み、報酬の多きを望むが如きは非なり。須らく先づ多くの心勞をなさゞる程度よりして之を爲せ、さりとて徒らに卑下せよと云ふにあらず、例へば十のものは七八に止めよと云ふと也、例令情實行はれ、苞苴行はるゝとは云へ實力なるものは最後の勝利者なり、請ふ漸を逐ふて其地位の鞏固を得べく力めよ。

其他社會に對し、交友に對し、記すべきものあれども今は暫く除く

余は前二項に於て個別に畧述したるも實は互に關聯するが故に兩者共に熟讀せられんとを希ふ、全くかく區別せるはたゞ其重きに據れるのみ希くは諒せよ。

▲兩者への注意

余は更に兩者共に必ず會すべき問題に就て少しく記述すべし、されどすべて之を盡すと云ふにあらず、唯だ其二三のみ。

一、卿等の卒業して家に歸るや、直に或は暫くして起り來る問題は結婚問題なり、此問題に關しては地方より出し者、都會に住せるものゝ徑路自ら異り、共に多くは困難なるは現代の狀態なり、其原因や種々なりと雖ども、多くは卿等の心の如何により大なる關係ある者なり、由來婚嫁の事たる人爲に出るとは云へ、余は半ば天意に出づるを思ふものなり、されば若し卿等にして自己の聊かなる學藝を鼻に掛け、空想に耽るが如き事あらば、心にもあらで友人間に公言し來りし獨身説は事實となり、生涯寂しく暮さゞるべからざるに至るか、後悔たらざるべかざる運命に立ち至るやも知るべからず、卿等希くは半夜再思して眞面目に考慮せよ、同級の者は此の如き人

に嫁したるが故に自己もまた此の如くならざるべからずと云ふが如き心事あるなかれ、抑も人事は塞翁が馬の如きものにして昨の是、今の非なるを少なからずされば最初の幸福必ずしも永遠の幸福ならず、一時の低地位必ずしも久しきに亙るべからず、況んや人生の運命豫定の如くならざるをや、故に卿等は斷じて眼前の名譽財産地位舅姑の多寡等に重きを置くことなく先づ眞人たるべき人の人格如何に注意せよ、若し眞人の人格にして理想に近き人なからんか之に婚を結ぶこれ至當の事なり、若し漫りに撰り好みを爲すが如きとあらば、卿等は遂に婚期を失し、生涯回復し能はざる不幸に遭逢するなるべし、希くは細心留意せよ。されどこれ決して急ぐべき問題にあらざるにも心せざるべからず。

二、卒業後と雖ども讀書趣味を廢せざるべく力めよ、若し卿等にして既習の學藝を應用しつゝ更に進取的精神あらば、時世に後るゝことなくして處世し得べし。さればとて社會の百事學窓にあるが如く簡單なるものにあらざれば、大に心せざればこの趣味を得る機會を失ひ、今日よりは今日よりはにて思はず年を送るべし、要するに新文明の空氣を家庭に流入し時代に適合する家庭を組織し得ると否とは一に卿等の心掛け如何にあり、たゞこゝに大に注意せざるべからざるは萬事目立たぬ程度に實行し行くことなり、若し一時にしかせんとせば衝突起り、思ひ掛けなき批評を加へられ、遂に多年の學習何の効もなくして終るの不幸を見るなるべし。

三、學窓に於て養成せられし秩序規律の如き忘るとなかれ、熟ら世の卒業生たるものを見るにに多くはこを忘却し社會の習慣に負け、無秩序無規律の人となるもの往々にして然るを見る、抑も此規律秩序なるものは一人にあるも、主婦となるも職業に從事するも必ず缺くべからさるものなるは喋々するの要なけん、若し卿等にして少しく注意する所あらば、容易に之を保續し能ふべし現今の我國の家庭の缺損はこの弊少からず、而して之を改善する一に卿等に俟たざるべからず、從て卿等の責任の重きを覺悟せよ、而してこも亦た漸を追ひ久しきに渡りて改良し行け、然らずんば意外の物議、家庭内に起るなきを保せず。

猶ほ告ぐべきもの多しと雖ども、今は暫くこゝに止め、他は卿等の常識に訴ふ。

終に臨み忝しく卒業の榮を祝し、健全を祈る。

◎暹羅の老處女　暹羅國の或部分で成年に達しても一向に配偶を得ぬ女子は國王の特別の配慮の下に特別の階級の下に置かれ國王自から此等の人々に對して配偶を周旋すると云ふ事だが其方法は至極簡單で暹羅國の囚人は此等の賣れ殘りの女子と結婚すると放免されるのである、而して其囚人が旣に結婚せると否とは問ふ所でない、何となれば同國では一夫一婦とは限らないからである然し此れでも囚人中には此を撰ばずして監禁を甘んずる者多しと云ふ。●

世俗の哲理

△人の妻となる事は俗なものなり、それを詩的と思ひあやまりしは二十世紀の買かぶり、くだけていへば矢張り若氣の無分別なり。（家　妻）

△女獨りで一生を終るといふ事は鬼神をも泣かしむる豪氣な精神なり、されどそれ丈け口惜しきものと覺悟せよ。（老　嬢）

△破れし障子には光陽のさし入ること金殿玉樓のそれよりも多きものなり。（貧　婦）

△厭やな思ひも五十年、恥かしい思ひも僅か半年、我慢の出來ぬ事はなし。（花　嫁）

△汝は東京を如何なる處と思へるぞ、知らずや東京は白晝人の生血を吸ふ怪物の横行濶歩する處なりとは。（職業女）

△親が貧すりや娘は緞子の布團の世の中といふ諺を玩味せよ。（都會女）

△人は心の置き處、一つにてどうにもなるものなり、金文字入りし書物を繙きし手にも田の草は採けるものと知れ。（既婚婦）

△星やすみれは一時のもの、襁褓の仕末は萬代の寶なるぞ。（老　妻）

△成功、成功といふ事は世故に疎き人を驅りて無分別を働かしむるものなり。

當季の式花



木蓮、女松、枇杷
水仙、梅、
沈丁花、つばき



歐米 漫遊雜感

本多庸一

私は約八ヶ月間歐米を漫遊して來ましたが、彼此行くべき先や、立寄るべき所が多く、一週間以上滯在した所は殆どない位でありましたから、自分の用向の外は、是と云ふ觀察も出來ませんでした、殊に婦人の事に關しては、餘り注意もしなかつたのでありますから取り出でゝ申述べる程の事は御座いません。ほんの見たまゝ聞いたまゝを擧げますると、先づ斯うであります。

△女子の位置

何も事新らしいことではありませんが、實地に見て今更の如く感ぜられたのは、歐米に於ける婦人の位置です。其が我邦の樣に低くない事で、中には隨分出過ぎたものゝ少なくないやうでありますが、流石に女子たる禮儀を重じて居りますから、感心すべきことも少なくはありません。

獨逸婦人は、比較的東洋風の所が多い。例へば婦人が男子に對して挨拶する時、即ち握手をする時、若い女子などは必ず少しく膝を屈します。勿論日本の樣に腰を折るのでは御座いません。が、是は女子が男子に對して特に敬意を表するもので、男子が女子に對するには、たとへボーイでも斯う云ふ事は致しません。其

から教育なども、女子に特別の關係がある優美なもの即ち音樂とか、繪畫とか云ふ如きものゝ外は、餘り專門的のものを奬勵することは見えません。ですから、私共の目には、獨逸の婦人が至極婦人らしい婦人の樣に見えます。

然るに英米二國では、之と異つて、女子教育の學科目も、殆ど男子のものと大差がないのみか、多く男子と同一の大學校で、同一の學科を學で居ます。從てアングロサクソンの婦人に對すると、獨逸の婦人に對するとは、萬事に於て大分相違が見出されるのであります。

▲女子教育の發達

其れから女子の高等教育が、最も善い傾向を以て發達して居るのは、スカンヂナビヤと英國であるかと思ひます。スカンヂナビヤは小國の寄集りでありますがこんな事は中々能く發達して居ます。其は國として武力威力で强大國と競爭の出來ない所から、精力を平和的方面へ集中する樣子で、教育とか文學とか、自由思想とか云ふ方は、餘程發達して居ります。從て婦人の地位も好く、獨逸などよりは高く成つて居ります。尤も獨逸婦人の位置が、英米は勿論、スカンヂナビヤ諸地方よりも低いと申した所で、猶東洋とは較べものに成りません。

こんな譯で、歐洲大陸より英國の方が、女子教育も發達し、女權も擴張されて居り、英國よりは更に米國が突飛な位に發達して居りまして、丁度三段の階級に成つて居りますが、何れにしても我邦より發達して居るとは勿論です。例へば青年會などでも、男子の青年會も、女子の青年會も、其會員がほゞ同じ位であると云ふことなどは、我邦では一寸思ひ及ばない事です。日本も就學兒童の數からは、歐米に伯仲する位に成つて居て、殊に露國などよりは遙に優つて居りますが、さて普通教育から中等教育に成り、中等教育から高等教育に成ると、竟に彼に一歩を讓らない譯には參りません。殊に女子教育は最も甚しく、現に女子の高等教育をする所と云へば、僅か女子大學が一つあるに過

ぎない位で、情ない次第であります。之に反して歐米の女子は、フヰジカルサイエンスの方までも踏込で、熱心に研究し、山へも河へも輕裝して分け入るのは、迚も日本のお姫樣育ちの婦人に眞似の出來る事ではありません。歐米でも女子は女子だけに、矢張り音樂とか文學とか優美な學問を好み、之を研究する者が多いことは申すまでもありませんが、去りとて法律とか物理とか云ふ方面の研究者も、決して少ないのでは御座いません。

私の滯歐中(七月)、倫敦で英國學生の大會がありましたが、之に會した男女の數は相半ばして居て、六百人ありました。其から瑞典でも同國學生の大會がありましたが、矢張り百六七十人の人數が、男女相等しかつた樣です。此等は決して初から男女の數を等しからしめたのではなくつて、自然の結果が斯う成つたのです。



黑もじ、白つばき

當季の花

然し普通敎育の方は、我邦も決して彼に劣らないのみか、彼の白耳義などにさへ優つて居る程でありますから、高等敎育も是から發展の仕樣で、隨分歐米に凌駕することが出來るであらうと思ひます。

▲オールドミスの增加

近年歐米では、各種の婦人倶樂部が澤山出來て、中には品の惡い、感心出來ないものもあります。烟草は吸ふ、酒を飲む、歌つたり踊つたりする位の事はまだしも、隨分我儘を盡して、不潔な快樂を漁つて居るものも、亦非常に增加して來ました。

男子が女子の前では行儀を愼むやうに、女子も男子の前では努めて優美に淑雅に見せて居るから、其間に上品な交際は保たれるのでありますが、男子ばかりの時は、隨分亂暴も働く、其と同じ事で、女子も女子ばかりの席では、思ひ切つた不行儀を平氣で致します。此の倶樂部は多く其れであるので、例の嫁入り時期を過ごしたオールドミスが澤山居ります。

其れから男子の倶樂部へは、女子は行けないが、女子の倶樂部へは、女子が連れて行くなら、男子は何程行つても善いなど、私共には想像の及ばぬ事實もあつて、倶樂部が多く罪惡の原因に成るのであります。

兎に角、歐洲大陸の或部分には、まだ婦人に謙遜の德がありますが、英米では最早忘れられやうとして居る有樣であるかと思ひます。

▲婦人の職業と其弊害

近き世まで忘られて居た女子敎育が、近年著しく發達して來たと同時に、敎育を受けた女子が盛に新しい職業を求めて執務する。所で社會の或部分は非常に影響を蒙り、今は女子の職業と云ふことが、各種の方面で、容易ならぬ問題に成つて來ました。中にも米國は女子の就業が最も盛大であります。斯うなければつまり女權は擴張されないので、是迄の樣に、男子に依賴しなければ生活が出來ないと云ふ樣では、女子の權利は何時までも蹂躪され、女子の地位は相變らず低いのでありますから、女子が從來の如く徒食せぬ風に成るのは、勿論望ましい事です。が、唯憂ふべきは

之に伴ふ弊害であります。

女子の職業で重なものは、小學校の教師、郵便局の書記です。米國では、小學教師の五分の四は女子が占めて居り、英國では、郵便局員の殆と全部が婦人であります其外保險會社の書記も婦人が多く、男子の青年會の書記すら、多く婦人がして居る。尤も此等の女書記女事務員は、上に男子が居て、取締りをし、監督をして居ますが、つまり女子は給金が安く、且此等の小さな仕事には、最もよく適當して居るからであります。

して、此の職業を有して居る女子は、多く獨立自活をして居るもので、槪して年を取つた未婚者でありますから、下等の下宿屋に一人住居をして居るものが多く、之が爲め弊害が生ずる次第であります。



常季の花――ひいらぎ、つばき

歐米の下宿は單に宿だけを貸すもので、食事は別に

成つて居ります。其故下宿の主人でも、下宿人に、一週間に一度とか二度とか顏を合はすと云ふ位に過ぎません。其上未婚の靑年女子に、まるで監督者があるではなく、又家屋の構造が日本とは違つて、一度戸口に錠を下せば、室内で何事が起つても外へ漏れるやうな事はない。此邊から自然斯う云ふ女子が墮落することに成るのであります。

我邦でも、追々女子の新職業が出來て自活することの出來る機運に向つて居りまして、此は勿論喜ぶべきことではありますが、同時に、女德の進歩發達を圖り何うか斯る弊害の伴はない樣に致したいもので御座います。

割烹教授談

赤堀女史

婦人記者

江戸前の料理法を以て一世を風靡したる赤堀峯翁の長女にして遺傳あり天才あり一言一語も料理法の實驗より出で自ら聽者を首肯せしむ。

▲女史の主義

御承知の通り父は舊大名の御料理方を勤めて居りましたので、私も子供の内から門前の小僧で自然覺えたやうな次第で御座います。併し昔者ですから學理なぞは一向心得ませんので、蛋白質がどの位含んで在るとか、澱粉質が如何だとか、其樣な六づかしい事を説明する力は無いので御座います。唯多年苦心した父の遺志を續いで、衛生と經濟とを基礎と致し、實地經驗上から世間推しなべて應用が出來る料理法を御傳へ申し上げ、聊か皆樣の御便利を計りたいと云ふ精神で御座います。舊大名の料理は、體裁を主と致したから、隨分食べられぬ品を飾つたもので、ひやかさぬ堅い數の子を盛り上げるやうな事を致しました。勿論當節でも體裁の美は貴びますが、列べた食品は盡く味好く食べられ、滋養になる事を專一と致し、口へも入れられないで費の多くかゝる虛飾物は拵へません、父も御維新の當時は職を失ひ、一時糊口にも窮する程でありましたが、斯道には非常に熱心家で、折角調法な料理法

を埋木とするのは殘念だから、切て一二の御婦人に傳習したいと貧苦を凌いで從事して居る內に、追々世間で割烹研究の必要を感ずるやうになり、今日では學課にも入る位進歩しましたから、父の志も貫徹した次第で有難い事と存じて居ります。

▲貴賤共に必要

料理の稽古と申せば、何か手込んだ物でも拵へるやうに聞えますが、何樣な貧しい生活でも三度の御飯に一度も御菜を附ぬ事は先づありますまい。如何に無造作な菜拵へでも芋や大根を生煮へで食べるわけにも參らず、目ざしや鮭を生燒で付けるとも出來ません、矢張口へ入れらるゝだけに手を掛けねばなりますまい。同じ原料や時間を費して不味物を食べる所も、聊か心得があれば、其手加減が大きに違ふものです。無益の費を省き、一家相喜ぶ食品を膳に上すの實習は、貧富の別なく研究して益ある事と存じます



當季の花――さんしよ、ちんちやらげ

▲書物に依賴するの弊

當節は料理案內の書物が大流行で私の處へも聽きに入らつしやる方が澤山ありますが、書物に載つてから拜見すると大分誤りがあつて、斯樣な事を赤堀が話したかと笑はれるだ

らうと心配で堪りません。御書きの御方に誤りはなくても活字で間違ふ事も御座いませうし、いつそ御話は御斷りする事と考へて居ります。一體料理が書物を見た計りで旨く出來る筈はありません、例へば卵六個を百目と定めて在つても、卵の中味に依つて一定せず、どれ丈の汁には醤油どれ程と定めても案外鹹過る事もあり、時と場合で往々相違があるものです。經驗のない方が書物通りに行つて見ても旨く出來ず、無駄な原料や道具を使つて兒戯のやうな料理を拵へるから、人にも笑はれ批難されるのでせう、料理書は實習の功を積だ人の參考位なものと思へば間違ひありますまい。

▲主婦の責任

昔の奥樣方は、御飯焚は勿論日々の菜拵へを下女に任せきりで、何も爲ぬのを虚飾にして居たのですが、當節の奥樣は、臺所の注意を第一に心掛け、假令御飯でも下女任せに計り爲ず、自ら早く起て火の加減も見、不潔な水でも釜に入りはせぬかと調べ、營養の第一たる御飯を寢惚け眼の下女に任せたまゝ朝寢して居るのは主婦の道に外れると云ふ風になりました。衣服の縫ひ損ひは直す事も出來ませうが、一旦咽喉を通した食物は拵へ直す次第に參りません。主婦が經濟と衛生を基として家庭の幸福を計るには、割烹の腕前如何にあるので、我が田へ水を引くやうですが、御心掛けありたいものと存じます。

▲一家和合の基

エライ方は知りませんが、大抵の人は平たく申せば意地の汚いものですから、年老いた舅姑には軟かい物を食べさせると自然折合が善いものですし、親類知己の來客にも鹽梅よき料理を出せば交情の温まる基となりませう。心を惱ましつゝ高直の店屋物を客に列べるより、下し大根なり浸し物なり、有り合せの材料で加減と體裁を善く料理致し、誠心こめて饗す方が如何程客を喜ばせるか知れません、又一家の御主人が終日勞苦して歸つても口に合た御菜も出來て居なかつたり、御主人の顔を見てから今日は何に致しませうかなぞと云ふ風ですと、御主人も家に歸つたつて食ふものも無

し、詰らぬから何處ぞで食べて見る氣になる。西洋料理は高くはありますまいが、麥酒の一杯も飮むと自然其御連れも出來、遂には善からぬ場所へ足を入れるやうになり、一家の和合が破れぬとも限りません。御主人の好き嫌ひは誰より奥樣が一番よく御存じの筈ですから、充分口に合ふ物を拵へて上げねばなりません。時間と原料を澤山費して旨く拵へるのは誰でも出來ますが、之を儉約して風味よく料理するのが熟練であります。



しだ、沈丁子

▲清潔

臺所は汚いものと定めて客には一切見せず、稽古に上つた私にさへ『先生臺所は汚う御座いますから此處で御稽古を』なぞと仰る方がありますと『夫れは以ての外です、料理は第一に臺所の清潔が必要で、假令粗末な料理も淸らかな處で拵へた事を客に見て貰へば、

客も心地よく食べられませう。天井裏から煤がぶら下り、棚の上は塵埃だらけ、流元はぬら〳〵して居る臺所で、如何程結構な料理を致したとて、客を饗す眞心とは申せません。私は先づ臺所を拜見して掃除から先へ御注意致し度い』と申して居ります。稽古にかゝる前には先づ爪を截り、手を洗ひ、髪を亂さぬやう身繕ひ致し、料理中は髪へ手を付けたり、顏をいぢつたりしてはなりませぬと、生徒方に嚴しく申して居ります。

▲後仕舞

一個月に八回、私の宅で實習を致しますが、私は極く八釜しい方ですから、御出での令孃方に洗ひ物や雜巾掛まで御させ申します。水仕業までさせて酷い師匠だと親御樣は思召すか知れませんが、割烹の間に手順よく皿鉢を洗へば、片付も善く人手を煩はさず、ちまちまと料理が出來上りますゆゑ、御可愛相と存じ乍ら、後仕舞まで濟まして御歸し申すのです。遊び半分の稽古では實際に當ると役に立たず、そらお梅味噌を擂れお竹火を起せと大勢を騷がせ、臺所をごたつかせるものです。一擧一動に油斷せず、順序よく働けば、何時の間に斯樣な料理が出來たかと思はれるやう物靜かに齊ひますと、毎度申して居ります。

▲道具立の弊

料理の稽古をするからと云つて、何が入る彼が入ると道具立を致すやうでは實際の役に立ちません。私は宅の教場で稽古の際、餘分の道具は決して出しません御覽の通り戸棚に皿でも鍋でも澤山ありますけれども、此處で自由に使ひつけると御宅で實地の場合に困ります。それで必要の外は皿一枚でも出さぬことに定めて置きます。『先生私の宅へ教授に來て頂きたいが、何々の道具を買ひ調へたら宜しいのですか』と御尋の方があると、私は『御宅に有り合せの御道具だけで澤山、七輪一個、鍋一個でも稽古は出來ます、其家々の臺所と道具に應じて繰り廻し御敎へ申す』と御答へ致します。但し多くの來客等で必要の場合には、東京内なら何時でも宅の道具を御借し申すから、滅多に入用なき道具は決して御買ひ置きなさるなと毎々申し上げ

て居ります。

▲盗人捕へて縄綯ふ　私共の娘を近々嫁に遣るに就て料理を覚えさせたいが、月謝は如何程高く出しても可いから一二ヶ月で至急卒業さして下さいと望まれる方が随分御座いますが私は御教へ申す積りでも海や畑が承知致しません。魚や野菜には四季折々の風味が在つて、夫れに應じた料理の加減が在りますから、如何しても一箇年の實習を要します。買はうと思へば唯今(三月)でも胡瓜や茄子が在る事は在りますが、一寸五分位の胡瓜が貳拾錢それで本當の風味はありません、薬にでもするならですが斯様な品を使つて稽古したとて實際の役に立ちません、私は如何程月謝を多分に頂いても早學びの傳授は御斷り致すのです。又私共の娘は少し虚弱だから運動のため稽古をさせたいと仰る方も在りますが、運動ならば體操の御稽古が然るべきで、割烹は氣樂なやうでも、工夫も要り、心を使ふ却々面倒なものと考へて頂きたいのです。



莢すゝき、菜の花

▲工夫

私が御教へ申した方法を何時でも其儘御用ひになる斗りでは可けません。此魚を先生は蒸せと教へたが、自分は一つ燒いて見やうと云ふ風に工夫すると案外思ひ付きな料理が出來るものです。畢竟私の教授は大通を電車でスーッと走るやうなもの、皆樣は横町や拔け裏を目付て近道を覺えるのと同じ理屈でせう。

▲家庭にての奬勵

令孃方が折角割烹の稽古をして歸られても『汝が臺所で御料理するとごた〳〵騷々しくて困るから、御夜食は店屋から取らう』などと、母樣が仰るやうでは進歩が出來ません。不馴れな娘の手料理も實習のためと辛抱なすつて、御父樣の御菜ば汝が是非拵へてと奬勵して頂きたいものです。又御弟子先で『先生に何か差上げたいのですが、御急ですし、私共の料理は迚も御口に合ひますまいと存じて』なぞとわざ〳〵店屋から取寄せて御出しになる御家があると私は薩張嬉しく御座いません。『御教へ申した貴女方の御手料理なら何樣な不味ものでも喜んで頂きますのに、店屋物ならいくら結構でも私は頂きますまい』と御斷りするので、私の頑固には皆樣も御弱りの事と存じて居ります。

▲治庖會の起り

父の某知人が新たに迎へた細君に就て割烹研究の必要を感じた御話があります。確か十五年程前の事でしたが、其細君は少し上目の家から迎へたので切り詰めの財政も任せ兼ね、五人暮し一個月の入用として五拾圓渡した所、十五日斗りで遣ひ盡し、更に參拾圓渡したのに未だ足りぬと云ふ風で月々多分の費用が掛る所から、主人が勝手元を調べると、魚や野菜を澤山買ては腐らして捨てたり、物置には菜漬や澤庵が幾樽も漬け込んであり、味が惡くなれば近所の誰彼にどん〳〵與ると云ふ工合であつたので、之れは目分量、見つもりが無茶苦茶である爲だと氣が付き、私の父に賴んで割烹の稽古を細君に致させましたが、追々熟練して經濟も上手になられたに就いて、江湖の婦人方のために深く斯道の必要を感じ、父に助力して唯今牛込に設立してある治庖會を起したので御座います。

活断

人事活断 運命占ひ所

天啓堂活断

△人事活断は婦人に新福音を齎すものなり
△人事活断は婦人に新光明を授くるものなり
△人事活断は婦人に新生命を與ふるものなり

緒言

學問技藝は學校から据膳据箸で教へて貰らへる、育兒や衛生の事はドクトル様から懇々の御世話を下さる庖厨には下女あり、子供には娛母も附く、其上古しは眼の上のたん瘤であッた舅や姑御は今時の若い者には所詮勝てないものと勘忍袋を抛げ出してあちらからあべこべに御機嫌を取ッて下さる、のみならず以前は亭主關白の位と稱して神棚の大神宮から二番目の尊といもの、恐ろしいもの、威權のあるものと、遮二無二威張り散らした其の御亭主からは、福子さん、丸子さんと我が女房をさん付けで呼ばれる、そこでやいの〳〵をきめこめば、アイスの金を借りて迄も當季〳〵の流行の三越ごやしはきつと調へて貰へる。若しそれずつと若いのになると二百三高地、我れこそはとの高慢顔も世間一統から辟易して電車に乘ッてもまづ席を讓らねば氣が濟まぬほどの世の中、不斷美味しいものを喰べて少し頬肉でも握り出た曲線的な當世顔と來れば、骨無しの角帽など雨上りの蚯蚓のやうにまぶれつくといふ揃ろいた女全盛の世の中、何とまア二十世紀とはこんなものかと天保老人の呆れ返へるも無理ならず、近刊書籍雜誌の表紙もこれでなくては幅が利かぬとはさても〳〵。

去りながら滿れば缺ぐる世の習ひ、盈滿の中には缺を兆し、土用三伏の熱天にも秋風蕭殺の氣は含まれつ

つあり、さても全盛一時に榮へし二十世紀女の運命も、永い月日の其の間には想ひも寄らぬ方面から難題問題が一身一家の眞ッ正中に湧いて來て、あゝでもない、斯うでもないの擧句の果が思案拋げ首の煩悶沙汰、ヒステリー、ヒポコンデリーが得意の舌を出す所となるは必定、そうなッては哲學でも解けず宗敎でも解けず、科學や、理學や、詩や小說では無論解けない、どうしてもこれは人事活斷運命占ひ所の解釋に依らずんば當面の解決は爲し得られないのである、併しこれ等は極端の一例とした所で、彼の黄門光圀卿の詠に、

たゞ見ては何の苦もなき水鳥の
　脚にひまなき我が思ひかな

とある如く、婦人といへる婦人は皆多少の弱點と煩悶とを有たぬものはない、肉親の父母は勿論の事、最愛の良人にも打明け難い難事もあれば、心を許した朋友にも聞かせたくない事情は萬々、これは勿論人間といふ不完全な動物に免かれ難い缺點で、そこで煩悶とか迷想とかになる、これを西洋流の言葉でいへば、ハートのダークサイド取りも直さず心の暗き半面か、感情が邪魔をして明智の判斷を失ふもの、良心が一時魔醉劑に罹つた所の現象である。こうなッては事甚だ面倒である早く何物かの暗示を求めて一刀兩斷の策を施さなければならぬ、人事活斷は即ちこの必要に應じてここに欄を啓き世の迷へる人、悶へる人に向ッて新福音を與へ新光明をさづけんとするものなりと聊か獻言を發す事爾り。

△婦女人事活斷發問者須知

（一）女性に係る人事問題は細大となく總て誠實に判斷を下して發問者に滿足を與ふべし

（二）發問者は匿名或は假稱一切差支なし故に如何なる秘密にても遠慮懸念なく申込まるべし

（三）發問者は眞面目に事實を委しく申越さるべし、若し判者が虛僞の事實と認むるときは判斷の勞を取らざる事あるべし

（四）判者は斷じて何等の報酬を期待せず、されど他日若し判斷の反應を御一報下さるれば幸ひ、それを參考として更に廣く應用して人事に稗益せんと欲す

（五）發問は　東京市日本橋區博文館編輯局女學世界●●●●天啓堂宛にて郵送せらるべし

以上

（問）只今私の娘に三つの求婚申込がございます、第一番は商業學校の卒業生で年は三十二歳某會社員で月收五拾圓との觸れ込み、家には母親と女學校通ひの妹が一人と十二の弟が一人あるきり、多少家作もあり親ゆづりの蓄財もあるとの事只困難なのは母親が繼母で妹弟が腹違になる所から將來家庭内に多少の紛紜が起りはしまいかとの懸念もあります。それは其母親の性格を知る人からの忠告ですが詳しい事は知れません。第二番は美術家です、これはまだ一定の俸給はありません、勿論まだ其社會に名を爲さない人です、伎倆は可なりの腕らしく認めます、將來は望のある人らしい、けれども何分現在の生活向が輕いので惣領の娘を縁付るには少し惜しいやうな氣がして躊躇して居ます年は三十で係累はありません、これは同國の好で本人同士は三年程前から交際といふ程でもありませんが、まア幾分か氣心も知り合ふて居る仲です、唯人間があまり沈默過ぎて當世にはチト向の惡い方です、第三番目は海外（支那）から申込まれて居ます、これは某會社の支店詰で隨分多額の給料を取る人です、寫眞を送ッたばかりで先方は大の氣に入り、是非貰ひたい、どんな條件でも聞くからとの執心で、詳しく現在の模樣を親類の方まで、申込んで來ました、年は三十です、私共はこの方へ大分心が動いて居ますけれども、どうも海山を隔てた遠方へ手放すといふ事が親の身として忍びぬ樣な氣がして少々迷ッて居ります、娘も今年二十一、一昨年高等女學校を卒業して更に一年間音樂を專門にやらせました。今が縁附け時でせうと考へます、どうか三つの中一つ御判斷を願ひます。（麻布一老女）

（判）成程御尤な御質問、世には三十近くなるまで緣談が開けずして氣を揉む親御の多いのに去りとは又牡丹餅で頰べたといふ御仕合せ、併し可愛い娘子の御行末、よきが上にもよかれかしと願ふのは有難い親心、御迷ひ遊ばすのも當然です、成程第三番目の海外からの申込は一番當世向で、學校敎育をさせられた娘子の身に取ッても晴やかな緣談ですから此の方も贊成申上げたいですが、卦によつて判斷をすると三者とも唯今は選ぶ時機でないと判斷致します、それは山雨來らんとして風樓に滿つといふ卦ですから、今選んではよくない、一時御見合せありていづれへとも生返辭のまゝ附かず、離れずの態度を以て先方をあしらひ時機を御待ち合せ然るべし、さすればこゝ二三ヶ月の間には必ず、貴女の御心に確定したる判斷の附く事あるべし、其の時に於て決斷さるれば必ず良緣なり。速やかに御緣組あるべし。故に天啓堂は選擇の時機はいまだ早しと判するのである。

（問）妾は不幸にして十二年前八歲の時に生母を亡くし（父も五年前に逝けり）以來は繼母の手で育ちましたが、左程憎まれて來たわけでもありませんが大きくなるに隨つて段々辛らい事が身に浸みて來るやうになりました。就ては妾に一人の從兄がございます、許嫁といふ程でもございませぬが幼い時から氣心も知れ合ふて居るし旁た先方は妾を望んで居るやうです、併しまだ獨立の出來て居ない男で、今日どうしやうといふ事も成り兼ねます、ところで困つた事には近日他から緣談を申込まれて義母さんは是非行けとの嚴命、其れに就て詳しい事は玆で申上兼ねますがどうしても妾は氣がすゝみませぬ、隨分榮耀は出來そうですが、どうも進みませぬ。さらばといつて赤坊のやうに唯すねて仕舞わけには行きませぬ。實に困り切ります。どうしたものでせうか。（苦惱女）

（判）成程一寸困つた問題です、併し元來貴孃が緣談に氣がすゝまないといふのは先方の何處が氣に入らないです、尤もそれには別段不足はないが只從兄弟の方

との間に心理的の關係でもあるからといふのですか、即ち戀愛でもして居る中ですか、或は唯幼な馴染といふ丈けですか、そこの所が一寸わかりかねますから一寸判斷の下し樣に困りますが、申込まれた方の緣談が格別不釣合でなければ、幼な心を思ひ切つて應じた方がよろしい、不足を忍べば福來るといふ象が顯はれて居ます、進まぬと思つて行つて見ると存外よい所が顯はれて來るものです。怒濤破るに益ありといふ卦です何でも乘り切つて行く事です。

（問）　妾の妹で玆年二十二になるのがあります、いろいろと面倒を見てやりますけれどもどうも物が出來なくて困ります、一體どういふ工合に仕込んだらよいでせうか。適當の藝と其の方法を敎へて下さい。

（赤阪くら子）

（判）　若し餘裕のある御家庭ならば何でも構はぬ御好な事をやらせなさい、干渉せずに一二年抛つてお置きなさい、もう世の中の分別のつく年頃ですから、あまり傍で干渉すると煩悶、厭世に陷ります。

（問）　妾は今年三十歲ですが、一度緣付きましたけれども不幸にして緣を全ふせずして歸りました、此頃、去る家より求婚を申込まれて居ります、妾は手に相當の藝もあつて獨立して行けぬ事もございませぬが、兄弟共は早く緣付くがよいと申しますけれど妾は今少し考へて見たいと思ひます、勿論最早年に不足をいふ妾でもございませぬけれども、四十過ぎた男で子が三人あるといふ所ですがどうしたものでせう。

（判）　御片附なさい、良緣です、獨立して行けぬ事はなくても、それは當座の考へ、矢張り女は襁褓の始末をするのが天職です。

（問）　妾は大學生の妻で、唯今は本鄕邊の或家へ一緒に間借をして勉强して居ますが、玆二月計り國元から妾の學資が參りませんので心配して居る矢先きへ、折りも折とて、良人が遊び始めて屢々內を明けて寢泊り

するやうになりました、妾と夫婦になつた頃はそれはそれは親切な人で、やれ若竹に女義太夫が掛つた、やれ明治座に新演劇が開いたといつては何處からかお金を工面して連れて行つて呉れました程でしたのに、近頃は打つて變つて邪見になり、妾の困つてるのを知らぬ振りして内を外にする振舞は合點が參りません。こんな時に親身の人の同情でもあればまだしも、宿の主婦は意地惡く妾の心配想な顔を眺めて、貴女は捨てられましたのねなどゝからかいます。妾は悔しいやら心配やらで勉强も何もそのちのけになりました、眞に良人との間はドウなるものでせうか、ほんとに妾は捨られたのでせうか御判じ願ひます。(眞砂町の女)

(判)　近來靑年男女學生の間に神聖視せられて居る呪文がある、それは『自由結婚』といふのである、この呪文の靈驗あることは大したもので、まだ商標付の服裝を嬉しがる學生、早く云へば學校の制帽制服を自慢氣に耀けらかす坊樣と、未だ肩あげの取れぬ式部との飯事ホームが始まる、さて此社會の稚氣加減と云つたらお談にはならない、新敎育ある令夫人がその良人に對して旦那ともアナタともモシとも呼び兼ねて獨りもじもじ極りわるそうに小聲で兄サン〳〵と云つて居る眞事は推して知るべしだ、

さて此等の手合に對しては、出雲の神樣も面喰ひ給ひてその責任を放棄し給ふとやら、大概は學資の切目が緣の切目となると、下宿屋の主婦が不斷の皮肉、半面の眞理を道破して居るのでせう、出雲の神樣の責任を逃げ給ふ取組やつぱり天眼通も豫言を御免蒙ります。

(問)　妾と同級の方は大抵五人七人の殿方を朋友に持つて居らつしやるのに、妾だけは唯一人、彼方ならばと心にも許し、彼方からも屢々交際せうと言はれましても、妾は、進んで握手することが出來ません、まア何たる意氣地のないことでせうか、我身ながら勇氣の乏しいのに愛想をつかして居ります、斯う氣が弱くつては廿世紀の女性たる甲斐もないことゝそゞろ悲くなります、何卒男子と交際の出來る法を敎へて下さい。(番町 女學生)

（甲）成程貴孃が心に交際を許して居らつしやるその男といふのは去年以來の面識で、而もそれは眞の面馴染だけと云ふのでせう、それは貴孃が今の學校へ轉じてから其通學の途次に何時も一定の塲所で行逢ひ風にも雨にも變らない勉強な學生です、最初彼方から聲掛けられた時はいけすかない書生さんだと喫驚して逃した位でしたなそれが遠くて近きは男女の仲とやら日の立つに連れて先方の學校も知れ、其後再三、向ふから聲掛られても一回の答禮だにしませんでしたな、これが尋常人なら脅迫もし兼ねまい所を、彼方は何時に變らぬ、寛大さ、人情通のセーキスピヤはこう申して居るではないか『處女がその口頭に拒む所はその心中に於て許さんと欲する所なり、彼れは一點羞恥の念に抑留せられて然るなり、其實は直に切り取られんとを希ふのみ』と全くでせう、その通りでせう、貴孃のお胸の中はセーキスピヤが先刻御承知ですそこで今は此方より脅迫されても交際をして見たいとの大熱心ですが何分先方の落付方をもどかしがりて天啓堂へ交際の

法を御質問になつたでせう、よろしい解釋を試みませう。抑も男女交際と申すは貴孃の億劫がらるゝ程に六箇敷ものではありません、墻を越へたり隙をほつたりするから非難も起り後ろ暗くもなるのです交際の順序さへ踏んで行けば水の低きに就く如く何の造作もないものです、今日は男女交際論が中々盛んになつて來て先輩大家連中で種々議論もある、併し未だこれは研究時代で實行の道は立つて居りません、貴孃の朋輩が五人七人の男子の友人を持つて居ると仰つしやるのはそれは變則な遣り方です、日本の慣習は男女七歳にして席を同ふせずと云ふが古來の制裁であつたが、下流社會でも亦未婚男女の接近は醜惡としてあつた、彼の相合傘は少年男女を侮辱した極點であつて、男女の關係を云々するは乞食、立坊、放火、盜賊と一般の中傷で『おそめと久松はチン〳〵で蜑附、元結、紅、白粉離れに遣とて買つたのじや』などゝ歌はるゝが最後、その少男少女は恰で死刑の宣告を受けたやうに感じたのであつた、されば今日盛に稱へらるゝに係らず頭から

男女交際問題を排斥する方も鮮くはないのである。して見るとこれは歐米の風俗であつて、日本の物ではない、しかし我が國も西洋諸國との交際が繁くなるに連れて、男女交際問題も段々擴がつてくるがその本場の西洋でも處女時代に三人五人の男の友人を持つなどいふ途方もない例はない、青年男女の交際は結婚の準備でその適當な配偶者を得る方便であるから決して輕々しくすべきものでない、その交際を結ぶ順序は双方とも家庭が明瞭に知れて居て身分の確實な所から交を訂すに至るので、本人同志の責任も重ければそれが爲めに誤解を招くやうなこともない、

そこで今交際の順序を云へば貴孃方へ出入する人で信用のあるものか、若し適當な人がなく、性格の正しいお朋友の知人中でお選びなさい、さもなくば人事仲介社へでも頼み、先方より相當の紹介者を立て公然交際を父兄に申込み呉るゝやう申遣はさるゝがよい、一體東京といふ所は白晝公然人の生血を吸ふ狒々や猥の横行する所ですから迂濶に交際などしたら飛んだ目に遭ひますぞ貴孃の勇氣がないと云はるゝのは大に勇氣の有つたので、取も直さず社會の制裁を顧みて、自分の意馬の手綱を確と引きしめて居なさつた所は、今時の女學生に珍らしい方、まづお褒申して置ませう。

（問）妾に適當な職業をお判じ下され度候。（十五才女）

（判）職業の種類なら一月定期增刊の女重寶記中新案勝利占ひに就て自ら選擇なさるが宜しい、併し職業には得手、不得手、好、不好があり、又境遇によつては就業のし難い場合もありませう、例へばじつくりと落付た仕事を好む方もあれば、パタ〳〵と立回つてする仕事を望む方もある、又一人閉籠ツて靜にして居るのを喜ぶものと、多人數で賑はしくやるのを望む方もある。遠出の好きな方もあれば一歩も家庭を離れたくない方もありませう、細に事情を申越されたらば又委しく訓て上げませう。



オールドミッスに與ふるの書

元祿姉さん

× 赤繩の緣は眼隱のごとし
× 羅綾の袖は涙のハンケチ
× 人の運命はわからぬもの
× 若い内に覺悟せよ
× 三十面の顔におしろい見苦し
× 空閨に枕を嚙む幾夜
× 永刧の光は、金や、學問、地位にはあらず

先日は神樂坂の通りにて、買物致し候八百屋の向ひ、似た樣な御方と一度ならず、二度、三度まで、振り返り見候へ共、將か、御前樣が、彼樣風をして這麼處に御出で遊ばすとは、夢にも氣が附かず、況して御後姿のみなれば、他人の空似と云ふさへあれば、と、其儘思ひ返し候もの〻、怎うも氣になりて仕方なく、家に歸りて良人にも然々談し候處、何だ、つまらぬ、六年前の朋友、殊には其頃、國で定まつた人のあつたらしき御前の話しでは無かりしか、其れを今時分廂髪でもあるまじ、今つから、さう、耄碌されては、御前百迄私しや九十九迄の約束を什麼する氣かと、例の氣輕に何の事もなく笑ひ立てられ申候、成程とは存じ候

へ共、何となく心元なくて、あゝでは無かりしか、斯うでやありしと、自分一人に取越し苦勞して、此日頃陰ながら心配致し居り候處、昨日ゆくりなく、御前樣も御承知の筈の諸橋の叔母樣見えさせられて、殊には御前樣の御我儘、何も知り候はねど、私は斯かる事を總て我儘と申候、御兩親樣の定め玉ひし御方を御嫌忌遊ばされて、一昨年御出京、當地のさる女學校に教鞭を執り玉ふとか、降る程な御縁談も、餘り高くお止り遊ばすにや、一向に氣に染までとの一點張にて、可惜三十の細眉美しき御獨身、御心がらとは申しながら、悼しいやら、御氣の毒やらとの御事、夫れは私とは違ひ、學校も澤山遊ばして、其れ程豪くおなり遊ばされては、高が中學校卒業遊ばした許りの、學問から云へば眞に弟の樣な許嫁のあの英樣とやらを、良人として、一生田舍に燻り給ふが勿論御厭でもあらうし、大方の女子のすなる樣に、百年の苦樂は他人に依る等と意氣地のない事を遊ばさずとも、一生は茶にしてゝも、煙にしてゝも、其れは御前樣の御勝手に候へ共、御孝心深き日頃の御前樣の擧動としては云はずもがな斯くては人間と生れし甲斐の、穩當なる處置とは決して申されまじく候。

然りとも御前樣の樣な御優しき御氣象として、有るが厭なり、思ふが何とやら、況しては、思ふ事も口にはえ云はで、惜しや青春の、花咲かず鳥鳴かず、松風通ふ空閨に枕嚙み給ひし幾夜、終には、所謂、世の拗者となり給ひしにはあらざるか、何にしても其は以ての外の御心得違ひかと存じ候。

或るは又、思ふ方の既に奧樣御貰ひなされしを、果敢なう思召して、古風な心中立てには在すまじきか、其れならば聊か御氣の毒の感無きにも候はねど、之とて、先入主となりし儒佛の偏頗な倫理觀、誠に以て馬鹿馬鹿しき次第と存じ候。

由來男等と云ふものは、妙なものにて、熱に浮され候當時は、やれこれと火の付く樣に申し候へ共、醒めて仕舞へば一昨年頃の夢程にも思つて與れず、夫で以て本氣になりて此方でも張り合つて遣れば、自分の顏

へ泥でも塗れた様に無上に悔しがり候も、夫も一時、後は又、けろりとして、見よがし聞けよがしに、頻りと細君のお薄心に、鼻の下を延ばすと云ふ至つて虫の善い者に候。（這麼事は良人へは極内に願上候）

所詮は夫婦は形骸相抱もの、女は兒を産む機械ならば、男は妻子を養ふ爲に働く運轉手と申て差し支へ無き筈に候、夫婦に戀の愛の、理想の糸瓜のと申すは、それは御前様の様に未だ經驗の無き方の仰せらるる若きお考へ、星や菫では却々以て、襁褓の始末の出來るものではなく、チックや香水では、あながち、機械の良運轉手とは申されまじく候。私迚も始めつから、日給六拾五錢の妻となりて、同じ長家の手前、前掛の下に味噌漉隠して歩行かうとは、思ひ候はず、其れでも人並に、奥様と云はれ候程の處に嫁きて、適偶の外出にも襤褸を下げず、丸髷の手柄も一度に一回は取り代へらるゝ程のとあゝでは無し斯うでは厭と、隨分親々へも心配をかけて、我儘も申て見候へ共、之が運と極つて仕舞へば、何

女子職業全盛時代の想像圖(1)



とも思はず、澤山に何でも食べさして置けば、三度々〱の食事の外に、物欲しいとは小供等も申さず、木綿ながらも盆と暮とに新らしいのを拵へてやれば、衣類が赤つかい〱と小さいの迄嬉しがり候、穢なけれど、家には雨も洩らず、夜寒の嵐を防ぐ用意は充分にあり、良人は晩餐の一合に陶然と醉を買ひて、兒供等を相手に太平樂を幷べ居り候、見捨てられまいか嫌はれまいか、の心配もなければ、此の上好かれて什麽しやうとも思はず、這麽平和な生涯は、富や位置にて決して買はるゝものでは御座なく〱と存じ候。

銀座街頭、二頭引の馬車にて悠然葉卷きを燻らし給ふ世に時めく、紳士とやらん御方と、暖かな春日浴びて、緋桃匂ふ堤に、款冬の蕚採る妻子相手に、田の畔耕し候人と、何れが名譽に候ぞや、二八水のローヤル水のと、日髮日化粧に憂き身を憔悴して、振の袂の紅絹裏にも色や褪せん、うば玉の綠の黒髮の光澤や失せんと苦勞し給ふレデーとやらむ御方と、油氣無き手束ねの鬢のほつれは春風の弄ぶるに任せ、姉樣被ぶりの微笑可愛ゆう、脊戸の小川で根芹洗ふ里の御嫁樣と、何方が幸福に候ぞや、さるにても一生、斯くても生涯、辛いも、悲しいも、厭な思ひも恥かしい思ひも、五十年の道草と思へば何でもなき樣に候へ共、現世の慰安、永劫の光りは決して、金、學問、位置、都會、の專賣物には非ざる可しと私は熟々考へ申候。

五彩輝く垂帳の影、必ずしも、綾羅の袂は、涙に包まれぬとは申されず候、春月漂ふ高樓の下、強ち錦繡の裳は恨みを匿さぬとは申されず候、考へても御覽じませ、能く〱考へて御覽なされ。

大臣何か候はん、博士何か候はん、岩崎何か候はん、況して、學士、高等官何か候はんや、まして況んや、下田奥村何するものに候ぞや、都は魔の住む處、東京は白晝人の生血を吸ふ怪物の横行濶歩する處に候、私は女學校の先生となり給ひて、多くの人々に崇められ給はん御名譽の御姿を拜し申さんより、ペン持ち玉ひし御手にて、御裏の畑に唐茄子の芽摘み玉ふも嬉しく、英語の文典、講義遊ばせし御口より、大根引きを

手傳ひて優しき御世事の洩るゝが況して嬉しく、況して況て御兩親の君の夙に定給ひし英様を良人として、染め玉ふ御黒漿の臙脂に映えて、物云ひ給ふ御口元の無邪氣なき新屋の御嫁様となり玉ふの、より大なる、御前様の、名譽と御幸福とを切に御勸め申候。

併し、私は、道學先生とやらん御方の虎の卷たる、犧牲てふ意味に於て全然同意する程の野暮にてはなけれど、さりとて、ニーチとやらむ崇拜者のハイカラ一派の樣に、彼樣箇人主義を本氣で擔ぎ廻る程、或は開けては居ぬかも知れず候、さ候へ共、之でも、其邊の消息は幾分か御前樣

女子職業全盛時代の想像圖（2）



より合點致し居り候つもり、迚も思召の坪へ嵌る樣な甘い思想は之なく候へ共、其れでも、酸いは酸いなりに、甘きは甘きなり、眞誠をもて、御相談の相手位は致さまほしう、構へて出過者と御腹立なき樣、豫め願上候、

先年さる女子師範の高等學校にて、柄にも無き粋な倫理の先生が在して、結婚問題に就き種種御話し遊ばされ候處、人は相愛し相戀する兩性ならば、自由に結婚すべき權利はあり、但し親が許可せぬと云ふ塲合ならば、宜しく男子三十歳、女子二十五歳迄待つべし等と、仰せられ候由、御前様とて什麼しても彼の人がお厭で、外

に――這は失禮の申分かは知らねど、世間には無い事ではなし、萬一、外に思召の御方の在すとならば、這般の方寸御自由たるべく、法律上の制裁も在しまさぬ御年齢なれば、甚麽御處置も御勝手たるべく、決して、誰も淫奔等とは申上ぐまじき筈に御座候。

私の友人にて、頻りと獨身主義を振り廻し候が有之り候、貰ひ人が無いからだと、惡口申候人も御座候ひしかど、人形だちの色白な面長、人を見上げ候瞳に、云ふべからざる趣きありと皆々申居り候、一年、夏休みの歸省の道すがら、汽車中にて急に病み出し候處、折能く乘り合せし醫科大學の生徒さんが、見るに見かねて、僅々一度の注射、異なものにて、之が縁の端緒となり、間もなく中國地方へ新婚旅行と聞いて呆れ候連中も少なからず候ひき。之は私の友人の良人に候、三人にて或る一女學生を競爭致し候處、其中に一番好男子と云はるゝ一人に御聲が懸りて、結婚致し候迄は善かりしかども、其後一年ならずして、良人なる人は、他の女に嵌り込み候て、出るの去るのと家庭の風波絶間なく、理想のスヰートホームは、滅茶滅茶と相成り候。落選者の一人は、其後大に自棄になりて、下宿屋の養女を貰ふでもなく、引つ張り込むでもなく、云はゞ内縁の妻と致し候とか、一時は兎角の評も之あり候ひしかど、先日久し振りにて良人の留守に一寸見えられて、やあ、婦人の味は始めて知りました、僕も大きに以後勉强するさと、至極御滿足の體に見受け候。今一人は、失望のあまり、生涯は獨身で等と鬱ぎ込みて、故郷に歸り候へ共、此間送り呉れし寫眞には、御自分の側に、可愛ゆらしき兒を抱きて腰掛け居りし婦人の、眼元、口元、眉の細くて顏立ちの艶なる、何處にも似通ひし處の候はねば、妹御とは受取れず、丸髷の殊の外美しと見たれど、何となく初々しくて、羞しげな面持、勿論姉樣とは思はれず、却て、穩かな家庭を持ちし樣に思はれ申候。

之は私の友人の話しなれど、世に時めき玉ふ止む事無き際にて、前の何大臣と云はゞ誰しもハハーと合點し玉ふべし、其が御方の宿の奧樣とやら御愛妾とやら、

一時は新橋の何やの何子とて名うての利け者、少し其の道に通がり玉ふ方は、夙うから御馴染の筈なるべし、親は貧すりや、緞子の布團も何の物かは、誠に女は美しう生れたるが身の徳となりて、生れ代つたやうな榮華、年老りし兩親までが親孝行なる娘の威光で、何處か下町邊で樂隱居、此の女の妹にて、姉さんよりは、とつととつと容色の美しくて氣質の優しさが之あり候、親御は娘を媒鳥に、左團扇を使ふ程な開けた人等に候まゝ、况して幾倍も美しい妹を喰物にせんと頻りに氣を揉み候へ共、肝心の御本人は頑として聞き入れず、嫁くにした處で、姉の旦那の何で、幾らも相當の處がある可き筈を、女學校卒業後、小學校の訓導の妻となりて、其れで滿足して、觸らば折れん柳腰に、惜しやよれ〱のメリンスの帯巻き付けて朝夕の水仕業、姉さんの身に比ぶれば、御氣の毒な樣なとの事。



女子職業全盛時代の想像圖 (3)

世の中は這麼ものに候。

人の妻となる事は、其れ程詩的な美しい意味のあるものでもなく、學問のある方は學者に、美人は好男子に、薪屋のお竹どんは湯屋の三助に、伯爵家の玉は貴族院議員の熊にと云ふ樣な、ちやんと定まつた規則のあるものにても御座なく候。丁度八犬傳の里見の御殿樣が、赤繩をもて、御自分の姫樣の夫たるべき人の天啓を悟り給ひしと樣に、始

めから誰の妻となるやら知れたものに候はず、眼隱しの鬼ごつこして、見えぬながらも、其處いら探して、步行いて、袖を捕つて、捉まへて見て、手巾を脱して、おや〳〵まあ、阿方でしたかと吃驚りする位、彼の人と定めて、捉まへ樣と思つてゝも、そう〳〵捉まへらるゝものでもなし、無理强ひに傍から押し着けられた時は、否でも捉まへねばならぬ場合もあり、そうかと云つて、何時迄も何時迄も捉まへねば、何時迄も〳〵鬼で狼狽かねばならず、側の者からは由良樣盲目手の鳴る方へ等と、可い加減にお目出度く取扱はれて、腹の撚れる程笑はれて、其癖自分では、隨分と人に云はれぬ心配もし苦勞もせねばならず、誠に之れ位馬鹿らしく損な話しは御座なく候間、もう大概にして思案を定めて、捉まへて御仕舞ひなさるが、上策かと私は考へ候、好いた人とて、其方と一生添ひ遂げらるゝものでもなし、添ひ候た處、班女の閨の扇に秋風寂ぶる恨はなしとも限るまじく、厭な人とて、夫婦になつて見れば、其樣に思つた程厭でもなく、澁からうと心元なく思ひし初ちぎりの柿に甘味記えて、案じるより產むが易く、兒供の三人も四人も出來候ては、況して天下太平、人も喜び、自らも自らの幸福を悟り、人世は斯うしたものかと始めて洒落けて出らるゝ樣に相成り申可く候。

何も厭と云ふ程物は識り給ひて、加之にお出來なさる御前樣、私の樣な者の申迄には候はねど、唯かくて一生終り給ふが、御前樣のお豪く入らせらるゝ丈其れ丈口惜しうて、我身の恥しさを顧慮ず、御前樣なればこそ、這麼譯の分らぬ言も申上げ候ひつれ、必ず、御氣にさへさせ給はぬ樣呉々も念じ上候。

其日〳〵の活計に追はれて、何時とは申上げ兼ね候へ共、花咲く頃には江戸川傳ひ、是非參上致し候て、色々御話しも承り候べし、御前樣も御閑の折は少と御出懸け下され度く、處は牛込の山吹町、彼の何とか云ふ敎會堂を右に見て、荒物屋の橫丁を曲り、がたくした路次を通り拔けてツヒ左に折れて二軒目の穢くるしきが夫れに候、破れた障子に太陽は射し入り候よ、

暖たかな御芋の燒たても用意致し置き候べければ、必ず在せ、必ず〲待ち上げ參らせ候。

序なれど、紅屋のお杉樣昨年八月肺病にて、御死去り遊ばされ候由、大崎の若旦那は相變らずの女狂ひ、御身代は滅茶苦茶になりて本家は終々人手に渡り、濱の御倉庫へ御逼塞とやら、御老年の阿父樣が眞に御氣の毒に候、門菱では火事に御燒けなされて以後、當地へ引つ越して、只今は深川に炭問屋を御始めなされ候由。

先日鄕國より參り候者の、話しに候。

今に成りて思ひ出し候、御宅の中坪の桃の花は今頃如何に候や、扨は、彼の菜畑に蝶々追ひ廻し居り候惡戯なポチは未だ達者との事にや、御前樣と餘り御惡戯が過ぎ候爲、父上樣御秘藏の萬年靑の葉一枚折りて、ポチにかづけ候處、父上樣が餘りポチを御叱り遊ばされしが兒供心にも氣の毒になりて、御前樣と相談の上、紅と紫との手綱染の鹿の子絞りにて、鈴つきの首輪拵へ遣りし等、思へば〲昔眷戀しく候。

何やら申上度き事は、澤山に候へ共、御前樣とは違ひ筆も思ふ樣にえ運ばず、何だか取り止めもなき獨談義、眞つ平御許容願ひ上げ候。眞晝の大路小路、近頃滅つ切りお混暖に相成り候へ共、未

女子職業全盛時代の想像圖（4）



だ朝夕の寒さは身に堪え候、返す〴〵も御身大切に御勞り遊ばして、更けての御勉學、曉月夜に獨物思ひ給ふは大毒、かまへて、湯上りの御薄着に御風等召させ給はぬ樣之のみ祈り上候。

女は陽性なり

靑柳有美

花は紅、柳は綠、男は陽のもので、女は陰のものといふことに、昔からチヤンと相場は定ッて居るやうですが、この相場附の、ちと當にならぬナと思はれることが茲に御座います。

落語家の曰く、世の中は何事も陰陽の和合で行きますから、既に柳が陰のものであれば、その下に出る所謂柳の下の幽靈は、ドウしても陽のものでなければなりません。幽靈が陽で柳が陰、それで始めて陰陽の和合といふことに相成りますと。然るに又、落語家の曰く、お女中と申すものは、仲々仕末に終へぬもので、賞めておけば乘けあがり、叱れば泣き、殺すと幽靈になッて出やがりますと。

之れによりて之を觀れば、先づ幽靈といふ奴は、略ぼ女であることに、相場が定ッてるらしい。然らば、所謂柳の下に出る幽靈なぞも、大抵は女であるに相違ない。して、其柳の下の幽靈が常に陽のものでありとすれば、無論、柳の下に出る女の幽靈も、陽のものであるべき筈ぢやアありませんか。死んだ女の假りに形を取ッて此の世に現れ出でた幽靈さへ、尙ほ且つ陽のものでありとすれば、活きてピン〳〵してる正味正當の女は、勿論いふまでもなく、陽のものですサ。女を陰だなぞと申すのは、實に大なる間違で、男こそ寧ろ陰のものです。

よく寺の山門なぞに仁王といふものがあり、淺草などにも見えますが、あの二體は陰と陽とを現したもので、つまり二つで陰陽の二王になるとのことで……。ところが、其の陽の方の仁王さんといふものは、必ず口を開いて、舌の端を少し出してるやうな加減に極ま

れ、陰の方の仁王さんは、必ずウムと唇の邊に力を入れて、如何にも六ケしそうな顏をし、口を食ひ閉めてることに定ッてますから、お話が仲々面白くなりますサ。

いま男が陽の仁王式に、口を七分三分に開いて、おまけに涎までお景物に垂らして居てゞも御覽うじろ……それは〳〵何とも云へぬ不景氣な御面相になッて、誰でも、そんな顏のものは、まづ白痴院の患者だといふ批評を下すことになり、頗る非常の阿房らしい顏に見えます、男は、矢張りドウしてもワシントンやブライヤンのやうに、口元が凜々しく締ッて、兩の唇は槓杆でも開かぬといふほどのところが無いと、第一、男らしい點が缺けて、威嚴と申すものが、カラ皆無ですサ。して見ると、男の口は、必ず閉めてるべき筈のもので、之を陰陽の仁王に徴すれば、男は陰の式ですから、男を陽のものだといふのは、全く無理で、實は陰のものですよ。

ところで、女が、陽の仁王さんのやうに、口を開いてますのは、仲々美しいもので、女が苦虫を嚙みづぶした樣に、始終エラそうに口を閉めてるのは、却て不景氣でお愛嬌が無くなり、全く女たるの資格を失ふに至りますが、七分三分に開いてる口のうちから、銀の鈴のやうな響を發して、オヽホヽなぞと笑ッて見せるのは、實に誰が見ても心持のよいもので、女が口を開いてれば、そのうちから、何となく女らしいところがホノ現れ、まことに女の美を增すものです。西洋の女役者なぞの、よく少し口を開き加減にして撮ッた寫眞などがありますが、全くソウして寫した方が、奇麗に見えるからなので、日本の婦人なぞのうちにも、そんなやうに口を開いて齒なんか見せて寫眞を撮る連中があり、よく雜誌の口繪なぞに載つてゐますが、仲々愛嬌のあるものでせう。して見れば、之を仁王の式に徴するも、女は陽の方のもので、決して陰のもので無いことは甚だ以て明ではありませんか。

又、兎角男ばかりの寄り集りでは、どんな宴會でも座が白らけて陰氣になり易いものですが、其處に一人

でも女が這入ると、忽ち陽氣になッて賑ひだします。歌加留多なぞを取ッて見ても、矢張り同樣で、女が無ければ、到底陽氣にはならず、女の影さへ見へると、ソレ女が來たぞといふので、如何な會でも直ぐ陽氣になりますサ。これで見ると、女の身體には、生れながらにして陽氣といふものを、自然に持ッて來てるらしい。それも、苟にも陰のものだなぞといふは、實に不屆至極の次第で、陽氣を身に備へてる以上は、女といふものは、ドウしても陽のものに相違ないサ。

それから、男の好んで着る着物を觀ると、仲には、落語家や特別製日本ハイカラ粋士のやうに、紅絹裏なぞとシヤレる儕輩の無いでもありませんが、先づ大抵は色も縞も陰氣の方で、馬鹿に粗らい縞だとか或は赤とか紫とか綠とかいふやうな陽氣な色の着物を着るものは、殆んど皆無で、ドチラかといへば、坊さんは例外として黒味がゝつたものばかりを着ることになッてます、これは西洋も同樣で、曲馬の道化師か芝居の舞臺でゞもないと、彩色や金色の這入ッた着物なぞを着るものは無く、若し、ありとすれば、宮中の式部官が舍人ぐらいのもので、皆な男は黒ずんだやうな陰氣なのばかりを、衣類にしますが、女の衣服は、日本も西洋も實に陽氣なものでして、色に紫あり赤あり鴇色あり靑あり綠あり金あり銀あり、縞も女は馬鹿に粗いのばかりを好み、模樣を衣類の上に織出すやら染め拔くやら、遂には友禪なぞといふ大仕掛大道具鳴物入の代物が出來てるほどです。ところが、こんな陽氣な衣類は、女にこそ似合もすれ、男が着ては、兎ても觀られたものでなく、世間からは、差當り巣鴨病院者と目せらるゝことになりますサ。然るに、女に此う陽氣な着物の似合ふのは、全く女が陽のものであるせいで、喪服には黒が似合ひ、陰性である男にも又黒が似合ひ、陽のものである女には、無論、陽氣な衣類が似合ふ筈ですサ。かるが故に、落語家の申さく、兎角お女中は御陽氣なもので……と。然り、女は誠に陽のものです。（まだある）



日本婚姻の迷信

清　水　芳　子

(六)　調度器具に關する迷信

婚禮に關する古書を見ますと『嫁入り道具』とて種種の調度器物が記してありますが、其中でも貝桶を第一の調度として居ります。蛤の貝は外の貝に合せても蓋が合ぬもので、例へば貞女兩夫に見へずとて身持正しく操全き女は兩人の男に從はざるが如く、一度婚禮して後は再び婚禮せぬものとの敎へのために、貝桶をば嫁入り道具の首位としたのださうです、蛤をお吸物に用ゐるのも又この心であります。婚迎記に『貝桶とは貝覆ひする桶と云ふことなり、受取り渡しの貝桶には貝かた〳〵づゝ一ツ入れるなり、其貝桶に紛れぬやう覆に貝桶と書くなり』とあります。又貝覆ひに就ては安齋隨筆に『或說に神代の昔事代主命その弟大己貴命を憎みて殺さんとせられし時に、神皇產靈尊の命にて鳥貝姬は人形を造り蛤貝姬は異井の水を持ち來りて此難を救ひ參らせ、後に大己貴命須勢理姬と婚禮し給ひしより、鳥貝姬蛤貝姬の名に寄せて貝覆ひと云ふこと起れり、又人代になりては景行天皇の即位五十三年十月に東國へ行幸ありて、上總の國より常陸國鹿島へ渡らせ給ふ時に、大空に覺賀鳥の啼き過ぐ

る聲を聞き給ひ、その鳥の形ちを見んとて海中へ出御ならせ侍れば白蛤を獲給ひしより、鹿島の浦の蛤貝を拾ひて貝覆ひをすること初りたりと云ふも此兩説とも牽强附會にして採るに足らず。源平盛衰記行綱中納言の條に、西八條へ推參して見れば馬車數も知れず集りたり、藏人なに事やらんと思ひて尋ねければ案内と覺しき者答へけるは、入道殿(平淸盛のこと)福原御下向の御留守に公達會合して貝覆ひの御勝負なりと。又西行法師の山家集に「今ぞ知る二見の浦の蛤を、貝合せとて覆ふなりける」とある。此他定家の明月記、徒然草、古今著聞集などにもあり、歌合せ、繪合せ、香合せ、花合せ、根合せなど〻同じく貝を合せて勝負することとなるを、何朝か婚禮に用ゐるやうになりしものなり、殿上の風流に眞似たるものならむ、とあります。

銚子に雄蝶雌蝶の形ちした折物をつけるのは、野に舞ひ飛ぶ胡蝶ではなく蠶の蛾をとつたものださうです。蛾は子を多く產むのでその心を以て子孫繁昌を祝ふためにつけるので、番ひ離れぬと云ふ意ではないと云ひます。又蓬萊の島臺とて洲濱の臺に松竹梅、鶴龜などを作り、之を座に置くことは古代から行はれた式ではありますが、今と昔とは其用ゐ方に大きな相違があります、昔は唯風流のため客への馳走に出したもので、作る物も獨り松竹梅鶴龜にばかり限らず、遠近の景色やら時々の花卉やらを作り飾つたのであります。全體島臺の起りと云ひますのは堂上の方々が花合せ草合せなどの遊びをする折に、臺へ載せて席へ出したのに基くことですから、單に梅や竹を作るばかりが式ではありませぬ。殊に松は常盤の色を現し、竹は根笹の元固く、梅は寒さを凌いで百花に魁けして花を開く心をとつて祝儀としたのでありませう、又鶴は千年龜は萬年の壽をとり千穐萬歳の祝ひにしたのでありませうが、是等は共に近世の儀式で古代にはなく、且つ島臺を用ゐる本來の意とは異つてゐることであります。

婚禮の時に盃を伏せて置くことを嫌ひますのは、其古へ合戰の場合に敵の大將の首實檢をする折に、實檢

が終へると其首に酒を飲せる儀式があつたさうです、此儀式には必ず盃を伏せて出すものと定まつてゐたので、それ故に祝儀には之を忌むとあります。又婚禮の時に柳樽を贈るに家内喜多留と書て家內來ると通はせることは、是も近代の風儀で古代にはない迷信であります。婚嫁用心記に「柳樽とは柳にて拵へたる手樽のことなり、柳は水にあへばふやけて洩らぬゆゑに用ゐるなり、柳樽を家內喜多留と書くを法となさば、桐の箱に作りたる簞笥長持は切りの箱と書かねばならぬ事となる、これ僻說なり」とあります。扇は塗骨を忌みます。之は黒は喪色であると云ふ心から出たのであります。



（七）言語に關する迷信

婚禮には「忌み詞」と云ふて必ず相警めて用ゐぬ言語があります。由來我國に於る言語の起原說は、所謂言語學上の神賜說、則ち言語と云ふ靈妙の作用を持つてゐるものは、無能なる人間の拵へたものではなく、全能なる神が人間に下し賜つた者であると云ふ說に基いて居ります、從つて言語に關する迷信も極めて古くから行はれてゐて、既に神代に於きましても、天孫

瓊々杵命が大山祇命の娘磐長姫、木花開耶姫の姉妹を召させ給ひしときに、姉姫の醜きを嫌つて妹姫を皇妃となし給ひし折に、父の大山祇命が『我が娘二人並べて奉れる故は、磐長比賣を遣しては天津神の御子の命は、雨降れども風吹けども長へなること石の如く、常磐に堅磐にませ、また木花開耶比賣を遣しては、木の花の榮ゆる如くませとうけひて奉りき。かゝるに今磐長比賣を還して木花開耶比賣をひとり留め給ひつれば、天津神の御妻は木の花のあまひ（堅からずして甘いと云ふこと）のみましなむと白し給ひき。かれこゝを以て今に至るまで天皇命の御命は長くはまさゞるなり』と古事記にあります。之は磐長と云ひ木花と云ふ人名の語義に運命を支配する靈力があると信じたことで、從つて之を娶つた天孫の子孫にまで禍福吉凶が及ぼすと思つたのであります。現今でも生れ性を見て名をつけるとか又は名が勝ち過ぎて弱いから改名をするなど云ふ迷信は乃ち之であります。

斯くの如き神賜説に伴ふ言語の迷信が漸く年と共に成長し、茲に言語には不可思議なる靈力があると云ふ信仰が加り、遂に『言靈の幸ふ國』と云ふ説が唱へられ、言語には奇き靈が宿つてゐるから成るべく善言美辭を選み、此靈能の恩みに與れとて、例へば伊勢の神宮では佛を中子、經文を染紙、塔をあらゝぎ、死を直る、病を休み、血を汗と云ふやうな隱語を生むやうになりましたのです。海人藻介と云ふ書に『公家方にては酒を九獻、餅を歌賃、味噌をむし、鹽をしろものと云ふ』とあります。之は足利時代の末葉に畏くも皇室式微なされた時に公卿達が、下民の食物や用具を需められる折に之を恥て造つた隱語であります。勿論かゝる隱語は純粹の言語の迷信からは遠ざかつて、稍々謎めいた洒落に近いて居りますが、其源は矢張り迷信の流れから出たものに相違ありませぬ。然して此隱語が發達し、更に共通の語音が繁多になり、軈てそれが迷信と抱合して益々迷信を生み、横笛の語が王敵と聞ゆる故にわうでうと云ひ、玉帶が玉體に紛れると云ふのでごくたいと訓み、葦は惡に通ふのでよしと稱する

やうになつたのであります。

偖婚禮に就ての忌み詞は先づ第一に返ると云ふことを嫌つて開くと云ひ、盃も返盃をせぬのが法としてあります。次には四と云ふ語が死と音が同じいので之を厭ひ、四の膳をよの膳と云ひ、酒の四献をよ献と云、若し四と云ふべき場合には三が一と云ひます。就中この四の語を嫌ふことは婚禮以外に於きましても甚しいものと見え、現に電話の番號でも各局ともに四十四番、又は四百四十四番の如き忌み詞の多いものは、誰も迷信に驅られて加入する者がないので、電話局でも是だけは架設せぬさうです、迷信の勢力は意外のところにまで及んで居ります。是に次での忌み詞は去ると云ふ語で、猿毛の馬に乗らず、猿樂町をばエテ樂町、猿屋町をばエテ屋町と呼んで之を避けます。それから次は切れると云ふ語で之は斷じて用ゐませぬ、本郷切通しの坂は之に當るので、婚禮の時には遠い廻り路をしても通らぬことになつてゐます。明治になつても此緣起からして祝儀の贈り物には、進物用の切手は遣り取りするのを嫌ひます。此外にうみなしの鞍を用ゐぬとか、婚禮の



時の病氣は歡樂と云ふとかまた種々とあります。

(八) 數に關する迷信

物の數の名の如何なる理由で此世に出來ましたか、是に就きましては我國特有の神話的傳説があります、餘事ではありまするが數の迷信に關する觀念を明かにするために槪略を申述べます。平田篤胤と云ふ人の著した宮比御神記と云ふ書によりますと、天照大神が皇弟須佐之男命の狼藉を恐れさせ給ひて天の岩戸に隱れ給ひし時に、天地ともに暗く國民の嘆き一方ならぬより群神達がいろ〳〵と神議りに議り給ひし後に、神樂を奏して大神の御心を和げ奉らんと企て、天鈿女命俗にオカメと云ふ女神が俳優の役を勤めることになり、天香山の天の日影の蔓を襷にかけ、天の眞折の蔓を鬘となし、天の岩戸の前に桶伏せてそれをば蹈と踏み鳴らしながら、一二三四五六七八九十百千萬と歌を唄ひつゝ踊りますと、神集ひし八百萬の神達も之に和して高天原の動くばかりに咲ひ戯れました。すると岩戸に隱れ居給ひし天照大神も其咲ふ聲を聞かせ給ひ何事か知らぬと戸を明て外に出で給ふところを、手力雄命が其御手をとりて引出し世は再び元のやうに光明なりました。そこで集へる神達が云ひますには、天鈿女命の力で斯くは國民の嘆きを救ふことが出來たのであるから、せめては其奇き功績を後の世にまで傳へ、萬民をして永く鈿女命の神徳を仰ぐやうにとあつて、其歌に唄はれた詞を數の名とし、今日は幾日、是は幾つと云ふ度ごとに思はず知らずも神の惠みにあづかるやうにと、斯くは名づけたのだと記してあります。此説たる元より荒唐無稽には相違ありませぬが、兎に角に我國の傳説として言語には不可思議なる靈力があると云ふ説を本として、更に此神話的傳説を考へ合せると、其間に一種云ふべからざる感應があるかのやうに思はれ、且つ數に就ての迷信の起るのも道理かと信ぜられます。

そこで祝儀に七五三の數を好んで用ゐますことは、同じ數の中でも一三五七九の奇數は陽の數で、之に反

して二四六八十の偶數は陰の數と申します、陽は日の象で物を生じ、陰は夜の象で物を枯します。此理を推して陽數を用ゐます。尤も同じ陽數でも初めの一は弱く終りの九は衰へると云ふので、初めと終りを取り去つて中の陽氣盛なる七五三だけを尊らと致します。又我國では八の數を儀數と唱へまして總ての數の根本として居ります、例へば神の數が八百萬、法華經が八の卷、公家が八百八公家、狐が八百八狐、江戸が八百八町、大阪の八百八橋、旗本が八萬騎、淨瑠璃が八百八流れ、八十伴の男、八十八夜、嘘八百など皆これを用ゐます。然るに是等に反して七難九厄とて此數を避け、厄年と稱して男は二十五、四十二、女は十九、三十三を嫌ひ、亦た並び年とて男女共に二十二の年には婚禮をせぬと云ふ迷信もあります。



酒をさゝともくこんとも云ひますことは、さゝは三々でくこんは九献の隱語であります、婚禮の時の夫婦取り結びの酒は三三九度飲のを法式としますので此の語が出來たのです。尤も之は支那から輸入した故實ださうで、左傳と云ふ書に『上公の禮は九献にして畢る』とあります。みなこ餅の數を五百八十七に丸めるのも、以上の陽儀兩數を祝ふたのでありませう。又男女の年の四め十めとて四ッ違ひ十違ひを嫌ひます、之

は嫁止めの語に通ふからであります。之に反して男より一ツ年上の妻は鐵の草鞋で探しても添へと云ふ迷信もあります。

（九）方位年時に關する迷信

方位と年時との迷信は諸種の迷信の中でも最も有力なものです、尤も方位年時の吉凶と云ふことは其古へ専ら軍學者流の唱へた說で、多くは築城合戰の必要から出たものであります。例へば北の方に水門口を設けるとか南の方に櫓を建てるとか云ふのは、防ぐに便利で攻めるに難義であるとの築城法、佛滅の日に合戰を避るとか戌の日に出陣せぬとか云ふのは、是また野戰攻伐の法であります。されば此築城合戰の法式を直ちに商估町人の家宅行事に應用するのは甚だ考へのないことです、然し迷信の勢力は常に理屈以上に立つて居りますので、今に人心を支配すること實に多大であります。

先づ生れ年にあつては誰も知つてゐる丙午です、如何なる理由にや此年に生れた女は嫁いた夫を食ひ殺すか、子を食ひ殺すか、さもなければ財産を食ひ殺すか、三ツのうち必ず一ツは食ひ殺すと云ふので痛く之を忌み嫌ひます、此結果は世上の父母をして丙午の年には成るべく子を産ぬやうにとの考へを抱かしめ、萬一にも此考へに違ひ妊娠することがあると、成長の後を恐れて故意に流産するやうな破倫不德の罪惡さへ行はれるさうです。斯かる迷信の結果は丙午の者は同年の者と結婚するより外に途がないと云ふことです、迷信の害毒も亦た恐るべきものであります。此外に五性の相性相尅と云ふことがありまするが、之は誰も知つてゐることですから今は省くと致します。

干支の年に就ては虎は千里往て千里歸ると云ふので寅年を嫌ひ、申は去るに通ずると云ふので申年を厭ひ、此兩年には、婚姻の數が少うございます。又此反對に酉年は鷄のやうに多く子ができ、戌年は犬のやうに產が輕いと申して婚姻の式が多く行はれます。

月にあつては五月を忌みます、之は五月の異名を病

月と云ふゆゑであります。尤も五月に婚禮を嫌ふ習慣は古代からあつたものと見え、源氏物語螢の巻に『五月雨になりぬるにうれへをし給ひて』とあり、又堀河院次郎百首にも逢みての後も五月を忌むとてや、晦日にだにも音せざらむ』など〻あります。五月に次では七月を佛月とて避け、十月は神無月とて嫌ひます。猶ほ一説には婚禮には正五九の三月を忌むともあります。

日に就ては六曜のうち佛滅赤口の兩日を嫌ひ、中段ではとる、下段ではやぶる、あやふの双方を忌みます。

婚と云ふ字は女へんに昏ると云ふ字だと云ふので、



婚禮の式は夜に行ふのが法式だと云ひますが、之は甚だ捏ぢつけた説であります。元來婚姻の制度には古代から現今までに凡そ四度の變遷があつて、第一期を共同婚時代第二期を掠奪婚時代、第三期を賣買婚時代、第四期を自由結婚時代と申します。然して斯かる變遷を經ます間に、支那で漢字を拵へました時代が恰ど第二期の掠奪婚時代に相當してゐたので、前にも述べたやうに花聟は夜陰に乘じ腕力を振つて花嫁を否應なしに連て來たので、女に昏と書いて婚と云ひ、取る女と書て娶ると訓ませたのであります。されば婚禮の式は必ず夜に限ると云ふものではなく、反て上流では晝を以て式の時と致して居ります。

(十) 婚姻に關する俚諺

俚諺の多くは常識的のものでありますが、此中には又迷信に關するものも少くありませぬ、左に一二を掲げます。

女房は臺所から貰へ。

つり合ぬは不緣の元。

媒人は宵のうち。

媒人口は當にならぬ。

媒人は痘痕の數まで計て來る。

貧しき者は妻を擇ばず。

幼にして親に從ひ、嫁して夫に從ひ、老て子に從ふ。（女の三從）

合緣奇緣。

緣は異なもの味なもの。

夫婦は二世の契り、

人には添て見よ、馬には乘つて見よ。

一人娘に聟八人。

一ッ勝りの嫁は鐵の草鞋で探しても持て。

四目十目の女には厭きがくる。

赤飯へ茶をかけて食ふと、婚禮の時に雨が降る。

紙よりの上手な者は、良き妻を持つ。

割れ鍋にどち蓋、曲り木にくねり木。

焦飯の好きな者は、痘痕面の人と連添ふ。

鬼の女房に鬼神。

擂鉢の尻を洗ふと姑が早く死ぬ。

姉姑は鬼千匹にむかひ、小姑は鬼十六匹にむかふ。

聟は臍の上に帶をしめる者を貰へ。

秋茄子は嫁に食はせるな。

緣と月日は待がよい。

月經の時に婚禮すると緣がきれる。

(十一) 迷信の自然淘汰

時代の智識と背馳し常識と矛盾する是等の迷信が、年を追ふて自然に淘汰されるのは人文發展の上から見て然るべき事と思はれます。貞丈雜記に「近世江戸に

て婚禮に途中にて鯨尺を取換ること、又桂女と云ふ女婚禮の供をすること、いゝわげと云ふ女を悪魔拂ひにとて召連ること、又嫁の輿を入れる時に聟の門内にてうちあわせ餅とて老人夫婦餅をつくこと、並びに召代の輿に筒守はふこ犬張子を載せて戸を開き人の見物に備ふること、鴛鴦の衾、長枕など〻云ふ物を作ること、此外常に變りたる事ども多し、是小笠原流なりと云ふ。小笠原の先祖は信濃の國の大名にてありければ是等は信濃の國の風俗か、古へ京都にてはなき事どもなり。右の事ども我が家傳にはなき事なり。近頃水島卜也と云ふ浪人小笠原流と名乘りて、故實にもなき作り事をして弟子に敎へ世間にはやらかす世間にも亦たこれを用ゐもて囃す、今は江戸皆これを用ゐる事になり來れり。苟且にも彼の水島などの眞似をして故實になき事を作り出すことなかれ、家傳になき事を人の尋ねなば家傳になきゆゑ知らぬと答ふべし』とあります。著者伊勢貞丈翁の家傳とは如何なるものでありますか、該書に記してないから確に知る事は出來ませんが、然し此說も五十歩を以て百歩を嗤ふものとしか思はれませぬ。江戸が東京と改名され、奥樣が夫人と改名され、婚姻の緣結びが出雲の神の手から離れて、戸籍吏の手に移つた今日では、迷信は軈て跡を絶つやうになりませう。（をはり）



實地經驗　出産問答

作葉女史

▲マア『隨分大變なものですわねえ、デ、後産と申すのは、何を言ふので御座ますか。

△後産ですか、其は産んで了つて、ガツカリした樣な心持に成つて、身體を落付て居りますと、やがて三十分も經つた時分に、子宮が縮む所爲か、復々腹が痛んで參りまして、臍帶の着いた大きな胎盤を娩み出すのを申すのであります、之も何うかすると、中々半時間位では降物のない事もあるさうですが、無いからと言つて、決して無理に壓出す樣な事をしてはなりませぬ、併し是等の事は産婆なり産科醫なりが能く心得て居て、宜い樣に手當をして呉れますから、氣を揉まずに任して置けば宜しいのです。

▲産湯の使はせ方をお話し下さいませ。

△産湯を浴はせるのは産婆の役目ですから、お産なさる御當人は御存知なくとも宜いやうなものゝ、併し心得て入らつしやるに越す事は御在ませんから、簡短に申上て置きませう、扨て先づ産湯の温度は大抵攝氏の三十度より四十度までにて、手腕を入れて見て温いと思ふ位が丁度宜しいのです、ソレデ湯の使はせ法は、赤子の身體を全く湯の中に入れ、頭だけを湯の上に出し、別の器に盛つてある微温湯の中に清潔な白布を浸して置き、其で眼耳口鼻等を能く洗ふので御座ます、殊に眼を拭くには能く注意をして、決して穢い布などで觸つてはなりませぬ、間違つて其の布から病毒でも眼に這入らうものなら、眼病を患ひ、或は之が爲に産れも付かぬ盲目に成つた例は世間に幾らもあるのですから、餘程氣を付けねばなりませぬ、それから顏が洗へたら、今度は「オレーフ」油か又は「ワセリン」を布につけて、赤子の肌に着いて居る脂肪を洗ひ落します、又た赤子を湯の中に入れて置くには、大概五分間、長くて十分が適度だと致してあります、さて湯から出しましたら、乾いた温い布で湯を拭き取り、温暖かな產衣を着せて、風害の中らぬやう氣を付けて、蒲團の上

ヘソッと臥して置くので御座ます。産婆は之が濟むと、今度は生母の腹を按つて、子宮が能く縮まつたか、何うか、痛みはありませぬかなど尋ねて、其の邊の汚液を清潔に拭取り、新しき腹帶に仕替へて與ます、但し汗に成つた襦袢などを着替へやうとして、餘り早くから身體を動搖すのは宜しくありませぬ。

▲産後三七夜が過ぎるまでは動いてはならぬ、動くと血が治まらぬと年寄は申しますが、そんなに何時までも寢て居なければなりますまいか？

△其は左樣ですとも、赤子を分娩した子宮が、舊の通りに復しますには相當に時日がかゝりますから、甚麼に壯健な者で樂にお産をした者でも二十一日間位は安靜して居なければ不可ませぬ、而してお寢になる體の位置も先づ四日目位迄は、仰臥に成つて居るが宜しい、尙ほ御退屈でなくば一七夜位までも此の位置を保つて居たが宜しい相で、二七夜目からは氣分次第で、横にならうと、起直つて居やうと隨意だと申すことです。

▲産蓐に居ります間の食物から、養生法などを細かに伺ひたう御在ます。

△お産のあつた後は、其の疲勞でグッスリ寢入るものですが、眼が覺めると氣分が何となく爽快致し、咽喉が非常に渇きますから、水なり白湯なり、又は麥湯といふものか、砂糖湯といふものか、お茶なら極く薄いのを召上るが宜しい、珈琲、紅茶は一週間經たぬ内に飮んではなりませぬ、食物も精々軟かな白粥に、燒鹽又は梅干位を添へて少しづゝ幾度にも食るが宜しい相です、さて三日目とも成つて少し食慾が出て參りましたら、鷄卵の半熟、鳥肉の肉羹汁、或は鰹節煮など、少量づゝ召上つて差支ありません、併し干瓢や湯葉などは不消化物ですから、當分食らぬやうになさい、其の代り赤味噌に豆腐の汁、白い肉の刺身、温飩の能く煮たのなどは構ひません、只だ餘り喰べ過ぎては不可ません、それから牛乳なら何時飮らうと宜しいが、香の物、果物は二七夜前には喰べては不可い相です、ソレデ三七夜を越した所で、全く平生の飮食に復れる相ですが、矢張當分は注意が肝要で、加減せぬと身體に

障ると、醫者から忠告を受けましたから、私共も是には餘程氣を付けたもので御在ます。それから尙ほ注意致すべきは、便通で御在まして、三日迄に大便の通利が無いやうでしたら、其の趣を早速醫者に言ふて遣つて、便通を付けて貰はねばなりません、又た產蓐熱にかゝらぬやうにしなければなりません。

▲何時頃から赤子に乳を哺せ初めたら宜しう御在ませうか？

△乳は分娩後母も子もグッスリ一寢入して、眼の覺めた所で、初めて哺ませるのが宜しいのです、此頃は未だ乳房に乳が充ちて居りませんから、極く少し宛しか出ませんけれど、哺む方でも幼稚ですから、夫で十分なのです、乳を哺ませますには、母が横に成つて、赤子に臂で枕をさせ、赤子の頭を臂にて胸に寄せるやうにし、明いて居る片方の手の人差指と中指とで、乳房を押へて、赤子の口に哺ませて遣り、赤子が乳を哺んで居る內、赤子の鼻の塞らぬやうにねてをるのが本式だと申しますが、成程斯う致しますと、母親も樂であるし、赤子も樂であります、尤も最初の內は乳の出が少いので哺ませ惡う御在ますが、哺ませ惡いからと言つて、決して怠つては不可ません、一日二日はよく氣を煉つて、哺ませて居る內には、自然出て來るものであります、此の哺乳は矢張一の技藝ですから、氣長に辛抱さへして居れば、母親も哺ませ馴れ、赤子も哺み馴れて、終には譯もないやうになります、序なれば申上て置きますが、我國では從來胎毒を瀉すと申して、產れた許の赤子に鷓鴣菜だの、五香だの、又は燈籠兒根などを煎じて飮ませますが、是は甚だ間違つた習慣で御在まして、ソンナ事を致すからして、却て分娩後の赤子に大下痢など起さして、危い目に逢はさせるので御在ます、ソンナ餘計な事を致さないでも、胎毒やかにばゝを瀉して了ふ位の用意なら、チヤント母親の乳の中に配合んであるのですから、何も別段に他の藥品を借りる必要は御在ませんのです。

▲是は何うもいろ〳〵と御親切にお敎へ下さいまして、難有う存じます、

△イエ、何う致しまして、是はほんの大體で、申上れは未だ澤山御在ますが、左うく一つ事許り續けて申上るのも如何ですから、何れ又た詳しくお話することに致しませう。（完）

家庭の栽培

まき子

▲葱

葱は我國に於て最も多く栽培する蔬菜にして其重なる種類を擧ぐれば

岩槻葱、千住葱、根深

以上は冬葱の部類にして其莖概して大なり夏葱は又小葱と稱し夏期採收することを得るものにして之に分葱と刈葱の別あり



葱は其性極めて强きを以て能く寒氣に耐ゆることを得れども荒地或ひは新地には適せず、其適土は輕鬆なる壤土にして稍砂を交へたる所を擇ぶを良しとす四月の頃畑地に人屎を多量に施し苗床を作り一尺四五寸の距離に畦を作り凡そ一畝歩毎に三升の割合を以て種子を蒔付くべし、發芽の際には濕氣を要するものなるが故に降雨の至らんとする時を見計らひて播種するを良とす、發芽の後は時時除草を行ひ圃地乾燥に過ぐるの恐れあるときは畝間に灌漑すべし、九月頃に至り濕潤の時を俟て豫じめ濃屎を施し、能く耕耙し置きたる畑に移植すべし、木灰、人屎の混和したるものを根邊に施

し、畦は深く切りて其底に苗株を植ゑ付け其生長するに從ひて尿を數回施用す可し畦の距離は一尺乃至七八寸に作るべし、苗は其大小によりて四五本乃至七八本を以て一株となすべし、其白莖の長きを欲せば凡そ一週間目毎に二三寸の覆土をなし十回目位に達すれば其莖の長さ一尺五寸位に達すべし又分葱は普通は種子を採收ず、專ら根を掘りとりて植付くるものにして、五六月の頃其葉の枯れ球狀の莖のみ殘れる部分を掘りとりて日光に曝し、又は之を焚火の上に吊して乾燥し九十月の頃冬葱を植ると等しく圃地を整へ少しく距離を繁く植付くべし、十二月の頃之を掘起し一株を分ちて二三寸になし濃尿若くは木灰、米糠の類を施し春期に至りて之を採收す。

又葱の撰種をなすには苗を本地に移すに當て其形狀の正しきものを撰び之を二尺の畦に凡そ二寸位づゝを隔てゝ栽植すべし然るときは翌春五月下旬より六月上旬に至りて種子を收め得べし。

葱は其葉を黴菌に害せらるゝのみならず、又蚜蟲の害に罹るものなり

葱を食するは肉類の添物にして殊に宜し其他の用法は球葱に異ならず。

▲萵　苣

萵苣は其質柔軟にして美味なるを以て浸し物として多く賞用せらる之を大別すれば「タマ萵苣」「立萵苣」の二となる球萵苣は甘藍の如く葉球を生ずるもの又立萵苣は結球せざるものなり。

栽培法は肥沃なる壤土を好むものにして之を栽培する期節は其採收の時期によりて異なるなり、通例春夏秋の三期とす、早春に栽培するものは温床内に種子を下し、後之を本地に移植するなり稍時後れて採收し若くは夏秋の候に採收するものに在ては露地に苗床を作りて移植するか、或は直ちに圃地に播種するなり、葉球を結ぶものは苗を仕立てゝ移植するを宜しとす、而して之を本地に移すには一尺の距離に溝を作り之に八寸より一尺の離りに苗を植付け時々灌水をなして適宜の水分を與ふべし、花梗を生じ易き種類に在ては早春若

くは秋期に種子を下すべし萵苣の促成法を行ふには先づ之に適する種類を擇ばざるべからず、次に苗床を作るべし苗床地には馬屎の腐熟したるもの及び新鮮なるもの丶分量を混和し大抵一尺二三寸の厚さに盛上げ其上に壌土を五六寸の厚さに覆ふべし、播種は八月下旬より九月上旬に於てするときは十二月に至りて第一回の採收をなすことを得べし、第二回の採收をなさんとするには苗床の馬屎半量を取出し更に新鮮なるものを以て之を補ひ覆土は前と同じくし適宜の温度に達したるを見て苗を植付くるをよしとす。



萵苣を採種するには春に播下したるもの、或は初秋に蒔きたるものを以て翌春に至りて採收するも宜し、其植付の距離は一尺五寸四方にして花梗の抽出を見るときは其下部にある葉をかき去るべし。

さて食用法は球ちさならば葉球を、立ちしやならば其葉を取り生にて食し、又は汁の實、浸しもの等となす立ちしやの内「かきちしや」の如きは下より漸次葉をとりて用うること恰もふだん菜のごとくなるが故に殊に便利なり。

▲胡瓜

胡瓜は本邦に於ては頗る需要多き植物にして全國殆んど其栽培を見ざる所なし漬物若くは酢のものとなし食するを普通とす。

西洋にては多く之を酢漬となし又は諸種の香料を和し生食す。

種類は普通種と節成との二種あり後者は各葉腋に雌雄兩花をつけ各腋瓤果を附着す、其果大ならずと雖も、結果多きを以て廣く栽培せらる。

普通種と稱するものは二三葉を置きて瓤を結ぶものといふ。

胡瓜を栽培するに最も適せるところは温暖にして天然の排水宜しき砂質壤土とす而して之に苗によりて蕃殖すると直ちに本地に下種するの法とあり。

苗床を作るには三月上旬新鮮なる馬屎、木葉を五寸乃至一尺の厚さに盛り以て釀熱を起さしめ此上に三四寸の厚さに沃土を覆ひ種子を下すなり種子發生して密に過ぐるものは間引をなし、一寸乃至二寸の距離を保たしむべし霜害を防ぐため、床地は薦類を以て覆ふべし。



盆栽奇品根本より六寸五分

苗の三四葉を出すに至れば之を本地に栽植することを得べし、大抵二尺五寸より三尺を隔てゝ畦を作り畦上一尺乃至一尺五寸の距離に之を植付くるなり移植終れば手芝或は竹の類を立てゝ之に蔓を纏はしむべし兩三日を經れば普通種にありては其蔓梢を三四葉を存して摘取し枝蔓を生せしむ若し節成なれば其儘にして蔓を生育せしむべし。

之を本地に直ちに植ゆるには三尺乃至四尺の距離に畦を作り畦上一尺より一尺五寸の隔りに二三粒の種子を下す甲折の後其發生良好なるものを殘し他は拔去るべし。

肥料は窒素に富むものを多く用ゆべからず、若し生長

悪しき場合には稀薄せる水肥を兩三回に施すべし、又夏期より秋期に引續き之を採收せんとするには其播種一二週間を隔てゝ行ひ、七月上旬より下旬に至れば大抵十月下旬頃迄は採收することを得可し、然れども霜害に罹り易きものなるが故に播種遲きに過ぐるときは効果を見ること能はざるべし。

胡瓜の促成法を行ふには苗床にて苗を作り其發生したるものを他に一定の温度を保持するに適する床を作り、之に播種するなり、其距離は一尺前後を宜しとす苗稍生成せば新芽を摘斷して枝蔓二個を殘し之を左右に成長せしむ其兩側には豫じめ藁類を置き其上に蔓延せしむべし。

胡瓜の種子を收むるには根本に成長したるものを取り其充分に成熟して殆んど透明となりたるものを採收し、其肉を去り水中に洗滌して後乾燥して貯藏す、種子は大抵七八年間は發生力を有するものとす。

害蟲及び病害　胡瓜は多く蚜蟲の害を受く之を防ぐには煙草の葉を水煎にし其液汁を注加するときは効力あるものなり。



盆栽奇品根本より一尺二寸

外人の日本婦人研究

目下滯在中のポーランド人ヒルスドスキー女史は日本婦人の研究を目的として朝野の才媛貴女を訪問して次の如く質問を試みつゝあり

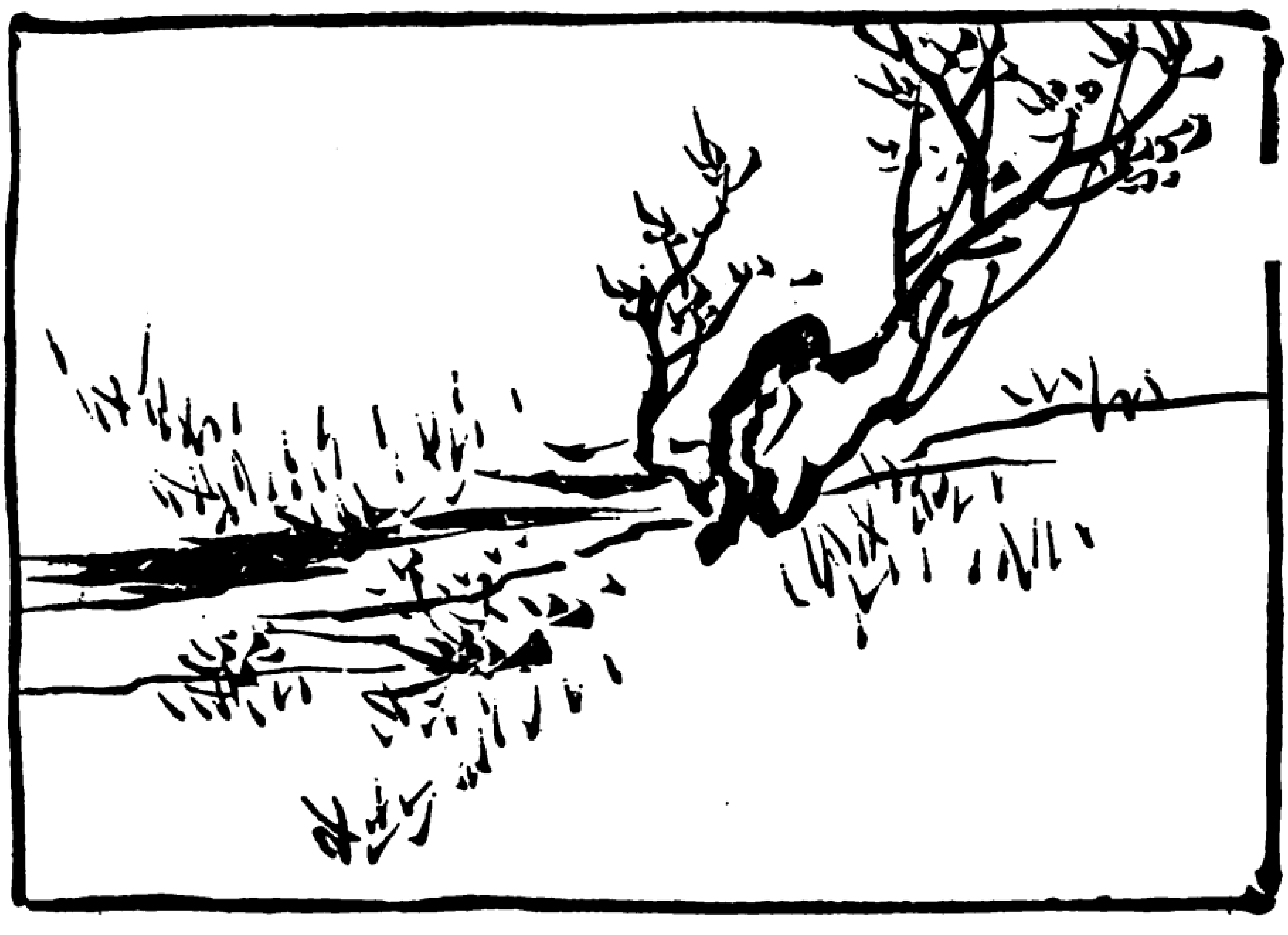
▲日本婦人は政府に向つて參政權を要求するに至りし眞意
▲世界各國の婦人に比して日本婦人の優美なる理由
▲日本婦人の結婚思想
▲日本婦人の職業問題に於る意見
▲一般婦人の穢多又は非人に對する感情及び所爲
▲非人又は穢多社會の婦人の現狀
▲現今日本婦人の教育程度に關しての意見
▲交戰中の日本婦人活動の實況
▲婦人會一般に流行する俗謠等にて調査の上は各婦人より聞取りたるものを綜合して一個の著術となし世界に發表する筈なり。

英國人の食卓

黄花

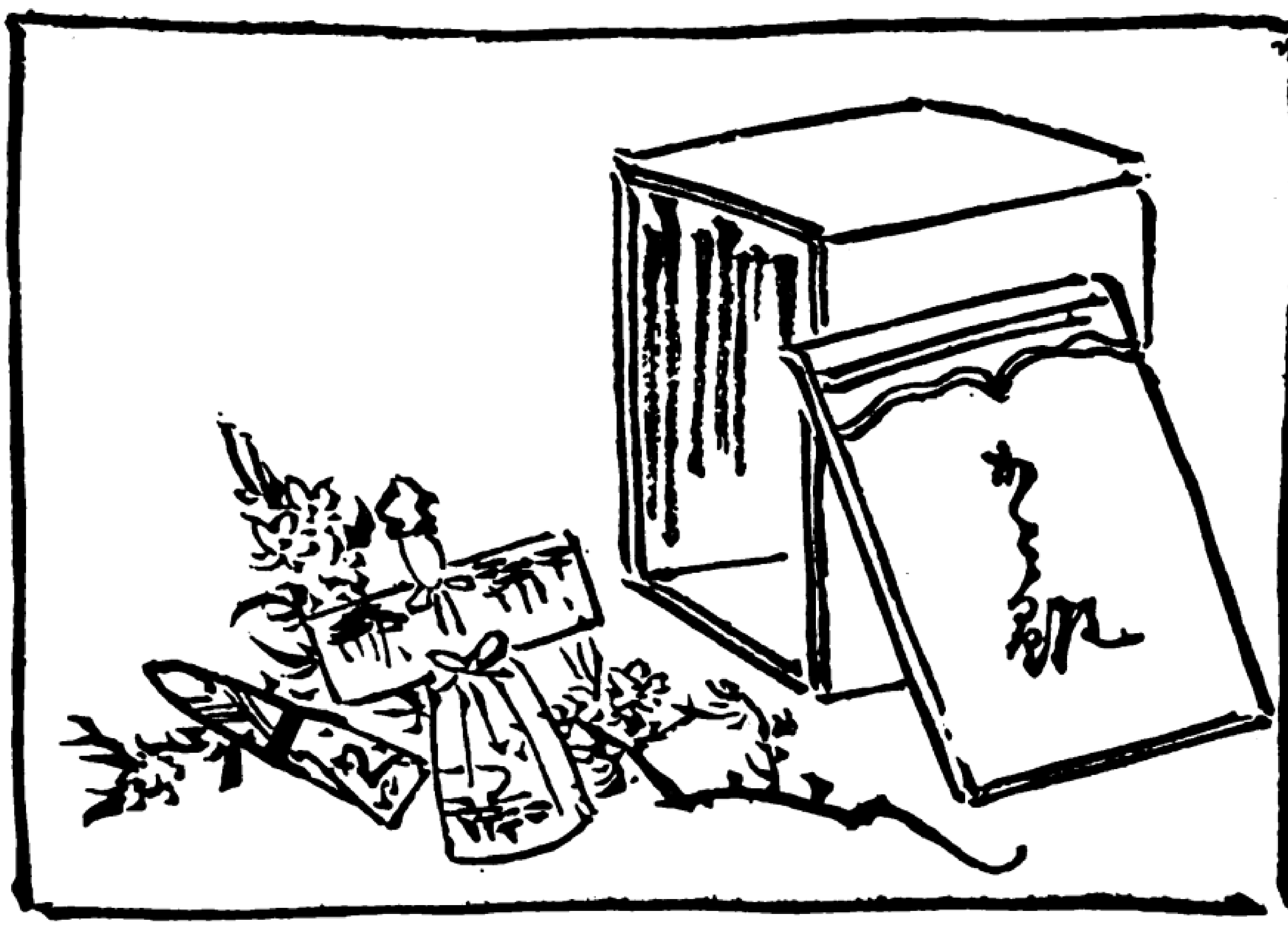
時間を利用する事に上手ならず、又家事を處理する事にもあまり巧みならざる日本は割合に朝は早くより起きる國なり、されど其反對に西洋諸國の朝の起き方は通例餘まり早からざるがごとし故に朝飯即ちブレックフハストは大抵午前九時なりそれより正午を過ぎ一時と二時の間にランチヨンと唱ふる晝食をなし七時と八時の間に正食即ちディンナーを取るが通例なり、此外にサッパー(夜食)と云ふを十時頃に用ゆる事もあり、又近來は佛國より始まり來りたる風なりとて五時の茶と云へる事大に流行し中等社會一般に之を用ゆるに至れり、是は晝飯と夕飯との間の五時に茶を飲むことにて腹加減には恰好の處なり、但し此の茶を用ゆる時は少々心して夕飯を延ばすは臺所を司る主婦の手加減にあり、家事に忙がしき婦人同士にありては此の五時の茶の折を目指して互に訪問し合ひ共に茶を飲み乍ら様々の世間話をなして互に世帯上の智識の交換を行ふ所の工合など尤も妙なり、扨て其の食事の献立は如何と見るにまづ、朝食にてはハムエグス、これは鹽漬の豚を煎りつけたるものに半熟の玉子を添へたるもの、麵麭にバタ、茶若くは珈琲等なり、或は豚の代りに乾魚を用ゆることもあり又た朝の腹の工合によりては茶と燒麵麭、半熟玉子位にて肉類を除く事もあり次に晝食は大抵昨日の夕飯に殘りたるロースト、ビーフ(燒牛肉)の冷たきものに馬鈴薯のウデたる位を添るを常としさもなければ何か魚のフライでも用ゆる可なり、其他は例の麵麭にバタ位、茶や珈琲は此の時には出さず若し必要あれば水を代用して濟す、又時としては橙皮を砂糖煮にしたる物、又はヂャム苺又はゼリー(ジャムよりも又一層精製して滑らかにしたる物)等を添へ置く事もあり、是等は皆なバタと同じく各自隨意に麵麭に塗りて食す、五時の茶は茶請として麵麭の薄く切りたるにバタを塗けたるをあしらふ位にて左したる事もなし、或は之にビスケットを加へジャム又はゼ

リー杯を添る事もあり、こは何れも臺所の都合によるものと知るべし、さて夕飯は一日の中最も馳走ある時にて、羹汁、ビーフテキ、羊の切身、燒鳥杯の類を二三品と馬鈴薯、胡蘿蔔、蕪菁、葱、其他其の時々の野菜を二三品宛添て之にあしらふ麺麭バタはいふ迄もなし、是等を食し了りたる所にて何か一二品甘き物を出だす例へば玉子のパイ即ち蒸玉子を碎きたるものに牛乳砂糖を交せて煮たる者、林檎のパイ即ち林檎の肉を小さく切りたるを砂糖に混じ其上に小麥の粉の衣をかけたるを蒸燒にしたる物ジンヂャケーク等いろ／＼あり併し此の夕飯中にありて常に第一位を占むるは燒牛肉即ちロースト、



ビーフとウデ藷なり、燒牛肉は大塊の牛肉を遠火にて炙りたるものにて必ずしも其時に食べ盡すにはあらず、若し殘りたらば取り置きて翌日の晝飯に用ゆることなり、これを日本に譬へなば冷飯の儲をなし置と同樣にて不意に食事を出すべき客人抔ありて料理の用意も十分手廻りかぬる時は懇意の間柄には是の冷めたる牛肉を出しても一時の間に合ふことなり、まづ日本でいへばお茶漬なり、又馬鈴薯の茹方は英國にて自慢の鹽梅のあるものにて晝も晩も善く膳の上に現はれ出るなり、兎に角純粹なる英國人は是の燒牛肉とウデ薯とを夥く食する事恰も田舍で豆腐を多食するがごとし英人の大食なる事は歐洲中の評判にて佛國抔に往きても英

人なりと云へば何は扨置き一番に燒牛肉と茄薯とを山の如くに持來るを常とすとは英人の等しく語る所なり、是は男子のみならず婦人にても隨分大食にて彼の世界の美人の標準に支那美人の足、伊太利美人の髮、佛國美人の愛嬌、英國美人の唇、と並べ稱さる程唇薄く口元愛らしく生れつき乍ら其愛らしき口元にて食べる事他國人の皆驚を喫するほどなり。さて又夜食は通例茶と麪麭パタのみにて濟ます、或は全く之を用ひざる者も少からず、是は近來衞生說の流布によりて寢しなに成るべく腹中に物の溜らざるがよきとの注意より出でしなり、尤も以上は唯だ中等社會の食事を述べたるものなれば貧富の程度に應じては勿論其差があるべ



し又た日曜日には大概寺院に參詣する都合もあれば此の日丈は夕飯の馳走を晝に繰上げ午後は只茶を飲みたる計りにて寺院に詣で夜分歸宅したる所にて尋常の晝飯の料理を食するが多し。英佛は勿論其他の各國にて常用する茶は謂はゆる紅茶にて之に牛乳と砂糖とを混せて飲む故に茶とさへ云へば必ず牛乳砂糖を調和せねばならぬものと心得偶々日本人の如きありて茶を入れること抔あれば下女は毎つも牛乳は如何、砂糖は如何、と尋ぬること常例にて牛乳も砂糖も不要なりと云へば何か物足らぬらしき面色なり、茶は英國人の用ふるもの尤も上等品にして他國に勝れり、又佛國人は名代の珈琲飲みほどありて珈琲の佳良なる事は世界中佛國

を以て第一とす其代り茶はあまり上等を用ひず、又茶も珈琲も極々粗末にして、其代りビールを用ふるは獨逸なり、獨逸は麥酒の名所にて血氣の少壯男子は勿論老人も子供も又た婦女子も悉く皆な麥酒を嗜み水の代りにもビール、茶の代りにもビールと一切の飲料はビールの一手に持切られたる有様なり、故に家庭抔にて茶を用ゐると云ふことは極めて少きと見へ偶々に用ゆるを見れば馬尿のごとき惡茶なり。

野菜の特効

▲胡瓜は血液を清め、身體の組織を清涼にし、また渇を止め胸のいきりを除き小便を利す。▲芹はリウマチス及神經の藥なり。▲韮、蒜、葱類はいづれも氣根の効あり、唾液胃液を增し、筋骨を丈夫ならしむ、醫學博士シユーソフと云へる人の說にも葱類は神經の强壯劑となるのみならず血液の循環を善くすと云へり、全體肉類は血液を鬱滞せしむるの傾あるものなれば牛肉に必らず葱を副食するが如き大に衛生法に叶へるなり。韮及蒜は寢汗に効能あり小兒等が鼻より出血する時韮を採みて挿入せば血止の用をなし蒜は邪氣を攘ふの効あり、不眠を憂ふる時蒜の臭氣を嗅げば大抵安眠を得可し。▲球葱は利尿劑なり葱雜炊は消化器の衰弱に効あり。▲菖蒲湯及干菜湯は善く發汗せしめ血液の鬱滞を治す所謂暑氣拂なり。▲大根卸は消化を助くまた酒毒及魚類の中毒を和らぐるの効あり大根卸を水飴に和して用ゐる時は咳嗽及喘息の藥となる。▲胡蘿蔔は逆上を下け腸胃を利す。▲蕪菁の卸汁は皸の藥なり。▲西洋赤茄子は肝臟の藥なり。▲甘藷及び馬鈴薯は大便の秘結を和らぐ。▲薯蕷及慈姑が腎藥なりとは我邦にて古へより稱する處なり。▲萵苣は血液に効あり。▲胡麻は氣根の藥といひ老後に胡麻を食すれば中風起らずとの諺あり、口中のやける時生胡麻一匁を煎じてこれを含み度々うがひする時は口熱を去るを得可し。



四月料理

○小葱の芥子あへ

蛤蜊を湯がきわけぎもざつと茹でゝ輕くしぼり六七分位に切り芥子味噌とあへるなり、味噌の拵方は初め味噌をよく摺り芥子を適宜に摺り交せ砂糖を加へそして蛤蜊とわけぎを入れてませるなり、偖芥子の拵へ方は粉芥子をふかき茶碗に入れ水にてねりませよくならし其上に紙を二重にしておしかぶせ其中へ水を少し入れ炭火の少き分を幾度も入るればカラシと水は沸立ちて炭火に吸込まるゝなり湯のなくなりし時を度として茶碗をふせておく暫時して紙を取りのけて芥子を用ふれば鼻をつく如くに氣の立つものなり。

○餅の昆布卷

燒きたる小餅を靑昆布にて卷き干ずいきを細かに刻みてくゝり半日ほど湯煮し後ち砂糖を加へ醤油をさして煮るべし但し炭酸曹達を少し入れて煮れば二三時間にて骨まで柔かになるものなりその他荒布にて卷くも山出昆布にて卷くも煮方は同じ又燒沙魚、鯡の昆布卷も同じ煮方なり但し始めは強き火にて煮立たせ後は弱火にて長く煮るなり。

○木の芽田樂

ぬるま湯を大なる器に入れ豆腐を切るにも串にさすにも其中にてするなりかくすれば柔かなる豆腐もくだけ落つることなし右の如くしたるを引あげてすぐ火にかくるなり扨砂糖少し加へたる味噌に木の芽を入れ又甘酒の堅ねりを二分どほり味噌に摺りませ上より塗るなり但し砂糖を多く入れば甘すぎてよろしからず。

○筍の葛煮

茹でたる筍を輪切にし煮汁をたつぷりとこしらへよく煮扨葛粉を水に溶かし鍋を下す際に入れよく攪きませて斑のなきやうにし後椀に盛り生薑を磨りて載すべし葛粉の溶き方は水一合に葛三食匙位の割合としあまり薄からぬ樣にすべし。

○獨活と筍の白和

春の膳部は獨活の白和など尤も適當のものなり、まづ孟宗筍の皮を剝きよく茹でゝ薄く切り獨活を亂切にし、茹でゝ醬油と砂糖にて薄く味をつけ白胡麻を煎り擂鉢にて能く擂り豆腐を拭巾にてしぼり胡麻と一所に擂り交せ砂糖と鹽にて味をつけて和へるなり又筍の代りに蓮を用ふるもよし。

○牡蠣の天麩羅

牡蠣を生のまゝ油揚にせんには油跳ねて容易に出來ざれどそれを手輕に揚ぐるには、まづ麥粉を濃く水に落し別に玉子を粉半斤に一個の割合にて黃味と白味をわけ黃味は衣の中に入れて好く搖ませ又白味は別の器にて薄茶を立てるやうに茶筌或は滑きサヽラの如きものにて泡立せ之に鹽と胡椒とを少しづゝ投じ扨揚げんとする牡蠣は始めよりよく水を切り（笊の上へ並べて置ば水きれるなり）ころもへ包みて油に投ずるなり。

○鱸の蓼酢味噌

鱸のこけを去り腸を去り水にて洗ひ三枚におろし皮付のまゝ刺身に作りまた板の上にならべ置き布巾をかけその上より沸湯をかけて後布巾を取去り良き茄子の皮をむき竪二つ切りにして茹でゝ少ししぼり竪二分位の厚さに切りめうがの子を薄く刻み水に浸して水氣を去り各々中皿に盛りわけ蓼酢味噌をも盛りて出す、たで酢味噌のつくり方は蓼の葉をよく洗ひて擂鉢にてすり味噌をも共によく擂り酢と砂糖を入れて又すり裏濾しにするなり。

○厚燒玉子

まづ玉子五個を打割りよく解きたる上へ煮だしをお玉じやくしに半杯砂糖少々を入れよく攪きまわし扨燒鍋に油をひき充分に燒けたる時玉子を入れ蓋をして火を載せて上下よりやくべし皿に盛り大根おろしに醬油をかけ之を添へて出す。

○湯葉卷きほうれん草

ほうれん草を茹でゝ醬油煮汁を含ませ置き中揚湯葉を砂糖醬油少しづゝ入れて煮立たせ其湯葉を二つに切りて鍋へ入れてザット煮るべし扨引上げて此湯葉を板の上にのして置きほうれん草をザット絞りて其上に乘

せて巻くなり厚さ五六分位に小口切にして鉢肴の附合せによろし。

○飛龍頭

豆腐の水を絞り能くすり葛の粉をつなぎに摺りませ扱加味は針皮牛蒡、木耳刻み、銀杏、栗又は慈姑の小賽切麻の實等はいづれも油にていり右の豆腐にて包み能き形に仕上げ油にて揚げるなり但し饂飩の粉を衣にするもよし扱いり酒に山葵又は白醋にはり山葵そへるか或は青味噌田樂にして罌粟ふりかけるもよし尤も青味噌は味噌をよくすりて青粉を加へたるものにて白醋といふは酢にいり罌粟を豆腐すこし入れてすり酢を入れるなり又豆腐の代りに葛を用ふるもよし且つ砂糖少し入るれば甘くなりてよろし。

○鳴戸巻

薩摩芋を輪に切りよく皮を剝き水へ入れ置き別に鍋にて砂糖七十目鹽五匁、味醂五勺、生酒五勺、(これは薩摩芋三百目の分量なり）を入れ、右の剝きたる生芋をそれにてよく煑、これを裏漉にかけ、饂飩粉二ヒほど入れてよくまぜ合せ又別にすだれ麩を味醂にてザットト煑この麩をしきて彼の芋を太さ八分位の丸さに捲、蒸籠に入れて凡二十五分ほど蒸し小口より切て口取の前盛にするなり。

手軽西洋菓子

△まづ菓子を拵へる前に燒鍋に脂肪をひき置くべし。

△菓子を拵らふ前にオブンを火にかけ置くべし。

△菓子に用ゆる鷄卵の蛋白はかき立てると直ぐに使ふべし。

△菓子の下拵らへをしたる時は直ぐにオブンに入れて燒く可し、然らざればベーキンパタは其力を失ふべし

△菓子が未だよく燒けぬ内に燒けたか燒けぬかを験めさんとして中途に菓子をオブンから取り出す事は禁物なり、出來損の患あり。

△菓子が燒けたらんと思ふ頃オブンの扉を開けてよく其の音を聞きもし猶ブツ／＼といふ音の聞ゆる時は

菓子の内が未だ生燒なるを知るべし。

△菓子の燒けたるか、まだかを驗す方法は藁しべ（きれいなる箒の藁にてもよし）をとり、よくふきて菓子にさし、もし未だ藁に菓子が少しにても粘着する時は其菓子は未だ十分熱炙せざるものと知るべし。

△菓子燒けて未だ熱き内には切る可からず。

◎チンチヤー、ケーク

これは薑の菓子なり、まづ大なる鉢へ一合の上等赤砂糖と、大匙一杯のバタか製法したる脂肪かに鷄卵の黄身二個を入れてよく一緒にかきまぜ、之に一合の酸き牛乳と一合の赤砂糖と四合の麥粉とを入れて再び一緒によくかきまぜ、今度は大匙一杯の粉にした薑と小匙一杯の肉桂とを入れて又かきまはし、終りに小匙一杯のソーダを溶解した熱湯を大匙に一杯入れて混ぜオブンに入れて三十分間固く狐色になるまで燒く可し。

◎マーブル、ケーク

二合の白砂糖と大匙二杯のバタとをよくかきまぜ、さて別の器物にて鷄卵の白身四個を固まるまでよくかきたて、八勺の水を前の砂糖とバタに入れ、次に三合の麥粉と小匙一杯のベキンパオダとを篩て入れ、皆よく一緒にまぜ合はせ、小匙一杯のレモンかワニスかを入れ、終りにかきたてたる白身を入る可し別の鉢に一合半の赤砂糖と大匙一杯のバタとを入れてよくかきまぜ、其内に黄身を四個入れて再びよくかきたて、又八勺の水と、麥粉を二合と、ベキンパオダを小匙に一杯一緒に篩ひ入れてよく混ぜ合はせ、今度は粉にしたるチヨコレートを大匙に四杯入る可し、脂肪をひきたる菓子燒鍋に第一の白き方を少し入れ次に第二の方を少し入れ順々に兩方とも入れうつして後中加減の火にてオブンの中にて一時間燒く可し。

◎紅白染分菓子

篩ひたる白砂糖一合半、大匙二杯のバターとをよくゆるくなるまで一緒にかきまぜ、鷄卵の黄身を二個入れて再びよくかきまぜ、又別の器物に鷄卵の白身を二個固まるまでかきたて、前の砂糖とバタと牛乳八勺とを入れ、三合の麥粉小匙二杯のベキンパオダを一緒に

篩ひて入れ、後ち一緒にかきませ、次にかきたてたる白身を入れて一寸かきませ、之を半分に分けて別の鉢に入れ一方の鉢に紅を少し入れ、それより脂肪をひきたる鍋に紅を入れぬ方を先に少し入れ、次に紅を入れたる方を入れ、順々に入れてしまへば中加減の火のオブンに入れて四十分或は猶少し長く焼く可し。

◎カステーラ

大きな鉢の中に二合の麦粉と二合の砂糖と小匙一杯のベキンパオダとを一緒に篩ひ入れ、鶏卵の白身四個をよく固まるまでかきたて又黄味を四個入れて再びかきたて之を鉢に入れて麦粉や砂糖などを混せ合はせ香料として小匙に一杯のレモンかワニラかを入れ、焼鍋に製したる脂肪をぬり又鍋に擴がるだけの紙をしきて脂肪をひき其中に前の混せてある物を入れて火の強さオブンにて三十分間位焼く可し。

◎ホワイト、ケーク

鉢に篩ふたる砂糖を二合と大匙二杯のバタとを入れて一緒によくかきたて、別の器物に鶏卵の白身を五個入れて硬くなるまでかきたて、牛乳を一合三勺砂糖とバタとを入れ又三合の麦粉と小匙二杯のベキーンパオダとを一緒に篩ひ入れて皆のこらず一緒に混せ合せ、終りにかきたてたる白身を入れて一寸かきませ焼鍋に入れて焼くべし、さてその鍋が一個の大きな焼鍋ならば四十五分間或は猶少し長く焼き又もし三枚の淺き焼鍋ならば二十分間焼くべし。

◎アイシング

二合の砂糖と五勺の水とを小さき鍋に入れてよく煮よい加減の冷たき水の中に落せば固くなる程になし、鶏卵の白身を二個固まるまでよくかきたて置きて、前の煮たち居る砂糖を掻まはしながら入れ、又小匙に半分のワニラを入れ、冷める頃までかきまはし、菓子の上にかけて出すなり。

◎苺菓子

まづ二斤の苺の茎をとりて鉢に入れ、木の匙でつぶし、白砂糖を一合入れてませ、かすていらを横から庖丁を入れて薄く二枚に切り、下の一枚につぶし置きた

る苺を幾許かのせ、其上に上の一枚をのせて、残り居る苺をかく可し。

◎クッキース

まつ一合半の砂糖と、大匙二杯のバタと鶏卵の黄身一個とを鉢に入れてよくかきませ、其中に大匙四杯の牛乳、二合の麥粉、小匙一杯のベーキン、パオタとを一緒に篩ひて入れ、又香料としてレモンかワニラかを小匙に一杯入れ、且つ其中に臺の上にてのばす事の出來る位の固さになるまで麥粉を入れ、いろ／＼の形をきりぬき、火の強きオプンに入れて狐色になるまで焼く可し。

◎又一法

鉢の中へ白砂糖を三合とバタか又は溶かしたる脂肪を一合入れてよく混せ合はせ、一合の熱湯に小匙並一杯のソーダを入れて之を前の砂糖とバタとに混せ、又香付のために肉荳蔻と小匙に一杯のレモンかワニラかを入れ、又次に前のごとく上にのばせる位になるまで麥粉を入れ、形をきりぬき火の強きオプンに入れて五分間狐色になるまで焼く可し。

◎麵包菓子

麥粉二合へ鹽を小匙に半分を鉢に入れ之れに牛乳五勺と同量の水とを入れて滑らかになるまでよくかきませ、鶏卵二個の黄身を又入れて再びよく混せ、白身を別の物に固まるまでかきたてゝ右の混せてある物に加へ、終りにベキン、パオダを小匙に一杯入れ、揚鍋に少量の脂肪を入れて其熱したるとき前のこね物を大匙に一杯宛三四ヶ所に落し、一方狐色となりたるときかへして又焼くべし熱き中糖蜜ジャム又は砂糖をつけて食すべし。

◎蕎麥菓子

蕎麥粉二合へ鹽小匙に半分を鉢に入れ之れに牛乳二合（又は牛乳一合と水一合とを混せたるものにてもよし）を注ぎて混合せ、鶏卵二個の白身を別のものにて硬くなるまでよくかきたてゝ、前の物に加へ、終りにベキン、パオダを小匙に一杯入れ、揚鍋に少量の脂肪を入れ其熱したる時夫を大匙に一杯宛三ヶ所に置きて

一方狐色となればかへして他の方を揚ぐ可し、砂糖ジャム又は糖蜜をつけて食すべし。

果物料理

果物の時節にはまだ少し早いですが、おい〳〵覆盆子や枇杷の出る頃となりましたからこゝに一寸果物の調理法二つ三つ申しあげませう、一體日本では果物は生で食ふものとしてあッたので、果實の調らへ方に就ては至つて未經驗の方が多いですが、これは未熟の物を食ふよりも煮て食ふ方が遙かに健康に益があります又殊に熟し過ぎたものは調理を加へて用ひた方がよいのです。

△林檎

まづ適當なる林檎六個ほど皮をむき、心をとり去り、鍋に入れて一合ほどの水を注ぎ、軟らかになるまで煮ながらかきまはし、林檎のつぶれた時適宜に砂糖を加へ尚三分間煮れば、酸き林檎からよいソースが出來ますこれは熱い中でも又冷めてからでも用ひられます。

△林檎の蒸燒

まづ大なる林檎をよくふきて心を去り皮をむかず其儘にして鉢に入れ心を去ッたあとの穴へ砂糖をつめ、軟らかになるまでオブンの中で蒸燒にする、蒸燒には甘味のある林檎がよし。

△梨子の蒸燒

前の林檎と同じい仕方で蒸燒にします、只林檎よりは長くオブンに入れ置かねばなりません。

△桃の薄切

よく熟した西洋桃の皮を剝き種子を去り、薄く切て砂糖をふりかけて出す。尤も桃は盛夏のものですから切ッて時が立つたものは腐敗し易いものですから直ぐに喰ねばなりません。

△夏蜜柑の砂糖掛

二個ほどの夏蜜柑の軟肉ばかり皿に盛りて肉刺でつぶし、砂糖を大匙に二杯くらいかけて一時間位ほど其儘に置いて後食します。

女代診（其二）

糸左近

昨年から前號までに懸けて、素人藥物學を説きましたが、これで盡きたかと云ふと、決してさうでは無い、まだ〳〵何年も續けて書かればなりませぬ、が併し能々考へて見ますに、藥物學は一册の書物として、辭書的に編れば、頗る重寶ならんも、毎月一回の雜誌に載せるとしては、餘り面白からぬ傾きが、有りはせぬかと恐るゝのであります、のみならず、讀者の方よりも、直接に婦人に關するものをと望まるゝもある、されば藥物學の方に、他日其後を書足して一册の本に纒めることにし、その代りこれより「女代診」を御紹介致します、固より女なれば、貴女方も御心置なく何んな秘密事でも御打明下さるに御都合が宜しいでせうし、又、當人は仲々深切な質ですから、御尋にならぬ事までも御注意申しませう、けれど代診の身分なれば、深く込入つた道理や、劑藥の調合を要する事などは勿論先生に御尋ね下さるとして、兎に角毎月五日には必ず貴宅へ參上致させますから、婦人科、產科、乃至は小兒科に關する事より御聽き下さいまし、今日は先つ左の題目に依て一寸御披露致します。

△月經の話

これを述ぶる前に、又、一寸前置を致します、實は本誌の主筆――君より「子を設ける法」を第一に書いてくれとの需めであつて、私も之を承諾しておきましたが、いざ筆を執るといふ塲合になると、何うも月華の事より話されば都合が悪い、されば其目的として、この順序に從ふたのである、子無き方も續けて讀んで居られれば、樂自ら其中に在りと思召せ。

身も心も普通に發達したる女子が、一定の年齢に至れば、身體に色々の變化を來す其中で、最も著るしきものは、月華の開く事である、この名稱は色々有つて月經、月水、月事、月華、月信、經血、經水、經行、天癸、經癸、つきやく、めぐり、つきもの、べつ、さはり、けがれ其他、客、日の丸など其地方〳〵に依て又様々に違ふ。偖て月經は如何なる道理に依て有るものかといふ説明は、餘り專門的に流るゝから姑く略し兎に角これは女に無くてならぬもので、規則的にさへ有れば、「妾は健康で御座います」といふ徴であらう、大いに喜び祝はねばならぬが至當である、然るに洋の東

西を問はず、世の開けぬ間は、之を以て不淨なる事とし、我國でも昔は、否、今も尚神前に出てはならぬとか、或は家人と飲食器一切は言ふに及ばず、室内までも別にせよなど丶、窮屈な目に逢はせてゐる者もある又、西洋でも會堂に參拜するを禁じたり、或は世人と交際するを避けしめたりした事もある、實に愚の至りと謂はねばならぬ此の惡弊が今も尚殘つてゐて、婦女其人も亦他の人に無い事の有るやうに耻らひ、縱ひ多少の故障が有つても、之を隱す傾きのある所から、月經に關する智識は大いに乏しく、それが爲め、時には取返のつかぬ疾に罹ることがある、即ち言ふ可き時に言はざれば言はぬに勝る耻有りで、慨かはしき次第と申さねばなりますまい然らばこの大切なる月華は何歳に始めて開くかと云ふに、我が國では平均年齢十四年八箇月（東京大學の調査）との報告である、けれど氣候健不健、生活の狀態、精神の如何から人種等に依て、其の開始の遲い速いに大いなる差がある、殊に氣候は頗ぶる大なる關係があつて、氣候の暖かい地方は概して速く、氣候の寒い處は大抵遲い、例へば、亞弗利加の黑人は十歳、印度人は十二歳を以て始まるけれど、スエーデンノルウエー人は十六歳、ラプランド國民は十八歳を以て始まるやうな次第



である、されば極めて熱帶の中心點とも云ふ可き處に至ると、往々八九歳で兒を擧げ、二十歳前後で孫を見るなどの珍らしい話もあるし、北極に近いエスキモー人に至つては二十五六歳で漸く其徴のあるのも有る、嗚呼我國の版圖も今や膨脹して、樺太ば寒帶に迫り、臺灣は熱帶に近づいてゐるから、今後は同じ日本人とても大なる差等を生ずるであらう。生活法も亦一方ならぬ影響を及ぼすもので、即ち金滿家のお孃樣を貧困者の娘に比ぶれば、何うしても一二年は早い、詳しく言へば、上等社會は十四五歳を以て始まるが普通とすれば、下等社會は十五六歳に始まるが平均である。又生來の健康なる人は、薄弱なる者に比ぶれば亦甚だ早い、畢竟するに發達の宜しき人は、其の開期が早くなるは爭はれぬ事實と謂はねばならぬ、然りと雖も周圍の事情が早く少女を促がして色慾を解せしむるやうな事有れば、身體左程に健康ならざるも、或は滋養の食物を取らざるも、大層早まることがある、彼の下等料理店に任する者や、或は半玉藝者、或は不規律な工場に務むる輩に至つては、身體の營養惡しきにも拘らず何と無く心身共にコマシャクれて、月經も亦十二三歳に始まる者がある、是等は所謂早熟であるから、從つて老衰も亦早まるは自然の結果、親たる者は大いに注意せねばならぬ。

次に月經の年限は温帶地方に在つては、大約三十年で、北方の寒地に至れば至る程減縮し、熱帶地方に在つても著るしく減縮し、亞刺比亞人の如きは二十年が關の山であるとのことである、然るに我國人は年齡四十歳から五十歳までの間に大抵止み、稀には六十歳、甚しきは七十歳までも續く人があるとは、實に目出度御國と喜ばねばならぬ、宜なる哉、神武以來僅か三千年に滿たぬ其間に、五千餘萬の同胞が蕃々として繁殖したとは、豈偶然ならんやである。次に月經の始まりが早ければ終りも亦早いかと言ふに、それは彼の早熟人や熱帶地方の者を除くの外は却つて早き人は比較的長く續くものである。偖又月經の始めて有る時は、身體に多少の障害を見るもので、例へば精神鬱閉を感

するとか、或は消化器に故障ある如く、恰かも胃病に罹つたやうになるものである、而して其の終に於ても亦色々の障害を起すことがあるけれども、人に依ては何等の異變無く始まり、何等の故障無く、唯二三回甚だ弱い月經が有つて、それきり全く止むも有る、若し障害あるとせば、月經時期不順になつたり、或は白帶下を發したり、又精神自らすぐれぬ樣になつたり、或は直腸より出血したり、或は下痢、腹痛或は發汗過多などが有者である。



月經時の日數は甚だ一定し難いもので、其の持續は通常二三日間を超ゆるが多い、即ち四日五日程で濟む稀には八日間にも渉るがあるし、二日或は一日位で止むのもある、又健全なる一人の婦人にしても、毎回一定せるは少く、即ち或は三日間或は五日間など〻、月に依て異なることの往々あるものである。

月經の量を定むることは甚だ困難なるもので、シムス氏といふ斯道熱心なる先生は、數多の健康なる婦人に賴んで、豫じめ其目方を秤つた布片を與へ、これに月經を泌み込ませて貰ひ再び之を量つたといふけれどこれとても眞の確實とは言はれますまい、病者ならば醫者の命令に從ふけれど、健康なる人而も例の耻かしがる物なれば、數多の人に貴女の月經を頂戴と言つた所で、仲々聽いてくれるものでは無い、兎に角我が日本人は大約百瓦半合程から二百五十瓦までの間ならんと

の、だらう說である。日數の短い人は日數の長い人より少なきは疑ふ可からざる事實である、亦氣候に依ても違ふ、彼の寒帶地なるエキスモー人の如きは、唯夏時に一時の月經を見るのみで、而も其量甚だ少いが、これに反して熱帶地方に於ては、甚だ多量であるとのことである。

月經時は何人も身體に多少の影響あるもので、これに就いての硏究は、諸家頗る其說を異にしてゐるが、余の狹い經驗に依れば、此際感動し易く、且つ常に血行消化などにも幾分の障害を起し、又腰部に牽きつれる如き痛さを多少覺ゆるやうである、又或る婦人に在つては、心身共に劇しき障害を來し、或は平素の心は全く違ひ、殆んど發狂的になるがあるし、或は腰部下腹部の疼痛甚だしきために、アイタ、、アイツ、、と叫びて七顚八倒苦しむものも有る、併し斯る劇しい障害の有るは、何か子宮の變常あるに相違無からうから斯道の專門の先生に診て貰はねばならぬ。

次に月經中の攝生に就いて詳しく申しませう、抑々月經は健全なる成人の女には、誰にでも有ることなれど、其通經時は右の如く一時的變化を起し、身體諸部の作用は幾らか沈衰するもので、極端に言へば病的に近づいてるのである、故に其間に愼んでゐるが宜い、愼しむとても神前やチャーチに行かれぬと言ふのでは無い、若しも其樣な狹い量見の神やゴッドがあるならば、宗教も絲瓜も有つたものでは無い、醫道の所謂愼しむは、第一に淸潔である、之を行ふには、縱ひ月經中でも、毎日五六回乃至七八回も微溫湯にて外部を洗ひ、綿或は布片にて經血を拭ひとるが宜い、然し膣中即ち內部へ微溫湯を注いではなりませぬ、膣中には棉花などを塡め月經帶を着く可き事は人の能く知る所である。月經帶は自家でも作れるし、市中の藥舖にも賣つてある。又斯く淸潔にす可きものなれど、入浴してはなりませぬ、入浴すると、異物が侵入したり、感冒に罹り易いものである、月經中の感冒からして、色々の子宮病を誘ひ易きものなる事を忘れてはなりませぬ、又、世には「月經中は何うせ不潔であるから仕方が無い」などゝ其止むを待つて然る後

清潔にする人がある、これは大いなる心得違て、これが爲に、外院部炎症といふ病を惹起すこともある。第二の愼しむ可きは安靜といふ事に候ふ、常ならば婦人とても騎馬、游泳、乃至は挽弓柔術などの運動も是非行つて頂きたいが、月經時は斯かる劇運動は嚴重に之を戒め、徜徉散歩花を眺むるとか、磯の貝でも拾ふ位に止めて置かれたい。第三には精神を愉快に有たねばなりませぬ、嫉妬、憤怒或は悲哀なる情を起すに至ては非常に有害で、これより直ちに歇私的里症に移ることがある、中には精神を樂します目的にて、芝居小說を見る人も有れど、大抵の芝居小說は悲哀とラブを以て充してあるから甚だ宜しく有りませぬ、現に彼の「不如歸」や「伯爵夫人」の芝居又は小說を見たり讀んだりして、月經中ならざる人さへ歇私的里に罹つたのを、余は幾人も目擊して居る、後者は悲哀の中にも又興奮する所なれど、前者は悲哀一方で、徒らに文筆を弄んだに止まり、何等の趣意が立つて居らぬ、然るに世に持囃され、英文にまで譯して洛陽の紙價を高からしめたとは、實に慨歎の至りである、過日も或雜誌の編輯者が來り、余に「至極悲哀の衞生小說を書いて下さい、世の人が好ますから云々」



と需むるゆゑ、余は大喝一聲して「衞生の道は人を薄弱にするものでは無いぞッ」と肝癪起したのである、井底の痴蛙、憂慮に過ぐるかも知れねど、斯る悲觀的の物を喜ぶやうでは、我國敎育の前途思ひ遣らる、話は悉皆岐路に這入つたれど、こは余が滿腔の持論が迸しつたのであるから、何卒御許を乞ふ。第四に食物は平常と敢て異なる程でも無いけれど、可成は淡泊としたる滋養品を取るが宜い。第五は夫有る方のみに申すのであるが、交接は斷々乎として禁せねばなりませぬ昔は若し犯せば痣の子を生むこと、或は夫は怪我をするとか戒めたさうですが、これは例の荒唐無稽說なれど、未開の世に在ては、生理の何たるを解せぬから自然即ち天が人を以て言はしめたのでも有らう、然らば生理上如何なる害ありやと言ふに、曰く卵巢又は子宮に炎症を發し、卵巢炎乃至は子宮內膜炎等の病に罹り、醫者の手を借らねばならぬのみならず、遂には不妊娠の原因を招くことさへ有る、元來月經時は大抵情慾の去るものなれば、此の戒めは女子よりも寧ろ男子に必要である、されば不幸にして意馬心猿に迫はるゝ夫を有つ方は、先づ此章を讀んで御聽せなさるが何より宜いでせう、又夫たる者はこれのみならず、此の時期中は殊に妻の心身を勞せしめぬやう相憐れまねばならぬ、若し奉公人を使はぬ身であらば、縱ひ、君ハ汲ニ井水ヲ、妾ハ炊ン飯ヲと言はれた所で是非も無き次第である。

終りに臨んで、今一言したきは、始めて月華の開く可き年頃の少女には、豫じめ此事を告げ知らせ、何時來潮せんも狼狽すること無く、前述の處置を自ら爲し且つ不養生を來さぬやう、親たり姉たる者の大いに注意す可き一大事である。

豫告

五月には月經の閉止、不順及過多の原因、療法。
六月には不妊の原因、療法。
七月には男女兒を隨意に設得るてふ話の可否。
八月には愈々出でゝ愈々有益なり。
九月十月には……オツと天機洩す可らず。

▼衛生顧問▲

(問)私の從妹廿二歳は、姑と夫と、一家三人にて、別に財產家と申す程ではなけれども、何不自由無く暮し居たるに、一昨年の五月、初めて女子出產致す間も無く、あはれ其子を失したれど、去らぬは乳泥の分泌、已むを得ず他の小兒を預かり育て居りました、然るに夫は不圖御金を使ひ出し、内方へは歸らず、姑は病に罹り、これ亦其年の十月、草葉の露と消え、家や田地は人手に渡り、夫は遠國へ出奔、妻は泣々實家に歸り今尚その子を育て居ますけれども、斯る憂事の重なりたる爲か、それより耳がジヤン〳〵鳴り、人の言葉も聲低くければ聞えず、其上一時間も坐つて居れば、足痺れ殆んど無感覺になると申す事、色々醫療も加ふれど、更に効がありませぬ、何卒勝手ながら是非共四月五月六月までの誌上に其療法の御教授を乞ふ。(香川縣の香川松子)

(答)色々と精神を刺戟したる爲め、遂に腦充血を惹起したるものならん、然れば藥用よりも寧ろ精神療法として、氣の合うた朋友と遊山見物でもするとか、或は宗教でも信じて、心の慰藉を求むるが肝要でありますゝ左無くば田畠へでも出て、農事をするとか、或は歌唄ひながら拭掃除洗濯など、坐つてせぬ仕事をして、身體を忙がしく使へば、却つて藥用よりも精神の欝を散ずるものであります、又乳汁を哺ましむる事は最早宜しくありませぬ、又便秘のせぬやう、時々「リチ子油」十五瓦を少量の葡萄酒に浮べて服用するが宜し、(但し連服すべからず)又、夜臨臥に入浴することも斯る病には大効あります。

(問)月經が毎月一週間乃至十日間位もありますが、斯樣に長くても差支ありませぬか、差支ありますならば治療法の御教示を乞ふ。(鹿兒島の白萩)

(答)長くなる爲に、何か身體に苦痛を感ずる事あらば勿論治療せねばならぬけれど、普通ならば、別に心配するにも及びますまい、何れ詳しき事は女代診の所で申上ませう。

(問)本年五十四歳子は十二人出産致したる女、十年以前より背中一面にボロ〳〵生じ、非常に痒きため醫藥を塗布致し居り候處、今度は腋下、乳房の下、陰部など紫色に相成り、其處にもボロ〳〵出で、相變らず痒し、そして醫療は一切効無し、誠に恐れ入り候へども御療法の御教示を乞ふ。(伊勢の女)

(答)診察せねば分りませぬけれど、伊勢からは近くもあるし、且つ慢性の皮膚病には頗る功あれば、彼の有馬温泉へ湯治を試みられたら如何です。

(問)私の顔に二月前から罌粟粒程の疣が四つ出ましたが、若し殖え、且つ大きくなると心配になりますから劇藥ならぬ簡易療法を敎へ玉へよ。(福島の無名十九女)

(答)格魯兒石灰(〇、一)と醋酸(一〇、〇)とを混せて、少し宛其上に塗つて御覽なさい、幾日も續いて。

(問)私は數年前より神經衰弱にて醫療も受けましたが病いよ〳〵重り、昨今は頭重く、夜は眠られず、動悸は高ぶり、唯々泣いたり、心細くなつたりして居ります、御情深き先生よ、今一度全快して人並に働かせて下されよ。(臺灣臺北の二十五才未婚女)

(答)臺灣は氣候の熱き處なれば、夏は可成樹間に徉徜散歩し、冬になるを待つて、旅行療法を試みられよ、旅行療法とは、氣の合へる友と、草鞋穿で、毎日、一月も二月も續けて旅行するのであります、すると、晝間の疲れで夜は安眠出來るし、變つた所〳〵と絶えず目を樂しましめますから、神經衰弱を治すことはお茶の子であります。

(問)私は野良の仕事は何も致しませぬが手が赤くて困ります、先日越中富山の藥屋が參り、この長州に來てから斯く手や面が赤くなりましたと申しますが、この國の風でせうか。(長門の海邊女)

(答)御國の風か否かは余よりも貴女の方が御目變なさるでせう、兎に角寒風に吹かれぬやう、手袋でも當てイヒチオル二瓦を酒精半合に溶かして塗布を試みられよ。

(問)「子宮サック」は廣告通り有効無害のものに候や。(名古屋すみゑ子)

(答)何れとならば餘り使用せぬを可とす。

(問)私は十六歳に相成候が生來逆上症にて顔面紅く誠に困入候間治療法を御示敎下され度。(日本橋村松町の眞佐子)

(答)毎月五日間程宛月經前にクキーン(本郷區森川町昭天堂製)を服用して御覧なさい。

(問)當年十八歳になる女、甲狀腺炎にて色々治療も致しますが効ありませぬ、何か良藥ありますまいか御示敎を乞ふ。(紀伊の病困女)

(答)素人療治としては沃度丁幾を塗る位なものですがそれでは餘り効が有りませぬから、御地の醫士と御相談有つて、沃剝の內服、沃度丁幾の注射をして御貰ひ遊ばせ。

(問)私事、言語訖りて、談話の際、大いに苦痛を感じますが、何卒治療法を御敎へ下され。(岐阜師範寄宿の一人)

(答)これは醫療に屬せぬものなるが、一寸知れる事を申せば、精神を安靜沈着にする風を養ひ、可成無言を守り、(無言とは他人と談話せぬを云ふ)さうして他人の聞かざる一室に籠り、カ行タ行サ行ナ行等の子音を自ら稽古すべし、例へば、カンカラ、キンキリ、クルクル、ゲレゲレ、コンコロといふやうな言を練習するのである、嘗て或る吃者が「向ふの客は柿食ふ客か柿食はん客か柿食はぬ客の善い客だ」が自由自在に言はるゝまで他人と一切談話を禁じ、坐禪の稽古したら大いに治つたといふ事を聞いてゐますが、果して然るや否やは未だ實驗仕らず候、兎に角子音中で カキクケコが最も困難なるもので、これが上手になれば餘は容易に言はるゝし、且つ大膽になつて、臆病ならぬやう肝心なり。

(問)腸結核は不治の難病と聞き及び候が、果して全治の見込無きものに候や、序でに養生法も伺ひ度願上候。(雪月花女)

(答)難病ではあるが、決して不治症ではありませぬ、暖地の海邊可成は孤島生活をして、魚鳥獸の肉を多食し、相當の藥餌を服すれば必ず治癒せんことを誓ひます、但し重症にならぬ中に手當するが肝要なり。

(問)「インキンタムシ」の根治法を敎へ下され。(播州の岸師範女)

(答)石炭酸水を以て能く洗ひたる後、イヒチオール三

瓦と剌納林三十瓦とを混せて之を塗るべし、かく幾日も續けて治つたら、以後常に其部を清潔にして居れば再び罹ることなし。

(問)卵巢嚢腫を切開施術したる後、經過極めて宜しく候が、普通人の業務を取つても宜しいでせうか、又或人の說に記憶力の減ずるものなりと、果して、さうでせうか御敎授を乞ふ。(奥州の一女)

(答)滿三年間程は可成安靜にして普通人の業務を取らぬが宜いです、記憶力の減ずると否とは餘り影響の無いやうであります。

(問)初妊娠一二ケ月中の身體異常を御話し下さる樣御願ひ致します。(氣掛女)

(答)第一ケ月は月經閉止、膣部は柔らかくなり、子宮口は橫裂してゐるが普通なるに稍々卵圓形となり、情慾盛んになる等、第二ケ月は乳房稍々膨れて、乳嘴や腹の白條が色づいて陰部も亦膨るゝものである。然れど是等の徵候は規則通りに行かずして、醫者なども甚だその鑑定に苦しむものである。要するに五ケ月に至らねば眞に了らぬものなり。

(問)關節病とは如何なる病に候や、目の下がピク〳〵と動くことあり如何なる譯か、炬燵に居る人脚部に火形とかいふ見惡いもの出づ、治らぬものにや、今年卅歲になる女常に酒嗜に候が手足痺れて筆持つさへ顫ふ酒の爲に候か、何卒御示敎を得度候。(白菊女、早々女、是非〳〵女、同女)

(答)葉書一枚に一人一問として貰ひたいのである、兎に角今度だけは答へます。唯單に關節病といふ名の病名を聞かず、大方關節僂麻質斯などの略名(素人が勝手に)ならん、次に目の下のピク〳〵することの有るは誰にでもあるものゆゑ憂ふるに足らず、次に皮膚に冷水摩擦でもして淸潔に且つ抵抗力を強くし、炬燵などいふ不衞生な懦弱にするものに這入らねば自然と治ります、これも憂ふるに足らず。次に大酒をすれば、運動神經を支配する所の小腦を侵すものなれば、手足の顫ふは自業自得、されど今や年漸く三十なれば、酒さへ止めなばこれ亦療治も何も要らず、貴女方四人の問は皆々奮發一つで治り申す可く候。

海外女新聞

△婦人探險家の叙勳　日本には河原操子出でぬ。河口慧海師出でぬ。寺本婉雅師出でぬ。佛國には三人を一人にて兼れたらん婦人探險家こそ出ゐれ。巴里に住せるイサベル、マツシウ夫人は多年東洋に於ける探險の功勞によりて今や佛國政府よりレジオン、ドヌールに叙せられぬ。

夫人の始めて東方探險の途に上りたりしは今より十四年前にありき。最初に埃及、リベン次にジヤヴア、セイロン、印度等を歴遊し、僕をも從へざる眞正の一人旅にて、ヒマラヤ群山を跋渉し、西藏に入りしは、千八百九十五年なりき。其後更に文部大臣よりの委托を受けて、三たび探險の途に上り、交址支那、暹羅、緬甸、及びメーコン河上流の山地、支那、日本、蒙古、シベリヤ等を歴遊し、其間歐洲人の、未だ曾て至らざりし僻陬をたどりて、無事に其目的を遂して歸來せり。

夫人は其經過せし各地の狀況其他につきて、巴里地學協會に於て講演をなせり。又「如何にして我は印度支那を通過せしか」と云ふ標題を以て一書を著述せり。又巴里發行の「兩界雜誌」「通信」等の大雜誌に其の探險談を寄せたり。夫人の探險報告書は文部省の記錄の中に綴り込められたり。

夫人の眼は靑く光りて、愛嬌ある中に怜悧の氣を含めり。夫人の語氣は低くして力ありき。夫人曰く「日本は日露開戰以來特に名高くなりまして、專門に日本の研究を企てる人も見えます。又色々日本に就いての書籍も御坐います。私は日本を探險いたしませんでしたから、一寸立寄つただけで、日本に就いての話の種を多く持つて參りませんでした。併し日本では至る所に。此善良にして謙遜深い國民に歡迎されましたのは大に仕合で御坐いました。」

又曰く「通りました各地の酋長や王様などから、いつでも歡迎を受けました。シンガポールでは英國の官吏の歡迎を受けました。ルアンプラバン（ラオ國の首府）ではラオ國王ザツシヤリヌの歡迎を受けました。また此前にジヤウアではジヨー、コカンメ王から歡迎を受けました。

△結婚法の改正運動　結婚に關する習慣を改良し之を成文律にして政府より發布し貰はんとの運動を開始したるは「結婚改良會」と云ふ一團體なり。

去る一月十九日の夜、改良會の委員諸姉は、巴里市に會合して、アンリ、クロン夫人を議長として一の決議案を作りぬ。曰く「夫婦は婚姻に關して、同等の權利と同等の義務とを持つべし」と。これは、現今の佛國の法律にては、若き娘たち婚姻するが爲めに、民法上の權利の大部分を失ふに至るを以て此を改良せんとするなり。委員諸姉は尙ほ之に關する數ケ條の細目を議定せり。

世態

如何に麗はしき多島海の風景よ

菱屋平七

△世界の好風景はライン河畔と瀬戸内海にありといふ其實況は如何。

△瀬戸内海の美景が百年以前の人の眼に如何様に映じたるべきか。

△彼等も又西人の評せし如く我が内海の風景を一大盆景に擬へたり。

▲四月三日——辰刻頃空漸晴わたる。午刻すぎに丸龜をはなれて。田口へむけて船出す、西風なるに一里許がほどひらき走りけれど。風負がたくして帆を下して漕ぐしほもあしかりければ。田の口まではえゆかで。申刻すぐるころ下津井に至りて泊る。(丸龜よりこゝまで七里)けふ船路に四國の七島といふぞおほたに見る、其中に與島には船どもおほくかゝりありて近し。須彌島もそのあたりにみゆ。是等に、わけ島、しゆつ石島をそへて讃岐につけり。立は島、諸木島、がま島は、備前なり。すべて島々の海中に浮みてみゆるは。盆に水を湛へておもしろき石どもを入れをける如くにて。何所にあるも佳景ならぬはなきぞ。船をすゝめながら其をながむるは。狀態種々に變化して。譬へばかの盆なる石どもをいろ〳〵と取りなをし見るに似たり。此方は動かずして。彼方のうごくやうなるぞおかしかりける。さて泊まりて下津井のさきを船より見やるに。山に添海邊に面ひて。家居西東に長く列れり。東の端に吹上とて。小き山ひとつを隔てゝ百軒ばかり、小山より西のかた千軒ばかりもやあらん。家々に土藏なんど白〳〵と多く見えて繁昌かるべく見ゆ。湊は三十間ばかりがほど石垣いかめしく築きあげて。ふねの入べき所二所。西のはしに石の燈籠ならびに船番所ありて。こゝは岡山の殿の領なりといへり。

▲四日――卯刻ごろに北西風に纜を解て船出す。半里程にして大畑といふ里のあたりにいたる。人家五六十軒ばかり見わたさる。又一里半程にして。辰刻ごろ田の口に着て陸に登る。濱手より山づゞきて家居二百軒ばかりもやあらむ。餘り賑しからぬところなり。船人に案内させて瑜珈山に參詣。(是より三十六丁)山坂二十丁ばかりのぼりて。潔き茶屋のあるに入てやすむ、南面をあけて。あたらしき疊靑々と敷たるに腰うちかけて。煙草くゆらせけぶり吹つゝ見わたせば、讚岐の山々島々丸龜の城なんど。みな眼下に見おろされて。樹色烟を含み海氣日に映じ布置の巧なる事。名畫も及ぶまじとおぼへて。一望の絶景に精神これがために爽なり。眺入てたちさり難き程におぼゆれども。かくては果じとてまたゆく。道は赭石の色したる赤土山を廻る。坂は少く平道多し、かくて十三四丁程にして本社にちかづく。二丁ばかりこなたに大なる石の鳥居たてり。それよりは一丁ばかり平地にて茶屋宿屋五六十軒兩側にたちつゞき。家毎に婢二三人づゝ門に出居て。ゆく人を見てこなたに入て休みたまへ。御膳めしてより詣で給へ。よき酒もさふらふ。肴もいろ〳〵さふらふ。饂飩蕎麥にても召れ候へといふ事を口々によびさへづる。所がらとて詞も異樣に。こゑも訛りありてをかしけれど。顏形はこゝろして拵へ置けるにや。あまりあしきは稀にして。髮華やかに高くゆひあげ。紅粉の粧ひ厚きにすぎて。媚きたちたるありさま。山中僻遠の地にあはせては。殊に目にたち打おどろかるゝほどなり。此町屋をはなるれば仁王門あり。門のあなたに銅の鳥居ありて。華表のもと左右に石の狛犬むかひたてり。是よりまた坂道にて。磴道をのぼりゆきて本社にいたる。拜殿は瓦葺にて。造作のさま頗る鉅麗といふべし。本社の後に奥院おはします。此御前にある狛犬陶物にて。高さ二尺ばかりあり。作りざま古雅にしてめづらしくおぼゆ。神は瑜珈山蓮臺寺自性院といひて。神領三十石つけりといふ。方丈客殿のあたりより。大師堂鐘樓堂などのあるを見めぐるに。すべて善好なる事甚愛すべく。目をよろこばしめて。寺僧の富裕な

る事まで推測らるゝさまなり。かくて下向して。仁王門のかたより茶屋に入て休む。西屋といひて此一町のほどに。すぐれて大なる茶屋あり。座敷も四間ばかりあると見えて潔淨し。婢も他家よりは勝れて無禮しからず。價をとふに忖測りしよりはいと賤直におどろかれて。すべて皆山中の美風なりとは思ひ知りぬ。午刻ごろ下津井に歸りて舟出す。下津井のまへをとほりて。二里ばかり漕行て。備前と備中の境にいたる。北にあたれるは玉島。南は備前の水島なり。こゝより備後の白石までを水島灘といふとなり。水島上下に分る。下なるは人家なし。上の水島には人家すこしあり。また行く北のかたに小島三つ見ゆ備中しやく島なり。其先にみゆるを三郎島といふ。南のかたの沖中に廣島見ゆ又一里ほどゆきて。瀬濤といふ小さき湊の人家すこしみゆるあたりにいたる。是は笠岡のかたへゆく入海のみなとなり。また一里ほどにして白石にいたる。入口に瀬戸あり。中に白き石のあるによりて。白石とは名づけしといふ。申刻ごろ風なぎて潮もあしきゆゑにこゝにふね漕入れて泊る。此入口より港の内まで。左右岩山にておもしろき松共の。わざと押まげて作りたらんやうにて。古びたるが。大なる岩どもの罅隙よりはえ。何を培にてかく生長すらんとあやしきまでなるが。いと多くしげりて。おの〳〵狀態を競ふ如くにて。とりどりに甚だ愛賞にたへたれば。あはれ〳〵このうちの岩ひとつ木一本にても。京大阪又我が名古屋のうちに搬きたらるべくんば。いかばかりが諸人のよろこび賞して。其名もたかくきこゆべき。すべてこの歎息は。とほき山中なんどの佳木佳石を見ては。誰にてもいつもよく發する事にて舊ぬれども。猶も默止がたくもおぼゆるかなゝんど。おもひつゞけながら左右にながめやりて漕入る。此みなとの淺きは。人家の南のかたにあたりて。近きころ新田を築たるによれりといふ。人家はすべて百軒ばかりある。みな草葺なり。備後國のうちにはありながら備中倉敷の御代官の支配たる所なりとぞ。

▲五日――卯刻過る頃。北風に開き走りて船出をする

鞆の浦よりこなたに泉水島とて小じまあり。松ども茂りおひて見事なり。其あなたに廿間四方ほどの小島のあるに。辨才天の小き祠あり。枝ぶりよき松。形よき岩ども多くあり。嘆息を發することきのふにおなじ。巳刻ごろ鞆にいたる。備後の福山の殿の領地にて。入口に船番所あり。此邊にて勝れたる湊にて。人家無慮千軒あまりある。本町といふには商家おほくいと賑はし。鍛冶屋町といふは一丁のうち鍛冶のみ居れり。又魚の店といふ町もありてすべて此浦には鮮魚ことに多くして。西東の端には漁者のみすめり。名物とするは世に備前燒といふ陶器。または保命酒。疊表。七島筵。綿などにて。所々に賣家多くみゆ。濱邊につける町中にいかめしく華麗に構へたる屋敷のあるぞ。何ぞと聞へば朝鮮の三使經過の時の。御馳走の官舍なりといふ。さてこゝかしこありくに。女共二尺計の平桶に。魚物また青物をいれて呼はりつゝうりありくにあへる。こゝの風なりといふを珍らしく見聞す。斯て山の手に祇園の御社のあるに參詣づ。前に石の鳥居あり。

磴をのぼりて。隨身門といふをすぐれば。御社は檜皮葺にて南向にたゝせ給ふ。前に銅の狛犬向ひ居れり。舞臺いと麗しく石の手水鉢は自然石の。長さ一間半ばかりあるをもちひたり。門前に小松寺といふ眞言宗の寺あり。寺内に内府重盛公手自植置給ひしといふ松あり。きはめて老松にて。高さは僅三間ばかりにして。枝どもは甚ながく。めぐりに延袤盡く垂さがりて。末は地を摩れり。かゝる珍らしき松は。かの公の御手づから植給ひしならずとも。心なく見すぐすべしや。それより町屋を過て濱邊のかたにゆけば。裏町とて青樓酒家の町あり。遊女屋は二三軒。店つきの粧奇麗にして。風體すこしかはりあれど。とり〳〵に美しうて並居たり。茶屋は十軒餘あり。家々の門々に婢出居て。旅客の袖を執へて引留。強てたちより遊宴せよとせちにすゝむ。袖を引きかぬとも離すまじく見ゆれば。せんかたなく引入るゝにまかせて入て。こしうちかけ莨なんど喫みて心をゆるめて。晝の間は心せわし用事をもしまひて。晩のほどより來て宵の月をも賞しゆる

らかに遊ばんなど賺置て出ぬ。この家は饅頭屋喜助といひて。中にもすぐれたるにて。座敷の風景もよしといへり。かくて町はづれの岸邊に。彼の祇園の御旅所あり。其後に廻りて南にむかひて海上を眺望すれば。眼前には泉水島おもしろく浮みて見え遙には伊豫のうらうら島々烟靄の中に莽蒼たり。此ごろはかくの如き絶景を歴々見るなれども。いとゞあかずおもしろくおぼえて心も晴ばれし。此所に芭蕉翁の塚あり。自然の青石にて發句幷に銘文を彫たり。

うたがふな潮のはなもうらの春

銘曰

蕉翁爲人　滑稽絶倫　包言温故
鼓吹知新　千里負擔　諸州師賓
同志繼緒　花月此裡

この紀行文は享和の昔尾張の人菱屋平七なる人が一年筑紫に旅行せし時の旅日記なり、文は元より專門文士の手になりしものにあらざれば決して巧妙といふべからず、又元より錬達の筆にはあらざれども、其觀察に一種の妙味ありて事物遭遇の間自から人の心を動かす所あり。

封建時代の滑稽演戲

狂言作者

△悠々緩々として舞臺に上る其の人物事相の如何に可笑しみありて又それが如何に天下太平の氣象を帶びしよ。

アト「是は田舍に住居致すもので御座る。某田畠を數多持つて御座るが、此中は久しう見舞ひませぬ程に、今日は見舞はうと存じて罷出でた。まづ、そろ〳〵と參らう。世間に田畠を數多持つた衆も御座れども、中にも某の畠の様に毎年よう出來るはないと有つて、皆のほめ物に致さるゝ事で御座る。いや參る程に、則ち是が身共の畑で御座る。扨も〳〵、ひさしう見舞はぬうちに殊の外よう成長いたした事かな。いや、瓜もよ

う色付いて御座るほどに、鳥獣の付かぬ樣に垣をゆひ、案山子を拵へて置かうと存ずる。見た處が一段とよい。又明日見舞はうと存ずる。

シテ「是は此邊の者で御座る。今晩さる方より夜咄に參れ、と有つて、人を越されて御座る程に、參らうと存じて罷出でた。先急いで參らう。遠路と申し、其上野道を掛けて參るは斟酌には御座れども、思寄つて人を越された事で御座るに依つて、か樣に參る事で御座る。定めて皆若衆の待兼て御座らう程に、急いで參らうと存ずる。いや是に見馴れぬ垣が結うてあるが、何畠ぢや知らぬ。先ちとのぞいて見ませう。扨も〳〵、よい香が致す。瓜畠さうな。是は幸な事ぢや。是を一つ二つ取つて、今晩のもてなしに致度い物ぢやが、やあら、何とせうぞ。いや、漸々日も晩ずるに依り、先何かは知らず、此垣を破りませう。先結ひめを切らうず。か〻〻。さらば垣を破りませう。めりめり、ぐはさ〳〵ぐはさ、めり〳〵〳〵。扨も〳〵、おびたゝしう鳴つた事かな。誰も聞付はせぬかしらぬ。人が居たならばと、がめうが、誰も人は居ぬと見へた。某はうろたへた事を致いた。誰ぞとがめうかと思うて、思はず知らず、口をふさいで御座る。笑。扨も〳〵、うろたへた事を致した。先垣を越えませう。いや、えい。扨も〳〵、夥い事哉。どれに致さうぞ。いや、是に致さう。いや、是に致さう。是は枯葉ぢや。はて、合點の行かぬ事で御座る。何とした事ぢやしらぬ。いや、今思出いた。夜分の瓜を取るには。ころびを打つて取るがよいと申す。さらばころびを打つて取りませう。いや、えい。早是に御座る。扨も〳〵、是は見事な瓜で御座る。いや、えい。是にも御座る。笑。是などは別して見事に御座る。最前から斯樣に致せば能う御座つた物を。何程取らうと儘な事ぢや。いや、えい。はあ〳〵〳〵、眞平御免されませ。私は瓜盜人では御座りませぬ。道に踏迷うて參つて御座る。眞平御免されませ。申し申し、其樣にふすべさせられた物では御座りませぬ。ゆるすとなりと、免すまいとなりとも、有無を仰られて下されませい。や、申し、其樣にたまつて御座つては、

何共迷惑に御座る。此上は七重の膝を八重に折りましても、御詫を申さねば成りませぬ。眞平御ゆるされて下されませい。や、申〳〵〳〵、是は如何な事、人かと存じたれば、あれは案山子で御座る。扨も〳〵、腹の立つた事かな。よしない案山子に降參を致した。憎さも憎し。致し様が御座る。先、此の案山子を打崩いてのけう。瓜蔓をも斯う引きかなぐつてのけう。是々、これでこそ腹がいたれ。いや〳〵、斯様の處に長居はいらざる物ぢや。定めていづれも待つて御座らう。急いで參らうと存ずる。はて扨、よくない事に手間を取つて御座る。

アト「今日も畠へ見舞はうと存ずる。是はいかな事。何者やら垣を破つて置いた。合點の行かぬ事ぢや。是は如何な事。瓜づるも引きかなぐつてあり、殊に是はかがしまで引崩いておいた。扨も〳〵、憎い事かな。定めて是は鳥類、畜類のわざで御座るまい。瓜盗人が這入つた物で御座らう。扨も〳〵、腹の立つ事で御座る。何とぞして、此盗人をして見顯度い物ぢやが、何とせうぞ。いや、思出いた。斯様のものは又重ねても參るもので御座る程に、今度は某の案山子に成つて、參度見顯さうと存ずる。扨も〳〵、腹の立つ事て御座る。今度參つたならば、急度見顯して、只置事では御座らぬ。是々、是で一段とよう御座る。」

シテ「急いで罷歸らうと存ずる。夫に付いて夜前瓜を持參致して御座れば、亭主をばしめ何れも、殊の外風味のよい瓜ぢや、と有つて、ほめ物に致されて御座る程に、又戻りにも一つ二つ取つて、宿への土產に致さうと存ずる。いや、何とか申す內に、是ははや夜前の畠で御座る。まだ瓜主が見舞はぬと見へて、垣も其儘御座る。瓜づるも其儘御座る。是はいかな事。瓜主が見舞うたやら致いて、又案山子がしつらつて有る。はて扨、しやうこりもない者が御座る。殊にこれは上手の作つたかゝして御座る。さながら正眞の人の樣に御座る。いや、あの案山子が人に似たに付いて思出いた。重ねての狂には鬼が罪人を責むる體もあり、其外種々の學びをして遊ばうと仰せられた。自然某が鬼の役に

當るまい物でも御座らぬ程に、あの案山子を罪人の心にいたし、某が鬼に成つて一責せめて見ませう。さりながら、この邊に竹杖はないか知らぬ迄。幸、これに竹杖が御座る是を鐵棒の心に致して、一責せめて見ませう。いかに罪人いそげとこそ。笑。何程責めても人形ぢやに依つて、責め力がない。又鬮取の事なれば、今自然某が罪人の役に當るまい物でも御座らぬ程に、今度は此案山子を鬼にいたし、某が罪人に成つて責められて見ませう。あら悲しや、是程參り候ふ程に、さのみな御責め候ひぞ。行かんとすれば引きとむる。とまれば杖で丁とうつ。是は如何な事。とまれば杖で丁と打つ、とうだうたれば、謠に合いて丁と打つたが、合點の行かぬ事で御座る風のしつらひでも御座るか、引けばうつむく、ゆるむればあをむく、引けはうつむく。ゆるむればあをむく。笑、扨も〳〵、上手の作つたかゝしで御座る。是は丁と打つたも道理で御座る。今一度責められて見ませう。行かんとすれば引きとむる。とまれば杖で丁とうつ、アト「がつきめ、のがすまいぞ　シテ「南無三寶、だまされた。まつぴらゆるいて呉れい〳〵アト「おのれは憎いやつの。よく某の瓜を取つたな。横着者、どちへ行くぞ。人はないか。捕へて呉れい。やるまいぞ〳〵。

これは瓜盗人と題する狂言記なり。

女豫言者

我國にて云へば濱口熊嶽の如き少女現はれたりルイズベール孃といふ。諸病を療治する事、裁判所へ引き出されたる事、平氣にて裁判を受け、得々として判事の前に辯論する事も同じく。東京市民の或者が熱心に濱口を信仰したりし如くに一部の巴里市民の此女豫言者をありがたがるも亦同じ。一奇といふべし。

孃は二十二歳の若き娘なり。病人を取扱ふ經驗も學問もあるものではなし、たゞ其父其祖父とともに熟練なる催眠術家なりき。其父とともにルイズ孃は催眠術を興行して歩きつゝ間に、ふとしたる出來事によりて、何の造作もなく、諸病を治療し得る方法を催眠術の中より發見したりき。此評判いつしか諸方に弘まりて施術治療を乞ふ者踵を接して四方より集り來りぬ。やがてルイズベール孃は、千八百九十二年發布の法律に違犯せりとの廉を以て裁判所に告發されたり。孃の辯護士はコル子氏なり。去る一月六日にサン、ケアンメン裁判所に於て判事はコル子氏の辯論及び心理學校教授ドクトル、マニン氏の鑑定をきゝて彼女に療病免状を下附する事を拒絶する決定を與へたり。孃は別段失望の氣味もなく、却つて傍聽人の厚き同情を受けつゝ嬉しげに退出したり。

名家談片

石黑男爵　家計談

ナニ大そう座敷が立派に出來たと、イヤ立派すぎるよ、石黑の應接室には、大過ぎものだ、それに付て話がある、御存の通り余は大ミミツタレの特質だから、家は一切かまはぬ、明治十四年に古家を求めて引移たまゝだ、然るに去年應接所の床板が落ちて修繕を要するに至つた、大工に修繕をつもらせたら、新築の方が安く上るといふから、そこで考へた、余は常に來客を悦ぶ、家にさへ在れば來客には成丈け逢ふて話し合ふ、そこで、其珍客を置く所が、一番大切の室だ、ゆゑに客室を造るには立派にして御客樣に滿足させたいと、此考で石黑家最上の室として新築したのだ、拙者も封建時代なら、小さくも大名だよ、華族樣だよ、されば此室一つが一國一城ともいふべきだよ、立派なのも尤だろふではないか、ナニ謂れなきけば有難やで、御尤だが、是が石黑家全力を盡しての御普請とは恐入るト、ソンナニ馬鹿にしてはいけぬよ、全力を盡して客室は作つたといふもの〻、二十七八年役で賜つた軍事公債は年々の利を積で既に一萬七千圓計りになつて、それは家資の根本として備てあるよ、二十八年に賜つた時に、世間並に直ぐ美宅を作つたり、又は別莊に別嬪でも蓄たら、如此には殖ぬし又た如此にはならぬ、此客間を作つても恩賜金の元利には、一文も手を附ぬといふはエラカロウ、モウ遠からず、大戰役の行賞もあらふが、新華族も出來やうし、陞爵者もあらふし、家資恩賜金もあらふが、受賞者はどふか石黑のやうにありたい、ナニエライ御自慢で恐れ入ると、イヤ自慢ではない、忘れもしない明治二十八年八月廿日に軍功によりて華族に列せられ特に男爵を授けられ同月二十六日に宮內省より家門保續の資として、帝室御資產の內より軍事公債額面一萬圓を賜つた、其時余は其恩命の厚きに感拜し考へた、家門保續の資といふ難有き尊き邊の思召は、我々一介の武辨元々何物もなき輩が、世襲華族に列せられたもの〻、一旦休退するか死亡すると、子孫は何も收入とてはない、今の世で兎に角に、華族で候とて、式日には金モールの正服を著ければならぬまさかポツ〳〵歩行て泥だらけの靴で參內も出來ぬ、又子女には必ず高等の教育もさせればならぬ、すると、いくら石黑流で儉約にするも、一ヶ年二千四百圓は要る、此二千四五百圓の金を得るには、五朱の利としても元金五萬圓は要する、されば子孫に華族の家を繼がせ、襲爵さするには公債五萬圓を備へればならぬ、そこで先づ資源として一萬圓を賜つた、そこで是を基として儲ればならぬ、是が余の考案で、故に叙爵以來は、一層の儉約を行ふて、其利子は一文でも他に用ひずに利殖するので、三十五ヶ年立つと五萬圓になる計算だ、光陰如矢で已に十三年を經過して、七千圓ばかりも殖たのだ、客室の床の

落ちる迄古家に住んで居たのも此譯だし、又大カバンを抱へて、電車で議院へ通ふのも此譯だ、急用があると飛乗赤毛布の人力で走るも木綿の袴に島桐の下駄で歩行くのも此譯だ、併し正裝をすると馬車で出るのも亦此譯だ、一方には恩賜金を増殖して家資を備へつゝ一方には元と一國一城の主たりし人々と、儀式上又は慈惠的の事に付ては、一歩も讓らずに行ればならぬのは、中々苦しいぜ、ナニ座敷をほめてトンダ御講釋を拜聽したと、此次にはモツトおもしろい話をするから來て下さい、應接所が出來たから、イツでも長々と話しますぜ、ナニ應接室は立派だが、卷煙草はやつぱり元の山櫻だと、ツンナ皮肉をいふてはいけぬよ。

婦人と虚榮心

有島夫人

男子と云はず女子と云はず、多少虚榮心のないものはありませんが、殊に婦人には此の弊が甚いやうであります、社會の進歩と共に婦人の活動すべき範圍が廣まつて參るのは誠に結構なことでは御在ますが、この範圍が廣まるに伴れて、各方面に婦人の虚榮心を發達させ、滿足させるの材料が殖えて參るものでありますから、志あるものは此の邊に注意致しませんと婦人の勢力が發展されると共に社會に惡弊を遺すことになります、此の惡弊風の社會に吹き荒んでゐる好箇の實例は、先年教育社會に起つた賄賂事件で判ります、是は虚榮心に驅られ、身分不相應にミエを張らうとした結果です、神聖を以て居る教育社會に於てすら此の弊あり、他は推して知るべしですが、何と慨かはしい次第ではありませんか。

風説によりますと、隨分借金をしても美服を作り、而して種々の會合へ御出席になる奥樣がある相ですが、甚だ當を得ない事であります、美服を着たからとて心が堅實でない日には、何物なも社會に貢献する事は出來ますまい、美服は歌舞の場に登る人には必要でありませうが、社會の爲めに盡さうと云ふ人には不必要なことであります、又奥樣に綺羅を飾らせ、贅澤をさせて、そして御自分の威嚴を添へやうとなさる御亭人もあるさうですが、是も間違た致方だと思ひます、要するに是は奥樣の虚榮心を益々增長させるやうなもので宜しくありません、苟くも一家の主婦たる大責任のある者に虚榮心を養はせて、夫で完全なる家政の整理が出來ませうか。

虚榮心は若い女の方程餘計にある、假令ば學校に入るにしても甲の學校乙の學校と擇り好みをして、少しでも世間に知られた學校に入りたがる、而して學生にはあるまじき贅澤をしたがります、又親御は親御で娘のいふなりになります、是は親の情として左うあるべき筈でありますが可愛がり過ぎては、却つて娘の爲になりませんから、能く能く此邊にも注意が肝要であります、斯樣に唯さへ起り易い——虚榮心を學生時代から養成しては、到底完全なる一家の主婦とはなれません、一旦惡習に染込んでは、之を除くには容易のことではありません、故に學生時代からこの虚榮心に染まぬやう、而して將來有爲の婦人たるやう心懸ればなりません、三子の魂百までとやら、少女時代の教育が一番大切であると思ひます。

人情哲學

市の人

▲奇妙な世の中

「田舍から出て來た、太郎吉如何も「世間は不思議なものだ、東京の叔父さん「何故だれ、太郎吉「だつて、何時かれ家へ畫家が來て方々景色なンか描いてつた時にれ、家の赤(犬の名)の肖像を寫してつたンだ、所が夫が五十圓に賣れたつてツて、禮金を家へ送つて呉れたンだ、肖像でさへ五十圓になるのだから眞物なら百圓には大威張だと思つて、今度赤を賣りに來たンだが、誰も買手がないンだよ。

▲可愛いから

父「お前を私が仕置をするのはな、お前が可愛いからだ、お前の爲を思ふからだ、子「ちや好いや、僕も大きくなつたら、お父さんの爲を思つて仕置をしてやるから。

▲外交記者

「是だけの材料をお集になるに、一體何人位の外交記者をお使ひですか、新聞の主筆「一人も居りません、家内が一人で方々から聞いて參ります。

▲許嫁

妃「賢さん位厭な人はないよ、おゝ厭だ妾大嫌いだ、母「お前御婚禮の濟む迄は其樣事云つちやいけませんよ。

▲糟糠の妻

「成る程」と詩人が夢中に筆を執つて居る所へ來た客人が云つた、「天才の火が燃えてると云ふ所だな」詩人の細君是を聞いて「煙の出て居るのはあれは煙草で御座いますよ。

▲ブランデー

病人「先生お言葉ですが私はブランデーは飲めません、醫者「嫌かも知れんが、興奮の必用があるから是非お飲なさい、病人「嫌どころか大好きですが、先の勘定が濟まないと酒屋が寄越しませんから。

▲拒絕の理由

婿の候補者「では私は御斷りなさるのですれ、孃「お斷しなければ仕方ないンですもの、候補者「お父さんが御不承知なのですか、「孃「いゝえ、候補者「私が貧しいからですか、孃「いゝえ、決して、候補者「だつて私の家は、貴家の樣に貴族的ではないから、夫でゞしよう、孃「いゝえ、違いますよ、候補者「ちやあ、私に何か肩書でもあつたら、孃「妾は其樣な望はありませんのよ、候補者「是やあ不思議で

す、一體如何云ふ譯でしようか、妻「妾、貴君のお顏を見るのが厭なンですもの。

▲成功者

母「何故お前學校へ行かないンです、子「だつてお母さん僕色々の本を見るとれ、豪くなつた人のお話が澤山出る居るだらう、其人達は皆子供の時學校へ行かなかつたんだから、僕も其通にして見ようと思ふンだ。

▲早起の法

怠け者友達に向ひて「早起の法を敎へて吳れないか、僕は毎朝起きるのが遲くなつて困るンだから、友達「譯ないさ、骨を折らずに君の習慣を其儘で早起の出來る法があるよ、好いかれ、是から毎日一時間づつ朝起るのを遲くするのさ、そして行くと仕舞には朝二時か四時に起る順になるだらう其所で、止めるさ。

▲動物園

A「如何うだ、動物園へ行かないか、B「僕は廢そう、家に居るとれ、一番の姉娘はカンガルーの樣な歩き方をするし、次の娘は鸚鵡の樣に喋舌るし、息子は熊の樣にごろ〳〵して居るし女房は熊鷹の樣で、僕の事を人は猩々だつて云ふ、……何處か他へ行かうよ。

▲人間は始めて

或人町を數十里離れて山奥の鑛山に行き數日滯在のうち、髯を剃らせ樣と思ひ剃刀の使へる者を搜したが中々無い、漸つとの事で一人を見付出し、是に剃らせる事にした、所が剃刀の當りが酷く痛い上に危險で堪らない、「おい、お前は誰かの顏を剃つた事があるのかい、「はあ、顏つて事は無え、體は平常やつてるだ、豚のを。

▲風景畫家

有名な風景畫家が夕暮の景色を描かうと思つて繪具をパレツトに出してはカンヴアスに擦すつて居る、カンヴアスにもパレツトにも在りと在らゆる色は取り出された、側に見て居た百姓、「お前樣はハア繪かきだな、何て巧えンだろ一度に二枚書きなさるな、けれどお前樣左の手の拇指で持つてなさる板片の方が好く出來たなあ。

▲新說敎壇

或坊さん大分惡き工面を一時に取返さんと思ひ、資本を掛けて態々說敎壇を直す、出來上つた日、權助を連れて檢分に行き、權助をずつと遠くの席へ坐らせ自分壇に上つて、一場の說敎を試み、如何だ、權助好く聞えるか、「好ウく聞へますだ、「其樣ら今度は貴樣壇へ上つて演つて見ろ、私は茲で聞いて居るから、權助はのこ〳〵壇へ上り

「俺はお未だに先月分の給金を貰ひましれえ、……如何です和尚様聞えましたかな。

▲結婚の申込

男「お孃さん、如何云ふ譯でしよう、昨夜私は貴孃に結婚を申込だ夢を見ましたよ、女「左樣ですか、併し正氣で爲さらない丈感じが御在ンなさるのれえ。

▲洋袴つり

世が進むに連れて色々な事が始まるもンだ、此頃は貴婦人が耳へ環をつけて花帽子を落ちない樣に縛り付けると云ふ事だ、いづれ此分では紳士は鼻へ環を透してズボンつりにする樣にもならうか。

▲利息

古本屋で一冊本を買つて來たら、間から百圓紙幣が出た、驚いて前の持主を探して還してやつたが、禮も云はず、突然武者振り付いた、如何した譯かと聞いたら利息を寄越さないからだと。

▲縮緬三尺

吳服屋へ來たりし隣の別嬪の孃「此縮緬は一尺如何程です、吳服屋の息子「貴孃の事ですから、キス一度でお負け申して置きます。孃「左樣ですか、では三尺下さいな、代はいづれお祖母さんがお拂に參りますから。

▲汽車の怪我

鐵道局員汽車に轢れた人の家に來り怖々「エヽ、實は奧樣あのお驚きになつちや困りますが、此方の御主人が汽車に衝突なすつてお け、イヤ汽關車は毀れましたし、だもンですから途其、頭と……女房「其樣事を云つてお出なすつたつて到底もだめですよ、宿のした事は妾は存じませんから、お出になつても、到底も御相談にはなりませんから。

▲音樂

醫者が辛子を紙に延ばしてチエスト（胸の意と簞笥の意と二義あり）にお貼りなさいと云つた、所で此病人簞笥一つも持つて居ない、併し其樣とは云ひ兼れて、醫者の歸つた跡でそつとトランクへ貼り付けた。

▲避暑

此夏こそは轉地でもして平常の苦みを免れ樣と七處借りで海岸へ避暑に出掛けた、すると豈圖らんや、家主も米屋も洋服屋も同じ樣に避暑に來て居る。

▲二つの惡るい事

惡るい事は二つ合したつて好くなりそうな筈はない、所がある、如何して、此間僕に贋造の銀貨を掴ました奴があつた、是一つの惡い事だろう、是を地代の内へ入れて地主樣へ持つてつたのも惡い事だらう、併し、惡い事も二つ目で僕には都合が好くなつたよ。

史傳

美姫紅涙

花散る里

日本武人の精粹典型たる木村長門守重成の内室眞野氏が夫の決心のある所を知るや、自ら書を裁して、『一樹の陰、一河の流、また他生の縁とこそ承り候、そもおとゝせの比より偕老の枕をなして、唯だ影の形に添ふがごとく、思ひ參らせ、おもはれ參らせ候、此頃承り候へば、此世限りの御催のよし、かげながら嬉しく參らせ候、からの項王とやらむは、世に猛き武士なれど、虞氏の爲には名殘を惜み、木曾義仲は松殿の局に別を嘆くとやら、さらば世に望みつきたる妾にてせめて、御身御存生中に最後致し、死出の途とやらに奉待上候、必ず／＼秀頼公多年海山の御鴻恩御忘却なき樣、願上參らせ候、あら／＼かしこ』と、即ち一死以て良人最後の首途を餞せし壯烈は、天晴れ我邦女性の儀標たるべく、此夫にして此妻あり、此妻にして此夫あり、まさに是れ鸞凰の契芳を千載に遺すものといふべし、嚮に征露の軍、一たび海を渡りてより連戰連捷世界の耳目を聳動せしめ、我が將士の忠勇壯烈は古への武人に比して過ぎたるも及ばざるなかりしかば、賛嘆歡呼の極、武士道の復活と唱へつゝありき、借問す明治の女性も亦武人の妻女として古名婦に比して遜色なきを得るや、聞く名譽ある帝國軍人の未亡人

として良人の墳土未だ乾かざるに、早く旣に再嫁の說に耳を傾けんとせるもありと、元より一個人の身の上にはそれ〴〵特種の事情もありて餘人の猥りに議すべきにあらずといへども、要するに是れ女性が薄志弱行の致す所に外ならず、歎はしきの極みなり、古來我が女德の世界萬邦の女流に一頭地を抽んずる所以のものは眞に操節を持するの堅固なりしにありて、これ誠に我が女性の誇りぞかし、彼の身は水萍の浮き沈む淵瀨にありて朝には平家の殿を送り、夕には源氏の君を迎ふる遊女傾城すら尙ほ一片奪ふべからざる日本婦人の淸節を留むるを見るにあらずや、予は今この濁れる浮世に浮き沈みせる遊女が如何に其の淸節を守るに苦しみたるかの實例二三を摘記して世の同情を求めんとす。

一、江口の妙――西行法師

治承二年の秋九月、三界無住の西行法師江口の里に行き暮れて、端なく遊女妙が軒端に一夜の雨宿りを乞へるに、彼女は更に許す氣色も見えざりければ西行とりあへず、

世の中を厭ふまでこそかたからめ
假のやどりも惜む君かな

と、口吟み行過んとしけるを、彼女は打頰笑みながら

世を厭ふ人とし聞けば假の宿に
心とむなと思ふばかりぞ

と、即吟しつゝ西行法師を請じ入れけり、偶々驟雨大に至り、彼女が一枚の板を手にして雨を拒ぎける樣を見て西行が

賤が伏せ家をふせぎわづらふ

と呼びければ、彼女はその板を投げ捨てつゝ

月はもれ雨はとまれと思ふには

と、對へたり、斯くて西行は妙女が才藻に驚かされて長の秋の一夜を語り明かし、翌朝分袂を惜みつゝ

髪おろし衣の色は染めぬるに
猶つれなきは心なりけり

と詠みたりければ、彼女も亦

假初の世には思を殘すなと

聞きし言の葉忘られもせず

とあり、西行更に

忘れずとまづ
聞くからに袖ぬれて
我が身もいとふ
夢の世の中

誠や世を棄てゝ身はなきものと思ひあきらめたる塵外放浪の西行をして情緒纏綿此語をなさしむるに至りたり、以て彼女が操守の堅固なると才藻の凡ならざるを見るべからずや。

二、祇王、祇女――平相國

榮華の天上、豪奢、絕頂を極めたる平相國清盛の爲めにその寵愛を專らにしたる祇王、祇女は京都の祇園の白拍子なりき、姉妹共に美にして艷麗、その伎も亦絕妙を以て洛陽に鳴れり、後、清盛の寵おとろへしかば、

萠え出づるも枯るゝも同じ野邊の草



いづれか秋にあはであるべき

と一首の國歌を殘し姉妹打連れて六波羅の花の館を退き、西山嵯峨の奥に庵を結びて、墨染の衣に世を行ひすましたり、時に祇王年二十一、祇女十九、

三、佛御前――平相國

佛御前も亦祇園の白拍子なりき、彼の祇王祇女と清盛の寵を爭ひて、姉妹の爲に奪はるゝや、彼女は

さらば心のまゝにつらかれよ

さなきは人の忘れ難きに

と、詠みて冷めたる淸盛の寵を温ためたりき、後ち祇王祇女姉妹が衣の色を變へぬると聞き、去にし己が身の上を思ひ出でゝ堪へ遣らず、終に六波羅を忍び出で、髮を切り姉妹が嵯峨の庵を敲きぬ、時に年十七、曾て詠あり

思はずも秋に逢ひぬるごと草の
我が身の上に生ひ茂るらむ

後白河法皇このよしを聞召されて、畏くも哀れを催させ給ひ、六條長講堂の過去帳に祇王祇女の姉妹と共に佛が名を記させ給へりとなん。

四、熊野――平右府

右大臣平宗盛が遠州濱名の宿に一夜、徒然に侍してその旅情を慰めたりしは遊女熊野なり、後朝の分袖に當りて熊野

東路のはにふの小屋のいぶせきに
故鄕いかに戀しかるらん

宗盛取敢へず

ふるさとも戀しくもなし旅の空
都もつひの栖ひならねば

宗盛京都へ伴ひて歸り益寵愛しけるが、熊野一歳東山の御宴に侍りて、坐ろに故鄕を思出でける

如何にせん都の春も惜しけれど
馴れし東の花や散るらん

宗盛も情ある武將なりければ、哀れを催して乃ち濱名へ熊野を送り歸へしき、後宗盛源氏の爲めに捕はれて鎌倉へ送らるゝ途次濱名を過ぎりけるを、熊野今昔の感に堪へずして

もろ共に思ひ合してしぼるらん
東ちにたつ旅のさ衣

の詠あり。

五、千手――平三位重衡

千手は白川宿の遊女なり、壽永三年平家の一門一の谷沒落のみぎり、明石の浦にて三位中將重衡梶原景時の爲に擒はれて鎌倉へ送られたり、中將鎌倉館にて沐浴の折、兵衞佐賴朝が旨を受けてその浴殿に侍ひた

りしは此千手の前なりき、關東の武者工藤祐經等の來りて中將の無聊を慰めばやとて、酒肴を整へ彼女をして一曲を舞はしめたりき、其舞伎の餘に妙なりしかば重衡歌ふて曰く

燭暗數行虞氏涙
夜深四面楚歌聲

と、一坐感動爲に涙を催さゞるはなし。

斯くて彼れ夜毎の伽に情懷轉た濃やかに、中將が元暦二年六月廿二日南都に移されて首刎ねらるゝや、彼女悲歎に堪へず剃髪して其菩提を弔へり、文治四年四月芳齒二十四歳を一期として歿しぬ、曾て鎌倉の一夜

やどりあひ同じ流れを結ぶこと
皆つぎの世の契りなりけり



六、靜御前――源　廷尉

靜御前は京都の白拍子にして九郎判官義經の妾なり、判官鎌倉右府の不興を蒙りて亡命するや、吉野にて飽かぬ訣に袂を絞り、既にして母礒の禪師と共に捕はれて鎌倉に送られ、判官の所在を糾問せられて語らず、有司更に禪師を詰るに娘をして天下の反謀人と共に落したる不埒を以てす、禪師即ち答ふるに是れ妾の知る所にあらず、判官殿に貞節なる彼女の眞情に侍ると。

右府靜が舞伎の絶妙なるを知る、即ち強て演舞せしめんとす、靜、賤女妾が身は敢て惜むべきにあらねど一たび判官殿の愛を蒙むりし上は如何で容易すく人の爲に舞ふべきやとて、再三辭したれども聞かれざりしかば、遂は涙を揮つて立ちぬ。

一たび神泉苑に舞ひて雨を降らせし妙手日本一との宣旨を辱ふせし彼女は、茲に再び鎌倉山八幡の神前に舞ひて關東武士をして衣袖を絞らしめにき、工藤左衞門祐經鼓を打ち、畠山次郎重忠銅拍子を勤めり、彼女は乃ち立て舞ふ、歌に曰く、

吉野山みねの白雲ふみわけて
　入りにし人の跡ぞこひしき

しづやしづ賤のをだまき繰返し
　昔をいまになすよしもかな

一齣の舞曲、鬼神を驚かしめて、一座に侍べりし猛きますら夫も皆哀傷を催しぬ、されど右府喜ばず、そも八幡宮の寶前に歌舞を演ずるに關東の萬歳を頌はずして、反逆の義經を慕ひ賤のをだまき繰り返し九郎が昔に迎へれと謠ひたるは奇怪至極の振舞なりとて、勘氣甚だしかりき、されど幸に夫人政子の君ありてこれを慰めて事濟みとなりぬ。

さりながら鎌倉武士は靜の艶色に其の本領を喪ひぬ彼女が判官の消息杳として聞えず煢々として喪心せる俘囚の身なるをもかへりみず、工藤、梶原、千葉、八田、重藤の面々はひそ〳〵靜が僑居に就て讌飲しける。殊に梶原三郎景茂などは醉に乘じて一たび彼を挑むに至る、彼女乃ち毅然として曰く判官殿は右大將の御連枝なり御身御家人の身として無禮めさるな、若し判官殿世にましまさんには對面すら叶ふまじきものをと、たしなめたりき。

彼れ後赦されて京都に歸るや剃髮して天龍寺の麓なる草庵に隱れぬ、時に年十有九、翌文治三年九月廿歲を一期として遂になき人の數に入りける。

七、虎御前――曾我十郎

虎御前は大磯の白拍子なりき、情人曾我十郎祐成が建久四年五月廿八日富士裾野の牧狩に於て父の仇工藤

祐經を討ち、仁田四郎忠常の手に斃るや、彼れ大磯を脱け出でゝ裾野の露繁き邊、田子浦の風清き處、ありし昔を繰返して

　露とのみ消えにし
　　跡を來て見れば
　　　尾花が末に
　　　　秋風ぞ吹く

と述懐し、遂に都に上りて剃髪佛門に歸し、十郎が菩提を弔ひけり、時に年十七

　浮世ぞと
　　思ひそめにし墨衣
　今また露の
　　何を置くらん

廿七歳にして大磯に歸り



高麗寺山の下に草庵を結びて、念佛三昧に晩年を送りけり。

八、少將——曾我五郎

曾我五郎の情婦に化粧坂の少將とて、當時全盛の白拍子ありき、五郎既に意を決して父の仇を富士裾野に報せんと欲し一夜忍びて化粧坂に至る、偶々梶原源太豪遊を試みて少將に逢はんに由なし、もとより落魄流浪の身の如何ともせんすべなく紊るゝ心緒を抑

へて即ち

逢ふと見る夢路にとまる宿もかな
辛きわかれに又もかへらん

と記して遺し置きけり、後少將これを知りて一夜泣明し、

數ならぬ心の山の高ければ
おくの深さを尋ねこそすれ

とて出家してその跡を慕ひけるが、五郎が終に望みを遂して果てたるよしを聞きて

捨てる身に猶ほ思出となるものは
とふにとはれぬ情けなりけり

佛門に入りて厚く五郎が冥福を祈りける

九、龜菊——後鳥羽院

龜菊は畏くも後鳥羽院の寵を得たる白拍子なり、承久の亂、皇運拙なく隱岐が島根に行幸のとき、途次播磨明石の浦を過ぎさせて、雅なる浦邊の景色を見そなはせ給ひ

御製

都をばくらやみにして出しかど
月は明石の浦に澄けり

とあり、彼女取敢へず

月影にさこそ明石の浦なれど
雲井の秋ぞ猶も戀しき

と、詠進しき

斯くて途上無事、御輿に供奉して、隱岐の國に着し、傅き奉りける。

十、瀬川——幡随院上人

瀬川は北廓松葉屋の抱へにて全盛一代に誇りたる遊女なりき、曾て詠みたるに

おなし世に降るをたのみの年月を
仇にも積る庭のしら雪

彼が首尾よく夫の仇を報じたる後は、剃髪して自貞と號し、幡随院の門徒となりて淺草のほとりに草庵を結び、念佛三昧に夫の冥福を祈れり、草庵の壁書の一に曰く、

池水に夜な／＼影は寫れども

水も濁らず月も汚れず

と、曾て幡隨院上人が汝禿のときより僞りを言ひしと限りなかるべしと仰せられければ、彼れ直に

ふたばより猶うるはしきそら言を
云ふも浮世の習ひこそあれ

と答へ、又上人、汝諸人を迷はせて財寶を投せしめしと夥しかるべしとありければ、即ち

戀すれば何の寶のおしからん
捨る命も厭はぬものを

と答ふ、遂に上人をして、我西方に淨土あるを知りて、北方に極樂あるを知らざりしとて

夢にだも花の廓を知らずして
唯だ徒に老いにける哉

と云はしめき、彼が貞節と云ひ才藻と云ひその非凡なるを知るべし。

十一、苅藻――赤穗義士

は苅藻は京都祇園の遊女なり、赤穗義士某と馴染を重ね遂にわりなき中となりける、然るにその愈事を擧ぐるに及び某と訣るゝにのぞみ、彼れ涙せきあへず

戀死なん我がのちの世を問はであれよ
迷ふをせめて片身ともせん

某も亦

味氣なきこれを限りの命とも
云はで分れし今朝の手枕

彼れ遂に苦界を出でゝ某が菩提を弔ひしとなん、

十二、小紫――貝原益軒

小紫は京都島原の遊女にして、その意中の人たりし貝原益軒が、九州へ歸らんとせるを聞きて、袂を惜みて己が姿を寫し左の一首の歌を添へ送りける

姿こそ繪にはうつせど中々に
通ふ心は筆に及ばじ

益軒は有名なる碩儒にして實に女大學の著者なり、此の君子人の愛顧を受けたる如き、縱令遊女なりともその才識品性見るべきものあるを知るべし。

日本國歌の變遷と君が代の性質

萬津子

皆樣はお正月や天長節のやうな目出度時に「君が代」だの其の他種々な唱歌をお唱ひなさるでせう、私は今其の「君が代」は、何時頃何して始つたかといふ事を少し申して見ませう。私どもの祖先即ち昔の人たちは、今日私どもが「君が代」を唱うやうな芽出度い場合に何な歌を唱つて居ましたか、又何な音樂を奏して居ましたかといふ事を申して見ませう。

元來此の世の中に在ると在らゆるもの、人類は申すまでもなく草木瓦礫に至る迄、皆事物に感せぬものは有りません、其の中でも生物は感じが強く、猶一歩進で人類に至ては感動が一層強いので厶ます、情が心の内で動き、感が胸に湧く時には其の感情が外に表れて參ります、其の外に表れるのが、或は聲となり、或は身振となり、或は手振足踏となりまして其處に或る一種の調子が付きますと、之れが唱歌ともなり舞踏ともなり段々進んでこれが音樂となるので厶ます。

此の事は何な野蠻國に參りましても、ちやんと有る事で皆樣方が世界の歷史をお開きになればすぐに分ります、即ち何な國でも其の開闢以來此の歌舞といふものが、自然に其の國に存在してある事を御承知になるでせう、只其の音樂として律呂正しく今日のやうに發達して居ませんのは、止を得ない次第であります、然し其の嬉しさ樂さの度合は、今日と少しも變ることはありません、歡を歡として詠ひ舞ふのですが、之れが又他人の心を樂しくする事は、丁度今日皆樣方がお家庭や音樂會などで御聞きになる時の快感と同じい事で厶います。

さて我が國に於ても遠く神代から唱歌舞蹈の有ッたことは日本の歷史を繙けばすぐ見える事です、皆樣御承知の天の岩戸の段は即ち其の起で厶ます、即ち、

是に天照大神畏みて、天の石屋戸を閉てゝさしこもりましゝく、高天原皆暗く、葦原の中つ國悉く闇し、此れに因て常夜ゆく、是に萬の神の聲は蠅なす皆滿き、萬の妖悉く發

りき、是を以て八百萬神天の安の河原に神集ひに集ひて、高御産巣日神の御子思金神に思はしめて、常世の長鳴鳥を集ひて鳴かしめて、天の安河の河原の天の堅石を取り、天の金山の鐵を取りて鍛人天津麻羅を求ぎて、伊斯許理度賣命に科て鏡を作らしめ、玉祖命に科て八尺勾璁の五百津の御須麻流の珠を作らしめて天兒屋命布刀玉命を召て天の香山の眞男鹿の肩を拔きに拔きて、天の香山の天の波波迦を取りて、占へまかたはじめて、天の香山の五百津眞賢木を根こじにこじて、上枝に八尺勾璁の五百津の御須麻流の玉を取り着け、中枝に八咫鏡を取り繫け、下枝に白丹寸手青丹寸手を取り垂て、此の種々の物は布刀玉命布刀御幣と取持たして、天兒屋命布刀詔ごと禱白して、天手力男命御戸のわきに隱り立して、天宇受賣命天の香山の天の日影をたすきにかけて、天の眞さきを鬘として、天の香山の小竹葉を手草に結ひて、天の石屋戸にうけ伏せて、踏みとゞろこし、神懸りして胸乳をかき出で裳緒をほどにおしたれき、爾高天原動きて八百萬の神共に咲ひき（下略）



そこで天照大神は變な事だ、大へん面白さうだと御思召して、天の石屋戸を一寸と御開きになりました、其の時天手力男神が御手をとりて、御つれ申しました此の時高天原も葦原の中ツ國も自ら照り輝て明くなりました、是を以て見ますと其の時代の樣子がよく〳〵見えるようでムます。

此の時代から奈良朝の半頃迄は、何事に付けても誠に天眞爛漫でムまして、儀式などゝ申す堅苦しいもの

がありません、其の實質に重を置きました爲め、折にふれ時に從つて思のまゝを聲に發し、身振に表して、詠ひもし舞もしたのです、然し此等は今から何千年と云ふ大昔の事ですから、其の曲の何で有たかは、今から窺ふ事が出來ません、只前申した通り簡易質朴の時代で其の曲も單純なもので有たらうと、想像されます其の今に傳て居る歌の詞ばかりを二つ三つ御覽に入れます、

下照姫衆人に岳谷に映くは是れ味耜高彦根神なるを知らざらしめんとしてよめる歌

天なるや、弟棚機の頸懸せる、玉の御流の、あふ玉はや、眞谷二わたらす、あちすき高彦根、

神武天皇兄猾を誅し給へる時に詠み給へる歌

宇陀の、高城に、鴫わな張り、我まつや、鴫はさやらず、いすくはし、鯨さやる、こなみか、なこはさば、たちそばの實のなけくを、こきしゑね、うはなりが、なこはさば、いちさかき實の多けくを、こきたひゑね

推古天皇二十年春正月群臣に宴を給ふ時蘇我馬子大臣

やすみしゝ、我が大君の、隱ります、天の八十蔭、いてたゝす、み空を見れば、萬代に、かくしもかと千代にも、かくしもかも、畏みて、つかへ奉らん、拜みて、つかへ奉らん、うたつきまつる、

右の內神武天皇の御歌は、其の次に「是謂來目歌、今樂府奏此歌者、猶有手量大小及音聲巨細、此古之遺式也」と書てムます、今の樂府と申すは元正天皇の頃でムまして、此の頃既に昔の歌を繰返して詠つたものと見えます、今日明治の大御代にも、畏きあたりには猶傳へらるゝとか申す事で。

奈良朝になり唐との交通が盛になりました、尤も其の以前に於ても三韓などゝ往來をして居まして、支那印度地方の文物を、輸入した事も有りませうが、此の時代になりましては特に頻繁になりまして、支那流の文化は益々輸入さるゝ事になりました、之れに伴て音樂なども日本に入て參ッたのは、疑も無い事です。

さて奈良朝の終りの頃から平安朝にかけて、此の外國音樂が漸々勢力を得ました、それで之れを聞く者も

耳が巧者になりまして、今迄自分の作りました歌を直ぐ勝手氣儘な曲を付けて詠ひました様には參りません又それでは面白くもない事になりました、茲に支那や高麗等の音樂を其のまゝ取ッた雅樂と其の影響を受けて出來ました神樂、催馬樂、朗詠、今様、などが行はれる様になりました、是等は日本古來のものもムますが、多くは丁度今日日本に於て西洋の樂譜に日本語の歌詞を應用して歌ふのと同じ様に、其の時代の歌詞を支那風の音曲で詠ッたのが始でせう。

支那の影響を受けたのは、之ればかりでない、儀式と申すものが出來て來て、太古に於いては前申した通り、自分の思ひのまゝな事をして居ましたが、此の時代になりては、形式と申す事を尊ぶ事になつて參りました。

すると年中行事のやうなものが出來て、何日何日には何をすると申す事が儼然きめられました、一旦儀式がきまりますと、日本人の性質として保守主義に於て此の風が中々變りません、從て假令源頼朝が幕府を鎌倉に開きませうが足利氏の室町幕府になりませうがそんな事には少しも頓着しませんで、宮庭に於いては大した變化はムません、織田豐臣時代から德川にかけて、世の中が大さう亂れまして、恐れ多い事ですが、朝廷



の御勢と申すものは少しも振ひませんで、何に付けても大さう衰へました、之れが爲め宮庭の御儀式の頽れたものが少くムません、徳川氏の末になりまして復古復古と申す事が流行致しまして、其の影響を受けて宮庭に於きましても御儀式の舊に復しましたのもムますが幕府の嚴重な壓制によりまして猶微々たるものでムました。

然し一般に申すと、平安朝から明治の大御代迄は其の大體に於ては、變りは無いと申しても宜敷い、日本風俗史にも「禁裡の年中行事は寧樂の朝より平安の世に至りて大に備りたりき、その後武家の世に至りては皇室の衰頽と共に恒例の節會なども或は絶え、或は絶えざるも其の式微々として藤原の盛時の十が一にも及ばず、此の時代に至りてはすべて朝庭に於て行はるゝ典禮は、幕府その費用を擔任したりしかば古典の回復したるもの多しと雖も、王朝の盛時に比ぶべくもあらず、さればこゝに更めて禁裡の年中行事を列叙せずとも、平安朝時代の式例の衰へたるものと云ひて足りぬべし」と有ります。

されば此等の時代に祝事に付いては、年中行事に載て有りますが、其中歌舞に關係しないものを省きますと次の様になります、神武天皇が正月軍兵に酒を賜ッた事の例を取ッて出來た、元日の節會、天武天皇が其の十年正月七日に、此の日白馬を見る時は年中の邪氣を去ると云ふ支那の古事に依て、白馬を御覧になッた例を取ッて白馬の節會、又持統天皇頃に漢人唐人が舞ひました事を例に致して正月十六日に、男女の聲の佳なるものを集めて詠はしむる、踏歌の節會、又天武天皇が吉野宮に行幸になり、琴を御彈きの時、雲起り天女表れて、曲に合せて舞ひ五變袖を擧げたと申す事の例を取りました、五節、其の他豊明節會など種々の宴會がムます、此等の席に於きまして奏じた音樂、詠つた歌などを固々に其の時代〳〵に付まして記錄がムますが、今之れを一っ一っ御話し致します事は煩しく且つ皆大同小異でムますから、只何な物をしたかと申します事を聊か申し上げます、

雅樂にては、

春庭樂　呂　鳥破　鳥急

萬歳樂　律　五常樂　慶徳

催馬樂にては、

安名尊　呂　席田　簑山

伊勢海　律　更衣

朗詠にては、

令月　徳は是

今様にては、

蓬萊山　靈山みやま

右のものは最も多く用ひられますもので、其の組合せ方は、

安名尊　呂　鳥破　簑山



鳥急　律

伊勢海　萬歳樂　更衣

五常樂急

のやうに致します、

右の内二三の歌詞を申し上ぐれば、

伊勢海

伊勢の海の、清き渚に、潮かひに、なのりそやつまん、貝やひろはん、玉やひろはん、

徳は是

徳は是れ北辰、椿葉の影再あらたまり尊は猶ほ南面松花の色十廻り、

蓬萊山

や蓬萊山にはや、千歳ふる、萬歳千秋、かさなれりむや、

松の枝には、つるすくひむ、巖かそばにはやかめあそぶ、

例はこの位に致して居きませう。

平安の頃から明治の御維新になる迄は、前申した通り少しの變化に止まりました、御維新以來制度文物が非常に變りまして、西洋式のものを輸入したのが少く厶ません、皆様方が御歌ひになる「君か代」は此の時代然も近々に出來たので厶ます、丁度明治二十年の頃に林廣守と申す宮中の一等伶人が作曲したものです、此の歌は御承知の通り古今和歌集の賀の部に讀人知らずとして出て居ります、「我が君は千代に八千代に細石のいわほとなりて苔のむす迄」此の「我が君は」の句が「君か代は」となりまして、少し其の範圍を廣めた許りです、之れが今日國歌のやうにして歌はれて居ります、其の曲は今日皆様方が御詠ひになるのと少しも變は有りませんが、只少し歌ひぶりが異ふので厶ます、之れが或る西洋の音樂家に依て今の譜に書直したといふ事です、然し調子は日本風のものである事は皆様方の御承知の通りで厶ます。

一寸茲にその國歌に付て二三言述やうと思ひます。

元來國歌と申すものは、國家の主權が命じて作らしたものでもなく、又國歌を作らうとして詩人や音樂家が首を拈つて製作したものでも厶ません、そんなら國歌は何して出來たと申しますと、之れは偶然に作られたものが偶然に歌はれて、段々と國歌になつたので有ります、其故に其の國々の風俗、氣候、地勢、宗敎、道德等に依て支配されるものですから、各々非常に其の性質を異にして居ります、此の事は一般論者の認めて居る所で厶ます。

歐洲各國の國歌、伊太利の「ガリバルディー」の曲、之れは其の當時の革命の氣風を表して居り、佛蘭西の「マルセイユ」之れも又暴君の壓制のもとに、自由を叫んだ歌、其他獨逸の「デイ、ワハト、アム、ライン」の曲等種々あります、皆其の國風を表して居らないものは厶ません、東洋に於ては、日本に「君か代」が有ると云ふ事を私は主張致します、或る論者は「君か代」は

陛下の萬歳を祝し奉る爲めに歌つたので、國民の歌でない、歐洲各國のやうに、其の歌を聞くと、血湧き、肉躍るやうなのでなければ、國歌とは云はれないと申します、私は其の說の大なる誤で有る事を主張致します、何となれば論者は日本の國歌を以て倭民族の氣風も知らず、只歐洲熱に浮かされ、徒に西洋音樂崇拜に陷たるもので、矛盾も亦甚しと云はなければなりません、日本の國歌が必しも歐洲の國歌に類似する必要は少しも有りません、且つ日本は元來平和的の性質を有して、朝日に匂ふ山櫻花の如き氣質を持つ國民に何して歐洲の如き詩想が湧き出ませうか、私は日本としての見解より歐洲各國の國歌を見る時は、只軍歌なりと認めます、軍隊の志氣を旺盛にし一度此の歌を聞く時は思はず秋水三尺の劍を拔かしむるの感ある歌は「打や懲らせや云云」の樣なもので有て、決して此平和なる日本の國歌とすべきものでない、然し之れを歐洲諸國の見地から云へば、立派に國歌たるの價値あるものだろうと想像致します、日本は元來忠君愛國を以て立つ國で、忠君は即ち愛國で有ります、陛下の萬歳を詠ふは國家の萬歲を詠ふので、純然たる倭民族の愛國心の髓より出たもので征服民族の氣候温和にして山川の美なる我が國



に於ては、何が故に軍歌めきたるものを以て國歌とする必要が有りませうか。

或る論者は又樂譜が陰氣くさいものだと云つて攻撃するが、之れは當を得ません、私は樂譜は決して陰氣で有ると信じません、論者は赤襦紅裙を翻して野卑に陽氣に踊て居るものと、白襟紋付に正服せる「レディー」とを混合したる誤謬に陷て居ると考へます、其故に俗に所謂陽氣と云ふわけにはいかないのは當然です、即ち品の有る樂譜で有ると考へます、此等の點に付いて私は「君が代」が國歌たるの價値ある事を主張するのであります。

さて現今祝の歌の第一は即ち「君が代」です、室町時代に謡曲、正親町天皇の頃に三絃に伴ふ長唄など出來ましたが、例へば御婚禮の時に高砂を詠ふなど、之等は公事に關しませんから、今茲には申上げません。今迄申した事を一括すれば、丁度三期に分つ事が出來ます、即ち自分勝手に曲を作けて詠た時代と、支那の影響を受けて稍々一定した時代と、殆ど一定した明治の大御代とに分つ事が出來ます。

舞姫

流石に詩中の鬼才を以て任ぜる與謝野晶子女史一家の調なり、この集に收められたるもの多くは飄逸にして他の妖艶、麗美なるもの少きがことごとく其の鎌ヶ岡の大佛像を形容したるものに

春の雨衆生すくひの大力者
ぬれていましぬさくらの中に

などは誠に奇品と稱すべし、やゝ凄絶なるものを擧ぐれば

人妻に高き名えたる黒髪の
うしろを見せて戸にかくれけり

などならんか、又柔和忍辱佛の御弟子の餘儀なくされし討死を詠みては

七つより袈裟かけならひ弓矢もて
遊ばぬ人も軍に死にぬ

ととぶらひぬ、又

菜の花の御寺も桃のおん堂も
佛うするゝ人まうでかな

などは―風俗畫報その儘なり、やゝ水彩的なるは

水を出でゝ白蓮さきぬ階の
うすら赤地の世界の中に

山かげを出しや五人がむらさきの
日傘あけたる船のうへかな

などならんか、與謝野寛(定價七拾錢如山堂發行)

露國革命婦人

横山天涯

○一月二十三日の騒亂

一月二十三日。

今、記者が机に對つて、筆を執つてゐる日より、丁度五十一日前即ち此の女學世界が讀者の前に現はれる四月五日より、僅に七十二日前に、浦鹽斯德に、一大騒亂の起つたとは、新聞紙の外國電報に注意して居らるゝ方は、何人も必らず御承知が有らうと思ふ。その結果は、ミシチエンコ將軍の出馬と爲り、革命派の遁竄と爲り、僅少ながら長崎港の如きは、一時は露國の革命有志を以て充滿した、のはつい此頃の事。

之は今更説明する迄もなく、昨年來露西亞本國に起つた革命運動の、その潮流を受けて、ドクトルフンコーフスキー等の捕縛されたのを動機として、極東に現はれたので、今に浦鹽斯德の天地は、妖雲慘憺として、暗黒の裡に蔽まれてゐる。

そして此の騒亂は、型の如く革命派の敗北に歸したが、その勝敗は兎も角も、此の騒擾に於て、自分の最も遺憾に覺へたのは、浦鹽斯德に於ては、特に青年の間にては「革命の母」を以て呼ばれてゐた、ドクトルウオルケンシテイン夫人が、大砲の矢面に當つて、黒烟の中に生命を落とした事で有る。

いざ、爰に情に温かき女學世界の讀者の前に、革命の犧牲と爲つたウオルケンシテイン夫人の經歷を訴へて、萬斛の恨を遺こして地下に入つた此の不幸の靈を慰めやう。

○夫人の生涯は一篇の哀史なり

ウオルケンシテイン夫人の生涯は、宛然一篇の哀史である、自分は詳細に入る前に、先づその略歷を話さう、夫人は、花の如き二十二歳の時に、すでに革命運動に加はり、二十四歳の時に、露人の間には「人界の地獄」と稱せられてゐるシリースセルブルグに投ぜられたのである。獄に在る事、十三年、刑期滿ちて、獄を出づると、今度はまた西比利亞に追放せられたのである。薩哈嗹島に在る事、五年、今より四年前、即ち千九百二年浦鹽斯德に住居を許されて、良人ドクトルウオルケンシテイン氏と同棲し、浦鹽斯德の地に自由の身と爲つたのも、ほんの束の間、その翌年には日露戰役起り、本國は千八百八十年代の當時と同じく、自由の聲四方に湧きて、極東に潜める身も心は本國に走つてゐたが、昨年十月三十日、大赦の詔勅出でゝ本年二月、夫と相伴ふて、本國に歸らんとしてゐた最先、一月二十三日の騒亂に不幸の死を遂げたのである。

露國には、此のウオルケンシテイン夫人の如き、牢獄と追放との間に生涯の過半を經つた人は二三では無いやうであるが、今日文化に

滑せる國にては、此の夫人の如き、轗軻の中に生涯を送つて、然かも悲慘の死を遂げた婦人は殆んど無いのである。そして、今、我國の版圖に入つた樺太南部には、幾多の紀念を遺こした、日本贔屓の此の婦人は、薩哈嗹島流寓中は常に日本人に親切を盡した婦人であるとを思ふと、自分は、なほ一層の感に打たれるのである。

○夫人の學校教育

夫人は、露國は中部の產といふ丈けで、郡名などは瞭然せぬが、初めて呱々の聲を揚げたのは、千八百六十年、丁度今より四十五年前である。

少年時代は、普通の小學教育を卒へて、直にギムナジヤ——我國で言ふと尋常中學と高等中學とを混同したやうな教育程度の學校に入つた。此のギムナジヤといふのは、普通教育を授くる傍ら、醫師の助手と爲るべき簡易の醫學をも教ゆるので、ギムナジヤを卒業した十九歲の年には夫人は最う醫師の助手と爲るべき資格を得たのである。醫師の助手たるを得た夫人は、學校を出づるや、間もなく、ドクトルウオルケンシテン氏に嫁づいたので、キムナジヤ卒業生たる一處女は、爰にリユドミイラ、アレクサンドロブナ、ウオルケンシテンと爲つたのである。

當時、ウ氏は、其の頃盛んに露國に行はれたトルストイ主義の殖民地で、農業に從事してゐたのであるが、ドクトルは露國人に通有した理想的傾向の人物であるのは言ふ迄もないが、夫人の烈しい氣象であると反對に、那邊歟と言へば、温順しい君子人——ウオルケンシテン氏はトルストイ主義の殖民事業に身を委して、穩やかに理想を追ふてゐたが、夫人は其人の平和事業を傍らに見て、當時露國の青年男女に活火(インスピレーション)を與へたウエラザスウリチ女史の行動に憧憬れてゐたのである。

この女史は、アレキサンドル二世在世の當時、大臣暗殺を試みて、露國の上下に喧傳された女丈夫、その裁判は、歷史に記るされて、今に評判が遺つて居るが、二十歲前後のウオルケンシテン夫人の心上に、此の女丈夫の行動が、無限の影響を與へたのである。其の頃、革命派を代表した人物は、ナロウドナヤウオリヤ氏であつたので

○夫人が革命派に動かされたる時代

ウ夫人の事は、ウエラザリスウリチ女史を出だした露國當時の時勢を說明しないと、夫人がウエラザリスウリチ女史の行動に感激した事情が瞭然して來ぬ。

夫人が呱々の聲を揚げた千八百六十年代より、ギムナジヤに醫學を學んでゐた千八百七十年代は、奴隸開放を行つた當時であつたので、一方には、富豪貴族の徒は、昏々として長夜の眠を貪つてゐたが、また他の

一方には、ツルゲーチフ、ガンチヤロフ、ドプリユコフ、ピーサレフ等の文豪出でゝ、平民の覺醒に力めたる結果として、社會の一角に、何時の間にか、インテリゲンチヤと稱する一階級——一種の志士社會が生じたのである。此のインテリゲンチヤは、「後悔したる種族」と呼ばれてゐるが、露國人の性情として、一國の文明進歩は平民の勤勞の結果なることを知つてより、しみじみと、平民を思ふの心起り、その擧句は、貴族の令孃にして、小學敎師の群に入るもあれば、富豪の長男で、百姓と爲るもなり、爲に露國の社會狀態は、二三十年前に比ぶれば、餘程異つて來たのである。ウオルケンシテン夫人が、ギムナジヤに入つて、醫師の助手と爲つたのも、此の風潮に動かされたのである。

學校時代に於て、すでに此の通り「後悔したる種族」の風潮に養はれてゐたのであるから、學校を出て、直にその無垢の心頭に革命の火を點じて、ウエラザリスウヰチ女史の行動に憧憬れたのも、無理は無い。

○夫人革命派に入る

當時革命派に種々の人物は加はつてゐたが、衆望を收めてゐたのは、大學敎授のラヴロフ氏であつた、氏は一種の見識を備へた社會學者で、露國では、ラヴロフ氏の社會學といへば、學者の間にも一派を爲してゐる、評判高き人物。恰かも夫人が革命派に眼を注いだ當時は、民間には前述の如く平民思想が醱釀してゐると同時に、政府は又たますます壓制の手を強めて、民間の有志者等に脅迫を加へて來たので、革命派も堪へ切れず、遂に非常手段を採るに至つたのである。此時、武裝團體より暗殺者として擇ばれたのは、ウエレホフ、及びキバリツチの二氏と、それにペロフスカヤ女史であつた、その結果は、アレキサンドル二世の暗殺と爲り、目的を果たして、世界を驚かしたが、暗殺それ自身は、首尾よく目的を果したが、アレキサンドル二世に勸めて憲法を出さんとした宰相ロリスメリコフは職を奪はれ、期待した自由は來らずして、却て革命志士の身上に大脅迫が行はるゝに至つた。左樣、當時の露國といふものは、丁度ウイツテを宰相とせる今日の露國に相等しく、露土戰爭の結果として、革命運動を促がしてゐるのは、日露戰爭の結果が、今日の騷擾を致してゐるのと殆んど相等しいのである。

ウオルケンシテン夫人は、此の風潮に驅られて、纖弱の身を提げて眞一文字に自由を呼ばるゝ革命派に投じたのである。但しペロフスカヤ女史は、武裝團に入り、暗殺の任に當つたが、夫人は秘密出版の事を以て、軍隊を煽動する遊説團に入つたので、直接暗殺の事

業には加はらなかつたが、露西亞全國の志士と連絡を通じ、軍隊を導いて革命を謀つてゐたのが事實で、着々と、此の大陰謀が、成就を擧げてゐる、中途に、計畫破れて、人界の地獄と呼ばれてゐるシリースセルブルグに投ぜられたのである。

○人界の地獄シリースセルブルグ

「シリースセルブルグ」

我國にて言つて見れば、鬼が住んだと傳へられた大江山に喩ふべき歟、併しながら、大江山の傳說は、お伽噺より來てゐるので、成人した者には、大江山といつても、別段恐るべき感情も起らぬが、シリースセルブルグといへば、幾十年、幾百年來、種々の傳說と歷史とを傳へられてゐたので、シリースセルブルグといへは、露國人の間にては、その名を聞いてだも、慄然と、肌に粟を生じて、恐れ戰くのである。

此のシリースセルブルグに關せる傳說の一ッを擧ぐれば、此の監獄は重罪者中の、情狀最も重き者を收容するのであるが、終日無言の中に置かれて、一房に一人。入口に、圓形のまん丸き穴を明けて、蓋が爲れてあるが、憲兵は十分乃至二十分每に巡回して、その蓋を上げて、鬼の如き眼を輝やかす、若し在獄者が身を横に、自墮落にして、行狀を怠つてゐると見れば、罵り叱つて、鞭を食はせる。——在獄中は、無論面會等は許さぬから、入獄中は、人間と離れ、社會と離れて、此世ながら、地中に生埋に爲れてゐるのである。左樣、露國にては、シリースセルブルグに入獄すると聞けば、生埋に爲れるものと思はれてゐる。

で、出獄者の言に依ると、草木も眠る丑刻頃に爲ると、狼の如き叫びの聲は、寂寞を破つて耳を劈く、之は在獄者が、苦悶に堪へ兼ねたその呻聲の叫、夜間、此の呻聲を聞くと、得ならぬ悲愴、凄慘、寂寞の感を覺ゆるので。それかあらぬか、此の監獄に入ると、多くは發狂するものである、そして氣の強い者は、獄中に在つて、生命を縮くるよりも、寧ろ死するを勝れりとして殊更に獄吏に亂暴を働らき、甘んじて銃殺される者も多いので、……………ウオルケンシテン夫人は、一人界の地獄と呼ばれてゐる此のシリースセルブルグに

投せられたのである。此時、僅に二十四歳。

夫人は、此のシリースセルブルグに在ること、丁度十三年。三十七歳の時に、初めて出獄を許されたが、獄を出ると、今度は、又……ア、女學世界の讀者よ、夫人は、シリースセルブルグに苦楚を嘗むること十三年、婦人の盛春時代の殆んど全部を滅却せられたるに、此の人界の地獄を出でゝ、ほつと一と息吐く間もあらず、又もや胡沙吹く西比利亞に追放せられたのである。

○流竄中の著書

夫人は、シリースセルブルグを出でゝ、西比利亞に流されると、露國の刑法は、國事犯罪人といへば、大低薩哈嗹島の北部に置のを普通とするのであるが、今長崎に來てゐるドクトルキリーロフ氏等の盡力で、南部に住むことを得たのは、夫人の爲に幸福であつたが、良人と別れ、子供と別れて、獨り配所の月を眺めた夫人の心事を思ふと、覺へず同情の涙があふり零つるので。

斯くて、夫人は今我國の版圖に入つた薩哈嗹島に幾月日を送つてゐたが、過ぎ去つたシリースセルブルグ在獄の當時を顧みて、感慨に堪へなかつたが、此の薩哈嗹島流寓中に、「シリースセルブルグに於ける十三年」といへる著書を思ひ立ち、稿を脱して、三四年前に、英國在住の同志の手に依つて、倫敦で出版されたやうに聞いてゐる。夫人は、著書の傍らには、また日本人と親しんで、露語等を敎へてゐたこともある。

○十八年目に良人と會す

ウオルケンシテン夫人は、右に言つたやうに、牢獄と追放との間に送つて來たが、顧みて、トルストイ主義の殖民事業に從事して、理想を追ふてゐた良人ウオルケンシテイン氏は、其の後如何してゐたかと言ふに、靜かに夫人の消息を待つてゐたが、シリースセルブルグに入獄後は、杳として消息なく、三年待つても、五年待つても、何等の消息が無く、其の筋に生死を質すと、何時も返答は曖昧、後には親戚を初め、同志の間にても、政府の壓制の犠牲と爲つて、夫人は死せる者と斷定せられたので、後にはウオルケンシテン氏も思ひ諦めて、第二の妻を迎へたのである。

然かも、夫人は不思議にもシリースセルブルグに死せずして、西比利亞に追放せられて、生存してゐたのである。それと聞いたドクトルの驚愕は、幾何であつ

たか。自己と境遇を同ふした者でないと此の驚愕が判らぬと、同氏は常に語つてゐたが、蓋しドクトルの此の言は、實情を現はした言であらう、――露國政府の暴惡は、神の導ける夫婦を割いて、謂れなく二重結婚の大罪惡を犯さしめたのである。

ウオルケンシテン氏は、ポルタワにて、夫人の存命を聞くや、後妻と相談の上、遙々西比利亞に尋ねて來た、花の如き青年男女は、半白の男女と爲つて、爰に十八年振に邂逅したので。…………間もなく夫人は浦鹽斯德に自由住居を許されたので、ドクトルは、同地に醫院を開き、夫人は助手の任に服して、その傍ら青年を集めて、社會思想を皷吹してゐた。思ふに、薩哈嗹島南部より浦鹽斯德に移つた一年間は、夫人に取つては、最も幸福の月日であつたらう。

○日露戰爭――革命運動――大赦――落命

上述の如く、千九百二年に、浦鹽斯德に醫院を開き、良人ドクトルは組合團體の會頭と爲り、夫人は内助に與つて、西比利亞の同志と語らつてゐたが、間もなく日露戰爭起り、ガポン僧正の憲法請求を機會として、本國には革命運動起り、日露戰役の敗北は軍隊の間にも、革命思想が普及されて、ます／＼大時機の到るを示して來た、夫人は獨り矢坪に入つてゐると、昨年十月に大赦令出で、本國に歸ることを得たので、昨年末より、良人を促がして、歸國の準備に取り掛り、本年の二月に、本國に歸らんとしてゐた丁度其の最先。

本稿の最初に掲げた一月二十三日の爭亂は、不意と、浦鹽斯德の天地に起つて、夫人は、要塞兵の放てる大砲の黑烟の中に、悲惨の最後を遂げたのである。アヽ何等悲慘の生涯ぞや、記者は親しく夫人を知らぬが、その生涯を見て、悵然として言ふ所を知らぬのである。…………併しながら、此の不運の經歷は、無言の長詩を綴つて、長へに革命の士を皷吹してゐるのを思ふと、夫人の靈も或は慰む所あるであらうか。

* * * * *

一月二十六日、浦鹽の地に、夫人の葬式が行はれた、天、掻き曇りて、大砲を放てる要塞兵も、竊に首俛れて、夫人の不幸を悲しんだやう。會葬者一萬、浦鹽附近の露國人は、悉く集つて、嚴肅に此の自由の犧牲者の葬式は行はれたのである。吊辭を讀んだ者は、十數人。何れも夫人を追想し、その人格は幾方面より觀られて、種々の逸話は出たが、艱難の爲に節を變じなかつた、志操の堅きを稱へたのは、それは符節を合はす樣であつたとか。…………その

後浦鹽より來る通信に依れば、夫人の紀念として、有志の間にては、夫人の名を附した病院或は學校を建設せんとする相談中であるといふ。

ウォルケンシテン夫人の經歴は、同夫人の知人にして、目下東京に來つて、我國の社會事情を研究しつゝある波蘭人ビルスウッキー氏より聞ける者多し、記して、同氏及び同氏を余に紹介せられたる長谷川辰之助氏に謝す。

家庭と建築

▲主婦と家屋――家と主婦とは最も關係が密接なものでありまして、家屋の事は主婦たるものが最もよく心得て居らればならぬ答でありますが、日本の婦人には建築と云ふ思想が皆無でありまして、私共が建築を請負ひます時でも、主婦の考案になる處は一つもありません、主婦の居間は素より臺所と云ひ、子供部屋と云ひ、各々自分に直接の關係ある所でありますから、自分が働くに都合のよいやうに作り、工事の監督位ゐは出來るやうでなくてはならぬかと思ひます。

▲室内の掃除――西洋館なぞを建てられても、日本の婦人には掃除の仕方が知れて居りませんから、掃除が甚だ不充分であります、假令ば一室の掃除は何處から始めるのが順序であるか、拭くがよいか、掃くがよいか、天井裏の掃除から板の間の掃除に至るまで、夫れ〲順序方法が整然としてあつて、其拭く用具にさへ種類がありますが、日本の婦人は一切其邊の心懸けがありませんから掃いた爲めに美術の置物を毀損したり、濡れ雜巾で拭いた爲めに金物に錆を出したりし、西洋室を使用する用意がまだ不充分であります。

▲家屋と衛生――家屋と衛生は又密接のものでありまして、是等も主婦たるものが最も注意を拂はればならぬ所であります、家の向き方窓の明け方、間取りの取り方、便所のつけ方等一々其法に叶はれば、家庭には病人が絶へぬとになります。

▲臺所の構造――臺所は主婦の働く可き戰塲でありますから、主婦の働きに都合の宜敷き樣作られればなりません、此處を建てる時は棚の作り所から、水の流し工合等一々主婦の意見に依つて定めるやう進歩せればならぬと思ひます。（建築業者田中綱吉氏）

信仰の力

○信仰と云ふものは人間が世を渡る一つの楫でありますから、男女共に必要であるが、殊に女子に取ては最も必要であります、家庭紊亂とか道徳の腐敗とか云ふ樣な忌むべき厭ふべき事は、信仰の堅い女子に依て救はるゝことがあります、又た勇氣なく多く引込思案の女子でも、信仰の力に依つて偉大なる活動をなすことがあります、故に信仰は女子にとりて最も尊き靈藥であります、

○日本の女子は一般に遠慮勝であります、假令ば慈善事業や社會事業に盡力しやうとは思ひながら、世間の手前に遠慮して、折角思ひ立つた善事も放擲して引込んで了ふと云ふ傾があります、是は昔女大學や朱子の中學を讀んだ習慣から來たことで、教育ある人程餘計に遠慮をされる樣に思はれます、此事は遺憾ながら日本女子の一大缺點であると斷言されます、けれど何の宗教に拘らず、一の信仰を有して居る女子は、非常に決心の堅い所がありますから、割合に遠慮を致しません、女子と雖も此の世に生存して居る以上は、いろ〳〵の仕事、つとめがあります、故に何によらず、世の爲めになすべき事と信じた時は、世評を意に介しては居られません、止むに止まれぬ熱情から始めて眞の活動が出るのであります故、遠慮をして居るのは、未だ信仰が足りないからであらうと思ひます。

○女子は社會に對して決して無責任なものではありません、殊に今後の日本は大和女の眞價を世界に紹介すべき時であるから、敢て諸外國人に譲らず、社會人類の爲めに盡すべき大責任があります、腕力の事と違つて思想界の働きは、優しき女子の手を待つ事が多いのですから、女子なればと云つて遠慮せず、各々主義の爲めに働くは社會に對する女子の責任であります。

○多くの日本女子中には、同情の涙を有する方も澤山ありませう、又社會の進歩の爲めに盡力して見たいと考へておいでの方もありませう、燃ゆるが如き高尚な女子の感情より迸り出づる活動は、男子の夫と相俟つて、實に尊むべく重ずべき、社會の必要物であります。さて女子の手を待つ問題はと云ひますれば、先づ家庭の改良を始めとして、男女學生の風儀、奢侈の風俗を矯正してゆくのは勿論の事、病める者餓えたる者、憂に沈める者等に同情を寄せて、慰め且つ勞つて救ふといふことが重なる仕事で、其他數へ立つれば、今の日本の社會に於ては、女子の手を待つべきもの決して少くないのであります。（矢島楫子女史）



水を清むる法

醫學博士　緒方正規

左の記事は過日緒方博士が學士會院の例會に於て述べられたる學説の大要なり文責は記者に在り。

水は、家事、飲料、醫療、その他種々なる事に用ゐられて、極めて重要なものだが、その中には、黴菌や不潔物を、澤山含んでゐるから、餘程注意して用ゐないと、虎烈剌、腸窒扶斯、といふやうな、傳染病の媒介となることがある。「水を清むる法」といふのは、即ち、斯かる不淨な物を、水より全く排除するとか、殺すとか、或は少くする、といふやうに、水を無害のものとする事をいふので、これには、色々な方法がある。第一は、

▲水を煮沸して清むる

ので、一度、水を百度に熱するときは、その中に有る黴菌や原球などは、五分間位で死んでしまうから、用ゐても害は無い。併し、一度煮沸するときは、水の美しい味や、清涼な味を與へる炭酸瓦斯が無くなるから、その儘飲むのは餘り好ましくない。そこで茶なり珈琲なりで、味をつけるのであるが、或は一度煮てそれを冷やして又瓦斯を入れて飲むとにするやうな裝置の器械もあるので、ジーメンスの水の煮沸器械なぞは、

隨分廣く用ゐられてゐる。第二は、

▲水を氷らせて淸むる

ので、水が氷結すると、黴菌も少なくなつて、殆んど純良水のやうになる。彼の霜柱は、土の中の水が氷るのであるが、これを見ると上と下とは不透明で不潔なれども、柱の眞中の部分は、透徹つて、立派な結晶に爲つて居る。人造氷などでもやはり透明な部分と、不透明な部分と有つて、雙方を較べて見ると、不透明な方は透明な方よりも何十倍といふ多數の黴菌を含んで居るから、食用、外科用などには、透明な方を擇ぶのが肝心である。次が、

▲水を蒸溜して用ゐる

のである、海水を飲まねばならぬ時に、まゝ用ゐて居るが、これでは中々飲料に足りない。此方法に依ると、海水中の食鹽、コロールマグチシヤ、其他有機物なども分解して、蒸溜水に、アンモニヤの臭氣や、魚の香を呈するから、これを除く方法として、蒸溜水を器に取つて、石灰を混じて温めると、黴菌は死んでマグネシヤは沈澱する、これを取除いて更に蒸溜すると、アンモニヤを追ひ出すが、尙ほ少し殘るから、タンニン酸小量を入れて温めると、良い水が得られる。併し生温るい蒸溜水を飲むと、嘔氣を起すから、それを冷やして振盪して、空氣を含ませるか、或は小石、大理石の類ひで濾して、一定の空氣と酸類とを含ませて用ゐる。斯うして製つた水でも、害となるほどではないけれども、黴菌を多數有つて居る。又

▲電氣で黴菌を殺す

のもある、即ち、鐵管の一部に、電氣裝置を施して、強い電流を通わせると、水中の黴菌は殺される。たゞの管ではいけないから、絶縁したものを用ゐねばならぬが、その仕掛はちと面倒になる。

又右に述べた種類とは、少し趣が異つた器械的の濾過法にも、亦色々あつて、その一は、

▲砂漉しにして用ゆる

のである、東京の水道などは是の方法ですが、大都市の住民に給水するには、餘程大きな給水箱が要る。

細い砂で水を濾す中に、黴菌數が減ずるので、七千分の一位までに減ずることが出來る。一家内で用ゐる爲めに、桶に砂を入れて遣つてゐるが、僅かの砂では仕方が無い。此種の水濾器械は、隨分澤山に出來てをる。

▲石炭、木炭、陶器などで濾す

のも亦一法である。併し、十分に濾すといふとはむづかしい。止だ此種のもので、パステオルシヤンベランド濾過器といふのは、細かい緻密な陶器製の至極完全な物で、これならば大丈夫。醫者ならば、ヂフテリヤなんかの血精に使つてもよろしい。ベルクフエルド濾過器といふのもあるが、これは河中の不潔な土を燒いて製へたもので、多く行軍なぞの時に用ゐる。北清事變の時には英米の軍隊は各中隊に一つ宛これを備へてゐたさうで、一時間に、一中隊の水筒に滿たす丈の水を、濾すことが出來るといふ。



尙ほ、水を清潔にする爲に化學的の藥品を用ゐる法がある。これにも種種有つてその重もなるものに、

▲明礬或は石灰を混ずる法

がある。即ち、一は、水五合の中に明礬〇、四瓦を入れて、暫らくすると、沈澱物が出來て、その上澄は、奇麗な水になる。これも、專賣特許の器械が出來てをる。東京の水道でも、雨が降ると、水が白く濁つてくるから、その時には此法を用ゆるがよい。も一つは石灰を水に混ずると

きは、炭酸、重炭酸、鹽類の炭酸と結び合つて沈澱物が出來、黴菌と共に沈降するので、石灰自身にも殺菌力を有してをる。斯うして得た水に炭酸を加へて、石灰を取除いて後飲料に供する、これにも專賣特許器械がある。

▲臭素加里とブローム水

とを溶かして水に加へるときは、五分間位で、黴菌は死んでしまう。其他、亞硫酸曹達、或は亞硫酸曹達と炭酸曹達液とを混じたものを、少しばかり水に加へるときは、黴菌が死ぬとは横手博士の實驗談。又コロール酸水と、コロール石灰との混合物は、水一リートルに、〇、〇〇四位を加へて、攪せて置くと、五分か十分位で、黴菌は死ぬそこでまだコロールが殘つてをるから、それを除く爲に次亞硫酸曹達を加へて飲む。其外にまだ、色々藥品を用ゐて水を清むる法はあるがまづ此位にして、も一つ風の變つたのを話して置かう。

▲オゾーンで水を清むる法

オゾーンを水に觸しむるときは水中に含有する黴菌類は悉く死んでしまう五石の水に、一瓦のオゾーンで十分である。その殺菌力の强いのと他の藥品のやうに、水にオゾーンを殘さぬ爲に近年に爲つて、非常に廣く用ゐられて來た。オゾーンは、大氣中に有つて暴風、驟雨、燃燒、蒸發、雷鳴の時などに、其分量が增して來るが、これを人爲で製する法は、エーテル水を、少許入れた壜の中へ、白金の螺旋條を燒いて挿入するときは、その中に雲が出來る、これはオゾーンが多量に含んでゐるのである。又、オゾーンを電氣作用で製出する專賣器械もあつて、獨逸のジーメンハスケ工場なぞでは、盛んに之を製造してをる。此方法で淸めた水は着色や臭氣も無く味ひも良い。エルワイン氏などはその水の價値は、砂濾の分と同じいと言つて居るから多數人民の供給に用ゐてもよろしい。

一家の財産調べ

財産の上より見たる日本人の一人前

俠禽

計算といふものは無味乾燥なものであるけれども、人間世界は萬事萬般この計算で成り立ち一家の盛衰から國の興廢まですべてこの計算から考へなければ本統でない。そこで今、日本の國勢を統計上より調べて見ると、まづ吾々日本人は幾何の財産を有つて居るかといふに、日本全國の同胞は近頃五千萬と數ふるやうになつて來たが、未だ五千萬には少し手が屆かぬ、先づ四千八百萬と見做さば宜からう、所で我が國の國富の調査を見ると大藏省では百貳拾五億圓と見積つてあるが、これはずつと內輪の計算で、實際はもう少し多からうとの說もあるゆゑ、大凡百五拾億圓と見做して一人前に割當つれば約參百圓となる、英吉利の國富は一人前貳千五百圓、佛蘭西の國富が一人前貳千參百圓、北米合衆國が一人前貳千壹百圓だと云ふとなれば、我國を貧乏國と云はれても殘念ながら是認せねばならぬわけである。然るにその家屋を煉瓦石瓣にし、その服裝を絹布にし、その飲食や器具を膏粱金玉にして紅寶石の指環、金剛石の首飾、白狐の襟掛を求めて、彼我交際場裡に競爭せんと憧るゝハイカラ女流は少しは國富、財產の手前遠慮せなくてはなるまい。

さて財政經濟上に我々日本人の地位は如何であらう。先づ年々の歲計豫算、即ち中央政府のお臺所の費用が貳億五千萬圓、これを全戶數八百萬戶に配當して一戶の負擔が參拾餘圓となる、この參拾餘圓は岩崎、三井のやうな富豪も其日稼ぎの日雇人、大道で飴菓子を賣る者も皆押なべての計算である、で一人前五圓餘に當る、之を一日に割當つれば約壹錢五厘で、我々日本人は國家の爲に日々壹錢五厘宛を拂はねばならぬ、これは女子も老人も嬰兒も押しなべてゞあるから、隨分輕くない負擔である、而もこれは中央政府の國庫に

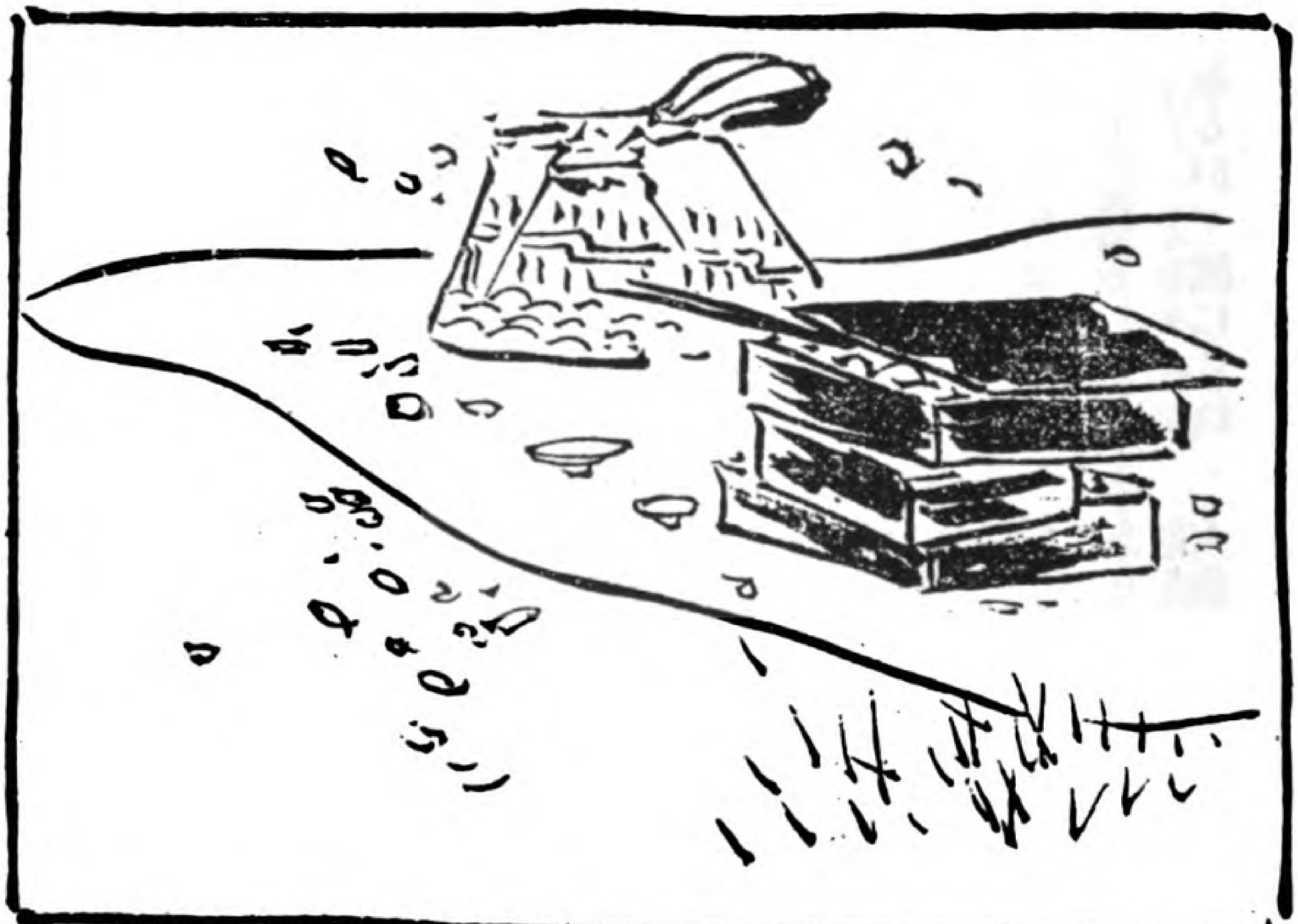
收入せらるゝ分のみに限つた話でまだ此他になほ地方税即ち府縣費もあり、郡費、市町村費と云ふものもある、此府縣費が參億五千萬圓、郡費は僅かで壹千五百萬圓、市費が凡壹億圓、町村費が參億圓は慥にある、之を合算すれば七億六千五百萬圓の巨額となり、國庫の分に比ぶれば三倍強に當る、即ち一人前の負擔額が約そ拾六圓となる、それに前の國庫の分を合すれば、貳拾壹圓に上り、之を又一日として見ると約六錢に當る、されば我々日本人は兎に角富豪、貧人押なべて一人前この六錢を拂はなければ我國民たるの義務を果せぬものと見て差支へない。

然るに我々日本人一人前の財產が前に割當た參百圓しかないから、今此參百圓を充分高く見込んで年六朱の利息を生み出すものと見積るも拾八圓にしか廻らぬのに、前述の貳拾壹圓餘の負擔を拂はなければならぬとすれば、到底日本人は財產の利息ばかりでは稅金さへ拂へない勘定であるから、そこで皆樣達お互に稼がねばならぬとが明白でありませう。戰爭後の日本人は誰も彼れも皆汗を出して働かねばこの大負擔を斬り拔ける事は出來ないのであります。

以上は只國家の入用たるべき經費即ち日本政府一家の生活費であるが、猶この外、國民の負擔となるべき國家の負債がある、即ち國家の借金といふものがある、今回の戰爭によつて國家の借金即ち國債の高は一時に激增して內外債を合すれば貳拾五億圓にも上つて居る、併し昨年末の外債五億圓は內外債を償還するの目的であつたと云ふからこれを除き先づ貳拾億圓と見做して、我々日本人一人前に四拾餘圓、一戶に付貳百圓の負債を背つて居る勘定である、此外に府縣債、郡債、市町村債と云ふものもあつて之が約五千萬圓、一人前壹圓餘に當る、故に前述の一人前參百圓の財產と云ふのも、此負債を差引いて見ると其實一人前僅々貳百六拾圓位にしか當らないのである、此貳百六拾圓計りの財產で貳拾壹圓を拂ふて行くには隨分骨の折れる譯で、輕からぬ負擔と言はねはならぬ、又國債が貳拾億圓あるとすれば其利子を年五朱としも、壹億圓は、

是れを國民一般の負擔とすれば毎一人一年貳圓づゝ拂はねばならぬ勘定となる。

　それから今度は流通貨幣の方の勘定を少し窺つて見ませう、現今の通貨の流通高は幾何あるかと見るに、通貨と云へば正金もあり兌換劵(紙幣)もある、正金には正貨(金貨)もあり、補助貨(銀貨、白銅貨、銅貨)もあるが、此正金の流通高といふものは確に分らない、大藏省の報告に係る發行高といふものはあるけれども、これは發行したと云ふ高であるから其中羽がはえて外國へ飛んで行つたものもあれば、內地で鑄潰したのもあつて、それは幾何とも分らぬが、實際流通して居るのは此等の殘りの補助貨に過ぎないであ



らふから至つて少數と見て宜しからふ、されば兌換劵發行高を以て直に流通高と見做しても大なる相違はあるまい、即ち兌換劵の發行高といふと昨年十二月日本銀行報告を見れば、貳億六千參百餘萬圓となつてゐる、戰爭の結果でもあらふが中々多額と云はねばならぬ、之を一人前に割り附けると五圓四五拾錢となる、最も銀行を始め商業の取引には多額を要するとは云ふまでもないとだが、子供までが五圓以上の金を懷にして居らねばならぬといふと、誰が見ても多過ぎるとも分り、物價の騰貴する理由も知らるゝであらふ。

　そこで今是等の計算を數によッて示して見ると大要左の如くになるのである。

日本國富の總高	△百五拾億圓
一人前の財産高	△參百圓
財産より得る一個年の利息	△拾八圓
中央政府に收入する國稅	△貳億五千萬圓
毎一家國稅の負擔額	△參拾圓餘
毎一人の負擔	△五圓
毎一人一日國稅に對する負擔割	△壹錢五厘
地方費の年計總額	△七億六千圓
毎一家地方費の負擔	△九拾六圓
毎一人の負擔	△拾六圓
毎一人一日地方費負擔	△四錢五厘
國債總高	△貳拾億圓
毎一家國債の負擔額	△貳百圓
年五分利として國債の利子	△拾圓
毎一家の負擔	△貳圓
毎一人一日の負擔額	△六厘

右は國家の上から見た財産調べであるが、試にこれを一家の上に施して收支の計算を立てゝ御覽になれば一家の盛衰、分限も自から明かになるわけであります。

飲食物の上より見たる日本人の一人前

飲食物の主要なるものは米である。

△米　米は我々日本人が常食の主要品で、年に豐凶の違ひはあるけれども先づ平作を四千萬石と見て、人口四千八百萬なれば一人前一個年八斗三升餘にしか當らない、之を一日に割當つれば二合三勺しかない、所が米は殘らず常食とする譯でなく其中で酒、菓子、糊等にも、取る所尠なからぬから如何とも心細い感じがする。尤も此米には輸出もあり又輸入もある、內地米作の豐凶により、之に變化を與ふるは云ふまでもないが平年の輸出米が五十萬石、輸入米がその八倍で四百萬石、差引三百五十萬石の輸入米を加へて勘定すべきであるが、金高で云はゞ參千五六百萬圓にも上れど、一人前に割當つれば一勺にも足らぬから、此位の輸入で前の勘定にはさしたる影響はない。

△麥　大麥、小麥、裸麥を合せて貳千萬石が平年作と見

做した所で、此麥類は馬にも牛にも喰はせ、又醤油、菓子等ともなり、その常食にする分が此の半分と見たら大差なからふ、而して半額一千萬石で一人前一日四勺位に當る、尤も此麥類にも輸出もあり輸入もあるが輸出の分は至て少額で數ふる程もない、併し輸入には麥粉其他米粉を合せて大凡二億斤もある、之も麵包或は菓子等となるものもあれど、假に常食となるものと見て一人前一ヶ年四斤餘となり一日分二勺弱にしか當らない。

△△雜穀　粟二百五十萬石、稗九十萬石、黍三十八萬石、合せて三百七十八萬石この三種を混淆して一人前一日一勺にも足らない。



併し以上米、外國米、麥、雜穀まで殘らず合算すれば五千五百二十八萬石となり、一年に一人前一石一斗五升餘となり一日三合一二勺に當る、之に麥粉の二勺とで漸く我々は命を繋き居る次第である、

△△副食物　大豆四百萬石、小豆九十萬石、蕎麥一百萬石甘藷と馬鈴薯とで一億四千萬貫目あるが、這て勘定に入れた所で幾何にも當らないとは明であらふ、肉類は屠牛數が先づ二十萬頭にて五千萬斤一人前一年に一斤餘しか當らない、此外馬が五萬頭で七八百萬斤、豚が十萬頭でこれ亦七八百萬斤、合計六千五百萬斤これで一人前一年に一斤半に當らぬ位だから、我々は肉食は出來ない。

△鹽　平年製產高が六百萬石として一人に付一年三斗二升五合に當り一日三勺五才となる、此鹽にも輸出もあり輸入もあるが、輸出は近年頓と減退して算ふる程でなく、輸入も僅か三千五百萬斤位なれば、假に一斤一升と見ても三十五萬石にしか當らざるゆゑ一人前として幾何でもない、勿論此鹽はそのまゝ食すると云ふにあらず、醬油、味噌、漬物等の鹽味となり、他の食物に調和して用ゐらるゝのであるが、日々三勺五才悉く人體内に入らずとしても、隨分需用の多いものと云はねばならぬ。

△砂糖　その產額は七百萬斤、それも大部分は臺灣にて作るのである、無論内國產に相違ないが、それにしても我需用高の幾何にも當らない、今日我が輸入高は實に四億斤の多額に上つて居る、内國產の殆んど六倍である、消費高合せて四億七百萬斤一人前一年に約八斤一日一人四匁弱に當るこれを見ると中々砂糖も甜められるものである鼻の下の空殿こそ恐ろしきものなれ、

△酒　釀造年額が先づ四百萬石、此外輸出として麥酒、葡萄酒等の洋酒類が七八十萬石であるが、その代りに日本酒の輸出も六七十萬石に上つて居るから差引幾何でもない、所で此酒は女子でも子供でもと云ふわけでないから、成年以上の男子を千五百萬人とし、その又半分を下戸とすれば、上戸は七百五十萬人なり、されば上戸一人一ヶ年に五斗三升を呑む割合なれば、一日一合五勺に過ぎない。

さて此外内國產の洋酒は幾分酒の補足になるであらふが、これとて其生產高は未だ一人一日に割當てゝ右の打算に影響を及ぼす程に達して居らないから、上戸でも一日に一合五勺以上を飲んでは、一人前を超過するわけゆゑ遠慮した方が宜しからう、

又砂糖は文明國ほど多く用ゐらるゝと云ふとであるが、我邦では製產高は僅かで大部分は輸入を仰いで居る所であるから、餘り砂糖を甜め過ぎて文明國人だのと、胃腸を起さないやうにして貰ひたい、

又鹽は昨年專賣となつてから價格が騰貴したので隨分八箇間敷くなつたが、さて一昨年は專賣となるのを

見越して、其上天氣都合が宜しかつたので製鹽高が七百五十萬石にも上つたが、昨年は之に反して雨天の多かつた爲め製鹽上に大阻碍を來して、三割方も平年より減少したと云へば四百萬石そこ〳〵であるべし、一昨年の多かりし高よりも昨年の減り高が多かつたのであるから、專賣にならずとも騰貴するは當然と見るべきである、さて鹽は酒や砂糖のやうに好きだからとて澤山に甜めたり飲だり出來るものでなく、又金がないからとてなしに濟さるべき品でなく、上下貧富の差別なく一樣に缺くべからざる必需品なれば之を專賣として政府の利益を計るは多少に係らず人頭稅とも云ふべき厭ひがある、世に非難の聲の高いのも有理な譯であるが、併し一方からいふと日本人は鹽に對してまだ十分經濟的思想が發達しない、それは彼の漬物である折角等力をかけて結晶させた鹽を水分の多い菜つ葉などを漬けて其の汁を水にして棄て仕舞ふ、これは鹽に對して課稅のなかつた古來の習慣で一時に改める譯には行かぬけれども、これが若し支那などであれば漬物の鹽汁を棄てるなどの事は決してなく、必らず他に利用するか左もなくば壓を置いて水を出すなどのやうな事はないのである。今右飲食物の計算を數量に示して見れば



△米　八斗三升

一人前一個年間に需用する米

△麥　二斗一升

一人前一個年間に需用する麥

△雜穀　四升五合　一人前一個年間に需用する雜穀

△牛肉　一斤餘　一人前一個年間に需用の牛肉

△豚肉　三十匁　一人前一個年間に需用の豚肉

△鹽　一斗二升五合　一人前一個年間に需用の鹽

△砂糖　八斤　一人前一個年間に需用の砂糖

新奇なる家屋の構造

RT生

人に衣食の必要なる如く、家屋も亦必要缺く可らざるもの、而して家屋の建築につきては種々の區別あり日本人の瀟洒淡泊なる家屋、西洋人の嚴肅重莊なる家屋、共に一種の建築法なり、その他アイヌ土人もエスキモー人も亦各々一種の家屋建築法を有す、然らば吾人が所謂理想的家屋なるものは、何を標準とすべきやと云はゞ、經濟と衛生に最も便宜なる家屋の構造を云ふなり。

先づ家屋を選擇するにつき第一に心を用ゆべきは空氣の事なり、空氣の必要なるは飲食物と其優劣を見ず寧ろまさるものあり、何なれば人は食物なきも一週間位の生存を保ち得べきも空氣なきに於ては十分間も生命を支ふる事能はざるを以てなり、故に空氣は家屋に十二分に其流通を適宜にすると共に新鮮なるを要す、家屋の如き覆塞したる内にありては、空氣は啻に塵埃等の爲に汚染せらるゝのみならず、家人の呼吸によりて亦腐敗す、英國の某醫學博士曰く、人若し予は腐敗せる食物と腐敗せる空氣と孰かを選ぶべしと強るものあらば予は寧ろ腐敗せる食物を採らんと、以て空氣の忽諸に附すべからざる所以を見るべし。

次に吾人の生存上缺く可らざるものは日光なり、羅馬人の諺に日光の來らぬ處必ず醫者來ると、光線のあらざる所には如何なる生活物も或は萎靡し或は死沒す、見よ日向と日蔭の胡瓜とに其生育上非常なる差ある如く人間にも日光に出でゝ働く人と日影にて一生を過す人とは其顏色を見ても直ちに判別し得るにあらずや、また世界の人種の上より言へば熱帶地方野蠻人

の概して徒足裸體なるも、其容貌骨格强壯にして、到底北方寒國人民の企及する所にあらず、彼の露國の小兒の多く貧血症に罹る所以は、重に日光の不足に歸因すと、以て如何に日光が吾人人類の生活上に大勢力を有するかを見るべし。

さて吾人は人類生活上に最大必要なる空氣と日光の事情を略說したればこれより如何にして家屋を構造すべきかに及ぶべし。

家屋の地所は成べく高燥地を選むべし、高燥の地は空氣の流通宜しく、炭素は窒素、瓦斯、塵烟等其他有害なる鑛物質、有機物質を混同せず、又衛生的學理的より言ふ時は、日本造りと西洋造りとを問ず、淸潔にして快活なるを撰み、家屋も新しく床は高く、床下は風通しを能くし、家屋の周圍には瀦池、沼澤、溝渠等を避け、諸種の製造所、工業場、停車場、魚鳥市場の近傍を避け、且つ其周圍に大建築又は高塀あるを避け、四邊は四時の草木を植ゑて空氣を淸新にし、かねては眼目を樂しましめ、また堅牢に溝渠を通じて遠く汚水を導き去るの方針によれば先づ完全なりと雖も、こは人々の業務の種類と生活の程度によりて、實行し難きもの多からん。



然れども吾人が常に注意すべきは空氣、日光にして之に亞げるは水なり。

今爰に某家屋通の理想的家屋の話を引用し見ん。

まづ塀（板塀にても、生垣にても土塀にても築地にても其人々の好みに任す）を以て取り圍み、正面に門を置き、玄關に至るまでは敷石を敷き、玄關の左右には木戸ありて內庭に通せり、其の庭には樹木を植ゑ、小兒等の運動場とし、後庭は菜園として主人又は主婦其他家人が園藝を試むべき場所となし、兼ては衣服等の乾場とすれば樹木なきを宜とす。

さて居室と客間に大衝立を設け其位置の移動に從ひて一室を兩分し、又は隨意に室の廣狹大小を爲さしむるの用に充つ、頗る便利の工夫なり、其幅はこの室の横徑に同一ならしめ、一方の端に一の耳門を設けて往來に便にし、且つ扉扇を設けて開閉自在ならしむべし而して其客房に用ふるものは、普通の衝立の製にならひ、又相當の粧飾を施すを可とす、其便室の方に用ふるには、其表面は薄板を釘附けて外面に壁紙類を貼りつけ、其裏面には數多の衣裳懸を設けて衣帶を懸け又は家什を藏するに便にす、而してその裏面は寢室に當て、衣服、調度の取扱ひを便にす、隨ひて簞笥、用簞笥等を備ふるの手數を省かるゝなり、此外十數個の小匣を件の懸楣に載るに充て又二三の抽斗を設けて貴重の物品、緊要の書類等を藏すべし、而して此衝立を造作せんには、其高さを六尺以上とし、障外と相望むなからしめ、又其轉覆を豫防せば、かゝる新奇の衝立は家屋の緩急に應じ一方ならぬ便利といふべし。



右は中等社會以上專ろ上等社會につき、家屋の構造を理想的に書き出したるものなり、中等社會に於ても此標準に依らば經濟と衛生に適ひ、又簡易の生活を爲し得らるべし、今日上等社會は詮方なしといへども、中等社會にて相互に城廓を構へ、生活及び交際の上に自家と他家との圓滑を缺き、これが爲めに煩雜にして不經濟なる生活を爲すは甚だ惜むべし、華麗を競ふ佛國巴里にてすら中等社會の生活は大抵共同の生活を爲し、數家一屋宇の内に生活し、數家共同して一人の下女下男を使ひ、すべて時間と秩序を以て最も簡易に生活を爲し行く下等社會の生活に於てもまた然りと、我國の長屋の住居を見るに中等社會以上と等しく相互に城廓を設け、不便利なる活計を爲し行くは愚策といふべし、吾人の主義より言へば今日の長屋の如き不潔不完全にして外觀見るべからざる家屋の構造を廢し、之に代るに、なるべく廣大なる家屋を構造し、二層階、三層階、または五層階と爲し、而て廻廊等を設け互に往復するに便ならしめ（病院下宿屋の如く）且つ飯を炊くにも數家共同にし、水を汲み火を燃し、買物を爲し掃除をなすにも數家交代して之を試みなば、時間と金錢の經濟を得べく、社會改良家の考慮せざる可らざる問題なりとす。

基督教女子青年會

今回津田梅子氏を會長としバック夫人、マクドナルド孃其他二三知名の貴夫人を委員として創立されたる同會は方今世界各國に亘りて設立され居る基督教女子青年會の組織に倣ひたるものにして主として青年女子の肉體上、社交上、心智上の帮助をなすにあり、而して其の事業とする所は種々あれども差當りて現時の問題たる年少女子の爲めに基督教的寄宿舎を設備し基督教の感化力によりて以て彼等を保護誘掖し以て正直なる婦人の品性を養成し、基督教信徒たるの美實を發揮せしめんことを期するにあり、現今倫敦に設立され居る青年會の如きは各種の商店、工場、事務所等に雇はるゝ妙齡の婦人、諸病院の看護婦其他の年少女子を以て會員とし、專ら品性の陶冶を圖るを以て任とし又大都會にありて各種の業務に從事せんと欲する青年女子に職業の周旋をなす等多大の便益を與へつゝあるものゝ如し兎も角現時婦人界にありて尤も必要とすべき事業なるべし

贈答の品物

西洋諸國にて品物を贈答することは隨分日本と同様なる場合もあれど日本の如く頻繁にはあらず先づ英國などにて品物を贈るは第一婚禮の儀式の時なり此時には或は坐右に置くべき文房具又は花嫁の襟飾、腕環、其他茶道具の類を親戚朋友より祝ひとして贈り遣はすこと實に盛んなり少しく身分ある人なれば其親戚朋友も亦身分あるが故、其贈り物のみにても中人以下の財産位の金高に積るとなりと云ふ婚禮の外には別に品物を贈答する定めなし但だ田舎を旅行し或は遠國に旅行する時は其地方〳〵の綺麗なる産物を歸遣として贈る者は甚だ多きがごとし、又た其他地方より倫敦抔に用事ありて出京せる人々が一夜にても二夜にても其相知れる人の家に引止られて逗留抔する時は其宿料の返禮と云へる意味にもあるべきか一寸したる小道具或は額面抔を其家の主人、主婦、娘抔にソレ〳〵贈るも少なからず、又タマ〳〵に面會する知人には一寸したる手綺麗なる其の地方の産物抔を贈るともあり。

英國抔にては銘々の誕生日を以て鄭重なる一年の祝日と爲すとにて、男女に限らず己れの誕生日には其の身寄りの者を會し茶話會にても開くか或は少し身分好き所は小宴にても開くかする者少なからず、又誕生日には父母たる者は其子に一寸したる品物にても必ず之に贈り、又た子は其父母に對して心計りの贈物をも是非爲す抔誠に床しく優しき風俗なり。

又同居せる父子兄弟の間にても誕生日にはソレ〳〵贈物を爲す者通例なり、就中子供の如きは誕生日とさへ云へば其父母兄弟より種々の玩物類を必らず貰ふ可きの日なりと心得て心待ちに樂み居る有樣なり、又たバアスデー、ブック（誕生日錄）とて筆硯文房具抔を賣る店々には三四寸許りの手綺麗に拵へたる金綠の小册子を賣り居れり、是は銘々所持して己れの父母兄弟朋友知人の爲めにも誕生日の贈答を爲すべき人々の誕生日を忘れぬ樣記るし置くべき爲の手控にて、一年中の月日を綺麗に印刷しあり、英國の士女にして此の生日錄を携へ居らざる者なし、親戚知人にありながら其誕生日に音信贈答を爲さゞる時は甚だしき不愛想の人の如く思はるゝとなり。

觀　察

女子大學校寮舍より故鄕なる姉の許に

泊子

後れ毛忙しう掻き上げ下されて、さらばよ今こそと、春戀しき若葉の村に、別離を惜しみ參らせてより、最早や一年あまり、雨細き寮舍の黄昏、初冬の光淡き眞晝の郊外の景色にも、思ひ出でらるゝは皆樣の御上に御座候、阿母樣血の道にて、霜置き餘る朝夕、兎角、病ひ勝ちに在せしが、近頃は如何に候や、直坊は嘸かし惡戲になりて、乳母のお守りは手に餘り候て、姉樣一際御多忙しからむと御察し申上候、いつも、御玄關先の南天の根元か、中坪の芍藥の葉蔭に丸う居眠り居りし小猫は、昨日今日の寒氣に定めて、御土竈戀しがりて三に叱られ居り候ひなん。

如月の空寒う、雪の三月の只今が眞最中、榾打ち燻ぶる御茶の間の團欒に、其れから其れと、私も噂の數に入り候ひけん、御火鉢の火の活々と起り立ち居候ものを、大きな嚔の一つ二つ致し候。

風や召し玉ふと、同室の花子樣、優しう紅裏の絹羽織をふはりと後より御掛け下されて、ホヽヽ、又御家への？　澤山書いてお遣り遊ばせなと、其の儘、泊子姉樣ちよつと用がと、御立ち去り遊ばされし後は、今日は日曜の事とて、廣き寮舍は更けたるにもまして、寂つそりと淋しう、冬枯の笹の葉摺れの、折々端近う聞え候のみに候。

新聞や雜誌にて、海老茶〳〵と罵言し立て候てより、海老茶と云へば、何か嫌惡な意味でもある樣に思はれて、私昨年十月より御袴は紫紺に致し候、紫は近頃滅つ切り勢力を得候樣なれど、未だ却々、矢張り海老茶に、壓倒され居り申候、只今は袴の戰國時代とや申す可き、我校等にても、淺黃あり、濃小豆色あり、オリーブ淡紫など、夫は〳〵なか〳〵に御座候、一時都下

にては、上は止む事なき御邊りより、下は御神燈の下を潜る傾斜のちまたの人々まで、大流行致し候へ、束髪、昨今大に下火となりて、通學の方々には、桃割れ唐人髷等の可愛ゆきがちよい〳〵見え申候、衛生等と鹿爪らしう云はずもがな、何と申候でも、學生の私共には、手が掛らで、一番便利なるは、矢つ張り此束髪かと存じ候、

昨日私の寮にて御客様を致し候、御客様と申した處が、他寮の心合ひたる方々ばかり、名のみにても、私、主婦だけに、下女を指揮して、彼れを此れをと、大混雑いたし候、御膾の大根を切り損ねて、算木の様な大きな屑々を笊に一杯掬へ候等、未だしも、もつけの幸なるは、手指などを疵つけで、孝の始めを全うしたる丈、亡き父様の御位牌に對しても肩身廣う候、

加之に魚の不足が出來て、江戸川縁のさる町まで下女を連れて、此態でせつせと買ひ出しに參り候等、ボンチにもあるまじき爲體、漸つと什麼にか斯うにか夕暮れ近う物に致し候、近頃就寝は九時一寸過ぐる頃に候を、朝は五時半の起床に候まゝ、夢は悠然と二つも見て、其上に、お隣りの室などにては、ひそ〳〵と、お伽話の談しつこを遊ばさるゝ位、私は何方かと申せば、寢坊の方なれど、夫れでも、三十分程前には必と目が覺めて、雨戸の透間より、明星の華美に煌くが見られ申候。

女同士の其上に一室に四人も五人も、混々し居り候事なれば、永の月日には定めて、不愉快の事もあらむか等と、御心配もある可き筈なれど、私主婦となりて、此の寮に參り候てより、殆んど一年、未だに同室の方方とは無論の事、皆々様とも、終ぞ、顔赤らめ合ひし事さへ、御座なく候。

其れに先日も申上候通り、寮には一名の寮監在して、朝夕萬事御導き下され候が、別けて、私等の寮監の君のお優しき事、御年齢は三十の上を一つ二つや越え玉ふ、紅梅一枝、雨にも嵐にも撓ゆまぬ、凛としたる御まなざしの、犯しがたき氣品は供はり給ひながら、温かき情の胸に湛へて、誠や御顔なら御擧動なら、私共

の檀那寺の御堂の欄間の端にある、何やら云ふ觀音様の様と私常々申候ては、皆々様に笑はれ申候、何となく、御姓名の申上ぐるが他人行儀の様に思はれて、飽き足らぬ心地せられ候まゝ、皆様にも阿母様〳〵と申上居り候眞に校長様が阿父様なら、寮監の君は慥しかに私共の阿母様に御座候、おつ杯頂戴の、厭々などゝ叨り甘へ、だゞを揑ね廻して、果ては寢ん寢んころゝの膝枕温かう、頭撫で玉ひながら優しう勞はり下されし、母様の昔が思ひ出され申候、病氣等致し候ても右の様な有様に候まゝ、病氣とは思はず、何にも氣附か



ぬ間に、醫師の薬瓶に遠ざかり候位に候、課業の中にて、一番好きなるは體操、ピヤノに連れて五十、百人の若き生徒が、水色に黄に扨ては、淡藤等の襷を洩れて、翻るゝ緋絹裏の振りの袂、入り違ひ入り亂れて、前に後に、左に右に、度あり法ある動作夫れこそ一度は是非〳〵阿母様等に御目に懸けたくと其都度〳〵につく〴〵と考へ候、先生は白井先生とて、彼の地にて、斯學を永々御研究遊ばされしとやら、日本にては未だ御一人と様に承り申候、自轉車は、近頃曲乘りまで出來る様に相成り候へ共、女子の身の如何かと、自分獨り定めして、此處暫

時、御稽古は休み居り候。
　生徒は全體にて、千三四百名も候やらむ、御通學の方は半數よりは少なく候、其れも其筈、父母の家庭か近親ならではと云ふ規則に御座候そ。
　此の四月よりは、別に、附屬として、小學校と幼稚園と幼稚舍なる、校長樣獨特の御考案にかゝる、寄宿舍樣のもの開始され候とか、現に其工事の最中に御座候、小學校と幼稚園とは別に普通のとは變りはなく、唯卒業生の研究生なる人々が御研究の爲め、訓導の勞を取らるゝとか、幼稚舍の方は、未だ開始いたし候はでは、私等には迚も相了り申さず候へ共、何でも、好き家庭の幼兒を預りて、所謂一日温ためて、三日冷やすの、現今の學校敎育の弊に鑑みて、朝夕寢起きまで、理想的に敎育すべき處とか、此處に好き家庭と申たるは、善良なると云ふ意味にては御座なく單に上流とか富裕とかの意味に候、本校は何かにつけて、理想的に、少なくも模範を江湖に示さんず抱負なれば、家庭の惡しく候ては實力にさし支へ候故とか、成程校長樣平常の御持論に照して然あるべしと、了らぬながら生徒同士感心いたし居り候。
　卒業生は、昨年迄にて幾人に相成り候ひしやらむ、兎に角、一番多數なるは、家政科かと存じ候、少なきは勿論英文科に候ふべし、打寄りて、櫻楓會なる規約ありて、櫻楓館てふ宏壯なる建物さへ校内に御座候、事業はと問はゞ我々門外漢の申上る限りには候はねどうろ聞きに承り候處によれば、其は先づ三つに大別され候よし、實業部と社會部と敎育部とやら、實業部は又、養鷄、牧畜、製菓、出版、雜貨、銀行、園藝等の部門に分れ、讀むで字の如く、其れ〲各々、學術研究の傍其部門の實務に服さるゝ由に候、殊に可笑しきは銀行部に候、私共千にあまる生徒の御小使をお預り下されて、其必要の都度〲切符樣の物にて、金錢の出し入れ致し居り候、さ候へば、養鷄部にては容易に玉子は求めらるべく、牧畜部にて、牝牛の六七頭も飼育され居り候へば、牛乳は絞りたての新鮮なるを用ゐ得べく、製菓部にては御菓子は無論の事、雜貨部

には、種々雜多の品物之あり候故、校内にて充分に用の足り候ふて、能く／＼の事出來せでは外出は致さずも濟み申候、さるからにもあらねど、近頃兎角、出不性になりて、小石川の叔母樣の處も其後すつかり御沙汰致し居候、御傳言の事もあり、次の日曜には、必ずと考へ居り候。社會部、教育部に至つては私共　局外者の了るべくも候はず、今後の行動を見て、大略推察するより外御座なく候、斯く迄追々日に月に盛大に進みもて行き候が、此校の生徒の如何ばかり誇らしう嬉しとや思す、さればこそ校長の君を皆々神樣の樣に敬ひ居　申候。



寮舍の數も私參り候當時は、僅かに十幾つと數へる程しか無之候ひしかども、只今は最早や二十一にも相成候、豐明、泉水、水明、凰仙、芙蓉、星花、桂花、春秋、松柏、靜明、藤、玉成、自敬、成生、敷島、積善等、後は何とか申候ひけん、只今思ひ出されず、樺山樣の御寄附にかゝりしを、華山寮と云ひしがある樣なれど、一つも年増り候ふては物忘れのみ致し候、有名なる森村銀行の頭取、森村樣の寄附遊ばされしを、豐明と申候とか、泉水、水明、凰仙は、豐明の部に屬すべきか、

確とは存じ申さず候、此度建つ可き小學校等も、矢張り同氏の御寄附にかゝりて、豐明小學校とか豐明何々とか呼び申候由、皆々樣の御噂とり〴〵に御座候。暫時、此處にて筆を擱き申候、豆屋のりんの音小さう聞ゆる樣に候まゝ、最早や下女に夕飯の仕度を指圖致し候はでは。

＊　＊　＊　＊

只今六時半よりの自習時間前三十分に候、

二伸と申さんも可笑しければ、其儘續け申可く候。暮鴉夕陽に淋しう鳴いて、一陣松風颯々、電燈は華やかに燈されて、皆々樣は嬉々として食後の運動に餘念なく候、扨て筆先檢めたれど、あまり御飯のお甘しさに、澤山頂戴せしせゐか、運動せでは迚も此の上書き續け難く候間、之にて御免致すべく候。

先日御附送申上候丸髷の手柄、御氣に召し候ひしや否や、姉上日頃粹と云ふよりは、上品と云ふを好き玉ひし樣なれば、わざと彼麽色合の物を購め申候。

此度の小包には、いつぞやお隣りの老母樣の京土產に戴きし帶止めと、母樣御嫁入りの時御持ち遊ばされしと聞く、大きな黑塗りのお鐵漿箱の中に僅か入れ置きしと思ふ、繪筆とを必ず御忘れなく願上候

なほ何とやら申足らぬ樣に候へ共、埋火灰勝ちとなりて、寒さ一際身に浸み渡り候まゝ、何れ次便にと書き殘し候。

花咲かばと仰せられし御言の葉の嬉しうて、春は彌生の一向待ち遠しく候、返す〲も御身御大切に、かしこ。

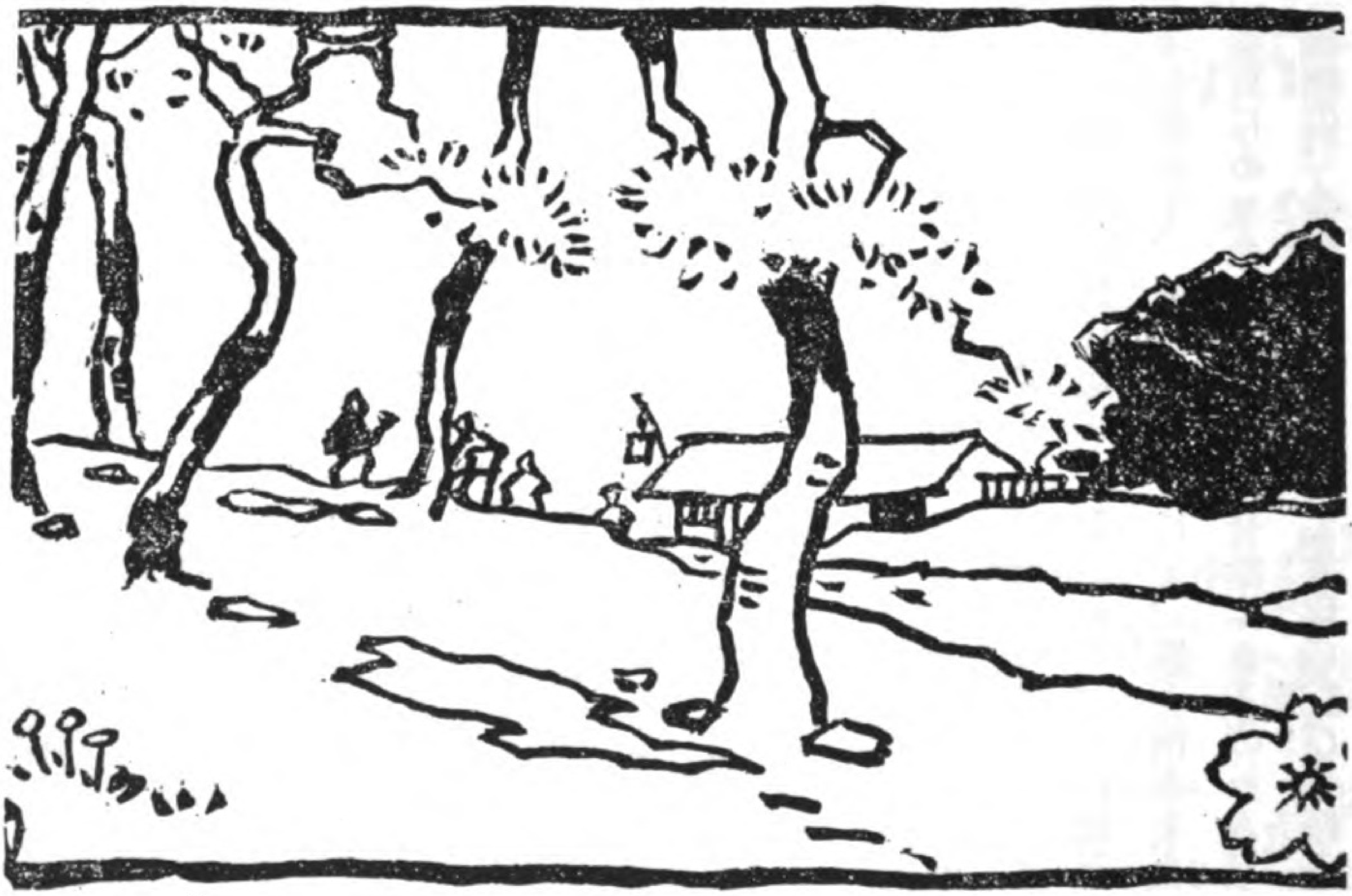
都の小間使より鄙なる兄の許へ

服部須惠子

汲ども盡きぬ御慈愛の泉を湛えられし細縷の御玉章を繰りかへし、妾は思はずも遠き雲山の隔をさへ忘れて、御膝近く侍る心持いたしぬ、脊戸なる林檎の最早色づき初て其一つ二つを御試みありし由、然れば漫に

想ぞいづる後園の萩、桔梗、この頃の色やいかに、袖が岡、葛原、邊を彩る草の花も、さこそ朝露夕日に照り榮て一入の詠なるらむと、故郷なつかしき念彌ましてわりなし。

　草深き田舎にのみこもりて、鄙びたる風俗に馴染んより、花の都の館に仕へて、萬しとやかなる立居振舞を見習ふは身の爲ぞとのたまひし父上の命に從がひ、去年の冬この館にまゐり仕へてより、夢の間に春も暮れ夏もまた去り、今は蕣の花の一日一日に其色を減しゆく秋ともなりて、妾は早一年近き月日を此館に過ぎこしぬれば、定て濁なき家庭



の水に清められ美しき都風になりまさりつらんと、兄上の思ひ量り給ふは宜なれど、そは唯海の面の浪靜なる光景をのみ眺望よしと見給ひて、其海の底にすむ鯱、鮫の恐ろしき業に思ひつかせ給はぬ御心より斯は實に違ひし名を妾に負せ給ひけむ。

　春の海いかに麗しければとて、泳ぐ術なき人之に入ば溺れなん、世の人よりは春の海の如く見ゆる此館も、泳ぐ術しらぬ妾には死の海なり、妾は只救の船をまつのみ、然ばこそ妾は今女の身としては忘れても言ふまじく又筆にすまじき事をさへ列ねて、之を兄上の御前に進らする心の苦しさ、いつまでも忍ぶ

べしと思ひしものを、今は早言で叶はぬ時となりぬ、身の憂ふしに繋がるゝ館の秘事、兄上もさこそ驚き給ふらめ。

圓滿に清らかなる家庭の模範と人に指さるゝ此館、妾も初のほどは其名に脊かぬ尊き人さまよと思へば謹み仕えぬ。

四位様を申し上る殿の、豊に逞しき御身をそらして言給ふさまいと畏こし、奥様は御容姿こそ細めに見ゆれど、御心に男々しき處あればにや、稀には角だちたる御眼つきして誰彼を叱り給ふ御詞には、妾だに聞なれぬ粋な言の葉さへ混へ給ふなどいとありがたし、つぎには浪月と雅號を呼ばせ給ふ若殿の、遉は文學士といふ、冠を戴きたまふ程ありて萬優しげなる御裝ひ、俳優などさへ及ばぬ底のしなをつくり給ふ賢き御心わけてめでたし、濃紫の袴を着させ給ひ學の庭に通はせ給ふ姫君の、夜半の徒然に妾達を集めて、緣結びとかいふ御戯の遊にどよめき給ふ更にめでたし、去年初めて學習院に昇らせ給ひし季雄様の、御年齢にも似ず價尊き巻烟草など燻らし給ふさま、之も亦大人びてありがたし、いかに兄上、これぞ妾の見習ふべき館の家庭に在す人様にて侍るなり。

御目見え濟みしより後の二月三月、妾は只めでたし、ありがたし、とのみ思ひて仕へまつりしが、春の頃ゆくりなくも、妾にうれしからぬ事はかゝり初めぬ、或日奥様のいたく罵りて妾を召させ給ふよしを承り、恐る恐る敷居越に首を低て其旨を伺へば、見覺えなき寫眞をつきつけ給ひて、其方は田舎訛もまだとれぬに、早役者狂とはすさましゝ、見れば此艶書の宛名こそ朧氣なれど、曾て靜子に此艶書を匂はし、なまめきし言を語りし由なれば、問はでも知るき其方の行爲に濁ありと敦圉き給ふ、餘りのことに妾は呆れて覺えなき身の濡衣を言ひとかんとする其折しも、襖の影に深く身を潛めて、妾の袖を引く人のけはひあり、見れば姫君にて、竊と兩手をあはせ、只頼むとの心を目狀に言はせ給ふさまのわりなく見ゆれば、妾は竟に犧牲となりて其場の綻びを繕ろひぬ、されど口惜し、妾は之より

後朋輩に壯士役者といふ綽號を呼ばれて辱かしめらる。梅雨降りつゞく、宵闇の渡殿にて、學士の若殿妾に戯れかゝり給ひ、此方へ來よと仰せらる、御用もやと後につきて從ひ行けば、灯のけもあらぬ客室の椅子にいざなひたまひ、由もなきにいと長き新體詩とかいふものを口吟みて、其方に戀てふものゝ感をしるかとのたまふ、妾は之に應ふる詞をしらずして胸安からず、若殿は尙重ねて、今の詩は己が戀を風月に寄せて歌ひ出たるもの、而も其戀は此花の香の忘られねばこそと妾の掌を握りしめ給ひて尙後の章句を歌ひつゞけらる、御戯にも程ありと、笑にまぎらして身を退かんとすれば、なに戯とな、さらば予が誠未だ其方に通はぬと見ゆるぞ、予いかにせば愛の神を其方の胸に宿し得べきかと凋れたまふ御けはひ手はなほ妾を離し給はず、折しも人の來る音したるより、漸く其場を脱れたれど、それより後も二句三句、斯る正なき御戯れに妾を苦しめ給ひ、時には眞しやかなる涙など泛べて言寄り給ふ、人の涙にも種々あり、淸き血より出る涙と、穢なき涎より出る涙と、之は其いづれより出る涙なるらん、妾はいと穢なしと思ほゆ。

暑を海邊に避け給ひし奧樣の御留守居に、妾其御居室を預りぬ、四位樣は公の務め繁ければとて玆年は館に在ます夕まぐれ、築山の亭に風を迎て盃をとらせ給ひ、其方もと强てつきつけ給ふ御盃、うけぬは無禮なれど嗜まぬ身に醉の苦しければと否むを、そは一入興ある事よ、醉崩れなば予其方をいたはりて臥床に抱へいれんなどゝ、此殿も亦戯れたまひて止まず。

若殿は蛇の如く執ねつくつき纏ひ給へど、長く柔かなれば遁るゝに道あり、四位樣は宛然鷲の如く勢すさまじく一摑にと振舞給ふさま、毛穴ふくれて恐ろし。

危き翼を一夜遁れ、二夜逃のびつれど、いよ〳〵今夜は逼りたれば館を脱るより詮術なしと決心せし其日の夕、嬉しや奧樣の歸館給ひたれば、殿も自から爪をかくさせ給ひぬ。

危き淵は免れたれど、苦しみの浪は又更に寄せ來りぬ、奧樣は人の讒言を眞にうけ給ひてや、之より妾に

つらく當り給ふのみならず、殿へも亦まさなき事を言かけ給ふと見えて、妾の上より葛藤の緒をひきだされ、覺に亂れて、いぎたなき諍ひ言を聞く妾の身こそつらけれ。

いかに兄上妾は今斯る危き淵に陷りし事の始終を白して、ひたふるに救助を祈る、よもや尚忍べとは宣はざるべし、父上には然るべき假の事を設け、一日も早く御許に呼び迎へてよ。

名を聞けば花の都といふからに美しく思はるれど、
來て見れば恐ろしき鮫の住家なりけり。

五濁の水、巷に溢り、狂津日の濤、人を襲ふ、清き血と誠ある涙の泉は涸れ果てゝ、瀆れたる膿汁と涎のみ湧出る茲處に比ぶれば、名は鄙の一字に包れて賤しくとも、野に眞清水あり、風に薫る故郷人は、いかに長閑けき心なるらん。

故郷戀しと思ふ心にのみ急かれて、筆の運びも、はかばかしからぬ間に今鷄の鳴くを聞きぬ、さらば兄上、御身も早く鷄の聲をつくりて、妾が苦しき夢を呼び覺し、闇より光に誘ひ給へ　かしこ

令孃の旅行

大森八景坂なる加納家にては令孃を昨年四月千葉方面に旅行せしめしが本年も又本月の學校休暇を利用して日光地方へ旅行せしむると云ふ、總指揮官は一番の姉國子孃にて何れも一種の改良服に大黑頭巾を冠り縱一尺二寸の手提柳行李を各自一個宛携へ其行李の中には一枚の寢衣、襦袢、足袋、靴下、手拭、石鹼、剃毛、郵便葉書、洗面具、墨筆紙等を用意せしむべき筈、旅者の道筋日程等は未定なれども第一回の時は往復四日間を豫算して宿泊料、晝飯料、電車代、汽車代、茶代旅費豫備金等を合はせて一人前六圓宛なりしかば今回も之を標準とし總指揮官の國子孃は他の三人より一回に五拾錢乃至壹圓宛の小使を預り置き是を共同金函の中に投じ自から會計の任に當りて可成不共通の經濟法を取らしめ又旅行中心得べき要件として父の子爵の示せる概略は(一)旅行と散歩とを取違へぬ事(二)途中の事物に留意して各自の所感を手帳に記し歸宅後これを演說する資料に供する事(三)四人ばら〳〵に分るゝ事なく旅行中は殊に仲よくして互に忘れ物などせぬやうに氣をつけ合ふ事(四)汽車の停まる驛々に注意し且り乘降りの地點を誤らぬ事(五)勝手氣儘に買物などせぬ事(六)旅中の經費は各自手帳に書き留め計算の問違ひなきやう注意すべき事(七)宿屋に着きたる後外出する時は荷物を宿屋に托し四人一緒に出掛くる事又入浴の際には二人宛交代する事(八)途中萬一道に迷ひ又は當惑する事の出來たる際には巡査を尋れて保護を乞ひ若し巡査が見當らぬ時は風俗の賤しからぬ年寄に依賴する事等なりと。

花見のいろどり

春は墨田、上野の空を紅う染めて、人の心も漫ろ花咲く方に向島の今日此頃、花見衣裳に美を飾り、身邊の物にも華車を衒ふは、昔も今も變らぬ都の風俗なるにより、爰に當季の好みを知る便りにもと、頭の飾り、携帯品などに就ての新流行を少しく御案内申し上ぐべし。

◉櫛と中差

本鼈甲の櫛笄は、白襟紋付の場合に限り、遊山の散歩のと申す折には適かず、うから友とち打連れてのお花見なれば、蒔繪の櫛に中差を挿し玉ふこそよけれ、さて此頃婦人社會に好まるゝ櫛はと云へば、元祿形と新橋形の二種なるべし。

△元祿形　は説明する迄もなく、櫛の兩緣角張りて棟の古風に高きもの、新橋形は之に反し棟の幅狹くして歯の粗きものなり、此の櫛にふさはしき中差には、平形にて稍肉の厚きもの、目下の流行なり。

△操形の櫛と文函形の笄　中流以上の令閨向には矢張操形が品よくしてよし、此の操形には大した變化もなけれど、唯だ少しく櫛の肉が狹くなりて、僅かに曲尺にて一分五厘の幅を保つに過ぎず、さて此の操形の櫛を差しては、平形の中差では和調がわるき所より、文函形と申す極く上品の中差を挿し玉ふことにはなれり、此の文函形と申すは、平形よりも肉厚く、上下が蒲鉾形に丸味を持てば、外見も高尚にて、品位高きこと云ふまでもなし、近來は概して櫛、中差共に高蒔繪物よりも、青貝芝山、金銀象眼を鏤めたる方が嗜好に投ずるといふ傾向なり、猶ほ金潰しよりは、黒鼈甲の生地を見せたる方を愛用する風あり。

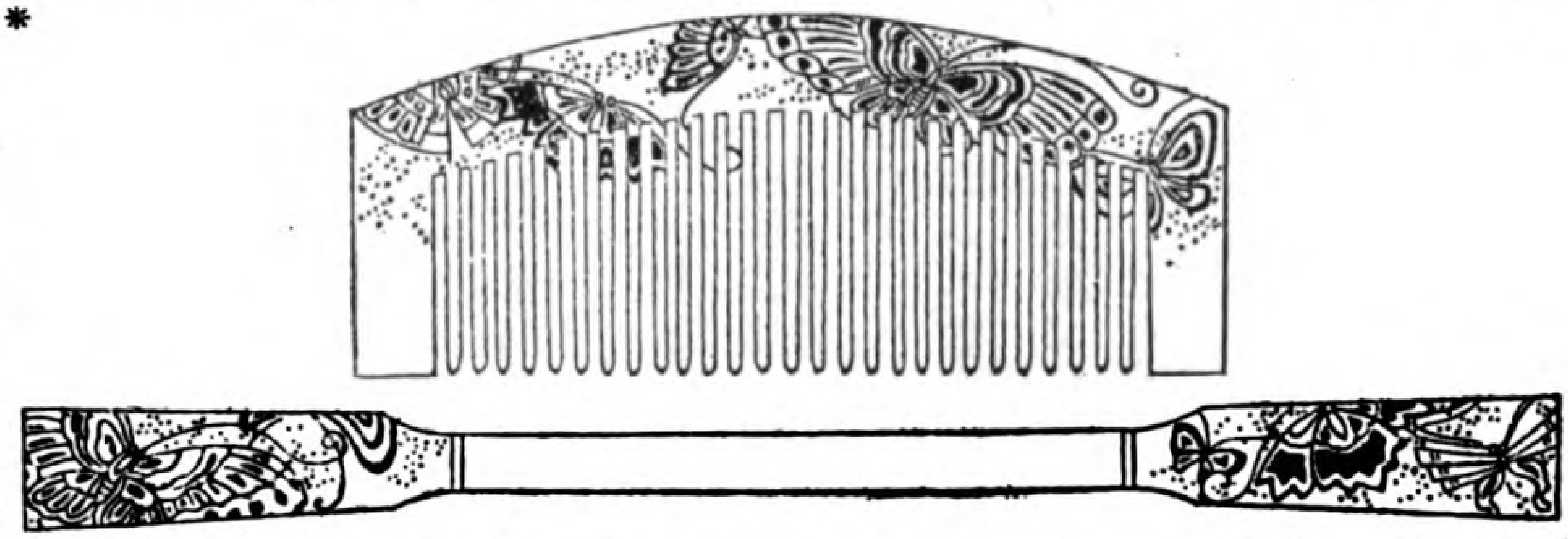
先づ其の調子は高蒔繪四分に、跡の六分を黒鼈甲を素地で見せ、それに蒔繪の中へ青貝や金銀の象眼をすりたるもの最も好まる、蒔繪模樣は圖に掲げたる蝶番し、櫻花に彌治郎兵衛と云ふやうなもの、或は寫生畫の花鳥といふ類の物流行す。

△簪　は矢張り平打の金銀透し彫なるが、其の模樣

は花桐、唐牡丹、光琳菊、八重櫻、櫻草などで、簪の足は松葉形に限り、金銀に拘はらず目方の輕きものを好む風あり。

◉帯留‖時計鎖‖指環

△。。。。帯留の金具。寶石入にて當季なれば櫻流しとか貝盡しとか云ふ＊



＊ものを好み、一般に華美向より樸素向といふ趨勢なり。

なほ上等の物になれば、ルビ、サフヤ、アレキサンドル眞珠などの寶石を金具へあしらへるものあり、先づ菫なればサフヤで利せ、櫻なればルビを用ゆると云ふ按排に、寶石をいろ〳〵に配合せるなり、それに三つ抱き四つ抱きと云つて、純金の爪で寶石を抱き合せた金具が多く珍重され居れり。

△。。。。帯留の紐巾。も餘り廣からぬを愛し令孃向が三分五厘、廿歳前後の令閨で三分、年増向で二分五厘と云ふ所が普通なり、紐の地質は綴錦織、繻珍、鹽瀬、琥珀織等にて、色合は若向に＊



＊て、オリブ薄鼠地、年増向にては茶色寂お納戸が流行す。

△女持の時計鎖は、襟掛の二本立騎兵形最も流行す、其他は相變らずの角繋ぎ繩形等で、極細い物愛さる。

△騎兵形の鎖には、コキと云ふ飾り金具あり其の形はハート形、香函形、銀杏形、菱形などにて、寶石入や金銀象眼と云ふ種々の好みあり。

△指環　は腕が細く、繊細の所へ彫透しにしたるもの流行し、純金は野暮だと云つて寶石に重きを置く風あり。

●帶揚、半襟

△帶揚　は縮緬よりは絹縮の方が、嵩張ずして體裁も宜しい故、需要者多し、色合は藤色、小豆色、朱鷺色などの淡色物、模様は一時熾んなりし元祿は下火となり、古代綆紗の熨斗目やうに染たもの目下流行せり、

△半襟地　は別に變りもなく在來の縮緬地、上等物が縫模様、普通物が有禪染と云ふ傾向、地色は帶揚と同じやうな淡色物を好む風あり。

△手巾　はリンチルのヘムで、尺五に尺八と云ふ所を需要するもの多し、又束髪用の絹リボンは一般に二吋幅が流行で、地色は赤色、オリブ、淡色暈し、模様は有禪、黒白織分などなり、それに束髪用の花簪も花物より、寧木の葉や草の葉を天鵞絨で細工したるハイカラの花簪を愛用する趨勢なり。

●駒下駄と草履

△下駄　は常盤形、霞形、操形の三種最も流行す、塗色は普通蠟塗で變り色は紫、オリブ、ピーコック塗、丈は令孃向が一寸七八分、令閨向きは一寸四五分、總じて臺の低い方を好むもの多し。

△鼻緒　の地質は高等の裂地で綴錦織、琥珀地の縫取り、同縫潰し、金襴、繻珍、博多織、ワナ天模様等で、其の色合は焦茶、利久茶、高貴色、梅鼠、櫻鼠、(以上令閨向以下令孃向)茜染、牡丹色、曙染等なり、令閨向は總てくすんだ色合を好み玉ふ風なり。

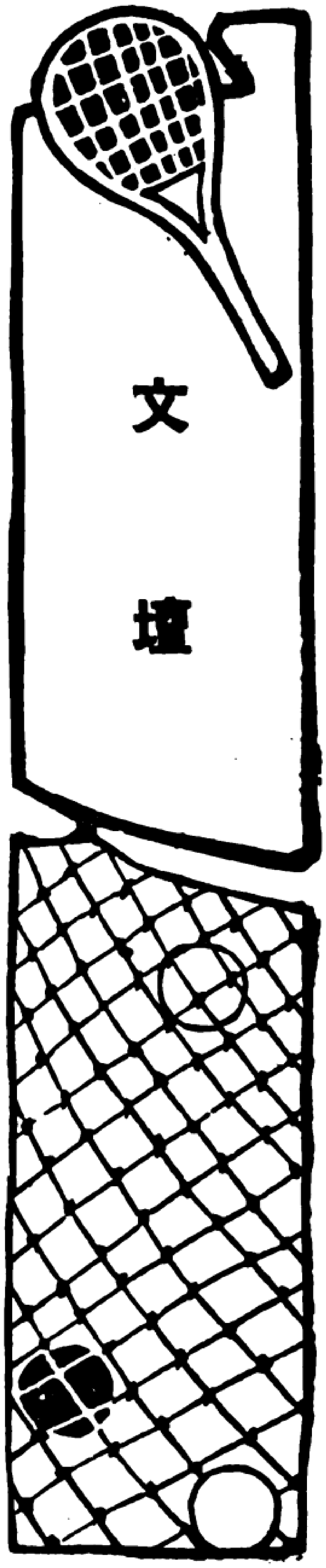
△空氣入千代田草履　お花見や摘草には下駄よりは却つて、千代田草履を需要する者が多し、千代田草履は從來の重ね草履と違ひ、裏が皮で空氣入なれば足の返りも克く、表は本天鵞絨、ワナ天鹽瀬、羽二重、博多織、網代織と云ふ上等の裂地にて張りあり、鼻緒は駒下駄と大差なし。

△携帶草履　といふもの近來は貴婦人社會に行はるるが、こは二ツ折繻珍の袋入にて、携帶に便利なり價は三圓內外、仲々贅澤なもの也。

流行の指環

眞珠、金剛石、ルビー、サフヤトツパース、新金剛石等あり目下最も賣行よきは眞珠入りなるが近來僞物多く出來たれば顧客は大に注意すべしとか價は七圓以上二百圓まで、この彫刻物は廿四五圓以上百五拾圓位昨今は透し彫り重に流行す△金剛石入りは七圓以上百參拾圓位までなれど品質によりて非常に高價なるもあり△ルビー入りは拾五圓より貳拾圓内外△サフヤ入りは七圓より五拾圓位迄△トツパース入りは參圓五拾錢より五圓まで△新金剛石は五圓内外△オパール入は七圓より拾八九圓まで、又男物には幅廣き平打、認印附等昨年以來再び大流行然して純金もの賣行よく價は拾八圓以上參拾圓内外、平打は拾貳參圓彫刻ものは拾五圓内外なりと△襟飾りピン彫刻物と石入りとの二種あり何れも拾八金乃至貳拾金製にて價は六圓以上拾五圓位のもの賣行よし△石入りは七圓以上五百圓位まであれど賣行よきは貳拾圓内外のものにて金剛石、サフア、眞珠等の中にも眞珠入り最も流行す△洋服釦鈕、夫婦釦鈕と稱するもの最も流行し彫刻は菜の花に蝶、櫻に瓢、牡丹に蝶、櫻に都鳥、唐草等なるが品質は十八金乃至二十金價は拾五圓より貳拾圓位まで△一ツ釦鈕は重に儀式用なれば昨年來頗る賣行よく形は圓形、三昧線胴の兩種、彫刻は花鳥、山水等、寶石入りにて拾五圓以上七拾圓位まで、これも眞珠入り最も流行す（日本橋丸屋店調）

●新たに發見されし寶石　米國カリフォルニア州のサン、ヂアゴの鑛山でこの程新奇な貴重の寶石が發見された、この寶石はその質が他に類の無いところから合衆國の鑛物學者の間に多大の注意を惹くに至つた、最も熱心にこの寶石を研究した學者はエール大學のダナ博士、カリフォルニア大學のドクトル、パスカービル氏、紐育鑛物學會の會頭クンツ博士などで、殊にクンツ博士の名に敬意を表するため、この寶石の名は「クンツアイト」と命名されたのである、この新寶石は美はしい桃色（ピーチピンク）を呈し黄玉よりも光輝があり青玉に比して遙かに光がある、而して寶石の鑑定家はこれを「寶玉中の薔薇」と稱讃するに至つた、またこの寶石は頗る光輝を發散する性質を有しこれをエッキス光線に暴露すると盛に燐光を放散し、なほエッキス光線に暴露した後に暗室に置くと感光紙に自らその姿を撮影する、この寶石は今紐育ニューボンド街のクエスト店の列棚に出陳されて居るといふ事である



美文

(天)神うた

名古屋市長島町二十番戸横井方　杉谷稜子

花やかに沈める夕陽の餘光は、くれなゐ映ゆる彩雲のかたへより擦れゆきつゝ、……」蒼こむる夕霧の帷は、婦むれ遊ぶ山門の棟を包み、七本立てる杉の木を包み、朱の玉垣を包み、白砂に咲きそめたる櫻の梢を包みて、軈てわが身も包み去らんとする寂寥さを敍ひて、現れし月姫のみ影よ、など永久に若きわれは今櫻の木のもとに倚りて、？空想に耽りぬ。此權現の櫻木よなど追懐の多き？まはらぬ舌に唱歌うたひて鞠つき遊びしも此木陰なりしよ、其折の幼き友今いかになし給ひつる、稍手たけて女學校に通へる頃は爛漫たる花を仰ぎて我の行末も此花のごと匂はさでは止まじと、果なき志望を恃みしも、その理想よ今いかに。

われは今歌への途とる身なり、理想は花の如く移ろはんか、胸の潮の湧き立かへる夜中もあるを。人は輕侮の眼を以て見ぬ、如斯賤しの職ならば今日の今捨つるも惜み遺らず、されど母よ〳〵と慕へる五十の幼兒とわれ袂を別つに忍びず。

教壇に上つてバイオリンを奏する時、無垢の童女……わが胸の天使……が朱唇をもれて、天籟の曲を傳ふる美韻、われおのづから涙下る。

わが道は尊き道よ、わが歌は天の調にたぐふ神うた。

(評)想高深　文藻麗、結末神韻を云ふ所千斤の力あり、文情合せ得たる好文學

(地)磯づたひ

兵庫縣播磨郡揖保郡余部尋常小學校　土井一子

此處伊津の浦邊、見渡せば大船小船の檣柱は林、そを左に濱邊を妾は西へと逍遙ひぬ。松は雨に風に曝されし奇松、砂は白く濤は花と散りて、朝の日今し波に映じて黄金色して漂ふにこそ。

この濱つゞきおよそ一里、處々に細谷川の瀧をなして飛沫は白く[illegible]寒く感ぜしむ。妾は不圖、巨岩の邊に佇みぬ。仰げば十仞の絶壁、中に

一條の清き流、多からぬ水の音もかすかに、

　こは妓女お玉が涙なりとか。傳へ曰ふ、妓女お玉は農家の育ち、不幸零落して遊村に陷れしが、天は無情、父は病に臥せしなりき。お玉の浮き川竹に身を沈めしは實に哀れの極ならずや。

　この關より四二十町、傳説の首標に三本ありき。命を賭けて挑みしが、三疊の業は替めど、心は燃うつ波に似て、清く汚れぬお玉なれば、更に麗かん風情もなかりき。可愛さ餘りて憎さが百倍とは、誰が言ひ初めし言の葉ぞ、薄倖なるお玉は、遂にこの關の邊に、えたえぬ辱をうけて、草葉の露と消えしなりき。

　岸うつ波は高く低く、憶へばお玉を悼むにか、浮べる泡沫は世の果敢なきを示すにや、松ふく風も物寂し。

(評)筆致綿密、詩才あり、文才あり

(人)山上の朝

相模國愛甲郡厚木町　奈良八重子

　眠春樓上の夢いつしか破れて、明くれば十六日、星なく夜の幕のいまだあけやらぬ五時といふに、案内者に導かれつゝ大地獄へとし志しつ。此處より大地獄まで山路二里と聞く。底倉をはなれ、提灯の光をたよりにけはしく細き坂路のぼり行くに、夜中に雨やふりけん路ばたの、草に置く露いとしげく、たどりゆく木の下陰もいと滑らかなり。行くこと半里ばかり、夜はやうやう名殘なうあけ渡るに、しらみゆく光にながむれば、こゝは早雲山の山腹なり。山一面に生ひつゞきたる萱すゝきは、谷より吹き上ぐる朝風にゆらぎ、袖うち招く尾花の末も、消えかゝる夜を殘りがほなり。聯羅とて淋しげなる家四つ五つある處をすぎて行くほどに、東の山花やかに打匂ひて、葉末の露まづ消え行けば、立ちこむる白雲もやうやう分れゆきて、早川、宮城野など霽るゝに、やがて朝日の山の端をはなれ、五色の雲よりいづるや、あたりの山は紅に、里は紫に。かくて地上の森羅萬象は、愛ある日の御神を歡迎せんとて、恰も幼な兒のたらちねに於けるやう、渇仰の雙手をば高く捧げぬ。空は青く澄み渡りて、消えのこりし地上の露は銀色にかゞやけり。あな美しき山上の朝よ。

(評)壯嚴なる山上の大觀、寫し得て巧なり、文また整へり

(秀)春の阿漕ヶ浦

津市西新町三九　松尾はな子

　春の潮が漫々と滿た海面はやゝ紫色に彩られて立罩むる霞の濃艷を縫ふて往くともなく復るともなき白帆が悶え、そよそよと渡り來る春風の頬を舐める心地よさに私は只恍惚と眺めやつた。

　空は名殘なく澄み切つた湖面の様に晴れ渡つておりおり牛乳色したちぎれ雲がふうわりと漂ふばかり、其遠き海面に接する邊りには多度の山が長閑の様に眠つて居て野に舞ふ胡蝶の様に飛び交ふ白鷗の、あゝ繪の如き長閑さ。

　顧みれば後に遠く翠松の連るあたり、伊勢富士麗ろに霞の中に眠りて、その麓なる松原陰には豆の様な人が遙りに網を曳ひて居る。何處からであらう悠たりした夢の様な歌乃が餘韻長うして、傳はつて來る。と、不意に後より靈喚ふ雛の聲が高らかに聞えるので振返つて見ると網干した漁家の軒端に早や桃花が咲いて所得顔に春を誇つて居る様、實に詩趣ある水彩畫の様である。

　かくて春の日影いよいよ麗かに沖の霞いよいよ深く、白砂を舐むる小波は

さら〳〵と言葉の衣摺れの様な音立てたら、平和なる詩趣を味合つて居るのであつた。

(評)巧みに寫生せられたり、文また繪の如し。

(秀)スケッチ

府下中野町五七一關方　星久子

南なる窓の下に、書讀みてありし程、いつしかに机上暗うなりたれば怪しと眼を上げたるに、こは如何に、障子に見慣れぬ影繪の畫かれたるは。誰がなせしいたづらぞとよく〳〵見れば、花に満ちたる梅が枝の蔭の映れるなりき。繪端書の圖案にもとて、繪筆とりたる折しも、外方に優しの鶯の聲美しくも、我が耳に入りぬあはれゆかしの音やとて、つと窓を押せば、開け様の激しかりけん、鳥影空しくして、梅の花、二片三片、そよ吹く春風に身を任せて、清き泉水の面へと浮びぬ。(三月五日記の一節)

○

春に惓みし一日、友と二人鶯の聲を案内にて、とある村里に入りぬ。園にやあらん、茅葺きのいと見苦しき屋根の上を掩ひたる老樹の梅の花いと美しく清らに、小枝など破れ垣を越えて、道の方を望めり。毛色烏羽玉の如黒き犬ありて、いと安げにこの樹下に眠る。

嗚呼、美の神。自然の美は到る處に隔てなく春の光榮ある事もて掩ひ玉ふぞ、といと奇しく思はれぬ。(三月六日の日記より)

(評)觀察面白し、日記文の上乘なるもの。

(秀)運命

芝　ふよう

此處彼處ちら〳〵燈火の見ゆる頃友の家を辭して御殿町の淋しい町を歸途についた。あゝ友の言が果して眞實とすると自分は實にどうしたらいゝだらう又あれがうその筈はない。思へば去年春、進み給はぬ御兩親に無理に御願ひし、兄上は南家の嫡男たるを以て空しく志を抱いた御自分の苦痛に訴へて痛く同情をよせられたのでやつと御許を得勇んで出京してからは隅田の花、團子坂の菊もあらばこそ一意専心に入學試驗の準備にのみ孜々勉勵したのである。が我不才一年の間満身の汗を絞つてそしてよく〳〵この三日の難關を越える事が出來なかつた。あゝ自分はなぜかう無能なのだらう思へば思ふ程胸を攪亂られる様である。

どの道を通つたのか何時電車にのつたのかも知らず家へ歸れば慰めて呉れる者どころか室は眞暗マッチをすつて見れば机上の一封あはれ母上兄上の御文。

日頃の勉強にて嘸上首尾ならむも尚此上にもと雪の日も雨の日も吉備津の宮に詣うで居候こは昨日新籤したるみくじなりいとも宜しき兆なれば嬉しくて……成否は時の運命なりとは云へ切に〳〵成業を祈るとあゝまるに。

(評)筆のはこび輕く、苦しき胸の思ひ、叙し得てよし

日記の一節

三河　淺井ふみ子

夜やいたく更けぬらん、夢さむれば、黄昏より降り出でたる糸の如き雨もやみ檐の玉水の音絶えて、人のけはいもなし。眠られぬまゝに、枕元なるさうし取りてひらけば、先づ春は曙と讀まれし、山際すこしあかりて紫くちたる雲の細うたなびきたる、そが眺めもさる事ながら、春は宵こそいと懐かしけれさるを誰か千金と申しうも定めたりしぞ。かゝる折

一人して讀まむは、昔男の歌ぞよき。春のものとて眺めくらしつと詠みしは、かゝる夜なりけむか。興おぼえてなほ誦しされば、わが方によるとなくなるみよし野の田の面の雁ならで、庭の泉水のほとりにて、蛙一つ鳴き出しぬ。初めて聞く懷かしさに、起き出でゝ雨戸すばかり繰れば、外は朧ろ〳〵夜の、池の水ほのかに白う、袖垣の山吹散り浮びて、燈籠の灯影かすかに映り、こりたる松の、高き梢に薄月かゝれり。也有も、蛙はかゝる夜にこそといひけり。實に、蚊遣焚く頃は煩はしきを、斯る折にたゞ一つ聞きつけたるは、まつき虫に啼く鳥の聲にも劣らじと覺えられて、いと嬉しくなつかしきものなりけり。

（評）すら〳〵と書流したる筆致、老練家の文なり

梅

長崎　山田ぺん子

軒端の雪は未だ高う、吹く風寒き窓の朝に、春信先づ音づるゝは梅花なり。

苔古りし枝の梢に、降り積る、雪や言ふとうたがはしめて、ほころびそむる其けはひ、眞にゆかし離う。

知らず、眞白の雪と、花と、何れが清く、何れが美なる。世に、俗なりと言ひふらさるれど、紅梅亦趣なきにあらず、

消え殘る雪中に、四つ五つ紅き花びらを點じたる、同じき色の霞宿して、金色流るゝ朝日に映えたる、實に濃艶の極ならずや、

凛たる白梅を素顏の美人にたとふべくは、粧ひこらせる三五の乙女は紅梅なり。

梅は月夜こそ、又たとへんに物なけれ、

光たゞよふおぼろの影を、眞白の花に浴びて、林下の一路、白銀糊た

り、四方に薫ずる清香は、天つ御空より、流れや來るとうたがはしむ、さては、流れ滔々たる、幽寂の境、臥龍の影を淸淺の水に宿し、黄昏一圓の月を迎へて、暗香四方に流動す、これ既に古人に言ひ盡くされたれど、又更に奇なるを覺ゆるなり。

嗚呼、月の影、梅の香、眞に人世の絶調なるかな。

（評）文に結構あり、筆にしまつあり

春の野あそび

秋田　津宇子

心も浮き立つものよ春のけしきになんあめると古人のいひけんもげにとおぼゆ、日あたゝかに霞はれし春の日に友とち打ち連れて野あそびせんほどこそ心ゆくものはなかるべし、朗なる雲雀の聲まづ聞えて靉靆たる霞の晴れ渡れるところ、爛漫たる櫻花の見渡す限り匂ひみちていで知らぬ香を放つ、あるは菜の花の黄色にたんぽぽすみれなど、けだかき野邊に花の毛布をしきつめたらんずとし、誰れか美しとめでげるものあらんや、遙かに雲雀のみそらに叫び、蝶の飄々として高く低く舞ふなど、凡て樂しからざるはなし、いづこともなく朝日に匂ふ山ざくらと愛らしきこゑにうたひつゝほこり顏にかなたより來るなど行く末は皆天晴の武士にもやならんずらんとおぼえて心いと樂し、春風のそよ〳〵と吹き過ぎてひら〳〵と散る花の少女が振りそでにかゝる樣などいはんかたもなしかゝる折しもたれこめてのみ居らんより野邊にいでゝあそぶこそこよなき樂しみにこそ。

（評）文簡にして要を得たり、

白犬

羽前　稲尾みつ子

春の雨やう〳〵止んでいとうらゝかに晴れ渡つた日、池のかたへの小さき畑に、一羽の親鶏五六の雛共を連れ暖かい光を浴みて、コッコッコッピヨピヨ〳〵と如何にも楽しさうに餌をあさりながら遊んで居ると何時何處から來たらうか一匹の熊猫、南天の陰に身を潜め鋭い眼を光らして今にも跳びつかんけんまく、親鶏は敏くも心づき一方ならず狼狽して一きは聲高にコッコッ〳〵と叫んだ、此の音に目をさましけん軒下におとなしう眠れる犬の白犬、ヌックと立ち上りざまそれと見るや二たあし三あしノッ〳〵と歩み出せば、流石の熊猫も何でうたまるべき、聲をも立てず小屋の彼方に一目散……其のひまに親鶏も雛も皆鳥小屋には入つてしまつた、白犬は徐ろに戻つて又おとなしく横臥した。あゝ彼等にも義侠心あるとみえる。

（評）文は未だしけれど、觀察する所面白し

柳の實

福岡　木下あさの

庭の片隅を限取つて高く眞直ぐに揮れない柿の一本、秋が來て霜が隕ちて葉が散つて二つの實が殘された、南と北との枝に、降り續き照り續き晒され續きて圓で火の珠のやう、籔の中の繡眼兒はチイ〳〵と優い聲で、低きから高きに大いから小さい枝に、けろりと飛びふいと移つて遂には南のを見附かつた、か弱い嘴で啄き廻り嘲り替はし又啄き廻つて同じ事を毎日のやう、繰返しつゝいくらかの時を送つた、南のがなくなつてから北のを啄

枝に晃れた姉さんは、輕く仰向きさま眺達つて嘆いた、神樣の造つた實を、神樣の容族たる鳥の兒が、無心に啄いて居る罪のなさ、もつと薄山に實つて居たのなら、もつと遠久に嬉びを分つことが出來やうに、あれを喰つて舉つた日は軈がて又どこかに去るであらう、途端！　閃りと尾を曳いた吹矢は一直線に舞ひ上つてふくらかな胸を射た、

實の所爲だ、血に乾いた戦の子の所爲だ、天使を射殺して餘りと讃へば關然な、暖き日光に愉快そう自由の空氣を吸うて居たのに。

柿の根本に土饅頭が固められて、萎えかゝつた萩の手向草は鮮かに讃まるゝ繡眼兒の塚。

流るゝ雲、風は閃を作りて枝の唸りが朝まで止まぬ、柿の實は塚のあたりにしやゝげて。

（評）想は可掬ものあれど、文の至らぬ憾あり。

○すみれ

上毛　齋藤いは

奉天陷落（カンラク）の紀念にと昨年植えた松の根元に美しい芽を出したものがある。何になるのかと思つて大切に育てゝ見ると可愛らしい菫であつた、それから兄さんに頼んで俳句を作つて貰つたら「去年植えし松の根下や花菫」と詠んで下された。その花、その松、配色の愛らしいつたらないのよ、或日黄色い蝶と白い蝶とが此の紫の菫を嬲（ナブ）つて居る風情といつたら實に天然の三色菫（バイオレット）であつた。

消息文

（天）雛に招かれたる返り言

名古屋　杉谷稜子

いく久しく、年々の御雛節の御招待に預り、難有存じまゐらせ候。わきて此年は裕子様の御初祝ひ、御座敷にしつらひ玉へる壇の上、うす絹の雪洞のともし火かゞやくに、御屏風の黄金しろ金、さては女男の雛の太刀冠、きらびかなる房瓔珞、貝すり蒔繪の御調度、京づくりの童人形など。そに仕へ給ふ御妹君たちのげに引ぞわづらふ花あやめ、美しさ麗しさ、さもこそと今もそゞろ眼の前にちらつき申候。尙新らしき人形に名づけよとの御諚、よき名を撰み置きて、参上いたし申すべく、嬉しき明日の待ち遠き心地いたし候。

緋桃一枝……御使ひにおとらへ申候かしこ

（評）文うるはしく、情やさしく、いと〳〵めでたし。

（地）桃の花を送る

三河國　淺井ふみ子

新さん、お變りもなくて結構ですれ、こちらも皆無事ですから、どうぞ安心して下さい、一昨日の雨で、庭の白桃が咲き初めましたから、かあいさうですけれど、二三輪取つて封じて送ります、あなたも御存じでせう、此木はお亡りなされたお母様が、私たちのもの心もつかない頃、お植ゑ置き遊ばしたものださうです。都に居るあなたが、お母様の御命日に、お墓詣のできないのを殘念にお思ひなさるのは、お察し申しますよ、けれども、お墓へは私が、二人ぶんお詣り致しますから、新さんは體を大切にして、此花をしをりに、撓まず勉强して、立派な方になつて下さい、眠つて居らつしやるお母様は、屹と其方をお喜び遊ばします。

姉より

左様なら

（評）うるはしき姉の情よ、こまやかなる心をこめたる水莖の跡誠にうれし。

（秀）友への返し

下野國　松本薰子

雲雀の聲、霞の音にのみは任せ給はで、いつもながらの御音づれ只今うれしく繰返し候へしに、日頃すぐれぬ、この身を御心に、かけさせられて、ねもごろなる御仰せごと、母にも讀みきかせどもに御心根に感じ入候へぬ、其後は御かげ様にて足の痛もさり候ものから床を離れ、座敷の中をあるき居り候へしが、今日は久々にて近きあたりを散歩いたしこの白すみれをつみとり候故、わざとこゝにまきこめ候まゝ、得心安め給へかし、されど、この次の御文には「などて無情にもつみとりしよ」とのお小言も候ならんが心なき馬子の足に浮世をかこつよりは幸多からんと存じ候何とぞ御きゝづみ下され度

先はこの花のしほれぬ中にと

とりいそぎあら〳〵

（評）やさしの筆よ、文また句ふめり。

親しき友の許に

大阪　江口千夏子

二片三片ほころびそめ候とて封じこめまゐらせし緋桃まだ幾日もあら

ぬに今は二つ三つ殘すばかりと相成候

されど〳〵君まつものは桃のみに候はず君よ忘れはしたまふまじ去年の春なほ淺き日野邊をあさりて只一つ見出し菫!!! 我こそ先に否我こそと爭ひしその菫!!!

よべの雨に匂ひゆかしう咲き出で申し候

あゝこのやさしき花に向ひて懷しき昔偲ばんは實に興深き業には候はずや

いで君よ必ず訪はせ給へ一年ぶりにテニスピンポンも戰はし候はんを例の物をな忘れたまひそ

(評 平氣の利きたる書方なり、されど文は今一息を要す。

友の許へ

伊勢 橫井はなる

月ケ瀨よりの繪葉書嬉しく。山に續ひ谷に連なる梅の林、水あり岩ありて淸き音流るゝほとり、殊にかののつと日の出る朝の眺め、景色とゝなふ月夜の趣などを想ひて、かへすがへすも御伴に加はるを得ざりしは憾みにこそ。歌讀の御歌のかず〳〵お洩しあらんことを待つ。

(評) 趣味ある挨拶よ、端書文としてよし。

摘草に誘はれし返し

相模 光子

一面野邊のみどりは色まさりて空はへいとゞ麗らかに春めき渡る昨日今日外面戀しう覺ゆる折からよせられし摘草の御誘ひいかで御供いたさでやは就ては履合せたまひし松子の君櫻子の君の同じくは共にと仰せ出され候まゝ明日は仰せの時間を期し三人りして御宿おどろかし參らす可く候

幸ひ今日しもお稽古がてら作りし棒太ケーキ君が僞しき草餠の愛らしきには似で其の形ちのおかしげなるあす若草萌ゆる青野が原に取り出でゝ面白き評承はらむも又中々に興あるべくと存じ候先は取いそぎお答までかしこ

(評) 要を得たる書方と申すべし。

師の君へ梅のたよりを

越後 梅子

今さしも園の梅二三りん雪のうすぎぬかむりながらほころびそめましてよあゝ三年前師の君の此地を後につきぬ名殘を惜みつゝ出立ち給ひし日も今日のやふな日でありましたが殊に年々にゆかしき香もそひてさぞ師の君ゟもおほめごといたゞかんと思ひましたでせうにぞ今ぞ咲きしまゝを手折るに忍びず一ひら白雪の上にさよく散り居ましたのをそとひろい文にま込め私のつたなき筆をも梅が香かりてにほはせ差上げ升故そよ吹く風に一言の御返し下さらば梅花のよろこびや如何ばかりでせうとかくは文してぞ〻

(評) やさしきおとづれよ。

▲競走

僕も足は早いもんさ、競走して三度勝つた事があるよ一度は習都と、二度は編査と、

短文

（天）雪の朝

攝津　前田するゑ

めづらしく雪の積た朝兄様がこのお庭のうちで一番すきな景色はと仰しやるから葉のない梅や櫨に多くない程つもつてるのが何ともいへませんと申上げたら一番いやなのはとの仰せに八ッ手や椿のやうな大きな葉に重さうにつもつたは却て雪がないほうがよろしいでしやうとお答へしたら兄様は只笑つて居らつしやいました

（評）これと云ふ奇はなけれど奇のなきところに却て清新の情見はれ而も嫌味なき筆致に無量の妙あり、敬服々々

（地）誌上の智惠子さん

河内　田中八須子

あちこちの雑誌の和歌にいつも優等の位置を占めらるゝ或る村の智惠子さんを一日其家に尋れまして訪問の旨を述べました肝腎の智惠子さんは何だかそは〳〵として一向敷島の語らひもなかつたやがてハイカラ分けの散髪に八字髯の御方が出られて私が誌上の智惠子であるとさもきまり惡さうに語られた

（評）今の投書家は槪れかくの如し獨り智惠子さんのみを咎むるにあられどさりとは卑しき心ざまならずや

（人）幾ちやんのお手紙

神田　菊野花子

田舍の叔母の家に幾ちやんと云ふ今年九つになる小供があります、去年から學校に出て居るのですが此頃はお手紙がかけ出したと見えて新年には賀狀を送つて來ました、幾ちやんにしては立派な文章、其後に、鳴一羽お目にかけますとあつたので多分叔母が送らしてくれるのであらうと待つて居たが來ない、幾ちやん鳴はときいてやると「あれは作文のお手本を見て書いたのです」

（評）一口噺にでもありさうな事乍ら一寸着想の奇なると採る文章も亦聊か遺憾なし

（秀逸）磯の夕暮

能登　池野白百合

浪の音が靜かになると、暮靄がほの〴〵と立ち迷ふて、衣神社のみ燈が夢の如に仄めく、磯山櫻がちら〳〵と散る。星のお母さんが天降りなすッて、櫻貝をおみやげにもッていらしやるのはこんな宵ださうな、鹿の聲が低う聞える。

（評）文簡にして想亦淸新天然を神の領に化さんとする作者の心情誠に羨むべし

夢うつゝ

福島　ゆり子

アヽ兄様あなたのお好な白梅が咲ましたよ二三輪匂ひ出し花を鉢のまゝお上げ申ましたけれども何の御答も無くたゞ新らしい御位牌にお母樣のお焼きあそばしたお香の烟のあは〳〵立ちめぐる其末に嬉しそうなお顔が拜れたやうで私は思ず大きな聲で兄様と呼びましたアヽ夢でしようか現でしようか

（評）想は稍や陳套に屬すれど文章の妙及び雛きところあり

あたゝかき神のみひかり身にうけて
いざゝらば愛とまことを餞はれし
こゝろの花を家づとに
あさゆふに闇のちぎりをかされこし
としごろのをしき袂をわかつとも
いろ香あるなさけはいかで忘るべき
師なる君よ友どちよ

黄昏の宿

京都府　井上らい

父は町より牛曳きて
われは機織のつとめをへ
夕の星のきらめきて
眼鏡ほどなる月の影

母は籠負ひ山路より
歸り落ち合ふ垣の外
軒端に煙る青柳に

夕磯

鎮南浦　修子

戰塲の露と消え果てし
何處に靈は迷ふらむ、
思ひで多き此の磯邊
匂ひ幽香しき新潮や、
月にきらめく小波は
昔の夢を運び來ぬ、

君は昨日の君ならで
今はた獨り佇めば
囁く如もわが前に

凱旋の馬

愛媛　珠川朋子

あななつかしのはやふさよ

あななつかしのはやふさよ

けふしも汝はいさましく
おもへばはやし去年の春
笑みこぼれにし櫻花
あゝひとゝせの其間
つくすますら夫たすけつゝ
あらがれとくる夏の日に
つはもの乘せていさましく
木枯むせぶ冬の夜を
すごき月影うちながめ
さすがにたけき荒鷲も
追ひせめられてたゆみけむ
あはれめでたきけふの日よ
うたふ雀も千代かけて

ほまれを負ひて歸り來ぬ
汝がいでたつ其時に
ふたゝびにほふ頃は來ぬ
大君のため國のため
たてしいさほのかずいかに
ふりくる彈丸のたゞ中を
はせめぐりしはいくそたび
寐ぬる小屋なき荒野原に
たちあかしゝはいくたびか
汝がたて髮の追風に
翼をさめて影もなし
平和の光さす軒に
汝がいさほしを祝ふらし

我が戀

千葉　和田きん子

鳥は野を戀ひ空を戀ひ
龍はそら行く雲を戀ひ
我は日も夜もわが戀を

蝶は小ぐさの花を戀ふ
虎うそぶきて山を戀ふ
忍びてこそは戀ひ塞へ

學び舍に別る

栃木　杉村八重子

愚かなる身も還き
恵の露に霑ひて
親しみ深き學び舍に
春多かるやあるは又
初めて出づる身の運命

情あふるゝ師の君の
卒へし學びの幸荷ひ
今や別るゝ吾が行方
秋多かるや活きし世に
天地の神よ守りてたべ

新體詩

(天) 安き生涯

福井縣吉田郡岡山西村開發　野坂雅子

あめ地の自然のすがた　長しへに朽ちず變らず
常磐にみどりをたゞへ　嶺たかく雲にそばだつ
さはれ富そは露のごと　榮そはいなづまのごと
顧みなき此の現し世に　何得んと人はあへぐか
財よ名よさて榮よと　幻のかげにあこがれ
一日また一日はゆめと　若き子の暗にたどるよ
われもまた幼きむかし　一度は雲にながれて
願ひの果てしらずも　まぼろしの影を求めき
そは只に果敢なき影の　風のごとさまよひ行に
身はいつか老に辿りて　雲に醉ひし夢は破れぬ
云ふ勿れいやしき業と　われはたゞ廣き牧場の
小羊のむれに交りつゝ　安らけくこの世送らむ

(地) 去冬賦

兵庫縣揖保郡余部　土井一子

冬の空、彩雲の　紫濃くも靉きて
冬の風の梢が枝に　そよぎて冬も去りけりな
冬よ汝は實に　奇しきものよ
枯木、そを　花もて飾りき
冬よ汝は實に　美しきものよ
田畑、そは　白銀にかざられぬ
冬よ汝は實に　高潔きものよ
つむ雪に　山おゝしきよ
氷る池の面風凪いで　水鳥月に泛ぶ時
笑みてし寒き月かげも　今や去らなん。響きたて

(人) 天

大阪府下南河內　椋本文子

夜中のあらしに怒あり　あしたの霜につるぎあり
人の心にれたみあり　あゝたゞ天に光あり
おつる木の葉に變あり　匂ふすみれにかぎりあり
人の命に定あり　あゝたゞ天に榮あり
のぼる朝日に光あり　かゞやく星にきはみあり
人のたもとに涙あり　あゝたゞ天に涙あり
流るゝ水によどみあり　もゆる燄にあくまあり
人の戀にけがれあり　あゝたゞ天にのぞみあり

(秀) 卒業告別の歌

大阪東區ウヰルミナ女學校　岡崎かつ子

花ならぬ心の花を咲かせむと
園守の草木をめづるその如く
師の君は培ひ植ぎれもごろに
いたはり育て給しよ、
みなしみの露いやふかきこの園かけ

可憐の少女

大阪　后間八重子

とある學校で先生や生徒がうち交つてローンテニスを遊んでゐると球が柵の外に飛出して溝に落こちた。そこへ通りかゝつた八歳ばかりの小娘がチョコ〳〵と走つてそれを拾うて泥を前掛で拭き先生に渡してそれからお辭儀をした拍子にゴツンと柵で額を打つた。泣きはしなかつたが可哀想に私は見てゐて涙が出たのであります。

（評）文に稚氣は脱せされど心情の奥床しきは惻として人を動すに足る

無邪氣

千葉　鎌田壽賀子

暖かい春の惠みに餘程蕾のふくらんだ櫻樹の根元に腰かけて、春ちゃんと敏ちやんが頻りにを話して居る、春ちやんは可愛いゝお聲で敏ちやん母樣と父樣どつちがお好き、あたい母樣、そう父樣は、父樣はないの、聲が曇つて、そう、春ちやんは不思議そうに小首を傾けて居たが、敏ちやん摘草に行きましよう、えゝ、早睦まじげに手を取り合ひて、日は暖たゝかく雲晴れて可愛いゝ唱歌の聲も霞みて遠く彼方に、

（評）少女のあどけなさ、眼に見るが如く描きしは作者の手腕、

心の小琴

相模　ゆたか

物靜かなる讀書の夜、遠く〳〵妻琴の響き、耳を澄ませば高く低く奥床しく、何の譜やらん知られ共、何となく心地よう、されど現にはあらざりき、さりとて夢にも非ず、樂に飢えし心の奥の小琴なりき。思へば不思議に美しかりし、彼の淵の石を羽衣になづる天女のそれの如く、心も清く〳〵。

（評）樂に飢えし心の小琴―此一句にて文の全體に生命を與へたり

紀美子さん

紀伊　宇多文子

「姉ちやん私、今度も一番よ」愛嬌のある涼しい目をパチ〳〵させて靜に、かく叫んだのは妾が眞の妹と賴んだ御隣の紀美ちやん、「そう、よく勉强して又一番なの、ほんとにえらいのね」

「御母さんは御褒美に美い御袴を買て下さると云ふてるのよ……」

日頃美はしい紀美ちやんの顔は、一層美はしく輝いた、庭の櫻も此の色に愧ぢてか机の上にひら〳〵と一片二片、あゝ可愛〳〵紀美子ちやんは明日から三年生である

（評）これスケッチの上乘なるもの

寫生の花

岩代　池上きわ子

「マーちやん」!!洗濯して居る河の板橋を唱歌、歌いながら渡ッて行くのは今年十一になる妹のます子、自分がこう呼んだので吃驚して振りむいてニッコリ、見れば美しい花の一束を持ッてゐる「マア奇麗な花だれどこから採ッてきたの」と聞けば「あの向ふの野から、奇麗でせう私これ兄さんにあげるの、兄さんは何か寫生する草花が欲しいと云ッていらしたから姉さんにも一本あげませう」としやがんで居る後へきて束髮のピンのところへソッと挿してくれた。

（評）可憐の情掬すべし

書端會

京都　四辻きよ子

姉さんは、今しも配達夫が入れていった一枚の繪端書をなんだか嬉しさうににこ〳〵笑って見ていらつしやる、何か知らと私しも見せてもらつた、白い桃の花と雛様がかいてある外なにもない、きれいな繪端書、これがなぜ笑可しいのかと姉さんに尋ねても姉さんはだまってやっぱり笑って居らつしやる、私しどうしても解らない、そして、これは千代田の兄さんからきたのだって……

（評）妙な兄さんが讃人もあつてはお身の爲になるまじと老婆心までに御忠告申す

うつしゑ

下野　松本薫子

砲の音やみし戰の場に山なす屍のいづれのポッケットよりもれやしけん、みどり子のうつしゑ！……あはれたが愛し子ぞ……見れば父君の戰死も知らずしていじらしな笑みて寫れる愛くるしきこの姿!!! 誰に返さん術なければ再び父君の靈魂に抱かれんことを祈りつゝ柳の木の上にのせてかへりぬ」とは頃日凱旋せし兄さまの御物語なりき

（評）悲絶悽絶

靜ちやん

鳥取　喜代子

或日お叔母様を訪ふた今年四ッの靜さんは可愛らしい聲を出して「目出度凱旋なされしか御無事で御歸りなされしか」と歌ッて居るから靜さん父樣凱旋なさるのよと云ふたら靜さんにこ〳〵しながら因幡言葉でよその父さまがな——と叔母様を見れば悄然と私は熱い涙があゝ靜さん此かなしみを知るはいつ

（評）因幡言葉が一篇を活動せしめたり

處女文壇懸賞募集

▲和歌　一人一首端書ニ限ル
▲新體詩　半紙一枚十句マデ
▲美文　廿四字詰廿行以内
▲短文　端書ニ限ル七行マデ
▲消息文　半紙一枚十行限リ
▲小說　半紙十枚以内

以上題ハ隨意ノ事

賞金規定

●和歌新體詩、短文、の優等者へは左の賞金（圖書切符）を呈す

▲天壹圓　▲地五拾錢　▲人參拾錢

●又美文、消息文の優等者へは

▲天貳圓　▲地壹圓　▲人五拾錢　▲秀逸三拾錢

●小說の當選者へは

▲甲拾圓　▲乙五圓　現金にて呈す

投稿はすべて女學世界處女文壇係宛にて字體明瞭に記すべし（〆切四月十五日）

短歌

（天）田家春　下野　森　照野

さくら散る菜種畑にうまいせる
　小猫の耳に蝶のとまりぬ

評。着想面白く、調調亦た能く整へり、かゝる景情は田舎にては往往見る所ながら、田園生活をなすものならでは、此の詩味は捉へ難し、蓋し田家の春を詠じて、殆ど其の妙を極むと謂つべき歟。

（地）湖上霞　熊本　安田文子

近江の湖八十の港に咲く花を
　ひとつにこむる春霞かな

評。雄大也、讀んで心地よき歌也、近江の湖と大きく讀出で、八十の港とかぞへ、一に籠むると結びたる手際、巧者の口振也、春意湖上を蔽ふの態躍如たり。

（人）綾瀬帆影　東京　高宮安子

散る花をしら帆にとめてすみ田川
　なみのあやせを下る舟かな

評。巧に水上の春を歌ひたるもの、上の句白帆にとめて殊に働きあり、水悠々、人悠々の佳景如畫。

秀逸

○○○鶯　京都　四辻清子

春心うごきそめてか鶯のやさしき音にも力ありけり

評。面白し、下句「力ありけり」殊に働あり、原作第二句「うごくなみれば」とあり。

○○○春興　京橋　高宮安子

ながき日を花がりくらし更に又たあくがれ出づる月の下道

評。晝は花に遊び、夜は月に遊びて、倫ほ飽かず思ふは、是れ春を樂しむ人心也、春興の眞意歌ひ得て遺憾なし。

○○○春雨　植野露子

なく聲にはてなき思ひふとさめて稚兒がき抱く春雨の夜半

評。うつゝともなき思ひに耽る闇の中、ふと我が子の泣聲に呼醒されて吾に返れば、外には春雨のシトゞ降りしきるに、いとゞうらかなしくなりて、可愛の稚子を肌に犇と抱きよする光景、何ぞの凄惋ぞ、慈を含んで添乳する婦人の情態躍如たり。

○○○田家春　本郷　原田峰尾子

いくさより歸りし背子と語りつゝあれし山田をすきかへす哉

評。銃取りし手に、再び鍬を持ちての軍話、光景掬す可し。

○○○桃　河内　前田雛子

ほろ／＼と咲の白桃こほれけり畑うつ賤が鍬のひゞきに

面白し。

○○○墓詣　松山　野口白露

亡き父の御墓邊近き砂の上に何心なく稚子の畫をかく

可憐の光景。

○○山家花　名古屋　羅田やへ
さけばこそ人もとひ來れ山里の春のあるじは花にぞありける
靜寂なる山家の春、想ふ可し。

○○桃　仙臺　相澤すゑ子
耕桃さく畫に小家の夕ぐれを胸葉りいるゝ人うつくしき

○○節句の頃田舍道を辿りて　越後　條村秀子
古びたるひいなをせなに幼兒が桃咲く門に歡愛らしき
「古びたるひいせなせなに」の二句働あつて、能く田舍道の光景を髣髴せしむ

○○春月　宇都宮　保田みき子
佐保姫が長きみ袖のうすものにつゝみしものか春の夜の月

○○折にふれて　河内　前田鏡子
稚兒がうかつ草履の紅緒の赤きは親の心なりけり
巧み也、草履といひ、紅緒といふに、子を思ふ親の心は見えたり。

○○田家夕　水戸　榊八重子
夕餉たく煙なゝめに立つ見えて雨にくれゆく桑の花の村

○○庭前梅　仙臺　小山田みどり
姫君の庭下駄かろく音すなり軒端に匂ふ梅の初花
御殿の光景可掬。

○○逸題　上毛　なでし子
吾妹子と梅かざして月ふみて小うたに下る清水の坂
面白く讀まれたり、下の句殊に妙也。

○○春月　能登　秋花女史
しも京やつゞみの遠音ほのもれて御にかすむ春の夜の月

○○鉢梅　麹町　豐田のり子
つちかひし小鉢の梅の咲きみちて我がつき山の春をしめたり

○○凱旋　牛込　藤野愛子
かへらじと誓ひてし身もながらへば猶なつかしき故里の空

○○梅村の夕暮　岡山　笹原貞子
梅多き此の一村の夕霞小川細みち人牛を追ふ

○○春雨　石見　宮内登美子
春雨の靜けきまどに昨日見し花のけしきを語り合ふ哉

○○春夢　大分　堀井靜枝
ふと覺めて夢の名殘のあと追ひて行きても見たき蓬萊の山

○○瀧　京橋　高宮安子
佐保姫の春の錦のたてならし震にかゝる白糸のたき

○○花園　備中　有田たまき
その昔遊びし友よ今いづこ其の花園の朧夜の月

○○都春　下總　川崇部幸子
さゞめきつ舞の妓二人行き過ぎぬ五條のあたり月高うして

○○星　新潟　川合よみ子
手枕は白百合の香に埋れておもひは高し星の夜の空

○○墓前　や　す子
去年の今日散りにし花のあとゝへばむなしき空に春雨のふる

○○瞬　足尾　森露野
月かげのあかしの浦につりえたる鯛の都の花さくら鯛

○○逸題　仙臺　齋藤きみ子
花實の翁年老ひ花ふりし庵に細き春雨のふる

○寫眞　和歌山　よし子
戀ひあまり君がうつしゑとりいでゝ我うつしゑそへてながめつ

○逃　鳥　出雲　じん子

むつれとぶ蝶の行方をながめやる人うら若しちる花のもと

○旅　東京　田中千賀子

今日もまた雨にくれけり旅の身はむかしの空のしのばれてのみ

佳調

春興　京都　かほる

蝶を追ひ花にうかれてまひくらし朧月夜にまた歌ふかな

春夜　岡山　林　榮子

ほと〳〵と柴の戸たゝく人やたれ櫻かつちるおぼろ月夜に

折にふれて　秋田市　智惠子

病む母をなぐさめまつる琴の音のもれて淋しき雨の夕暮

武藏　東　てい子

御殿に今宵を花のうたげとてつゞみの音の月に流るゝ

月梅　岡山　安藤笑月

窓際に月のかげさし梅の影揺ぐと見れば花ちりかゝる

平和の　を迎へて　鎭南浦　西崎鶴子

ものゝふの御靈もいまは靖國の花とあふがむはるは來にけれ

觀櫻會　名古屋　杉谷稜子

春日山杉の木の間の花ちりてみ垣のもとに巫女遊ぶ見ゆ

柳　岩代　志賀隆子

吹くとしもよそには見えぬ春風を糸に知らせてなびく青柳

春雨　河内　竹内敏子

なり〳〵は落つる樋の音もして更け行く軒に春雨のふる

山城　北尾きぬ子

夜にして月の瑠璃殿に歌舞せば夢より美し大瀬田の橋

落花　大阪　岡市岸子

糸竹の調はやみてひとしきり櫻ちるなり祇園朧夜

上野　杉田繁子

逃鳥　本所　中川千代子

大殿に今宵の花の宴つゞみの音に花散りみだる

越後　高橋まく子

畑中の小芝居はてゝ春の夜の風あたゝかに小雨ふるなり

河内　櫻井貞子

行違ふ舟の小唄の淋しさや月の大利根堤の花散る

春の夜　紀伊　川俣ヒロエ

磯洗ふ浪はかへりて薄月夜櫻ちるなり川添の里

宴つきて小舟つなぎし青柳の梢に更くる春の夜の月

春雨　下野　齋藤松子

春雨の降りしきる夜半にたゞ獨り歌もなくして物思ふ哉

折にふれて　山口　船越ゆな

月きよし夜はふけにけり風さむし思ひこそやれ陸奥の民

春の歌の中に　越前　島眞喜子

菜の花にれふれる蝶のゆめ路にもさはらぬほどの春の風かな

野末櫻　東京　船野菊子

手折らんと野末の櫻にたちよればあるじ顏なる鶯のこゑ

山口　林　たけ子

竹島や鯨しほふく沖の海に釣船さわぐ春日和かな

春宵　下總　川奈部よし
琴の音も朧ろに春の宵や町行き違ふ人の袖馨るなり

春の歌　大阪　紀藤榮子
大君の御車きしる音すなり都大路の春の夜の月

折にふれて　廣島　勝子
何となく只なにとなくしのばれて心さわたつ志賀の浦波

桃　相模　安藤光子
紅ふくむちごの口にも似たるかなけさ笑み初めし姫桃の花

折にふれて　越後　松永松葉子
紅梅のほころび初めしあづまや〻小雨の夕べ琴の音ぞする

春の月　岩代　菅野和子
夕もやに馬子の追分消え入りておぼろにいづる春の夜の月

肥前　嬉野登子
古びたる聖書一巻友として深山の奥にわが世送らん

水邊柳　神戸　小松蝸牛女史
ふく風になびく入江の玉柳幾代の春をくりかくすらむ

梅　前橋　宮内りき子
君まさばいとゞたぬしさまさるらん梅さく庭に春の夜の月

霞山　攝津　濱田なみ子
朝霞ふもとの里にたなびきてさながら浮ぶ大比叡のみね

河霞　越後　和歌子
漕出てかへりみすればともづなを解きし柳もかすみはてたり

この春　岡山　田上はま
花はさけど花はさけどもうつら病む春は花ともおもはざりけり

折にふれて　埼玉　秀子
ちる花のあやに流る〻妻こそ下ゆく水の心そと知れ

歓迎　久留米　神代いと子
かへりこん父をむかへて母の背に小旗ふりつゝ勇むうなゐ子

雉子　熊本　安田文子
狩衣すそ野の原のあさぢふにかくれかれてや雉子鳴くらむ

蝶　東京　ゆき子
咲き匂ふ花のしとねにねる蝶の夢ぢや如何にたのしかるらん

早春鶯　備前　近藤繁子
春くれば深山なうしと鶯もこゝろなのべに出でゝなくらん

雛を見て　伊勢　藤堂しげ子
うない子の雛の遊びの浦山し過し昔と偲ひながらも

逸題　千葉　岩瀬信子
君逝きぬ身はうらぶれぬ野は荒れぬ菫つみにし春もありしを

名所花　麻布　きく子
春風にそゝのかされて來りけり花さきにほふ隅田つゝみに

春野の夕　神田　村井英子
夕されば家路に急ぐ牧の子の霞のおくにかげのうすれて

菜の花　佩南浦　西崎久美子
森かげにわくやま清水こ手のべて掬べばゆらぐ白き藁のはな

春雨　福岡　服部春子
夜もすがらしめやかに降る春雨を花待つ宿の軒端にぞ聞く

神戸　黒田敏子
胡地よりの音づれ待ちて今日もまた夕となりぬ山かげの宿

本郷　西岡古代子
花影に君とわかれて黄昏の柳の下をたゞひとりゆく

遠望　安房　松阪梅子
舞ひたゝす女神の袖か青柳糸にかゝれる三日月のかげ

山家初春　宇都宮　鈴木翠松
昨日今日梅咲き初めて山里のしづが軒端も春めきにけり

春の野川　長門　三宅千代
菜の花をのせて流るゝ野の水に姿うつして胡蝶おりくる

落花　鎮南浦　修子
吉野山かすみの奥ものどかにて朝日うらく散る櫻花

蛙　足尾　森照野
行水にかげをうつしてさく花のうへゆく蛙の数もみえつゝ

帰雁　名古屋　志村寸美子
初雁になりてまた来よさく花の春に別れて帰る雁がね

落花流水　姫路　松下梅子
なかれきし花のさかつき手にとりてすくひあげたる谷川の水

帰雁　越後　小原操
さして行く里はいづくか白雲の花を見すてゝ帰るかりがね

春雨　伊賀　服部うた子
大方の花のさかりと心して静かにもふる春の雨かな

紅梅　仙台　岩淵あやぢ
鉢に植ゑし紅梅いまや盛なり花ちらぬ間に主かへりませ

夜春雨　芝区　松村睦子
しめやかに雨のふる夜のあすこそは柳も露の玉をぬくらめ

春日訪友　河内　田中八須子
巣りてし君が庵をけふ訪へば梅咲くあたり琴の音かほる
大阪　三宅真子

しやうの音のゆるくたゞよふ加茂の道春はたそかれ雨細う降る

折にふれて　山梨　藤崎かれ
花見にとさそへる友もあるものをまたふりいでぬこゝろなの雨

落花　名古屋　清水操
舞ひ遊ぶ蝶の羽風に誘はれて露よりもろく散るさくら哉

大阪　桂子
鳳ひきや捨し命をながらへてけふ故郷に父母を見むとは

ゆき　山形　登坂周子
朝な夕な目なれし山もめづらしく見ゆるはゆきのあしたなりけり

播磨　森静子
桃割髷のにほひをそふる房かざし髷にはあまり淡き色にして

雲雀　山城　北尾きぬ子
うすれゆく霞の中をわけゆけば野路はにほひて雲雀なくなり

時鳥　岡山　河原萬壽
あけがたの御廟の松の露ちりて月の輪山になくほとゝぎす

折にふれて　広島　勝子
梅香るやどのあるじや誰ならんこゝろ筑紫の琴の音ゆかし

柳風　横浜　寺西てつ子
佐保姫の手引の糸の青柳結びつときつ風のまにく

大阪　櫻子
花の夜を殿が御輿の小つゝみや扇かざして姫まひたまふ

柳　大阪　高枝
影うつす柳の糸に風ふけばなみもあやなる春の川つら

春の夜　香川　大内まさ子
里の子がすさびの笛の音たえておぼろ月夜に梅の花ちる

潮干狩　　備前　しげ子

うら〳〵とかすむ海邊に貝ひろふ少女やいかにたのしかるらん

桃　　愛知　森井ますみ

笛の音はしばしとだえて月淡きくち井のほとり白桃のちる

旅にてよめる　　岩代　遠藤久子

ゆめかよふ舟のほのかに見ゆるなりかすみかくれる伊豆の大しま

逸題　　高崎　池野たま子

ひろき野の花まだ花に蝶のゆめのせてぞ春はしづかなりける

春雨　　上毛　金子[illegible]子

梅かほる野邊に草摘む少女子のリボンをぬらす春の雨かな

ひな　　小石川　みつ子

ひゝなならでなき姫君が振袖にもゝの一枝を今日奉る

逸題　　伊豆　加藤[illegible]子

午引のひな唄ゆるう聞ゆなり緋桃咲ける川添ひの里

逸題　　伊勢　渡邊梅子

事なくて千鶴雛鶴むひたつと妹の遊べる文に見えけり

田舎春　　備中　樋口富子

明日はまた向ひの原に遊ばむとさゝめきかへる花たばのむれ

雁　　徳島　今野めい

かりがれは北へ〳〵とかへるなり古里しのぶ春の夕ぐれ

梅　　水戸　根本茂子

香に匂ふ垣根の梅のさきしよりゆきかふ人のたちどまりけり

河邊柳　　神戸　倉重千代子

里の子はまだ釣もせぬ川水にとくいと垂れぬさしの青柳

鶯　　水戸　根本貞子

遠ちかき竹の林に朝な〳〵ふし面白くうぐひすのなく

鶯　　小倉　琴子

きゝそめし梅のこずゑをつたひつゝのどけき春をうたふうぐひす

山城　北尾きぬ子

三尺の小庭にあそぶ雛鶏のしろ毛に紅き桃の花散る

折にふれて　　下野　玉野とし子

亡き兄の[illegible]染めしはこゝらあたり白菫咲く岡の夕ぐれ

卒業式に　　越後　荻野てる子

師の君の御手にひかれてうれしくも文の小路にわけのぼりけり

失意　　越前　星雲

丸窓にいつもの人の影はなくてさびしくまもるかごの鶯

春の夜　　甲斐　前田[illegible]子

いつのまに雨となりけむ宵のまはおぼろ月夜と思ひしものを

夕雁　　下野　江川貞子

小羊のむれつゝかへる夕まぐれ牧場にひゞく入相のかね

春曙　　岐阜　泉靜子

鳥の音の窓をもれて聞ゆなり花にあけ行く春のあけぼの

信濃　本田よしえ

をたけびの聲はとだえて五百年古城のほとり白梅の咲く

折にふれて　　備後　平岡敏子

[illegible]暮れて歸れば三日月のかたふく山に雉子なくなり

春きたり　　[illegible]　藤濱やな子

佐保姫のかすみし袖をもれいでゝ匂ひこぼるゝ花の色かな

逸題　　上總　貞子

五條風にゆられてほろ〳〵と落つるもゆかし朧夜の月

夜歸雁　埼玉　東角井　高子
鳴く聲にゆくへ知せて過ぎにけりかへり路いそぐ夜半のかりがね

櫻花　美濃　しら露
そこ清き野路のながれにさくら花浮ぶもやさし四ひら五ひら

祝凱旋　三河　山中その子
のきごとに朝日の御旗かゝげつゝ平和の春を祝ふこのごろ

逸題　横濱　大槻清花
菜の畑に咲く花瓣の精うけて飛ぶ蝶々の羽袖うつくし

春の歌の中に　神戸　岩崎ゆき子
少女子が桃の木かげにつむつくしひゝなも母も笑みて待つらん

春の夕暮　備後　神原英子
見渡せば雲雀はなちて日はくれて鎮守の森に月朧なり

折にふれて　高田　ことぢ子
かゝる夜を月にかたりしふるさとに父もいまさず母もいまさず

落花　神戸　小谷ともへ
ながれ行く小川に浮き月みへて落ちる里の春の夕ぐれ

雪解　栃木　松本泉
のこりゐしみれの白雪今朝とけて水かさませる春の山川

折にふれて　淺草　寺田錦子
さわらひをなりもわづらふみちのくのしのぶの奥のしのぶばかりに

古寺春月　神月女學院　藤屋登美子
初瀬山をのへの鐘の音ふけて花にこもれる春の夜の月

若菜　信州　芳圃子
春の野のゆき間もとめて少女子がふる雪まじりの根ぜりつむなり

春雨　小樽　佐山すま子
朧やに暮の音たえてしばらくはさくらにそゝぐ春の雨かな

逸題　美濃　菅井志賀
手にうけてつきぬ名殘をとゞめばや風にちりくる花のしら雪

逸題　小樽　宮井湖月
美くしう雲雀鳴く野は黄昏れて夕映あはき川端の村

春雨　門司　やまぶき
わすれては又繰り返す文車繪散りはてし春雨のもと

春雨　保土ヶ谷町　佐藤登美子
川沿ひの一と本柳おぼろげに雨に暮れ行く春の夕ぐれ

雨中柳　伊賀　岩瀬もと子
つばくらめしばしやすらふ川そひの柳のいとに春雨のふる

折にふれて　和泉　津田孤子
せの君の歸りきませしゆめさめてまどにさし入る春の夜の月

春風　伊勢　花嘉子
幼子の鶯小笛吹きなせばよき音にかよふ窓の春風

春駒　京都　水川光枝
若草のもゆる裾野にいなゝきて心ゆくらんひばり毛の駒

春雨　香川　松田綾子
ふりすだく春の雨夜のつれづれにまたとりいだす友よりの文

聞鶯聲　栃木　みつ子
にはとりのそらねにすぎしせきの戸をとざさぬ御代にあふ坂の山

山櫻　北海道　磯部照子
春毎に花見る人はかはれどもかはらぬ色の山櫻かな

夕春雨　石見　河村雪子
つれづれの琴のしらべもたゆみけり夕寂しき春雨の空

柳體詩（劍花坊撰）

題「櫻狩」「下女」アルバム

天

芝明舟町　新野壽枝

國賓の御目にかけたい櫻狩

評、この様な句を拔いて天位に据えると、必ずやかましい非難が沙上の偶語と爲つて現はれるであらう、劍花坊近頃どうかして居る、滑稽を根として作らなければ眞の川柳でないといふことは柳樽寺唯一の主張だ、されば一般の投句家も劍花坊の投句となれば必ず滑稽を根本として作句し、而して投吟する風になつて居る、それに何ぞや此句の如き、どこに滑稽があるどこに川柳らしいところがある、恰かも彼一派の人が唱へて居る新風俗詩といふものに近い、且つ季節の這入つて居るところから、チョット詠んで見ると月並の俳句の平々凡々なるものと大差は無い、これでどこに川柳の特色がある、柳體詩といふものは元來どんなものぢや、劍花坊に聞きたい…………必ず斯ういふ質問が起るだらう、また起らなければ嘘だ、これは劍花坊が一言して過ぎたいのである、川柳が滑稽といふこれを本義にして居るは無論で、多くの韻文の内で最も面白可笑しく出來なければならぬものである、がそこを誤解して貰つては困るので、我所謂滑稽は徒らに、駄洒落クスグリ、悪謔を主とするものではない、頗る廣義に取つた自然の面白味でなければならぬ、決しては婦人の句となつては、一層上品なのが必要である、下卑ぬやうにと心掛ければならぬ、そこで前號にも「竹柏園に花が咲き」といふやうなのを拔いたのだ、この句は川柳の方では高香句といふもので、上品に、高尚に、壯嚴に、詠むのが趣意で、古人にも「仙すゝめ申せば天へ御指さし」といふやうなのがあり、劍花坊にも「鳳の室漲の鼓を御酔樂」といふのがある、この句もこの類で、川柳で櫻狩といへば目かづら、角樽、猫の手拭で狂轉するところを詠むものときまつたやうに思ふ人多きに對し、案外にも「國賓」といふ尊い御客様を請待して來たところが働きだ、しかも其内に自づから國民の心を代表して歌ふて居る、俳諧にしては月並の中へ入れられるか知れぬが、川柳には之を歡迎するの餘地がある、特に本紙も今回以後柳體詩は止して國芳前句附の名の下に募集することになつたから、吟友諸據も其心を以て詠んで下さるやうに御願申します、

地

鳥取縣　朴樹子

目の見える下女奧樣の苦手なり

評、これは投書家の住所も詳細でなく、其名も何だか御婦人らしくないから、如何と思つて拔句にも躊躇したが、よく考へて見れば其書ぶりも女の手なり、而も句も全くの川柳式で面白いところがある、このたびは吟友諸據が割合に振はなかつたに拘はらず、「奧樣の苦手」と新しい警語を拈り來つて「目の見える」と照應さしたのがいかにも面白いから、地の位に頂戴することにした、この奧樣頗るじだらくなお引きずりなるべく、この下女また目から鼻へ拔けて氣の利いた奴と見えたり、

人

大阪東區南本町二丁目百三十　磯野かほる

櫻狩舞の衣に花の雨

評、高尚な滑稽とはこれ等の句をいふのである、どこに滑稽があるかといはれるところが最も滑稽で、櫻狩とあればいづれ賤しからぬ身分の人が樹が下に酒盛などを開いて居るのである、

そこで舞ふ人は誰だらう熊野御前のやうな美しい人か、さなくば一さし舞はうするにて候ふと紋付袴の人か、どちらにしても、カッポレや紀伊の國ではない、そこで櫻の方でも愛嬌に其舞の興を助くべくチラ〳〵と花の雨を降らせるといふのである、何と上品ではないか、艶麗ではないか、滑稽ではないか、美術ではないか、この邊が新派川柳特得の詩趣である、因に云ふが、この句は詠史として熊野御前を詠じたものにも聞こえる、さうなると花の雨も非常に美しく婉しくあはれに取られるのである、前句附にすれば「奇麗なりけり〳〵」にでも「美しいこと〳〵」にでも附く句である、

秀逸之部

櫻狩迷子の親は端唄なり　米澤　藤倉富士子
奧様と見違へられて下女得意　東京　飯野しげ子
寫眞屋が下手なんですと下女は云ひ　本所　中川ひろ子
櫻狩幔幕張つて三味太鼓　大阪　川口島子
櫻狩實は見合の下ごゝろ　相模　たんぽ
八百善へ蝶が舞ひ込む櫻狩　神戸　吉田清子
櫻狩扇燈にも一二輪　廣島　金子たか
下女化粧鼻摘む事やゝ暫し　本所　戸村荒子
馴れぬ下女割れた茶碗を合はて見　伊豫　渡邊梅子
吉野山花の下にも花が咲き　駿河　喜久代
アルバムに戀の女神が潜んで居　下谷　森井秋子
シヤツター(?)を取ると櫻の木にかくれ　尾張　大池ひこえ
亢の下女折々大根持つて來る　紀伊　たみ子
散りかゝる花を扇で受け止め　近江　栗末露子

書齋に一枝かついで千鳥足　越後　木島そう
アルバムを出されて尻が又揚り　神戸　青瓢女史
足音を聞いてアルバム一寸ふせ　尾張　梶田愛子
奧様の心は使ふ下女で知れ　駿州　春野麗子
奧様の病氣下女丈悟つて居　京都　藤田靜枝
下女發心先いろはよりならひ出し　山城　吉川よね子
洗濯を仕ながら下女の水鏡　本所　たま女
奧様の素性を下女が洗ひ立て　越後　坪井わか子
櫻狩三三五五に陣をとり　大阪　松岡みどり
櫻狩朧に霞むアラ貴耶　明石　壽美麗

佳句之部

下女までが兎角扇を出したがり　大阪　新子
ハイカラもあり元祿もありハガキ帖　尾張　登代子
下女までに頭を下げる新夫人　京都　とめ女
奧様の秘密は下女が荷つて居　大阪　梅垣哲子
櫻狩三味や太鼓ではやし立て　大阪　山田てる子
自轉車で式部理想の櫻狩　仙臺　高橋正代
櫻狩家族連れたる殿御振り　千葉　田村源子
坊ちやんの手癖が下女に暇を出し　尾張　穂積榮子
孫に手をひかれて老の櫻狩　本所　花舞女
アルバムの初口に海老茶すまして居　信州　粟川とも子
坊ちやんに無理を云はれて下女は泣き　近江　鈴木こう
アルバムは未見の知己の集會所　上總　田村瀧子

アルバムに洩れて美人詮議なり　本郷　春江子
櫻狩花見る人が花となり　美濃　日比野としな
山出しはおの字をやたら付けて云ひ　筑前　北村ろーる
アムバムをひらいて一家團くなり　神田　工藤はる子
下女得意小笠原式で茶を進め　近江　林　敏子
アルバムを抱へて笑う優さ姿　羽後　波奈子
アラ讀むぢやいやとアルバム引たくり　大阪　藤山波津子
櫻狩嫁は姑の手を引いて　仙臺　しげ子
花は見ず飲むで食つて櫻狩り　相模　よし子
櫻より優つた花が歩いて居　神戸　田中ふで子
お花見の衣裳が出來て雨が降り　大阪　あい子
櫻狩物言ふ花も供につれ　伯耆　入澤　沼蘭
教へられ下女三つ指で旦那様　靜岡　松村紫野武
屏餅で下女奥様を驚ろかせ　下谷　安西しげみ
櫻狩老人までが厚化粧　麹町　菱刈なほ子
奥様はかげでおさんに云ひきかせ　神田　小林　幸子
丸顔か流行ですと下女得意　岡山　田上　濱子
櫻狩アラお珍らしい顔に逢ひ　芝　愛　子
櫻狩歸り道には千鳥足　伯耆　入澤玖満子
山出しのおさん乞食に挨拶し　淺草　長濱はな子
秘藏の皿鉢を念じて洗つて居　津　富　子
麻疹下女代ふる事二度三度　山城　尾崎いち子
孃樣のお留守に下女は袴つけ　讃岐　柳田　玖子
御馳走のあまりはいつもお三どん　奈良　中山　昌子
長尻の客にお三は腹立て　伊豫　山崎　くま

見る人も花とウトツリ眺められ　磐城　中村　雛子
日曜の櫻狩から嫁となり　丹波　波多野女子
體格ぢや下女第一の美人なり　廣島　木下　はる
山出しは先づ言葉から教育し　神戸　藤谷美喜子
中間が好いとみやびの櫻狩　深川　てふ　子
お花見の話に嫁は元氣付き　埼玉　新堀　仙子
櫻狩知らぬ人にも話しかけ　愛知　小島　昌子
初奉公ハイの返事も口の内　横須賀　恵　計　子

撰者吟

目かづらへ庇のまじる櫻狩
日の丸を化粧でぼかす下女の面
アルバムは海老茶色から賣り切れる

次號　人事詩　課題

『美しい事』

今回より柳體詩欄を廢し、人事詩欄を設く、「美しい事〳〵」を前句に附けて十七字詩を作るにあり、要するに「美」てふ題目にて一層女らしく柳體詩を作るツモリならば成功すべし、而して美字を詠み込むことは避けられんことを望む、

謎々

「花見」「落第」「西園寺内閣」とかけて

一等

▲西　石川縣小松町字京町　字都宮瀬平方　大槻晉子

乳母の仕事」と解く。心は「太郎の跡仕末

評「太郎のあと仕末」近來にない面白い解答なり斯う出來ればアテコミも惜く無し寧ろ嬉しい方なり、大頂戴々々、

二等

▲西　大阪市東區南本町二丁目一番屋敷　梅垣晉子

口喧しい姑」と解く。心は「始めから小言

評、太郎のあと始末には及ばざれど、難なくスラ〳〵と出來て居るなり、

三等

▲花　阿波徳島市寺島本町　吉田梅子

高天原」と解く。心は、諸々の神(髪)があつまる

評、ちよつと六づかしいやうなれど考へたものにして露骨ならず新式の謎ともいふ可きか、神と髪の「もぢり」耳に立たず。

▲花…豊公の馬印」と解く。心は「瓢箪が附き物だ　京都　藤田靜枝

▲西…天狗の劍術」と解く。心は「腕前が知れる　神戸　岡名部こま

▲西…馴れ合の夫婦」と解く。心は「具持が仕まい　下野　永井きく子

▲西…俳優の踊り」と解く。心は「かつらの跡も見へる　大阪　磯野かほる

▲落…死産」と解く。心は「骨折つた甲斐がない　安房　渡邊那々子

▲花…友人からの手紙」と解く。心は「開く迄が樂しみ　東京　中上晶子

▲西…丙午」と解く。心は「災難(火難)が多い　相模　よし子

▲西…西洋料理」と解く。心は「無箸(無勝)　甲府　山田錦子

▲落…戰死者葬儀の未亡人」と解く。心は「泣く〳〵上席に着く　神戸　笑鳳

▲花…土用干」と解く。心は「箱入(處女)も出る　兵庫　木村うた子

▲西…俳優の女形」と解く。心は「かつら(桂)で氣を揉む　下野　大谷富子

▲落…暦」と解く。心は「番(籤)がおくれる　福岡　筑紫鎚子

次號課題

『入』とかけて

『郭公』とかけて

『柏餅』とかけて

〆切　四月十五日

皇孫殿下の玩具

皇孫迪宮、淳宮、光宮三殿下の御慰みとしてお召しになる御玩具は何れも御教育に稗益ある製品にて多くは內國製の物を召させ給ひ中には舶來の雛頭人形、洋犬等もある由にて彩色を施せる物の繪具を十分に撰定し若し御口に觸るゝ如き事ありとも害の無きやうに注意を加へありて薬鐵製などの危險の虞れある玩具は御用ひあらせられずその玩具の多くは木彫臺の人形に緋縮緬の衣裳を着け其衣裳の模様には櫻花、喇叭、日章旗、軍刀或は浪に錨等を金糸にて縫ひて陸海軍に利かせ又は鶴に菊の有職模様の刺繡にて出し軍服を被せ肩章を帶びさせ腰には飾緒を下げさせ或は下様に云ふ亀の子旗掛を掛け夫れにも櫻花模様を出せし美しき人形或は緋縮緬の鯛の臺車附の曳物もありて其鱗は金粉にて描き臺車には浪を現して緋縮緬の紐を附けるを例とし又軍帽を戴き改良軍服を着せし馬上人形もあり馬は毛植にして多く白馬なるが原料は白羽二重又は縮緬等を用ひ而して馬の前に聯隊旗を建てあるもあり或は臺人形が大砲を曳く者、木彫の運動馬等と時々御目先の變るを工夫して御覽に入れ御體操用の啞鈴、棍棒の如きも小形に造りしもの等にて價の非常に安きものもある由尚ほ迪宮御生誕後淳宮、續いて光宮殿下の御生誕ありて以來は何の玩具も皆三個づゝ揃ひに製作して納める由に傳へ承はる目下三皇孫殿下も沼津御用邸に御避寒中に在しませば矢張り同處に御避寒遊されつゝある皇后陛下の御用邸へも折りに觸れて皇孫殿下の御機嫌伺ひに成らせ給へる事ありて陛下より皇孫殿下方へ御土產として下賜になりし最近の御玩具を承はるに教師が地球儀を鞭にて指し生徒が手を擧げて居る人形、縮緬細工の大さ八寸程ある水雷艇、魚形水雷、錨、救命袋などを實物より縮少して造りしもの等なるよしと聞ゆ又中山一位局より獻ぜられしは乘馬の軍人人形なりしと申す事なるが殿下方には殊に動物類の御玩具と皇后陛下より賜はりし御玩具は御三方とも別けて御喜び遊ばされ給へるやに漏れ承はる。



小說

淋しき家

米光關月

其一

妾はお目見得に上つた時から、お淋しい宅だと思ひました。

場所は本鄉の高臺で、お二階からは上野の森が一と目に見えて、晝間はお邸の前を引つ切り無しに車の音がするのでございますが、何うも私は淋しいお宅だと思ひました。坪にしたらば三百坪もあらうかと思はれる地面に、建物は二階屋が一軒ある斗り、ぐるりは庭になつて。可成見事な石や樹があるやうに見受けました。

二階建は、下が玄關を入れて都合六間あります。廻り椽になつた、日當りの可い室が十二疊の御座敷になつて居りますので、次が六疊、其後が又六疊、これが奥樣の御部屋なので、其處へ這入ると、一と目で奥樣の「おえらい」方だと云ふ事が直ぐに知れます。正面を見ると、硝子戸附きのお立派な書棚がある。其中にはピカ〱と光つて、妾などは唯もう美しいと見る斗り、何が何やら薩張り解りません西洋の御本がぎつしり詰め込んでありますので、油繪のお美事なのもあれば、水彩畫の華やかなのも揭げてある。其外に驚くの

は、ピアノが一臺据へてあるかと思へば、琴も立掛けてあるので、ヴワイオリンがあるかと思へば、三味線もあるのでございます。

なんと云ふまあ御器用な方だらう……と、私は始めて其御部屋へ這入つた時、妙に胸が騷ぎました。

二階は八疊に六疊の二間で、其處は旦那樣の御部屋になつて居ました。其室も亦何より一番に目を驚かしますものは、澤山の御本で、奥樣の書棚とは違つて、金ピカの洋書斗りで無く、和漢の書物が奇麗な本箱に這入つて、北窓の腰はすつかり其本箱で塞つて居る。旦那樣も「おえらい」方には違ひ無いと思ひました。

御一家は、唯このお二方の御主人樣斗りで、御隱居樣も無ければ、お兒樣一人無い。尤もお話によると、御養子が一人あるとかで、其御方は今京都の高等學校とやらへ御出になつてるので、御内輪は今の所、全くの二人限りだと云ふ。其他の者は皆な召使ひで、これも書生さんが一人に、車夫が一人、勝手の働きをするお三どんと、私は小間使ひと云ふので雇はれた、其四人しか無いのでございます。

旦那樣はお年齢、五十前後で、尠し痩せてお在のやうにお見受け申ますが、決して見惡い御格服ではありません。丈けも可成りにお高くて、肩幅もある。それに坐つてお在になつても、始終尠し反身になつてお在の御格好が、如何にも男らしく、品があつて、何處から見ても充分旦那樣のお位がある。

お顏は長面で、お髯の立派な、眼の大きな鹽梅などは、一寸見ると怖いやうですけれども、一時見て居ると中々温い、同情の深さうな、眞に〱お慈悲のある御主人樣だと云ふ事が解りますので、私の始めてお目に掛つた時は、恰度夕御飯の御膳の上で、葡萄酒を二三杯傾けられた所で、奥樣が御引合せ下さると、

「ハア、然うか……。」と、鷹揚に有仰つて、

『何分頼むぞ。』と、莞爾笑つて、首肯いてお在なすつた御樣子、其眼元、私は乾度お柔しい方だと見てとりました。

毎日お車で、銀行とやら會社とやらへお通ひ遊ばす

ので、日曜大祭日には、大概奥様と何處へかお出掛けになる。そしてお夕飯に、葡萄酒を少々召上るのが定りになつて居て、私はお夫婦の御給仕をして居ても、眞に氣骨の折れん、それは〳〵務め可い旦那様なのです。

奥様はお年齢四十一二かと思はれるので、一體小作りの、何方かと云へば意氣に見える性のお方で、御色は聊か白い方では無いが、目鼻立ちの揃つて。如何にもお怜悧さうなお面附で、お兒の無い爲か、お齢よりも若く見えて、お頭髪なぞの濃い事は、妾なぞの若い者でさへお美しいと思ふ位で、骨組のなんと無く丈夫さうな、堅い、男らしい所は、お兒様の無い方に可く見掛ける、それと同じでございます。

物を有仰る時、尠し見上げてお口をお利きになる癖があつて、何うかすると、お柔しさうな眼が險しく動いて、なんと無くお側へ寄り惡いやうな事の無いでもございませんが、それかと云つて、別段那樣折りに烈しい口の利き方をなさるでも無し、決して可厭な思ひは尠しも爲無いのでございます。

以前は何處とやらの學校へ、毎日教授にお出掛け遊ばしたさうですが、四五年斗り前から其方はすつかりお廢しになつて、今では孰れへもお務めは無いとの事、けれどもお交際は廣いと見えまして、やれ音樂會、やれ慈善會と、それは〳〵御用多の樣子で、三日も續けてお出掛けになる事もあります。

然う云へば、妾も思ひ出しますが、未だ此方樣へ上らぬ前、或處で或女學雜誌を拜見致しますると、奥樣の肖像が寫眞版になつて出て居ましたので、其折り五つ六つも公の會の幹事だとか、發起人だとか云ふ肩書の附いて居る事も見ましたので、「おえらい」方は又格別に「おえらい」お急がしい事のあるものだと思ひました。

ですからなんと無く、尠し派手好でいらつしやるやうな所もあつて、お召衣などもづッと若い所を御召しになる。お頭髪のものから、お持物から、それは〳〵お若いお好みでいらつしやるので。尤もこれは、お兒

様の無い爲もありませうが、一ッには何うしても、お交際の場所へお出掛けになるには、是非恁うなさらずばなるまいかと意はれますので、決して浮いたお心から恁うなさるのではあるまいと思のでございます。

併し一體に、お陽氣な性は、お陽氣な性で、お夕飯の折などに、旦那様とお話をなさいますにも、何うかすると陽氣な高聲にお成りになる事があつて、其折は又旦那様よりもづッとお聲が大きく高く聞えるのですそれにお笑ひになる聲は又一段とお高い事があつて、恐れ入つた申分ではございまするが、これ斗りは、チト奥様の御品格が下るかの様に思はれますので。併しそれもほんの時折り響く斗りでございます。

妾は始めて奥様にお目に掛つた時、これ丈けのお方で、お夫婦方ともお揃ひなのに、何故お兒様がお一人も無いのであらうかと不思議に思ひました、御養子は旦那様の御緣家から御貰ひ遊ばしたさうで、今年僅か二十とやら、けれどもそれは今京都へお越しになつて居て見れば、何處迄もこのお家には温い、賑やかなお兒様のお聲は聞えませぬので、段々馴れるに従つて、其淋しいのが身に泌むやうで、お夫婦揃つて、華やかな燈の下で、お睦じく、お夕飯を召上る狀を見るにつけ、つく／″＼私はお氣の毒になつて來たのです。

それと云ふが、一つには、私の子煩惱な爲もあるのでしよう、私の家は貧しい生活でこそございますが、それは／＼賑やかなので、ひよつとしたら、他様によつては、餘り賑やか過ぎて、姦しくは無いかとお思ひになる位、大勢の兒供達が居りますので、それは悉く私の爲めには眞身の弟と妹です。私は惣領の生れで早くからこの大勢の弟妹の世話をする様に出來てたのでございますが、他様の御覽になる程、それが可厭でございませんので、段々其世話をするのが心から面白く、嬉しくなりました。弟や妹の笑へば共に嬉しく泣けば氣使ひになる。怒れば胸が騒ぐ、其一擧一動は心から注意するやうになりますので、どの弟も妹も皆私には可く懐ますので、いよ／＼私は可愛くて／＼なりません。

ですからお夕飯の時は大變な騒ぎで、私は御飯を盛るのを待つて居ります連中が、恰度六人お茶碗を抱へて、箸を持つて、口を開けて、目を丸くして、私の顔附手元を見て居りますので、其賑やかな事…　、全然家中煮えくり返へる樣でございます。

那樣中に居着けて、這麼お兒樣一人無い宅へ參りますると、土藏の中へ這入つて燈の消えました程、淋しく、冷めたく、何うも〳〵堪らぬ程心細くなる事がございます。朝晩雨戸の鳴る音はしましても、お兒樣のお聲のせぬ家はなんと無く、御家族お不在の樣な心地が致しまして、雨の降る日は殊更ら、お天氣の可い日でもお寺の樣にお淋しいのです。

其　二

一體誰方の御話を承りましても、奉公は馴れ無い中が眞に淋しいものださうで、別けてこの、夜になつて、何か手にする仕事でもあれば可ございますが、それが無いと却つて居づらい、淋しい、なんとも云はれぬ可厭な可厭な心地が致しまするものださうで、百人が百人、先づ大體は馴れ無い中の淋しさを可く有仰るものです。

私も成程最初は淋しうございました。お目見得に上つて、晩に部屋へ下つて、お三どんと對坐になつて、ぽつり〳〵話をした揚句が、いつとも無しに二人とも無言になつて、折々お三どんのそつと目を上げては、私の横顔をじろ〳〵と見るのも淋しく、洋燈の心がジイジイと音を立てるのも淋しく、玄關の書生さんが、可笑しな咳拂ひをなさるのも淋しく、表を通る車の音が、晝間の樣に意勢可續いて響かず、時折ごとり〳〵と老人でも挽いてる樣な響きのするのも淋しく、四疊半の室も二人切りではなんだか廣いやうで淋しく、もうもう奉公と云ふものは這麼淋しいものかと思ひましたが、それよりも亦一ト層淋しい所が、馴れるに從つて出ると云ふのも奇妙でございます。

全くこれは、一重に私の子煩惱からで、お兒樣の無いのが何處〳〵迄も淋しい方へ引張つて行くのです。

さて私はお兒樣の無いのが這麼に淋しく、一人で心細く、旦那樣奧樣のお身の上が氣の毒になつて、氣の毒になつて仕方が無いのでございます、其氣の毒に思はれる、肝心の旦那樣や奧樣のお心は甚麼だらうかと云ふ事を考へはじめました。

人間誰れだつて兒の欲しく無いものはあるまいと思ひますので、別けて可い加減のお齡頃になられては、乾度もう一人や二人は欲しくなるだらうと思ひますので、奧樣だつて旦那樣だつて、皆變りは無い、世間並お兒樣は欲しいに違ひ無いのでございます。それの無いと云ふのはひく／＼運の悪いので、人間の御不幸この上も無いのでございます。けれどもそれは、もう致し方も無いとお諦めになつて、御養子を一人お入れ遊ばしたのでございましようが、可くそれ丈けで、毎日毎日這麼淋しい御生活が續けて行ける事だと、私の不思議に考へますのはそれの事でございます。

お三どんの話で見ると、奧樣のお好きなものは第一に音樂だと云ふ。成程これは然うでございましよう、お部屋に立派なピヤノやヴワイオリン、琴だの三味だの飾り附けてある所を見ますると、乾度それはもう、お好きには違ひありますまい。で、其お好きな證據は毎日お宅に御在になれば、必ず一度は其樂器のいづれかに手をお觸れになるので、朝か晩に間違ひ無く美しい音が響くのでございます。恐らく奧樣はこの美しい音色で、其淋しい、味の無い、溫味の無い家庭の憂さをお忘れになつてるのでございましよう。けれども其音色は一日中響いて居るものではありません。奧樣が其樂器からお手をお放しになると、段々以前の淋しい色に包まれて終ひますので、お家は却つて何時よりか淋しくなるやうでございます。

これは私の心計りではありますまい、幾ら音樂のお好きな、其音色によつて憂さをお忘れになつて居る奧樣だつて、永く其の美い音色が耳から去らずに居る理でもありますまい。

私はいろ／＼に奧樣のお心持を考へて居る中、とうとう或日其お心の中をすつかり悟つて終ましたです。

其日はお日和續きが、夜から雨になつて、朝からは小雨になりましたが、しと〳〵と絶へ間無しに降る陰氣な日で、二三日前から散りそめて居ましたお庭の櫻が、この雨の爲めすつかり土に落ちて終つたのでございます。

朝間はそんなでもございませんでしたが、お晝過ぎになると、永い日は馬鹿に又永い樣で、通りに車の音も餘り響きませず、お家は夜のやうに靜かで淋しい、何時の事ではございますが、這麼時にお兒樣のお一人もあつたら……と、又自分の勝手な了簡を出して居ますと、奥樣の御部屋で珍らしく琴の音がします。

ピヤノもおよろしいもの、ヴワイオリンも妾大好きでございますが、春雨のしと〳〵と降るこんな靜かな日には、又琴の音も別段におよろしいもので、私は淋しいにつけてつく〴〵聞惚れて居ました。

するとそれも軈ての事に止んで、淋しさは又以前のやうになる。と、お手が鳴つて、奥樣の私をお呼びになる樣子、私は出かけた欠伸を嚙み殺して、眼から出る涙をそつと襦袢の袖で拭つて、靜かにお部屋へ行くと、奥樣は莞爾お笑ひになつて、

『まあ、此方へお這入……。』と、有仰るのです。御用はと伺ふと、

『淋しいからお茶を入れました。』と、有仰るので、私にも一つお上り……。』と、結構なお菓子迄それへ出て居る。

私は恐入つて、始めの中は唯もぢ〳〵として居ましたが、それでも段々茶碗に手が行きますしね……。お菓子へも手が行きまして、何時の間にやら話の口が解けて參りました。

奥樣は桐の丸火鉢を頻りに撫でゝお在でございましたが、東窓の硝子戸越しに、庭の櫻がすつかり散つて雨の爲め土に叩きつけられて居る風情を、見るとも無く御覽になつて、

『花もとう〳〵散つて終つたね。』と、云ふお辭。續いて、

『雨も一寸氣が靜まつて可いけれど、這麼に朝から止

み無しに降つては、全く氣が沈んで終つて可けないものだね……。」との仰せで、酷く冴へ無いお顔附で居られるのです。

　私は別に御返辭の爲様も無いので、

「左様でございますね……。」と、噛まぬ御返辭を申して居ると、一寸私の面へ目をやつて、

「あのお前は慥か、澤山兄妹があるやうな話だつたね……。」と、いよ〳〵妙な事を御尋ね始めになりました

　私は隠さず、

「ハイ、私を惣領に、後が六人あるのでございます。」

「六人……、六人と云へば隨分大層有るのだね。」

「えゝ、もう大變なのでございますよ。」

「けれども、賑やかで可い事だらうね。」

「それはもう奥様、姦しい程賑やかなのでございます。」

「結構だね……。」と、奥様は心から感心遊ばしたやうなお面附をなすつて、

「それでは宅などへ來ては、お前淋しく思ふ事があるだらうね。」

　このお尋ねは、全く私の胸を騒せました。毎日〳〵もうこの事が私の胸にあるのでございますから、と、尋ねられた時にはハツト致しました。

「イヽエ……。」と、辭を濁して、

「馴れて見ますると、何そんなでもございませんです……。」と、不思出鱈目の嘘を申上げますと、奥様は淋しくお笑ひ遊ばして、

「然うでもあるまい……。」と、靜かに私の辭を打消し、

「私などのやうな、馴れたものでさへ這麼日になるとつく〳〵淋しくなつて來るからね……。」と、何うやら小さな溜息さへお吐きになつたやうでございます。

　私はこのお辭を聞くと、ひよいと首を上げて奥様のお面を見ました。

　日頃から何うだらうか〳〵と思つて居た事が、今漸くすつかり解けたからでございます。(つゞく)

處女文壇　懸賞小說

兄弟

ひさ子

椽の風鈴は、背戸の小川を渡る風に、小さい舌を振つて、カラン〱の音も涼しさう茅屋の軒に釣つた葱に水打てば如露の飛沫に色美しう虹浮ぶ一と日土曜の晝盛り小さい庭の影も綠な白楊に、蟬のなく聲、油沸ぎるとばかりの下に、唱歌をうたひ乍ら妾は編物してたと知り給へ、スルト妾の兄樣は生れてから廿三年の此日迄、日に燒けたことのない御顏に、ソンボリ汗ばんで、麥藁帽の白きが却つて眩しいやう、額のあたりを拭き〱御歸り「兄さん」と云へば何時もなら嫣然、玉を揃えた齒を見るべきに、一寸頭を下げたまゝ家へ這入られた、妾は何だか物足らぬ氣乍ら、洋服にブラシをかけてるうちに兄樣は、白飛白の浴衣小ざつぱりと御召になつて、妾のとこを、つく〲覗て入らつしやつたが、極く細い聲でしたけれど判然「女と云ふものは薄情なもんす」と云はれるのをきゝました、けれど妾には意味が解りませんので、茫然立つて居られた兄樣の傍に行つて「兄さん御飯」と云ひますと、妾の顔を撫でゝ、

「今は食べたくないんだからね、僕の部屋へ御茶を持つて御出で阿母樣は何處へ！」といつもの樣に優しく申されますから、妾は「御洗濯してたのよ」と後ろに云つて、御茶の準備に行きました、兄樣の部屋は二階の六疊で、其の他には、八疊、丈けの極く狹い家でありますが、妾だと兄樣の部屋ばかりでも澤山と思つて居たのです、何故つて、兄樣は縣廳に出ては御出でゝしたけれど、繪を大層お好きで上手に畫くことは出來たんですよ、妾がまだ嬰兒の時御亡くなりの父樣が額も兄樣が御かきなすつたの、ですから兄樣の部屋へ行きますと、紅や黃や色々の繪具に染まつた紙は、散らばつて居るのでしたが、それは、丁度兄樣のあたりそ、

蝶々が飛んでる樣でしたよ、それに種々な額が美しう、かゝつて居るのですもの、いつでも妾が「兄さん」と梯子で呼ぶと、「また來たのか」つて繪筆を置いて西洋の面白い話をして下されたり一緒に唱歌をうたつたり、また、蜻蛉つりをしたりするものですから、母樣は時々、「龍お前はモウ御嫁さんを貰はねばならない年なのに何時まで子供だらふ子」と云はれると、顏を赭めて、只笑つて御出でゝしたつけ、妾は何處にだつて兄樣程好きな方はないのよ、それに栗田の姉樣が遊びに來られると妾はほんとうに夢見てる程、愉快かつた、の姉樣は女學校に居られたのですが日曜には、屹度早くから、來るんです、サア、それから晩迄は舞踏も始まる、唱歌もうたふ、兄樣のかきかけてる繪に髭もつける、眼鏡もかけるといふ騷ぎ何時だつたかは覺えて居ませんが、姉樣の眞白な幅廣のリボンへ「梅さん、僕はこれに、あなたの名を書いて上げようか」と云ひましたら、「妾だつて書けますワ」と筆に墨を含ませたが「マア僕のするのを一寸見て御出で」つてスラ〱と浮いてる樣な、梅をかいたら、「アラ」と云つて姉樣は嬉しさうに、キスしましたつけ、スルト兄樣は「梅さんこれには僕の生命が吹き込んでありますよ」と云はれたのも覺えて居ります、妾の兄樣は餘り早起な方ではありませんでした、そうすると姉樣はドン〱行つて夜具も何もはいで仕舞ますと、兄樣、「は御轉婆だ子エ」と笑つて居るのでした。或る時母樣の繪を書いてモウ僅かで出來上ると喜んで居られたのに、姉樣はコツソリ惡戲をしたもんですから、大變面白くなさそうな顏で、僕の書いてるのだから好いけれどお前方には、如何なものだつてかなはん子」と云はれましたがそれだつて、荒い恐しい聲ではありませんでした、その翌る日の黃昏方姉樣は息をはづませて、駈けてきて、「兄さん」と小さな包を投げてサッサと歸るでせう、開けて見ますと、香水の匂がプンとして、肉色のテーブル掛の端に「御免下さい」と書いてあるではありませんか、姉樣の御家は〇〇村で此處から二十里ばかりありますけれど汽車では一寸で行けます、海邊に添ふた屋

並が三百もありませうか、其うちで一番に立派なのは姉樣の御家です妾も夏休みに二度ばかり兄樣に連れられて、行きましたが、景色も好いし、皆んな親切な方なので、自分の家に歸る氣にはならぬ程でした、伯父樣は何か、會社の御用で始終東京の方へ御出なされるし、妾と同じ年で姉樣より三つばかり不足な、健ちやんは姉樣にそつくり、愛らしくつて、よく妾と貝殼を拾ふたり鬼ごつこをしたり大層仲がよかつたの伯母さんは、妾が健ちやんに泣かせられると何時でもカパッチ下されましたつけ、伯母樣も兄樣も姉樣も皆で晩の御飯をたべる時でありましたが、伯母樣は「光ちやんと私の梅子と取り換つこしませう子、え光ちやん」と云はれたので妾「よくつてよ伯母樣」と云ふたら皆で大笑をしたこともあつたのです。

先刻妾は一寸云ひました、土曜の晩ですが妾が蚊遣の火を澁團扇であふいで居ますと、光子散歩に行かんか、螢がとれるかも知れんよ」と云はれますから直きうらの土橋迄涼みがてら參りました、その晩の月の奇麗いつたらありませんでしたよ、兄樣はズット流を眺て居られたんですが急に振り返つて、「光子」「兄さん何に」つて云つたら「僕は子兄さんは、栗田の姉樣に欺されたんだ、梅さんは、今度子津田昇と云ふ文學士の立派な奥樣になるのだ、だから子これからは光子、梅さんはお前の姉樣ではないんだよ、梅さんはつまり金に身を賣つたのさ、お前は大きくなつても、そんな情を知らぬことをしてお呉れでないよ、女を、玩具にしてる男なら云はぬけれど、金も位もそんなものは、如何でもよいんだから、只お前を心から愛する人に安心して身を任せるのだ、デなかつたらその男は一生死んで仕舞んだから子、お前も梅さんに似て美しいのが僕の心配になる、女と云ふものは、よく自分を誇りたがるものだがそれは抑々誤りの初めになるんだから子今夜兄樣に云はれたことを忘れては不可ませんぞ」と妾のとこを確つかり抱いて、キスして下さいましたが頬には、とめどなく涙が流れてました、妾も何だか悲しくなつて、「兄さん」といふて、泣きつきますと、「アー僕

は悪いことを云つた子阿母樣が待ちて御出でだらうから、そろ〳〵歸るとしよう」つて、橋の上から姉樣から送られた、テーブルかけも、寫眞挾も肱かけも皆んな川の中へ流したのです、その後からも姉樣は二三度入らつしやつたが先きの樣ではありませんでした……兄樣は矢張毎日役所へ御通ひなされては居りましたものゝ、書もかゝねば唱歌もうたはず、部屋に這入つたまゝ、御飯も召しあがらぬことは珍らしくはありませんまるで別の方になつてしまはれたんです、母樣は「龍お前は此の頃チツトモ元氣ない樣に見えるし、何だか顏の色も晴れ〴〵しない樣ぢやないかイ、惡いなら早く御醫者にかゝつたらよからうよ、阿父樣も御亡くなりなのに、お前も若しや萬一のことがあつては光も私も浮ぶ瀨がないと云ふものだから子、大事にしてお呉れてないか「別段なこともないのです、けれどどうも頭の具合がチト變ですから、ナアニそのうちに癒りませう」「それだと好いけれども子エ暫らく繪なども止したらよからふと思ふよ、」「そうですナア」「栗田の梅さんも來年卒業すると、津田とか云ふ方に嫁くつて子大層な學者だとか云つてるから、仕合な事だ子エ」「そうですな、末迄おさまると結構でせうが……」「そんな事はなからふよ、梅さんも承知の上なんだし、向ふでも强つてとの事だそうだから子、けれど龍や、一寸聞いた丈けの話だが、津田と云ふ方は餘り品行の好い方ではないと云ふぢやないかイ」「そうかも知れません子」「何れ仕合で呉れると何よりだか子エ」と覺束なげな御話をなさるのも、妾はきいて居りました、それから二三日經つて「妾は兄さん女つて如何云ふもの」と云ひましたら、「僕には解らない子、お前が女だもの成人くなつたら獨りで解つて來るだらふ」と寂しく笑つて居られました、段々袖に風が冷たくなつて、破れ垣のおちこちには、虫の音が悲しくなつて來た頃兄樣は、風邪をひいたのですが、いつも今頃はそうなるので、格別氣にもとめませんでしたが、好く晴れた日曜の朝に庭を掃かれてる際中、ゴツトリ臥ふれたのです、それから急に熱が出て一週間と云ふものは、斷末魔の苦

しみをなされました、けれど、やつとの事で熱が去つた後は、とても寂しい程憔悴せて、力ない咳は悲しく響くのでした、母樣も妾もどんなに、心配しましたらふ母樣などは碌々御寢みなりませんで看病なされましたが、此頃は餘程兄樣が元氣づいて來ました、その間に桔梗が咲き、女郎花が市へ出で、モウスツカリ世は變りました、或る朝に、兄樣が「光子庭の萩が咲いたか」と申されますから、「エヽ、澤山、折つて來ませう兄さん」と云つたら、「イヤ、阿母樣今日は餘程心地が宜い樣ですから、どうか庭迄、連れて下さい」と無理に起つて、母樣と妾の肩にすがり乍ら漸う庭に下りました、そうして、大そう變つてる子」と露の重さに得堪えぬ白萩のもとに、蹲踞んで「光子肩をおさへて呉れんか」と云ひ乍ら危ふげな手をのばして顔を洗ひましたつけ、それから椽に腰をおろして、「阿母樣大分小ザツパリしましたよ」と云ふたら何故か、後ろに立つてた、母樣は聲を立てゝ泣かれました、萩は一昨年の春栗田の姉樣が植ゑて下さつたのですよ、母樣は一寸そこをはづされましたので「光子僕は今度は到底も駄目なんだ、また、生きてたいとも思はんから子お前はよく阿母樣に孝行して、磯部の家をついで呉れ、此夏橋の上で話したことは、僕の遺言だと思つて、忘れるではないよ」と妾の手を握つて下さいましたが妾は泣くことより外出來ませんでした、其晩から兄樣の御容體は非常に惡くなつて、翌くる日栗田の伯母樣と姉樣が御見舞に御出でなされた時は、最早昏々と眠つた樣で何にも確ではなかつたんですよ、デ母樣は、泣聲で、

「龍や龍伯母さんと、梅さんが御出でだよ」

と云ふたら、瞳が鈍く動いたので「龍造さん、確ツかりして下さい子」と伯母さんが、耳に口を寄せたら兄樣は、「有り難う」と云はれた樣でした、姉樣はオロ／＼と泣いて「兄さん兄さん許して下さいよう」と手を握つたら紅褪せた口のほとりに笑の影が漂ふて、僅かにうなづかれたの、母樣はたまらなくなつた樣に側へ寄つて、

「龍、お前は私を殘して死ぬのかエ、これ龍や」

「濟みません御先へ」と、かすかに云つたは、兄樣の最後で御座いました、その後はとても〳〵妾は御話する力がないのですから、御察し下さい栗田の姉樣は三年たつた、今日迄、何處へも御嫁にゆかずに、居ります。

（乙賞金五圓）

秋田縣北秋田郡大館町
岸　久　子

▲高等女子實修學校

山脇房子女史の高等女子實修學校は從來牛込區白銀町にありしが、今回基本金を募りて新校舍を赤坂檜町に興し、校則を改正して高等女學校程度となし、實踐躬行を主義として女子教育の弊を矯正せんことを計るといふ、なほ家族的の寄宿舍を設けて女史自ら監督の任に當るといふ。

▲お伽倶樂部講話會

子供等の趣味教育に資せん目的を以て設けられたるお伽倶樂部は、其の第一回講話會を去月十七日午後一時より神田の青年會館に開きたるが、開會に先ち可愛き子供の踵を接して入場するあり、かくて定刻に及ぶや少年少女は一同起立して會歌を合唱し、次に久留島主事は子供の新天地なる題下に面白く開會の主旨を述べ、次で總裁柳原伯の洒落なる挨拶、野村海軍中佐の海軍談、笹野小學校長の講話、最後に顧問巖谷小波氏の世界お伽噺あり、其間快濶にして巧妙なる小供向のピヤノ、ヴアイヤリン等の奏樂あり、會衆の小供等は孰れも喜色面に溢れて滿足を表しつゝ午後四時會を終れり、なほ第二回は四月十四日に催す由。

▲こども博覽會

教育學術研究會にてはこたび子供の衣食住、玩具、繪書、讀物等「こども」に關するあらゆる部面の製作品を蒐集して世人の觀覽に供し、學校と家庭の教育に資すると同時に、子供に清新なる娛樂を與ふべしとの趣意を以て、「こども」博覽會なるものを五月三日より向ふ二週間、上野公園第五號館に於て開設する由にて、目下江湖の贊助と其の出品を求めつゝあり。

▲東京女子音樂傳習所

神田區表神保町一番地の同所にては小學校教員及び東京音樂學校入學志望者の爲めに鋭意教授しつゝあるが、次第に盛況に向ひ該校卒業生中市内の各小學校に奉職せしものも少からずと、其の教授科目は、唱歌、風琴、バイオリン、理論、發音訓練、教授法等とし、講師は野村成仁、坪内せん子の二氏にて、目下生徒募集中なり。

▲やまと女塾

本鄉弓町の同塾はもと元老院官吏たりし伊庭豐長氏の未亡人くに子刀自と其長女よね子女史（高等女子師範出身）の兩女によつて營まるゝ監督下宿なるが、目下十餘名の女生徒を預り、其の監督法も父母に代りて家庭的の保護指導に力を注ぐといへば、女子の遊學者にとり便宜少からざるべし、但し入塾を許すものは品行正しく意思堅固なるものに限ると。

五月號記事要目

（五月五日發行）

毎月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢	
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢	
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢	
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢	
内（定刊數……十二冊 / 增刊四回…一、四、七、十月價格同一）	
郵稅	一冊 二錢

廣告料

二十四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	五十四錢	四十四錢	三十七錢
半頁（卅二行）	……	十七圓二十八錢	十四圓〇八錢	十一圓八十四錢
一頁（六十四行）	割引 四十圓	割引 三十三圓	割引 二十七圓	割引 二十三圓

▲等級の位置ハ切日等御照會次第御報可致候

注文署規
●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅九年四月五日發行　第六卷第五號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所（東京市小石川區久堅町百八番地）

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番　千十八番
本局　二千六百二十番　三千二百二十九番

統計學專攻伊東祐穀君著

明治三十九年

袖珍 世界年鑑

全一册

洋裝菊判半截縦五寸〇分横三寸八分總布金文字入　紙數六百餘頁◉四月下旬發行

日本の部　各國の部　世界の部　實業の部

本書は四大部に分ち　著者の心血を濺ぎたる世界年鑑の内容に倣ひ更に其粋を拔き精を萃め重きを新事實の報道に措き　記事の簡潔と携帯の便とを以て刻下の需用に供せんとするものなり　著者の統計學に篤き世既に定評あり本館曩に著者と相謀り明治卅七年世界年鑑を發刊したるに大方の高需に倍し殊に著者伊東君の客歳十月擧行臨時臺灣戸口調査事務視察の爲め渡臺の折は同地官私の世界年鑑需用高實に三百部を超へ同君往返の途次に於ける各府縣の購需亦豫想以上に達し發兌以來數月を出でずして豫約注文の外諸方よりの清需に應ずる能はざるに至れり

則ち著者の臺灣より歸るや時偶々歳尾に瀕し明治卅八年世界年鑑の再版に暇なく遂に同君と謀り其勵精に依りて急劇斯卷を出だすをとせり本書實と袖珍書なれば　常にポケットに挿入して一たび繙かば宇内の大勢を窺ふに足るべし氏が大書册の編纂に長ぜるのみにあらず即ち本館從前政教、地理、文化等に關する編修を試むる毎に同氏の統計表を載録し來り殊に客年末刊行の當用日記及懷中日記も仰ぐに同君が統計の正確至便なるを以てしたるに　我國戰後の需用頓に進みたるものか　無慮百萬部を賣盡したるが如き私かに本館の誇りとする所併せて　本書内容の簡にして要を逸せざるを知るに難からず

思ふに戰捷の國民は遂に世界を知らざるべからず一部僂小の册子能く精を悉すとのみ言はず然れども　廣汎の記事細大の事跡之を索むるに舊來の世界年鑑あり今本書を發行する所以抑も期する所なくんばあらず乃ち本書も又た逐年發刊の期を過たず世界年鑑に先んじて恒に新事實の報道を任とせば庶幾は江湖需用の在る所に適ひ以て國勢の隆運に副ふを得ん哉

敢て大方諸賢の座右に一本を薦む

▲正價七拾五錢　▲郵税八錢

◉豫約——明治三十九年五月廿日迄申込に限り金六拾錢（外に要送料）

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

女（後付の一）

石倉翠葉君著　各宗本山

天台座主大僧正　三津玄深師題字
青木香葩君挿畫

善光寺名所圖會

洋裝菊判頗美本
紙數二百六十二頁
正價金四拾五錢
郵稅金八錢

寫眞銅版口繪

後西院帝宸翰●光格帝御所持中啓●孝明帝御所持末廣●皇太后陛下御所持煙草入●盈仁法親王御遺品●伏見宮同御息所●山階宮●久邇宮●小松宮各親王殿下御歌●輪王寺宮捉書●家康●下知書●天海僧正捉書●運慶作阿彌陀佛●善光寺御本尊●本堂●鐘樓●山門●大本願大勸進の內部外部等

信濃國**善光寺**は、畏くも**欽明天皇**の御代、**百濟**より貢献せる**一光三尊**の**阿彌陀如來**を安置せる我國**最古**の**佛刹**にして、**壯麗**なる殿堂は巍然として雲表に聳へ、宗門の差異老幼の嫌なく、歸依渇仰する事尤も深く、日に數千の參拜者を絕たず、殊に歷史上偉大の關係を有し、加ふるに其**法要儀式**の**壯嚴**なる、他宗本山に於て到底見るべからざるの**一大趣味**を有す、本書は著者の周到緻密なる史的觀察と精密なる實地調査とにより**流暢**なる**行文**を以て之が**委曲**を**詳述**し盡せり、加之寶物古文書等數十種の寫眞銅版は實に錦上花を添ふるの觀ありといふべし、今や**容易**に**遭遇**すべからざる**開帳**の時期に際し、本書が**善男善女參詣**の**栞**として如何に**必須缺**くべからざるものたるかは、又多言を要せざる處なりとす。

([illegible]の二)

名所圖會　發兌元　東京　博文館

本派本願寺名所圖會　紙數三九〇頁　寫眞版三十四頁　正價六拾錢　郵税拾錢

大谷派本願寺名所圖會　紙數二二四頁　寫眞版十七頁　正價四拾錢　郵税六錢

日光名所圖會　紙數四八〇頁　寫眞版二十四頁　正價六拾五錢　郵税拾貳錢

佛光寺名所圖會　紙數一〇八頁　寫眞版十七頁　正價貳拾五錢　郵税六錢

日蓮宗各本山名所圖會　紙數三六四頁　寫眞版二十三頁　正價五拾錢　郵税拾錢

高野山名所圖會　紙數三三八頁　寫眞版三十二頁　正價六拾錢　郵税拾錢

成田山名所圖會　紙數一六四頁　寫眞版二十三頁　正價參拾五錢　郵税六錢

附●總武線●房總線●成田線●沿道名勝案內

本誌は女學世界の姉妹!!至廉無比

婦女子の文藝雜誌

女子文藝

婦女子の家庭雜誌

（毎月一回發行）第壹卷第四號（四月一日發行）

論說

源氏物語の女子觀　一斑　芳賀博士

女子の通弊　鹽井文學士

家庭

細君と一家の經濟　實際博士

妊娠中の心得　川添醫談

四月の花壇　○△子

元祿料理　士閑翁

文藝

春の田園より　文學士　野菊園主人

忘れな草と忘れ草　川村淸一

納豆賣　松枝子

お小夜　蒼生子

シンセーリテイ　文學士　森岡格雄

沙濱　尾上柴舟

春の朝風　鳥橋

滑稽譚　山縣五十雄

和歌評釋　安部烏橋

英詩評釋　西村醉夢

熊ちやん（お伽噺）　ちよ子

雜錄

理想の婦人　津田梅子

婦人觀　夢の人

小說

情の聲　堀內新泉

思ひ出　土屋香葉

女子文藝

論文、敍事文、抒情文、消息文（鹽井文學士選評）新體詩（大町桂月選）短文（編輯局選）和歌（安部烏橋選）俳句（內藤鳴雪選）

其の他家庭笑話、婦女子の領分等

挿繪

表紙（石版彩色刷）佐藤生巢

口繪（春の庭）市川秀方

美術學校移轉式、泰西名畫、熊野　木村武山（以上寫眞版）

短冊（寫眞版）小野鵞堂

木版挿繪三十有餘枚

懸賞女子文藝募集（每月三十日〆切）

定價　一冊拾錢　四冊金卅八錢　八冊七十五錢　拾六冊壹圓四十錢　郵稅外一錢

二十世紀婦女子の爲文學藝術趣味と家庭の慰安とを語るものは本誌なり▼奥さんもお嬢さんも學窓の女學生も▼里の少女もお母さんもお媼さん方も本誌を讀んで無盡藏の趣味實益を得られよ!!

各號出來增刷取揃應注文　見本郵劵拾錢

誌友會規定割引劵は郵劵二錢御送附あれ

發行所　東京小石川　日本葉書會　電話番町九三二番

賣捌　東京堂　東海堂　北隆館　良明堂　上田屋　至誠堂

女（後付の五）

日露戰史

四六判二倍(太陽同形)每編本文二百頁寫眞版二十四頁每月二回發行
正價一冊參拾錢●八冊貳圓廿錢●十六冊四圓廿錢●郵稅一冊參錢

◎第五卷 大孤山上陸軍及第四軍初期の活動　三月五日發行

▲題辭　野津元帥、川村大將、上田、塚本、淺田、古川の四中將、東條、上原、楠瀨、門司、の四少將

▲戰局寫眞　大孤山上陸當時第十師團の首腦、敵中日探の大捕縛、神戶出發大孤山上陸、大孤山、岫巖、分水嶺各地の戰鬪光景、敵の綳帶所、敵の軍旗、敵軍中の諸將軍、敵中の我同胞捕虜等の珍寫眞四十餘圖二十頁、

本卷は筆を**大孤山獨立上陸軍**に起し上陸後の活動、岫巖占領戰、岫巖北方の形勢、分水嶺の攻擊、上陸軍の北進、第四軍の活動、第四軍司令部の前進、我軍の位置、第四軍の**析木城大攻擊**大戰鬪後の矚目、**遼陽進擊**の準備に到る迄全部十二章第四軍の戰況を說述し剩す所なし尙卷末には**將軍傳記**、及塞上餘韻を添へ更らに光彩を放たしむ。

◎第六卷 第一軍次期の活動……三月廿日發行

▲題辭　黑木大將、井上大將、西島中將、岡崎少將

▲戰局寫眞　黑木軍の各將校、第一軍司令部、木越、松永、渡邊、岡崎、佐々木各將軍肖像、北白川殿下と司令部幕僚(以上光澤刷)、顧家屯の近衛騎兵糧食運搬援助、鳳凰城附近の戰利砲隊、大家堡子の野戰郵便局、摩天嶺下の黑木軍前進、九連城戰死者吊砲、連山關の進軍、第二師團の騎兵と樣子嶺の大行李○艸河兵站倉庫糧食積込、從軍外國武官と內國記者數葉

本卷は第二師團の前進に筆を起し摩天嶺の敵襲及激戰より石門嶺の敵襲に及び第十二師團の前進に移りては小市附近の戰鬪、東家嶺の激戰、橋頭の激戰近衛師團の前進淺田枝隊と**岫巖の占領**、南部大荒溝の戰鬪、里浦嶺の戰鬪、**樣子嶺**の激戰、楡樹林子の激戰等を說述し尙附錄としては摩天嶺第二回敵襲の戰鬪略圖、橋頭の戰鬪略圖、楡樹林子の戰鬪略圖を添へたれば其の身其境にあるの想ひあらん

東京 博文館 本町

女（後付の六）

最新發賣書

理學博士男爵 菊池大麓君序文
少年世界主筆 巖谷小波君序文

少年算術遊戲

少年世界記者 竹貫直人君著

全壹册洋裝中判美本
紙數約二百五十餘頁
正價貳拾五錢
郵稅四錢

算術遊戲は算術を應用したる遊戲なり世人やゝもすれば算術を以て諸學科中最も難解のものなりとす然れども斯道に堪能の聲高き著者はこゝに平素の蘊蓄を傾け其獨特の平易明快なる筆を振ひ以て世人の迷夢を一掃すべく巧みに編述したるものなり、されば未だ數理の堂に入らざる少年子弟にて一度本書を繙く時は、趣味津々として恰も無盡藏の如き中よく高尚なる學理の一班を窺ひ知るべく、斯學を以て常に難解の科目と心得たる人は、正に一驚三嘆、初めて數理の了解し易きを知らん、

日本婦人正風會々長 中島義式君著

新撰日用女禮式

全一册

洋裝菊判美本
紙數約二百頁
正價貳拾五錢
郵稅六錢

禮法は國家の美觀にして人倫必備の要儀なり我國古來禮儀の國と稱す其作法の高雅にして優美令淑の標儀たるは決して外邦に遜色なきなり、然るに因襲の久しき自から現時に伴はざるものあり須らく之を改良して日進の世範に伴はざるべからず。著者中島先生は三十有餘年の經驗と在職學校の敎授に採つたる方針に依り尚文部省訓令に適合せしむる程度に由つて極めて簡單なる日用女禮式を著はし之を本館に出版せしめられたり其記する所精しく古今の典儀に鑑み能く內外の善風良書を折衷し補正せられたり之を一讀する者如何に先生が禮法界に貢献せらるゝやを了知せらるべし。

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

文學博士高山林次郎君遺稿

文學博士姉崎正治君　文學士齋藤信策君共輯

樗牛全集第五巻 想華及消息

△口繪＝樗牛先生墳墓の圖(コロタイプ版)及樗牛先生原稿筆蹟(寫眞銅版)挿入

樗牛一代の論評及び研究の外、別に一天地を成せるもの是れ彼れが創作の想華と消息文となり樗牛の天眞を發輝するもの却て彼に非らずして此にあるもの又た多からん今や最終の巻に至つて此最も趣味多豐なる消息數百餘通を収めたり全集を讀了し來つて讀者又た此別乾坤を見る豈妙ならずや

全一冊洋裝
金縁金模樣
頗美本紙數
約六百頁
近日發行

(後付の八)

樗牛全集第一巻 美學及美術史

全

第一部美學上の研究
第二部日本美術史
總論◎奈良朝以前の美術◎天平時代◎平安時代

洋裝大判美本
正價壹圓五拾錢
小包料拾五錢

樗牛全集第二巻 文藝及史傳

上編

本編收むる所の主なるものは樂杯子評論、運命と悲劇歷史的精神、桐一葉と牧の方、社會小說論、英雄論、理想的人物の表現、文明批評家としての文學者其他

洋裝大判美本
正價壹圓五拾錢
小包料貳拾錢

樗牛全集第三巻 文藝及史傳

下編

▲釋迦▲平相國、平家雜感、淸盛骨相考、▲菅公傳、菅公年表、▲史傳雜纂、南歐美術論、ナポレオン三世外八項▲文藝評論補遺三十一種

洋裝大判美本
正價壹圓五拾錢
小包料拾五錢

樗牛全集第四巻 時勢及思索

全

▲第一期(倫理問題研究の時代)▲第二期(國家主義の時代)歷史と人種外八拾餘目▲第三期(信仰覺醒の時代)雜篇(學說と人格、人々自ら悟らざるべからず外五十餘目

洋裝大判美本
正價壹圓五拾錢
小包料貳拾錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

東京美術學校教授 白井雨山君閲

森田洪君 鈴木古拙君 牧野等君共著

應用家庭美術 全一冊

▲口繪!! 鮮魚之圖（西洋畫）磁器花瓶圖（石版彩色刷）石膏型像（寫眞銅版）

洋裝四六判美本

紙數三百三十頁

近日發行

本書概目

○緒言 研究の順序

○日本畫 （一）日本畫の沿革（二）用具の種類（三）畫筆の種類（四）刷毛の種類（五）用紙と礬水引（六）假張の法（七）輪廓と運筆（八）濃墨と淡墨（九）臨畫の法（一〇）寫生の法（一一）彩色の法（一二）極彩色と淡彩色（一三）圖案と應用

○西洋畫 （一）西洋畫の研究（二）西洋畫の沿革（三）西洋畫研究の順序（四）鉛筆畫の用器（五）運筆と陰影（六）練習の方法（七）郊外の寫生（八）ペン畫の用器（九）ペン畫の描法（一〇）水彩畫の用器（一一）水彩畫の繪具（一二）水彩畫の寫生（一三）色鉛筆の練習（一四）パステル畫の用器（一五）木炭畫の用器（一六）木炭畫の描法（一七）裸體の寫生（一八）油畫の練習（一九）油畫の用器（二〇）油畫の描法（二一）肖像畫の描法（二二）チヨーク畫の用器（二三）擦筆畫の描法（二四）西洋畫の應用

○彫刻 （一）彫刻の沿革（二）木彫の用具（三）刄物の研方（四）木彫の用材（五）用具の使用法（六）肉相彫刻の作法（七）半肉の作法（八）立體彫刻の作法（九）練習と實用（一〇）裝飾としての應用

○象牙彫刻 （一）象牙彫刻の用具（二）象牙の種類（三）練習の順序（四）應用の範圍

○彫金 （一）鏨の製作法（二）鏨の使用法（三）象眼の方法（四）彫金の應用

○大理石彫刻 （一）大理石彫刻の用具（二）錐揉の方法（三）大理石彫刻の應用

○塑像 （一）油土と用具（二）塑像の用具（三）油土原型の作法（四）陶土原型の作法（五）蠟型の用具（六）蠟型の作法（七）雌型と雄型（八）石膏型像の作法（九）寒天型の作法（一〇）セラチン型の作法（一一）塑像の應用

○鑄金 （一）型土の製法（二）挽型の作法（三）繩繰心型の作法（四）窯の築造法（五）鑄金の簡易法（六）金屬着色法（七）銅器の着色法（八）傳世古銅着色法（九）朱銅の着色法（一〇）鑄金の應用

○蒔繪 （一）蒔繪の沿革（二）蒔繪の用具（三）蒔繪の材料（四）蒔繪の寸法（五）平蒔繪の方法（六）研出蒔繪の方法（七）高蒔繪の方法（八）極高蒔繪の方法（九）肉相蒔繪の方法（一〇）梨地蒔繪の方法（一一）蒔繪の簡易法（一二）蒔繪の應用

○陶磁器 （一）陶磁器の沿革（二）陶磁器の産出地（三）陶土の製法（四）杯の製作法（五）素燒の方法（六）窯の築造法（七）釉藥と顔料（八）窯積の方法（九）本燒の方法（一〇）鍋窯の方法（一一）陶磁器の應用（一二）樂燒の方法

○造花 （一）造花の用具（二）造花の材料（三）造花の順序（四）造花の實習（五）造花の應用

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

女學世界

(明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可) 第六卷第五號 (明治卅九年四月五日發行 毎月一回五日發行)

(定價金貳拾錢)